魔法少女さやか☆マギカ

神谷萌

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

見滝原中学の２年生、美樹さやかはある日、妙な夢を見る。

そして、その日。

その夢に出てきた、妙な生き物が出てきて、こう言った。

「ボクと契約して、魔法少女になってよ」

本作はＰｉｘｉｖにて別名義で公開していたものですが、諸事情あり公開先を切り替えたものです。

本作は２０１１年当時に執筆されたものです。

この為、原作設定は以下の範囲となりますので、ご容赦ください。

ＴＶアニメ『魔法少女まどか☆マギカ』

コミック版『魔法少女まどか☆マギカ』

『魔法少女おりこ☆マギカ』全２巻

『魔法少女かずみ☆マギカ』２巻まで

目次

第１話：隣に、誰か、いたような……　1
第２話：きっと、ああなりたいと思ってる。　25
第３話：キミ自身がそれを望むのか　51
第４話：もう、あたしは迷わない　69
第５話：後悔しない生き方なんて　92
第６話：アンタは胸を張っていてよ　113
第７話：正義の味方じゃなくっちゃなぁ　133
第８話：出会えてよかったと思うよ　156
第９話：本当に欲しいモノは、なんですか？　179
第１０話：そんなの、あたしは望まない　201
第１１話：どうして　224
第１２話：失敗するつもりなんか、ないんだもん　247
第１３話：Ｔｈｅ ｔｅｒｍｉｎａｌ ｏｆ ”Ｔｈｅ ｒｉｎｇ ｏｆ ＭＯＥＢＩＵＳ”．　271

第1話：隣に、誰か、いたような……

カンカンカンカン……
革靴がリノリウムの床を鳴らしていく。
造りは鉄筋コンクリートのオフィスビルの様式だが、色は白黒のモノトーン。しかしグレー（中間色）の存在しない、コントラストの激しい光景。
何を探してるんだろう、あたし……
気が急いて走っている。何か――何か大事なものを探している。
けれど、その肝心な何かがなんなのかわからない。
通路を駆け抜ける。
突き当たりに、ようやく自分以外に白黒以外の色が見えた。
緑色に光る、非常口の看板。
やや太めのピンストライプが描かれた扉の、ノブに手をかける。
ごくり、と喉を鳴らしてから、扉を勢いよく開ける。
バァンッ
扉を開けると、眼下に広がるのは巨大な大都会。
モノトーンの世界の中で、モノトーンの人の群れが、機械的に何かをこなすように動いていく。
「どこに……」
呟いて、下唇をかみ締める。
喪失感と絶望感で、身体が震える。
「どこに、――のよぉーっ!!」
彼女の叫びに答える声は――――
「大切なものを、無くしてしまったのかい？」
――あった。
「君がなくしてしまったのは、宝物？　それとも、大切な誰か？」
ウサギとフェレットを足して2で割ったような、奇妙な生き物が、そう話しかけてくる。
「――それとも、自分自身？」
「私が探しているのは、――――！」
怒鳴るようにして答えると、その生き物は首を横に振った。

「でも、それは見つからない。見つけられない」
「解かってる、解かってるのよそんなこと！」
　生き物に向かって、感情的に声を荒げて返した。
「でも、ひとつだけ。ひとつだけそれを見つける手段があるかもしれない」
「なに？　それ、なに？」
　生き物のその言葉に、縋りつくように手を伸ばして、生き物の肩の部分を掴んで激しく揺すった。
「簡単だよ。奇跡を起こせばいい。その為に――――」
「ボクと契約して、魔法少女になってよ」

　ジリリリリリリリリ……
　ベルをハンマーが打つ、クラシックなスタイルの目覚まし時計が激しく音を立てている。
　クッションぐらいのサイズの枕を抱きしめる形で、ベッドの上に寝ていた。
「夢……か……」
　まだ寝ぼけ眼でそう呟いてから、ベッドサイドの目覚まし時計を止めた。
　美樹さやかは、見滝原中学に通う、少し活発だけど、ありふれた、という単語の範疇から外れない、１４歳の少女。
「行ってきまーす」
　見滝原市の割りと旧くからある住宅街。縁側のある旧い日本型住宅の、引き違い戸の玄関をガラガラとあけつつ、家の中に向かってそう声を張り上げた。
「ほっ、ほっ、ほっ、ほっ」
　いつもの登校路を、特に運動部に所属しているわけではなかったが、ランニングのスタイルで小走りに駆けていく。
「ん……」
　さやかの家のある、昭和テイストの和洋折衷型の家が並ぶ旧くからの住宅街と、よりモダンなユニット住宅の並ぶ新興住宅街、その両者

からの中学生達の登校路が交わる場所。
さやかは一度脚を止めて、新興住宅地のに住む生徒が登校してくる路地の方を見た。
「……？」
なぜそうしたのかよく解からず、小首をかしげるようにしながら、今度はゆっくり歩いて登校を再開する。
やがて、見滝原中学校の正門前に繋がる、公園の遊歩道へと至る。
白いレンガ敷きに、花壇や、黒い街灯のある洒落た遊歩道だが、この時間帯は見滝原中学の生徒の登校路として使われていて、かなりの人数を確認することが出来た。
「おーい、仁美ー」
さやかは、自分より前を静かに歩いて行く見知った後姿を見つけると、手を上げて軽く振りながら声をかけた。
同級生の志筑仁美が振り返る。
「おはようございます、さやかさん」
彼女は結構良いところのお嬢様で、学生鞄でスカートの前を隠すようにしながら、静かに歩いていた。さやかが声をかけると、それに気付いて振り返り、軽く会釈をするようにして、さやかのように張り上げる声ではないものの、はっきりとした口調で挨拶した。
「おはよ、1人？」
さやかは、パタパタと走って仁美に駆け寄ると、笑顔で仁美に挨拶を返しつつ、そう訊ねる。
「？　はい、そうですけど……」
仁美は、口元で微笑んだまま、軽く小首をかしげるようにして、聞き返すように答えた。
「え？　あ、そ、そうだよね……何聞いてるんだろ、あたし……」
仁美の態度を見て、さやかは決まり悪そうに苦笑しながら、誤魔化すように言った。
「なーんか昨日、変な夢見ちゃってさ」
さやかがそう言いながら、2人は登校路を正面に見えてきた中学校に向かって再び歩き始める。

仁美は先ほどまでと同じように、鞄を前に下げてしゃなりしゃなりと歩く。さやかは頭の後ろで手を組み、そこから鞄を下げている。
「夢……ですか？」
「うーん、よく覚えてないんだけどね」
仁美に訊ねられて、さやかは正面を向いたまま視線を空に上げて、煮えきらない答えを言った。
「夢はその人の深層心理を反映しているといいますわね」
仁美は、軽くさやかのほうを向いて、くすりと笑いながらそう言った。
「深層心理ねぇ……」
迷ってる、って事なのかなぁ。
さやかは、断片的に残る夢の記憶をリフレインさせながら、そう思った。
でも、何に迷ってるんだろ？
さやかは仁美の言葉に逡巡するが、それらしい心当たりが無かった。
「ところで仁美、昨日のラブレターの相手、どうするつもり？」
さやかは、答えの見つからない自分の夢の話題を終わらせようと、別の話題をみつけると、ニヤリと笑みを浮かべて仁美に視線を向けた。
「もう、その話題には触れないでくださいまし」
仁美は、僅かに困ったような表情をして言った。
「それじゃあ、今回の相手もゴメンナサイってわけか。ちょっと可愛そう」
さやかは、明るい微笑を交えつつ他人事のように言う。
「わたくしもそれほど人のことは言えない立場なのですけどね……」
そらせ気味のさやかに対して、仁美はやや丸めがちの背をさらにすくめさせて、どこか自嘲するようにそう言った。
「なんでー、仁美みたいにもてたらどんな相手だって、自信もてると思うんだけど……」
さやかは意外そうに言う。

「そうは言いますけど、さやかさんだっておもてにならないわけでもないでしょう？」
「えー？　あたしなんか全然可愛くないし、ダメダメだって」
仁美が、少し拗ねたような表情で言い返す。すると、さやかは左手に持った鞄を左に下げつつ、右手をパタパタと振りながらそう言って苦笑した。
「それに……」
さやかは、言いかけて、急に視線を逸らした。
「それに……なんですの？」
仁美は、軽くさやかに顔を向けて、口元で微笑んで問いただす。
「……別に」
さやかは、少し逡巡して、視線を仁美から逸らしながら誤魔化すように言った。
「くすっ」
仁美はおかしそうに笑う。
「さやかさんは、誰か気になっている方がおられるのでしょう？」
「べ、べべ、別にそんなんじゃないってば！」
仁美の言葉に、さやかは慌てたように、中腰で構えて手を振った。
「それならよろしいのですけれど」
仁美は、優しげに微笑んで言う。
「チャンスはきちんと掴んでおきませんと、早乙女先生みたいになってしまいますわよ」
「ああ、うん……」
仁美にそう言われて、さやかはどこかげっそりした表情になった。
「3ヶ月目だっけ、今……」
「新記録ですわね」
「このまま続いてくれるといいんだけど、平和でいいんだけど、ね」
「いいですか皆さん、今日は先生から大切なお話があります」
見滝原中学校、2年4組。
朝のホームルームが始まるなり、担任の早乙女和子は強い調子で切

り出した。
「目玉焼きの黄身は半熟かそうでないか……」
やや口調のペースを落とし、含みを持たせるように言うと、
「そこの君！　どう思いますか!?」
と、伸ばした伸縮式の指示棒で、びしっと最前列の男子を指してそう質問した。
「え、いや、その……」
突如指された男子生徒は、戸惑ってオーバーリアクションに腕をばたばたとさせつつ、言葉を詰まらせる。
「どっちでも、いいんじゃないでしょうか？」
「そう！　どっちでもいいんです！」
男子生徒が右手を上げる姿勢でおずおずと答えると、和子は即座に声を張り上げる。
「女子の皆さん、『目玉焼きは半熟じゃないと食べられない』とか言う男性と交際したりはしないように！　それから男子の皆さんはそう言う大人にならないように！」
「あー、やっぱり駄目だったか」
さやかは、背後の仁美をちらりと振り返り、和子の独演を他所に小声で囁いた。
仁美も、まるで駄々をこねる子供を見ているかのような苦笑をする。
「あー、あと、転校生を紹介します」
おいおいおい、そっちが先だろ!?
急にやる気なさ気になった和子に対して、クラス全員が一斉にそうツッ込んだ。
「暁美さん、入ってきてー」
「はい」
教室の前のドアの外から返事が来たかと思うと、ガラリと扉が開く。
長いストレートの黒髪をなびかせながら、少女が入ってくる。
男子がどよめき、女子がざわつく。

「うわ、すげー美人」
さやかはその姿を見て、思わず呟いていた。
伝統的な黒板に代わって設けられたホワイトボードに、和子が水性の専用マーカーでその名前を書く。
『暁美ほむら』
「あけみほむらです。よろしくお願いします」
寡黙そうな黒髪の転校生は、淡々とそれだけ言って軽く会釈をする。
「皆さん、仲良くしてあげてくださいね」
和子が言うと、クラスの中からパチパチと拍手が起こった。
ジロッ
「!?」
その瞬間、ほむらの視線がまるで突き刺さそうとするかのように、さやかに向けられた。
「それじゃあ、席は……と……」
和子が教室内を見回す。
「先生ー、俺の後ろが空いてますー」
そう言って親指で自分の後ろの席を指したのは、さやかの隣に座る男子生徒だった。
え？
さやかはその男子生徒の言葉を聞いて、一瞬それに〝疑問を持った〟。
どうして空いてるんだっけ、この席……
「あら、本当ね」
確かにその席には今は誰もついていなかった。机の中には何も入っておらず、最初から空白地帯だったかのように空いていた。
「じゃあ、そこでいいかしら？」
「はい」
和子が問いかけると、ほむらは頷きながら返事をして、さやかの側の通路を通ってその席へと向かう。
さやかの席のすぐ前を通りかけたとき、

ジロッ
「!?」
と、再び突き刺すような視線を一瞬、さやかに向けた。
――なんなのよコイツ。
ほむらは、席にたどり着くと、鞄を机のサイドのフックにかける。
さやかはちらりとそれを振り返った。
ジロッ
三度、決して表情を険しくしているわけではないにもかかわらず、突き刺さるような視線をさやかに向ける。
さやかは、ビクッ、と肩を跳ねさせて、身をすくめるようにしながら身体の向きを戻す。
「なんなのよこいつ……すごくやりづらいなぁ……」
さやかは、渋い顔で呟き、最後に脱力したように軽くため息をついた。
休み時間。
「ねぇねぇ暁美さん」
好奇心旺盛そうな何人かの女子生徒が、席についたままのほむらを取り囲んでいた。
「前はどんな学校だったの?」
「ミッション系の私立中学にいたの」
「髪すごく綺麗だねー」
「ありがとう」
わいわいと騒ぐクラスメイト達に対して、ほむらはニコリともしないものの、淡々とながら答えていく。
「ふふっ、すごい人気ですわね」
「なんだかなぁ……」
さやかの席の傍らで微笑む仁美に対して、さやかは脱力したように突っ伏す姿勢になっていた。
しばらくクラスメイト達の質問に答えていたほむらだったが、やがて、
「……ごめんなさい」

と、そう言って、髪を掻き揚げる仕種をしながら立ち上がる。
「ちょっと緊張したみたいで、気分が悪くて……保健室に行かせてもらえるかしら？」
「大丈夫？　連れてってあげるよ」
ほむらを囲んでいた女子生徒の１人が、心配げにそう言ったが、
「いえ、できたら」
と、ほむらは言って、視線をすぐ近くの別のクラスメイトに向けた。
「保健室まで連れて行ってもらえるかしら？　美樹さやかさん」
「え、あ、えっと……あたし？」
さやかは、突然自分に振られてビクッと跳ね起きる。
正直気は進まなかったが、他のクラスメイトの視線がさやかに集まり、断り辛いというか、その場に居辛いというか、そういう空気を作り出していた。
「はぁ……解かったわ、保健委員だしね」
さやかは、ため息をつきつつ立ち上がる。
「！　……そう、そういうことなのね」
ほむらは、誰にも気付かれないほどの一瞬だけ目を見開き、それから淡々とそう言った。
教室を出て、廊下を歩く。
「あの、こっちだけど」
「知ってるわ」
さやかが先導しようとするが、ほむらはそう答えた。
「あのさ、暁美さん？」
２人の間を支配する妙な空気に、さやかは不条理さを感じてため息をつきつつ、切り出した。
「なにかしら？」
「なんかさっきからあたしのことジロジロ見てたみたいだけど……もしかして前に一度会ったことがあったりとかするの？　あたし達」
さやかにはそのような記憶は無いが、もしかしたら昔に逢ったことがあるのかもしれない。あるいはさやかがそれを覚えていないから怒っているのかもしれない。そう考えて、訊ねてみた。

「……」
ほむらは、その場に立ち止まり、しばらく逡巡したように沈黙した後、
「そう、あなたも何も覚えていないのね」
と、言った。
「！　あ、やっぱりそうだったの――」
ほむらの言葉に、さやかは今度は申し訳なく思って、眉を下げて謝ろうとするが、
「私のことではないわ」
と、ほむらの、それほど大きくないがはっきりした声が、それを遮った。
「え――――？」
ほむらの言葉の意図が理解できず、さやかは表情を凍らせる。
「それに、それならそれでいいのよ」
「どういう、意味よ？」
途端に投げやりになったかのようなほむらの言葉に、さやかはようやく絞り出した声で、その意図を問いただす。
「気にしなくていいわ」
「気になるって！」
ほむらの態度に、流石にさやかも焦れて声を上げる。
「美樹さやか！」
「！」
ほむらは突然、険しい表情でさやかを見据え、それまでと異なりやや荒げた声を出した。
「な、なによ」
突然険しくなったほむらの態度に、さやかは少し驚きつつも、気丈を装って聞き返す。
「ひとつだけ覚えておきなさい。あなたがあなたでなくなる事をして、それで誰かを助けようとしても、結局誰ひとり救われない、それどころか関わる人を傷つけてしまうわ」
「はぁ？」

ほむらの言うことがあまりに荒唐無稽だったため、さやかは間の抜けた声を出してしまう。
「あたしがあたしじゃなくなる事って、いったいどういう意味よ？」
「直に解かるわ。そしてあなたは天秤を傾かせる。でもその時、安い正義感や義務感に捉われては駄目。そんなことをすれば、あなたは全てを失うことになる」
いつの間にか、２人は保健室にたどり着いていた。
ほむらはその扉を開けつつ、振り返りながら、
「〝あなた自身〟も含めてね」
と、そう言ってから、保健室に入り、その扉を閉めた。
「いったい、どういうことよ？」

「ってわけで、今日はなんだかいろいろサイコな出来事に出会ってしまってさやかちゃんはもうくたくたなのですよー」
放課後、ショッピングセンター内のファーストフード店。
さやかはトレイを避けつつ、行儀悪くテーブルにもたれかかっていた。
「ふふふ、大変でしたわね」
テーブルの向かい側に座る仁美が、苦笑気味に笑って言う。
「もー、笑い事じゃないってばー」
さやかは身を起こすと、そう言って一瞬だけふくれっ面になってみせ、すぐにその表情を崩す。
「自分が自分じゃなくなるとか、なんか哲学的なこと言われても、困るって」
「自分が自分ではなくなる、ですか」
頭を抱えるような態度で言うさやかの言葉に、仁美はそれを反芻した。
「例えば、自分の言いたいことを言えなくなる、自分の本心とは違う行動を強要される……とか、そういういみなのでしょうか？」
「んー、それは解からなくもないけど、ますますあたしとはかけ離れてるなぁ……」

何でわざわざ言ったのか、とさやかは首を傾げるばかりだった。
仁美はちらりと、手首につけた女物の腕時計に目をやると、
「あ、もうこんな時間……ごめんなさい、そろそろ失礼しますわ」
と、そう言って立ち上がりかけた。
「あ……習い事か。お嬢様って言うのも大変だね……あたしゃ小市民でよかった」
そう言いつつ、さやか自身も腰を上げて片付けに取り掛かる。
「割りと、好きでやってることですから」
仁美は、苦笑しながら言いつつ、トレイの上のゴミを処分して、トレイをその上の回収棚に乗せた。
さやかもそれに続くようにして片付けを終え、２人はファーストフード店を出る。
「それでは、失礼いたします」
「うん、また明日」
お互い手を振って、その場で別れた。
「……」
カツンカツン。
人のごった返す夕方のショッピングセンターの中だというのに、リノリウムの床を鳴らす自分の足音が、やたら大きく聞こえた。
「……確かに、隣に、誰か、いたような……」
ほとんど無意識に、さやかはそう呟いてしまってから、はっと口を手で抑えた。
「何言ってんのよ、あたしは。誰がいたって言うの？　はぁ……」
疲れたような態度をとって、誰が見ているわけでもないのにオーバーリアクション気味にため息をつく。
「やだなー、あたしまであのサイコに巻き込まれてんのかなー？」
柱のひとつにもたれかかるさやかの後ろを、同じ見滝原の制服を着た、ロール髪の少女が通り過ぎていった。
「あー、それこそあたしらしくないぞー」
こんこん、と頭を自分でノックするように軽く叩いてから、
「よしっ」

と、気合を入れなおすように言う。
「さてと……」
さやかはそのまま、ショッピングセンターの中にあるCDショップに向かった。
やはり、見滝原の制服を着た生徒が散見される。が、さやかが向かったのは、それを見ることができないコーナー……先端のポップス曲ではなく、クラシック音楽CDのコーナーだった。
「何かいいの、入ってないかな……」
陳列棚に並ぶCDを、1枚1枚、指をさしながらタイトルをチェックしていく。

パンッ
乾いた音がし、閃光が掠めた。
「きゅっ!?」
何かの鳴き声のような、短い悲鳴が上がる。
「なんで〝存在している〟のか知らないけれど、逃がしはしないわ」
そう言って、セーラー服にやや似通った、黒に近い紫と白を基調にしたツーピースを着た、長髪の少女がにじり寄ってくる。
「よ、よくわかんないけど、き、君は誰かとボクを間違えてるんじゃないかな？　ボクは、結果的にだけど、この星を……」
チュンッ！
言い終わらないうちに、再び乾いた音が鳴り、閃光が掠めて床に火花を散らした。
「わ……たすけ……」

『助けて』
「えっ？」
少し腰を屈ませてCDの棚をチェックしていたさやかに、その声は聞こえた。
怪訝そうな顔をして、さやかは身を起こした。
『誰か、助けて……』

「誰？　誰なの？」
　周囲を見渡すが、それらしい相手はいない。
『お願い、助けて……』
　けれどそれは、確かに聞こえる。
　ゴクリ、とさやかは喉を鳴らした。
『助けて……』
「こうなったら、今日はとことん付き合ってやろうじゃない」
　険しい表情をしつつ、その声の聞こえる方に向かって、さやかは歩き出した。
　ＣＤショップを出ると、買い物客の人ごみの中をすり抜けるように進む。足取りは徐々に速くなり、やがて小走りといえるものになった。カツンカツンと、ざわめく雑踏の中でも解るほど、さやかの靴は、音を立ててリノリウムの床を踏んでいく。
　間違いない、こっちの方から聞こえてくる。
　さやかが、助けを求める声に突き動かされて小走りにかけていくと、やがて、人の気配の少ない、通路の端の方まで辿り着いた。
『改装中につき、関係者以外立入禁止』
　その先あたりには、プレハブ構造の簡易な壁に、そう書かれたプレートの掲げられた扉がある。
「……」
　一瞬躊躇ったように、扉の前で立ち止まってから、それを振り払うようにドアノブに手をかけた。
　鍵はかかっておらず、軽い扉は簡単に開いた。
「お邪魔……します」
　おずおずと中に入る。
　当然テナントは入っておらず、無塗装の壁とリノリウムの床が続く無機質な通路が続いている。作業中であることを裏付けるかのように、あちこちに資材や工具が積まれていたが、人の気配はない。
　ドアのところにたどり着くまでの勢いとはうって変わり、あたりを警戒するようにしながら静かに脚を進めていく。
「！」

そうしているうちに、さやかの視界の中に、白い影がよろよろとふらつきながら姿を現した。
「え？」
――――ドクン。
その姿を見たとき、さやかの中で何かが動くような感触が走った。
「今のは……いや、えっと……」
なんだろう、コイツ、ウサギ？　フェレット？
ううん、その前にコイツ、どこかで見たような……
その姿を見て、さやかは胸にドキドキと動悸のようなものを感じた。
「た……すけて……」
さやかが呆然と立ち尽くしかけたとき、その白い生き物はさやかの目の前で、搾り出すように言いながら崩れ落ちて倒れた。
「ちょ、ちょっと大丈夫!?　しっかりして！」
得体の知れない存在であったが、見た目はどちらかというとぬいぐるみのようで愛らしかったし、それに傷ついて助けを求める姿を見て、慌てて駆け寄り、腰を落とす。
「そいつに近寄らないで！」
さやかがそれに手を伸ばそうとしたとき、激しい怒声がそれに割り込んできた。
「アンタは……」
聞き覚えのある声に、さやかはそちらに、見上げるようにして視線を向ける。
「暁美……ほむら……」
「そいつを渡して」
さやかが呻くように声を漏らす。だが、現れたほむらはそれにも構わず、声のトーンを落としつつも脅すように言いながら、カツカツと靴を鳴らして近寄ってくる。
「相変わらず汚い真似をするのね」
「な、何を言っているのか解からないよ……大体ボクは君と会ったのは今日が初めてで……!?」

凄むような表情をして、まるで以前からそれを知っているかのように言うほむらに対し、白い生き物は戸惑ったような声を上げる。
ギリ、とさやかが歯を鳴らし、
「おい転校生！」
と、気付いたときには声を荒げていた。
「これはアンタがやったのか？　どうしてこんなひどいこと!?」
さやかは、ほむらに向かって問い詰める。
「美樹さやか。あなたには関係ないわ」
対照的に、ほむらは冷たい、しかし冷酷なほど鋭さを持った声ではっきりと言う。
「それとも、あなたが関係することを望むのであれば……私は、あなたには容赦しないわ」
カツン、カツン。
酷薄に言い放ちながら、ほむらはさやかに近付いてくる。
――なにか……なにかないか……
さやかはあたりを見回す。
「！」
それを見つけると、さやかは白い生き物を抱きかかえながら、立ち上がり様に振り返って走り出す。
「逃がしは……」
セーラー服に似た、白と黒に近い紫を基調にしたツーピースを来たほむらの左腕に、真円状の小さな盾が出現する。
だが、次の瞬間、さやかはそれを手にしていた。
すばやく安全ピンを抜き、ハンドルを握り絞る。
バシュウウウウッ
「!?」
赤い消火器から白い消火剤が、ほむらへ向かって一気に放たれた。
あたりを粉末の霧が覆い、ほむらは視界を失う。
「っ、逃がさな――――」
遮られた視界の向こうで、走り去っていくさやかの足音を聞き、ほむらがそれに対して追いかけようとした時。

「……くっ、相手してる場合じゃないのに！」
白い粉末に変わって、黒い霧があたりに立ち込め始めた。
「あいつ、なんなのよ、いったい、あの転校生！」
革靴で廊下を鳴らしながら、さやかはほむらのいた場所から、一目散に駆け出していた。
「それにしても、何なのコイツ……」
走りながら、腕に抱えたそれに視線を向ける。
垂れた長い耳はウサギの一種のようにも見えるし、細身の長い身体はフェレットのようにも見える。
さやかの知識の中はこのような生き物は存在していなかったが、さわり心地はぬいぐるみ、といった人工物のものには感じられない。明らかに生きている、体温があるし、怪我をしている。
そう考えている間に、さやかは通路の突き当たりに辿り着いてしまった。
照明の消えている薄暗い通路の中で、緑色の非常誘導灯だけが、煌々と灯りを湛えている。
非常階段に出る扉に向かい、そのドアノブに手を伸ばす。
ガチャ、ガツン！
「開かない!?」
ドアに鍵はかかっていなかった。
にもかかわらず、何かが支(つか)えたかのように、非常扉は開かない。
「どうなってなってんの、これ」
ガツン、ガンガンガンガン！
さやかは、左腕で白い生き物を抱いたまま、焦れてドアを何度も押したり引いたりする。
「ここ以外に出られそうなトコは……」
数分ほどその行為を繰り返してから、それが無駄に終わり、さやかは口に出しながら周囲をキョロキョロと見回す。
見回して、気がついた。
「なに……これ……」
逃げることに無我夢中で気がつかなかったが、周囲に黒い霧が立ち

込めていた。
　正体はわからなかったが、生理的に危険なものに感じられた。
「危ない、ここからすぐに離れて！」
「えっ？」
　さやかがそう感じたとき、まるでそれを裏付けるかのように、白い生き物はそう言った。
「ここから速く離れて！」
「けど……！」
　危険なのは感じている。だが、どこへ逃げるべきか。もと来た通路を引き返せば、あの転校生――暁美ほむらのいた方向に向かうことになる。
　八方ふさがりの状況に、さやかが、ギリ、と奥歯を鳴らしたとき。
　ドゴォッ、バキバキバキッ!!
「なっ!?」
　巨大なものが、おろされたままになっていたテナントのシャッターをボール紙か何かのように踏み抜き、さやかの前に現れた。
「な、に、こいつ……っ」
　その姿を一言で表すなら、巨大なカマキリ。
　ただ、明らかに不自然なのは、その手が鎌や斧に例えられるカマキリ本来のものではなく、鋏の形をしていたことだ。ザリガニのような別の生き物のものとも違う、文字通りに道具の鋏の刃の部分。
　その巨大な鋏が、まるでさやかの胴を鷲掴みにするかのように動き、迫ってくる。
　勿論、掴まれるどころではない。実際に挟まれたら、さやかの胴が上下泣き別れになってしまうだろう。
　さやかが、その迫る鋏から少しでも逃れようと身を竦めつつ、どうしようもない、と諦めたと言うより反射的に、視線を逸らして目をぎゅっと閉じてしまったとき。
　ガキィンッ
　迫って来た鋏は、ついにさやかを捉えることはなかった。
　さやかの直前で、色相がぶれた膜のようなものが、さやかを捉えよ

うとする鋏の前に、一瞬だけ視認できるように出現して、それを弾き返した。
「……？」
さやか自身が目を開いてそれを見上げたとき、視界に入ったのは、バランスを崩してのけぞるカマキリの化け物と、そして、そのカマキリと自分との間に、立ちはだかる様にして現れた人影。
「危ないところだったわね」
人影――長い髪を縦ロールにした女性は、さやかを振り返りながら、相手を安心させるような、穏やかな微笑みを浮かべながら言う。
「でも、もう大丈夫」
「えっと……どちら様」
さやかは、見覚えのない顔にどこか場違いな声を出してしまうが、
「マミ！　来てくれたんだね」
と、さやかの腕の中にいた白い生き物は、表情を輝かせ、さやかの腕から身を乗り出すようにして声を上げた。
さやかには、ぱっと見には女性は、自分よりもいくらか以上に年上に見えたが、よく見るとさやかと同じ見滝原中学の制服を着ていたから、外見で感じるよりも自分に近い歳なのだろう。
「自己紹介、しないといけないわよね」
女性はおっとりした口調で優しげにそう言いつつ、
「けど、その前に」
と、視線を正面に戻しすと、手に持っていたそれを胸の前に構える。
王冠のような装飾品が、黄金色の宝石を抱えたもの。
次の瞬間、その宝石から光が溢れる。
女性がステップを踏み、靴で自分の前側につ、半円を描く。
宝石から光が黄金色の光を凝縮したようなものが、リボン状に湧き出す。それが女性の身体に巻きついたかと思うと、見滝原の制服が、山吹色のスカートとちょうちん袖のブラウスを主体に、ピンストライプのタイツと羽飾りのついた帽子、そして最初に見せたそれと同色の宝石をあしらった髪飾り、と、くどすぎない程度にファンシーな衣装になる。

「え、えっと？」
その姿のかわる様を見て、さやかは彼女の背後で呆然と立ち尽くしてしまう。
一方、カマキリの化け物は、出で立ちの変わった女性に向かって、焦れたかのように、今度は両手で一気に、女性に向かって襲い掛かってきた。
「危ない！」
さやかがそう言うが速いか――――
タタンッ！
ガランガラン……
「え……？」
さやかは、先程とは別の意味で唖然とする。
乾いた音が響いたかと思うと、カマキリの腕の、肘にあたるだろう部分が砕かれて、鋏がリノリウムの床に転がった。
女性は、装飾の彫られた白銀の銃床を持つスナイドル銃が２丁、長い銃を両手それぞれに持っていた。
「Ｒｅｌｏａｄ」
女性が銃身を下に向けると、直接ブリーチへの再装填を経ることなく、スナイドルのサイドハンマーが起き上がる。
「マミ、残念だけど見た目の割りに余り持ってないよ、こいつ、〝中身がない〟みたいだし」
さやかの腕の中で、白い生き物が女性に向かって背中越しにそう言った。
「そう」
それを聞いて、女性は柔らかく苦笑する。
「でも、腕力だけは強いみたいだし、こんなところに放って置くわけにもいかないから」
そう言って、マミと呼ばれた女性は、左手に持っていた方の銃を放り投げる。放り投げられた銃は、一瞬穏やかに白く光ったかと思うと、そのまま姿を消した。
「中がないなら好都合、消えてもらうわ――――」

右手に持っていたスナイドルを一度引き寄せ、その銃身を左手で撫でる。
すると、その銃身は、まるで臼砲のような巨大なものになった。
「Ｔｉｒｏ　Ｆｉｎａｌｅ!!」
ゴォンッ
サイドハンマーが叩かれ、黄金色の光を放ちながら発射される。それは巨大カマキリの胴体に命中したかと思うと、そのまま炸裂するように光で満たし、ボロボロと侵食するように巨大カマキリを消し去った。
その光景を見て、さやかは呆然としてしまっていた。まるで、夢を見ているかのような光景。
「す、すごい……」
だが、光が晴れたとき、そこには破壊されたビルの壁やシャッターなど、妙に現実感のある光景が残されていた。
一方――――
「ち――――」
壁の影からその光景をのぞいていた、長髪の少女が舌打ちしながら走り去っていくのを、マミは確認しつつ、追わなかった。

「ありがとうマミ、おかげで助かったよ！」
さやかの腕の中の白い生き物は、向かい合ったマミという女性に向かって、明るい声でそう言った。
「お礼ならその子に言って。私だけじゃ間に合わなかったかもしれないから」
マミはそう言って、白い生き物を抱いているさやかを視線で示した。
「うん、そうだね」
そう言って、白い生き物はさやかの腕の中で姿勢を入れ替えてちょんと座るようになり、さやかに視線を向けた。
「ありがとう！　さやか！」
「え!?」

そう言われて、さやかは驚いて目を円くした。
「何で名前知ってんの!?」
「えっと……それは……」
「順番に説明していきましょうか」
問いただすさやかに対して、白い生き物が言いよどみかけると、マミはニコリと微笑んでそう言った。
「まずはお礼と自己紹介ね」
そう言うと、マミの身体を包んでいた衣装が、再び光の流れになって黄金色の宝石の中に吸い込まれて行き、見滝原中学の制服姿に戻っていた。
「巴(ともえ)マミ。あなたと同じ見滝原中学の3年生よ」
へ、変身した？　っていうか、変身してたのを解いた!?
そうさやかが思っていると、
「よろしくね」
マミはにこりと優しげに笑って、そう言った。
「あ、え、こちらこそ」
さやかは少し決まり悪そうに返事をする。
「それから、この子はサッきゅん。私の大切なお友達よ」
マミは、白い生き物を指す様に視線を下げて、そう紹介した。
「よろしく！」
片手というか前脚というか、上げて、挨拶をするように笑顔で言う。
「本当の名前はＳＱ(エスキュー)っていうんだけど――――」
「それじゃあんまりに可愛くないから、私がそうつけてあげたの」
サッきゅんと呼ばれた白い動物が言いかけ、それをマミが継いだ。
「そして、私はこのＳＱ――サッきゅんと契約した魔法少女なの」
マミはニコニコと微笑みながらそう言って、すぐに眉を下げる。
「うーん、急には信じられないわよねぇ」
「いえ！　目の前で見てましたから！　ちょっとかっこいいな、って思いましたし！」
さやかは慌ててフォローするように、しかし嘘をついているわけでもなく軽く興奮したようにそう言った。

「サッきゅん、ひょっとしてこの子も？」
マミは、視線を自分の腕の中のサッきゅんに移して、そう訊ねた。
「うん、彼女には充分な資質があるよ」
サッきゅんはこくりと頷いて、そう即答した。
「えっ、わ、私にですか？」
いきなりそう言われて、さやかはどきりと身体を跳ねさせながら聞き返す。
「そもそも、魔法少女って、やっぱりアニメでよくある、世界を闇に染めようとする悪の組織と戦ったり、ガチで攻撃魔法撃ち合って友情したりする魔法少女……ですか？」
「なんだろう、後者のは妙な悪意を感じるよ……」
「大丈夫よ、気にしないで。私も気にしないから」
さやかは身を乗り出し気味にして訊ねる。サッきゅんは、それを聞いてなぜか脂汗をかき、それを聞いたマミはくすくすと笑いながら言った。
「基本的なイメージとしては……ううん、ちょっとだけ違うかなぁ。世界を護るため、っていう意味では正しいと思うけど」
サッきゅんは、少し悩んだようにしてから、そう答えた。
「あ、やっぱりそうなんですね！」
さやかは、再び興奮したように目を開いて言う。
「それじゃあ、今のは悪の組織の放ったモンスターとか？」
さやかは、先程マミの砲撃で消滅させられた巨大カマキリが出現した場所を見て、そう訊ねる。
マミに撃ち落されたはずの鋏も、いつの間にか消滅していた。
「いや、ボク達の場合は、特定の敵がいるわけじゃないんだ。ただ、悪意的な存在だし、放置しておける存在でもないと言う点では、君の考え方も間違ってないよ」
サッきゅんは、今度はよどむことなくそう答えた。
「すごい。正義の味方なんですね！」
さやかは、マミの顔を見て訊ねるように言った。
「まぁ、そう言うことになるかしら？」

マミは若干苦笑気味にそう応える。
「それなら、あたしもなります！　魔法少女！」
妙に正義感の強い１４歳は、妙に嬉しそうにはしゃぎながら、自分の胸を押さえるポーズでそう言った。
「だって、あたしにも資質があるって、さっきそう言ってたよね？」
さやかは畳み掛けるように、サッきゅんに向かってそう言った。
そんなさやかを見て、マミとサッきゅんは顔を見合わせ、苦笑しあう。
「えっと、気持ちは嬉しいんだけど……」
言いにくそうにマミが切り出し、それをサッきゅんが継ぐ。
「資質があるって言う意味じゃあ、さやかは確かにそれなり以上だよ。でも、それだけで軽はずみに魔法少女になられても、むしろ逆効果になってしまうこともあるんだ」
「え？」
サッきゅんの口から出た意外な言葉に、さやかはそれまでの興奮に急ブレーキをかけられたかのように、間の抜けた声を出してしまう。
「詳しいことは、これから君にきちんとした説明をするよ」
サッきゅんは、再び視線をさやかに向けて言う。
「もし、それでもさやかが、魔法少女になりたい、或いはボクと契約したいって望むのなら――――」
そこまで言って、サッきゅんはにっこりと満面の笑顔になった。
「ボクと契約して、魔法少女になってよ」

第2話：きっと、ああなりたいと思ってる。

「ところでサッきゅん、さっきの魔獣以外に誰かに追われてたみたいだけど……」
　マミは、話題を切り替えるようにして、サッきゅんに顔を向けると、心配6割怪訝さ4割と言った感じの表情になって、問いただした。
「ボクにも何がなんだかわからないんだ。あの子も魔法少女みたいだったけど、なんだかわけのわからないことを言うし、こっちの言うことは全然聞いてくれなくて、いきなり攻撃してきたんだよ」
　サッきゅんは頭を抱えるようにして、困惑に軽い混乱の入った様子で嘆くように言う。
「ふぅん……」
　マミも怪訝そうに目を細める。
「あいつ、ウチのクラスに今日転校してきたやつなんですけど」
　さやかは、頭の後ろに腕を組むポーズで、マミに言う。
「なんてゆーか、何考えてるかわかんないやつで、なんかあたしにちょっかいかけてきては、サイコや電波なことばっか言うんですよ」
　そう言って、ため息をついた。
「って、もしかして、あいつも魔法少女？」
　言ってしまってから、さやかは、はっと気付いたように、気まずそうな表情をした。おずおずとマミに視線を向ける。
「ふふっ、大丈夫よ」
　さやかが失言のと思ったその言葉を聞いて、しかし、マミはニコニコと穏やかに笑ったままだった。
「とにかく、いろいろと説明しなきゃならないこともあるようだし、場所を変えましょう？」
　マミがそう、提案するように言った。
「こんなところで立ち話もなんだし、結界も張ってないから、他に人が来たら困るし……」
「そうだね」
　サッきゅんは、短い言葉で肯定した。

戦前、とある二大財閥のすったもんだに翻弄された挙句、戦後になって沿線のセメント会社に助けを請うた結果出来上がった〝秩父鉄道〟東上線。

その東上線川越市駅から分岐し、見滝原市をほぼ東西に貫き、隣接する滝元市の武蔵滝元駅までを結ぶ、滝原線。

東上線、秩父本線をいまだに席巻する５００系や指定席急行用の３００系も昭和３０年代設計のロートルだが、支線の滝原線は、線内運転用に、旧型車の部品にその５００系と同型の車体を被せただけの、４００系が、ツリ駆けモーターの轟音を立てて走っている。

もともと他の首都圏大手私鉄より経営基盤が強くないところへ持ってきて、貨物輸送により多くのウェイトを置いているせいである。もっともその貨物輸送にしたところで、機関車は最も新しいもので昭和４２年製が１両だけ、中には大正生まれの骨董品も現役という有様なのだが……

――――閑話休題。

その４００系の走る轟音が裏手に響いてくる、見滝原駅前近くのマンション。高級と言うほどではないがアパートと言うには質感の良い建物。間取りは１ＤＫ。

……あれ？

玄関に駆けられていた表札を見て、さやかは少しだけ怪訝そうに思う。それには「巴マミ」とだけ書かれていた。

「遠慮しないで上がって。大したおもてなしができるわけでもないんだけど……」

「お邪魔しまー……す」

遠慮がちに言うマミに誘導される形で、さやかは軽く頭を下げながら玄関をくぐる。

やや手狭なダイニングを抜けて、案内された洋間の室内には、マミのベッドと、ミニカーペットにガラストップのテーブル。他にも、ファンシーな、いかにも少女らしい調度品が置かれている。

「うわぁ……素敵」

さやかは思わずそう漏らす。
「ふふっ、ありがとう」
マミは嬉しそうに微笑んだ。
「でも――」
さやかは、感心してような表情で周囲を見回していたが、マミに視線を向けて言う。
「マミさん、1人暮らしなんですか？」
「ええ、いろいろと事情があって、ね」
さやかの問いに、マミは優しげに微笑みつつもどこか寂しそうに答えた。
「だから、遠慮しないでくつろいで」
「あ、はい……」
さやかは、マミの言葉に困惑気にしつつ、そのマミに明るく取り繕ったように言われて、おずおずと、テーブルに向かって腰を下ろした。
「本当に、たいしたものでなくて悪いのだけれど」
そう言って、マミが用意した紅茶とケーキが、さやかの前にも運ばれてくる。
「い、いただきます」
さやかは少し萎縮しつつも、ケーキをデザートフォークで一口に切り、口に運んだ。
「うまっ」
その、レモンのレアチーズタルトを味わったとたん、さやかは、それまでの軽い緊張感を忘れて、思わずそう声に出していた。
「美味しいですね、これ。どこで買ったんですか？」
さやかは、好奇心旺盛そうな目でタルトとマミを顔とに交互に視線を向ける。
「ありがとう。ふふっ、私の手作りなのよ」
マミは何処か照れくさそうに笑う。
「へぇ、すごいですね」
さやかは好奇心旺盛に声を上げる。

「お世辞でも嬉しいわ」
「あや、本当ですって。あ、できたらつくり方、教えてもらって良いですか？」
「良いけど、ちゃんとしたオーブンある？　電子レンジの簡単なのだと、上手く生地焼けないわよ？」
「あちゃ、うちの安物だからなぁ……」
　苦笑しながらマミが言うと、さやかは、苦笑しながらおどけまじりに頭を抑えてみせた。
「コホン」
　話題が途切れたところで、マミが軽く咳払いをした。
「それじゃあ本題に入るわね、魔法少女の事、それと魔獣の事」
「あっ、はい」
　マミの言葉に、さやかはすっかりはしゃいでしまっていた自分を少し恥じながら、姿勢を正した。
「さっきも見たと思うけど、これ」
　マミがそう言うと、その右手の中指に嵌められていた指輪がポンッと音を立てて姿を変え、黄金色の宝石を抱えた王冠のような、小さな置物のようなものに変わる。
　それはただの宝石のようにも見えたが、中にキラキラと銀色の星のようなものが降り注ぐようにきらめき、何処か神秘的な美しさを見せていた。
「きれい……ですね」
　さやかは、それに見とれつつ、思ったままに口にした。
「これはソウルジェム。魔法少女としての……魂の源よ。サッきゅん――ＳＱに選ばれた女の子が、契約によって手にする宝石なの」
「そこから先は、ボクが説明するよ」
　マミが言うと、サッきゅんがそれを受け継いだ。
「とりあえずソウルジェムについて説明する前に、魔獣のことから説明するね。その方が順番的に解かりやすいと思うから」
「うん」
　サッきゅんは、さやかが頷くのを待って、更に続ける。

「魔獣っていうのは、悲しみや絶望、憎悪に付け入られた人間が、生み出したり、変貌したりするものなんだ。元が女性の場合は、魔女とも言うんだけど」
「生み出したり、変貌……？」
サッきゅんの言葉に、さやかは愕然としたように、ゆっくりとその言葉を反芻した。
「そう、人間の心に宿る、負の感情が持つエネルギーを利用して実体化する代物なんだ」
サッきゅんはそこまで説明して、少し難しそうな表情になった。
「でも、それを放置しておくと、放出されるエネルギーが……えーと、さやかの年齢だと、まだ熱力学の法則は習ってないよね……？」
「簡単に言えば、魔獣を倒して、それを生み出したエネルギーを回収するのが、魔法少女の役目なの」
言葉を詰まらせるサッきゅんに代わって、マミがそう説明した。
そして、再びサッきゅんが説明を続ける。
「ただ、生身の人間の身体のままじゃ、魔獣や魔女との戦いの為の能力（ちから）が無いだけじゃなくて、回収するエネルギーの莫大な量にも耐えられないからね。だから、魔法少女って言うのは、生身の人間とは違う存在になる」
「な、なんだか重い話……」
サッきゅんやマミはあっけらかんと説明するのだが、それを聞いたさやかは少し笑みを引きつらせた。
「もちろん、ただでとは言わない」
サッきゅんが苦笑するように言った。
「魔法少女になって戦う運命を背負ってもらう代わりに、ボクらは契約してくれる相手にひとつだけ奇跡を起こす事ができるんだ。どんな願いでもかなう奇跡を」
「――――っ!?」
ドクン。
サッきゅんのその言葉を聴いた瞬間、さやかの中で何かが反応した。

「どうしたの？」
一瞬、文字通りに凍りついたかのように動きを止めたさやかに、マミが心配そうに小首をかしげながらたずねる。
「あ、いえ、なんでもないんです」
さやかは引きつった苦笑でそれを誤魔化してから、
「奇跡って、例えば金銀財宝とか、不老不死とかも？」
と、サッきゅんに向かって問いかけた。
「できないことはないね」
サッきゅんは即答する。
「それじゃあ――」
さやかは急に、視線を2人から逸らし、床に這わせた。
「例えば、……その、好きな人を、振り向かせる事とかも？」
さやかは、顔をほんのりと紅くしつつ、もじもじとするようにしながら言う。
しかし、それを聞いたサッきゅんとマミは、顔を見合わせて、軽くため息をつく。それから、2人そろって視線をさやかに戻した。
「それは確かに、かなえられない願いじゃないけど……」
「そう言った、自分でするべきことに契約の願いを使うのは、感心しないわ」
困ったように言うサッきゅんに続いて、マミが、批判と言うか、言い含めるような口調でそう言った。
「あ、べ、別に、た、例えばの話ですよ、例えばの」
2人の態度を見て、さやかは顔をさらに真っ赤にしつつ、わたわたと手を振りながらそう言った。
「とにかく――ボク達が魔法少女と契約するのはそれが理由なんだけど、もちろん、直接的な危害もある。今日の魔獣のように、直接暴れまわって破壊するモノもいれば、人の負の感情を増大させて、自殺させたり、逆に他者に危害を加えさせたりもする」
「世間でよくある、理由のはっきりしない自殺や殺人事件は、かなりの確率で魔獣や魔女の呪いが原因なの」
サッきゅんが気を取り直したように説明し、マミがさらに付け加え

た。
　２人の言葉に、さやかは自分を襲ってきた、巨大なカマキリ形の魔獣の姿を思い出し、身の毛をよだたせた。
「そ、そんな恐ろしいものと戦ってるんですか……」
「そう、見た目だけだと綺麗でかっこいいかもしれないけど、実際には死と隣りあわせなのよ。だから、契約するかどうか、契約するときにどんな願いをかなえてもらうのかは、慎重に考えたほうが良いわ」
「ボク達としても、生半可な覚悟や簡単な願いのために契約しても、本末転倒ってことになりかねないからね」
　さやかが思い口調で聞き返すと、今度はマミがそれに答え、サッきゅんがそれに付け加えた。
「うーん、確かにめったに無いチャンスではあるけどねぇ」
　さやかは、唸るようにして呟きつつ考え込んでから、ふと気がついて視線をマミに向けた。
「そういえば、マミさんの他に魔法少女はいるんですか？」
「ええ、大体、人の集まるところには何人かの魔法少女がいるわ。そう言うところは、魔獣が生まれやすいから」
　さやかの質問に、マミは表情を穏やかな笑顔に戻して答える。
「それで、結局、あの転校生も魔法少女なんですか？」
「うーん」
　マミに向けられた質問だったが、唸り声を上げたのはサッきゅんの方だった。
「確かに彼女は魔法少女だよ。しかもかなり強い力を持ってる。でも、よく解からないんだ」
「よく、解からない？」
　困惑気なサッきゅんの答えに、さやかは小首を傾げて反芻する。
「彼女は明らかにボクを狙ってたんだ。でも、彼女の言うことはボクには何がなんだかわからないし、恨まれる覚えもないんだよ。でも、正気を失ってるわけでもなかった」
「うーん、結局理由はわからずじまい、って事か……」
　サッきゅんの言葉に、さやかも少し深刻そうな表情になった。

「ただ――――」
「ただ？」
マミとさやかがそろってサッきゅんを注視する。声を出したのはマミの方だった。
「ボクを何かと勘違いしてたみたいではあったね。それがなんなのかはわからないけど」
「そう……」
マミはそう言って、少しだけ憂鬱気にため息をついた。
「でも、結局つまるところ、魔法少女、って、やっぱり正義の味方なんですよね？」
重くなりかけた空気を振り払おうと、さやかは気を取り直したように、マミに向かって訊ねる。
「ええ、もちろんよ」
マミはにっこりと笑ってそう答えた。
「うーん、さやかちゃんとしては大いに悩むなぁ。正義の味方はやってみたいし、願い事が何でもかなうっていうのも美味しい話だし……」
少しおどけたような口調で、マミはそう言った。
僅かな沈黙の中を、タタン、タタンと電車の走るジョイント音が響いてくる。こちらは近代的なＷＮドライブ、もしくは直角カルダン駆動の音。都営三田線直通の、西馬込～武蔵滝元間の快速電車の音。
「それなら――さやかさん、しばらく私の魔獣退治に付き合ってみない？」
マミは微笑みつつ、どこか期待したような眼をさやかに向けて、そう言った。
「ええ!?　いいんですか？」
さやかは驚いて聞き返す。
「ええ。よほど強い魔獣じゃなければ庇えないことはないし、魔法少女がどんなものか、自分自身で知ってみたら良いと思うの」
「それに、もし危なくなったらボクもフォローするから！」
マミが言い、サッきゅんが手を上げながらそれに付け加えた。

すると、さやかは真摯な瞳をマミに向ける。
「あのっ、よろしくお願いします」

ジリリリリリリリ……
クラシックなスタイルの目覚まし時計を、半ば無意識に止める。
「ん……夢……？」
さやかがそう呟くと、
「おはよう、さやか！」
「……じゃ、なかったか」
と、聞こえてきた元気な挨拶に、やや力の抜けた声でさらに呟いた。
「よいっ、しょっ、と……」
眠気を振り払うようにして、ベッドから身を起こす。
「行ってきまーす」
いつものように、特に時間に切羽詰っているわけではないけれども、家を出てランニングするように小走りにパタパタと駆けて、学校に向かう。
「それにしてもアンタ、マミさんと一緒にいなくていいの？」
走るさやかの頭の上に乗って、だらりと伸びているサッきゅんに、さやかは視線を上げるようにしながらそう訊ねた。
「今はマミより、さやかのフォローに回っていたほうがいいからね」
「そう言うものかな」
サッきゅんの答えに、さやかは微妙に納得しきれていないような表情をした。
いつもの登校路。
いつも、1人で通る道。
いつも通り過ぎる、旧くからの住宅地と新興住宅地とが合流する、小さな交差点。
「……」
さやかは、やはり今日もそこで脚を止めてしまった。
「どうしたの？」
急に立ち止まったさやかに、サッきゅんが怪訝そうに聞いてくる。

「あ、ううん。なんでもないの」
さやかはそう言って、再び登校路を歩き始めた。
そして、いつもの、学校前の遊歩道。
「さやかさん」
今日は、さやかの方が背後から声をかけられた。
仁美の声に、さやかはびくっと背を跳ねさせる。
「あ、お、おはよう、仁美」
さやかは、頭の上に乗っているモノを気にしつつ、ぎこちなく振り返って仁美を見た。
『大丈夫。今は、さやか以外の人間には見えてないから』
さやかの、耳に、ではなく、頭の中に直接、サッきゅんの声が聞こえてきた。
『そうなんだ……って、これ、なに？　テレパシー？』
『そう言って差し支えないかな』
さやかが声に出さずに言うと、やはりサッきゅんからの答えが返ってきた。
『あたしにも……もうそんなにマジカルな力が？』
『あ、いや、今はボクが中継してるだけだからね？』
自分の手を見るようにして、軽く驚いたような態度をとるさやかに、サッきゅんはじとりと汗をかきながらそう説明した。
「どうかなさいましたの？」
1人芝居状態のさやかを怪訝に思ったのか、仁美が小首をかしげながら問いかける。
「あ、いやいや、別になんでもないの」
さやかは、慌てて仁美に向き直りなおして、パタパタと手を振って誤魔化した。
さやかと仁美は2人並んで、既に直線上の視界に見えている校舎へと向かう。
「ねぇ、仁美」
「なんでしょう？」
さやかが、空を見上げるように軽く背を逸らす姿勢で歩きつつ、訊

ねる。仁美はそんなさやかを覗き込むようにして、聞き返した。
「もし、なんでも願い事がひとつかなうとしたら、どんなことをお願いする？」
「なんでも、ですか？」
　さやかの問いかけに、仁美は一旦返事をしてから、口元に指を当てて考え込む。
「そうですわねぇ……強いて言うなら……」
「強いて言うなら？」
「世界が平和でありますように、でしょうか？」
　仁美はそう答えて、にこりと微笑んだ。
「へぇ、仁美って……ううん、仁美らしいのかな」
　さやかは意外そうに言いかけて、考え直したように笑った。
「特に望むものが無いわけじゃないですけれど、自分の手でかなえられるものは、そうしたいじゃないですか」
「なるほどねー」
　仁美の答えに、さやかは一度は感心したようにそう言ったものの、
「お嬢様の考えることは小市民とはやっぱり違いますなぁ」
　と、茶化すようににやりと笑って付け加える。
「もう、からかわないでくださいまし」
　流石の仁美も表情を険しい笑みにして、比較的にだが荒い声で言い返した。
「そういうさやかさんは、何かそう言う願い事がありますの？」
「んー……、ないことも、ないんだけどね？」
　仁美の問い返しに、さやかは半ば誤魔化すように言う。
「それはひょっとして、恋の悩みだったりいたしません？」
「なっ」
　仁美の言葉に、さやかはあからさまに狼狽する。
「何言っちゃってるのかな？　そ、そんなんじゃないってば」
「ふふふ、顔に出てますわよ」
「ち、違うってばぁ」
　仁美の追及に、さやかはムキになって否定する。

「もうっ、仁美こそ、からかわないでよっ」
「あらあら、それは失礼いたしました」
口ではそう言いつつも、仁美はくすくすと可笑しそうに笑っていた。
教室にたどり着き、さやかが自分の席に着くと、サッきゅんはすとん、と、そのさやかの机の上に降り立った。
『さっき仁美が言ってたような願い事もありなの？』
『ちょっと難しい、ところかな』
さやかのテレパシーでの問いかけに、サッきゅんはそう答える。
『不可能って言うわけじゃないよ。ただ、つまり――システム上、魔獣と魔法少女に関わる事には干渉できない。つまりそれは例外になっちゃうってこと』
『なるほどねー』
さやかが視線を天井に上げて、感心したように心の中で言った時。
ガラガラと、教室の後ろの扉が開いて、長髪の女生徒が入ってきた。
『う、まずっ』
ちらっと振り返ったさやかは、入ってきた女生徒――暁美ほむらの姿を見て、表情を歪ませて前に向き直る。
『ナチュラルにアンタついてきちゃったけどさ、まずいんじゃない？
転校生、このクラスだよ？　命狙われてんでしょ？』
『大丈夫、こんな人の多いところで実力行使には出てこないだろうから』
憔悴するさやかに対し、サッきゅんは平然とそう答えた。
『それに、マミもいるし、学校の方が安全だと思うな』
『マミさんのクラス、３年だから遠いよ？』
『大丈夫、話は聞こえてるわ』
さやかとサッきゅんがやり取りしていると、そこに割り込むようにして、マミの声がさやかの頭の中に聞こえてきた。
『わ、マミさん!?』
突然聞こえてきたマミの声に、さやかは慌てて挨拶をする。
『お、おはようございますっ！』

『おはよう』
マミは返事をしてから、
『ちゃんと見守ってるから安心して。それに、サッきゅんの言うとおり、人前で襲ってくるような真似はしないはずよ』
『なら、いいけど……』
そう言いつつも、心配げにちらちらとほむらの様子をうかがう。
ほむらの方もさやかの視線に気付いたのか、さやかの視線にあわせて、ギロッ、と睨み返してきた。
なんなのよ、アイツ。
さやかはテレパシーにも飛ばないように、心の中で毒ついた。
「結局、今のところ特に願い事が思い浮かばないな～」
昼休みの屋上。
校庭がそれほど広くない分、高いフェンスで覆われつつ解放されているそこで、さやかはくつろぎながらそう呟いた。
「あんまり性急に決めない方が、ボク達としてはありがたいんだけどね」
さやかが行儀悪く床に腰を下ろし、フェンスにもたれかかっているその横で、ちょんと座ったサッきゅんが苦笑する。
「でも、魔法少女になってくれる女の子がいないと困るんでしょ」
「まぁ、それはそうなんだけど……」
さやかに問われて、サッきゅんは難しそうに答える。
「そういえば……」
『そういえば、マミさん』
さやかは声に出して呟きかけ、それからテレパシーに切り替えた。
『なにかしら？』
この場にはいないマミから、返事がくる。
『マミさんは、いったいどんな願い事をかなえてもらったんですか？』
『ちょ、さやか、それは……』
さやかがマミに訊ねると、マミより早く、サッきゅんが慌てたような言葉を発した。
『いいのよ、サッきゅん』

マミは、その笑顔が見えるかのような穏やかな口調で言う。
『私がかなえてもらった願い事は――』
「！」
マミの答えを聞く直前、さやかはその人影に気付いて表情を険しくした。
『まって、アイツが来た』
マミを止めながら、さやかは腰を下ろしたまま、上目遣いの姿勢でほむらを睨みつける。
「なんの用だよ、昨日の続きか？」
「勘違いしないで」
対するほむらの態度はやはり刺々しいものだったが、昨日と比べて幾分攻撃的な態度が消えたようにも見えた。
「私はあなたのことなんかどうでもいいの。だから、あなたが敵になるなら容赦しない」
「喧嘩売ってるのは、どう見てもそっちに思えるんだけど？」
ほむらの言葉に、さやかは低い声で言い返す。
「そう。でも本当のことだから」
「じゃあ、何でわざわざちょっかい出しに来るのさ」
「そうね……」
さやかの問いに、ほむらは一瞬だけ沈黙を置いてから答える。
「悲しむからよ」
「え？」
意外な言葉に、さやかは毒気を抜かれたように、目を円くしてほむらを凝視する。
「それだけ。だから、出来ればそいつの甘言に乗って欲しくないし、天秤を傾けるような真似はしてほしくないの」
さやかはわけが解からないまま、ほむらは続ける。
「ただ、それは私にとっては二の次でしかない。それだけのことよ」
言いたい事を言い終えた、というふうに、ほむらは踵を返すと、そのまま屋上を後にした。
さやかは、ただ呆然と取り残される。

「なんなの……あいつ」

キーンコーンカーンコーン……

鐘の音を再現する電子音が、市立見滝原中学校に放課を告げる。

「それでは帰りましょうか、さやかさん」

「あ……」

さやかがカバンに机の中身を詰め込んでいると、既に支度を終えた仁美が近寄ってきて、声をかけた。

「ごめん、今日はちょっと約束があるから」

さやかは、申し訳なさそうに苦笑して断った。

「そうですか、それは仕方ありませんわね」

仁美の方も、残念そうに苦笑した。

さやかが仁美を見送ると、その彼女が出て行った教室の後ろの扉のもとに、さやかが昨日知ったばかりの顔が見えた。

その顔が、にこりと穏やかに微笑む。

数十分後、さやかとマミの姿はショッピングセンターのファーストフード店にあった。

「それじゃあ魔法少女体験コース、行ってみるけど、準備は良い？」

さやかとテーブルを挟んで向かい合うマミが、やさしげに微笑みながらそう言った。

「うむ、どんと来い」

さやかはそう言うと、悪戯っぽく笑いながら、布袋に包まれた長尺物をその脇から持ち上げた。

「さっき体育倉庫から拝借してきました」

さやかは、金属バットをかざすようにして、マミに見せる。

「うん……まぁ、意気込みは良いわね……」

マミは、どこか辟易したような、呆れたような顔をした。

――――ドクン。

「……」

さやかはキョロキョロと辺りを見回した。

「どうか、したの？」

「はっ」
怪訝そうにするマミの声で、さやかは我に返った。
「べ、別になんでもないんです」
慌てて手を振り、誤魔化すように言う。
「そう、それならいいけど」
マミはそう言って苦笑した。
「それじゃあ、準備も整ったし、行きますか」
「ええ、行きましょう」
2人はそう言って、既に空になったトレイを手に立ち上がった。
「サッきゅん、反応わかる？」
ショッピングセンターの、改装エリアの入り口。
マミがそう声をかけると、その肩に乗っていたサッきゅんがすたっと床に飛び降りた。
ちりん。
その、ネコのそれのような耳の右側につけていた、ピアスで止められていた小さい、白い鈴のような物が澄んだ音を立てた。
「大分反応は弱まってるね。ちょっとボクじゃトレースしきれないかも」
「そう……」
残念そうにするサッきゅんの言葉を聞いて、マミは軽くため息をつく。
「昨日、取り逃がしたのが痛かったわね」
マミは落胆したように言った。
「取り逃がした、って？　昨日の魔獣は、マミさんが……」
さやかは不思議そうな顔をしてマミを見る。
「昨日のは、人の負の感情が生み出した魔獣。でも、その根本の実体じゃないんだ」
「解かりやすく言うと、魔獣を生み出しているその呪いを叩かないと、意味がないの」
サッきゅんが言い、マミがそれを噛み砕くように説明した。
「な、なるほど」

さやかは理解できたような、しきれていないような返事をする。
「距離が離れてるとなると、ボクがやるよりマミがやった方が確実かもしれないね」
「ええ」
サッきゅんがマミを見上げてそう言うと、マミは右の中指に嵌められていたソウルジェムの指輪が、宝石を抱える王冠をのような姿に変化する。
美しく輝いていたはずのソウルジェムが、今はその輝きが暗くなったりして、明滅している。
「光の加減が変わってるでしょ？　これが昨日、ここで昨日、魔獣を生み出した人の、負の感情に対する反応なの」
マミの説明に、さやかは凝視するように、マミの手の中にある黄金色のソウルジェムを覗き込んだ。
「基本はこの反応を頼りに、魔獣を生み出しているその呪いの存在を追うのよ」
「あー……結構地味……」
苦笑気味のマミの言葉を聞いて、さやかは疲れたような笑みを作って言った。
チカチカと明滅するマミのソウルジェムを注視しつつ、２人はその場から歩き出した。
「……」
そして、それを見ている一対の視線があった。
「あれは……ソウルジェム？　どうして……？」

さやかとマミの２人は、ショッピングセンターを出て、見滝原市の駅前市街地を歩く。
「昨日も言ったけど、魔獣の呪いで起こるのは、交通事故や傷害事件……それに、自殺なんかが多いわ。だから、そう言う事が起こりやすいところを重点的にチェックするの」
歩きながら、マミが説明する。
「それに病院。身体的に弱っていて、なおかつ負の感情を溜め込んで

いる人が多いから、そこに魔獣の呪いが紛れ込むとかなりまずいことになる。注意したほうが良いわ」
「病院……」
その単語を聞いて、さやかの表情が俄かに曇った。
「美樹さん、最近そう言う、自殺が増えたとか言う場所、知らないかしら？」
「えっと……」
マミに訊ねられて、さやかは一旦脚を止め、腕を組んで考え込むポーズをとり、唸った。
「あ、そういえば」
カンカンカンカンカンカンカンカン……
警報機の単調な音が鳴り響き、遮断機が降りる。
それは、見滝原市ほど程度の街なら普通にある、鉄道路線の踏切。
ただ、普通の光景と少し違うのは――――
「この踏切、最近飛び込み自殺とか、自動車が立ち往生する事故がここ数日立て続けに起こってるんですよ。それで電車がしょっちゅう遅れてるって」
さやかは、Ｗｅｂのブログやｔｗｉｔｔｅｒで見かけた記事と、同級生達の噂話とを重ねつつ、手振りを加えて説明する。
『また見滝原第１踏切の事故で抑止ｋｔｋｒ』
『いい加減にしろよ。また三田線巻き添えじゃねーか！』
『今日も川越市で足止め中@滝原線快速下り』
『電車ボロすぎんだろいい加減廃車しろ』
『あそこ、今オタが多いからそのせいなんだろ』
上り線を、線内運転の４００系６連が、床下からつりかけ式モーターの轟音を響かせながら、見滝原駅に向けて走ってくる。
普通と違う光景、それが、走ってくる電車に向けられる、三脚に立てられた、１眼レフカメラの、望遠レンズの砲列だった。
ブァァァァンッ!!
接近しすぎている撮影者に、電車は激しくタイフォンを鳴らして警告する。

「！」
マミのソウルジェムの明滅が、急に早くなる。
２人の傍を、１人の、２０代後半ぐらいの青年が、ジュラルミン製のカメラバッグを背負って、歩いてくる。
「あなた――」
その青年が２人の背後を歩き過ぎようとした時、マミは振り返らずに、さやか達に対するものとは明らかに異なる、剣のある声を彼に向かって発した。
「そのケースの中身、一体なんですか？」
「な……」
青年は反射的に立ち止まり、その場でマミに向かって身構えた。
「ちょ、ちょっとマミさん？」
さやかも、マミの態度に驚き、思わず顔色を変えて声を上げる。
だが、マミと、その肩に乗っているサッきゅんは、冷静そのものの表情で、青年を振り返った。
「な、何を言ってるんだ君達は……そんなの、見れば解かるだろ……」
青年は明らかに狼狽しながら、カメラバッグを庇うように抱えなおす。
「だったら、その中身をボク達に見せる事も出来るよね？」
サッきゅんが言った。
普通、わけのわからないぬいぐるみの様な生き物が喋ったら、それに対して驚くだろう。
だが、青年は、それに驚いた様子はなく、マミたちの方を向いたまま、じりじりと後ずさりしていくだけだった。
カンカンカンカン……
警報機が鳴る。遮断機が下りる。
今度は下り線を、４００系とは隔世の感のある、三田線乗り入れ用ピカピカの軽量オールステンレス車体にＷＮドライブのＶＶＶＦインバーター制御車、２０００系の８連、終点の武蔵滝元行快速が軽やかに加速しつつ、踏切に差し掛かる
「うわ、うわぁぁぁぁぁぁっ！」

電車が踏切にかかった瞬間、青年は奇声を上げつつ、マミに向かってカメラバッグを放り投げた。
その次の瞬間、マミのソウルジェムから、黄金色の光の束が放たれ、リボンのように舞う。
フタのロックを外された上体で放り投げられたカメラバッグから、無数の、ミニチュアライズされた一眼レフカメラが飛び散る。
黄金色の光るリボンが、その飛び散った小さなカメラを片っ端から受け止め、空に跳ね飛ばした。
チュドオオオンッ
「ば、爆弾!?」
さやかはそれをみて、驚愕に目を円くする。
カメラのミニチュアに見えたそれが、爆発したのだ。しかも、花火というレベルではない。充分な破壊力を持つだろう威力だ。
「やっぱり、あなたが〝呪い〟の大元ね」
マミがそう言うと、黄金色のリボンが巨大な布になって、あたりを覆った。
覆われた空間は、色を失い、真っ黒なキャンバスに白墨で描いた線画のような光景になる。
警報機の音は止み、遮断機は降りたまま。行きかう人の動きも、踏切の上の電車も、ぴたりと動きを止めている。
「俺が悪いんじゃないんだ……」
青年は、頭を抱えて振り乱しながら叫ぶ。まるで、マミやさやかたちの姿は眼に入っていないかのようだった。
「みんな、ミンナ、ミンナホカノヤツラガカッテナノガワルインダァァァァァッ!!」
まるで、ムンクの「叫び」のような姿勢で青年が身を逸らしたかと思うと、その背が異様に伸び、そして姿さえも人のものではなくなっていく。
「ひっ……」
さやかは息を呑んで、一歩後ずさりした。
マミのソウルジェムから黄金色の光の束が放たれ、それがマミの身

体を包む。
マミの姿が魔法少女のものになったとき、青年もまた異形の怪物へと変化していた。
身体を構成するのは線路。
その両手、そして頭は1眼レフカメラになっていた。
ぎょろり。
異形の頭部であるカメラが、そのレンズをさやかに向けた。
「危ない！」
「うわっ」
巻き込むようにして、マミはさやかごと転げた。
次の瞬間、カメラの頭部に備わったストロボから、光が放たれた。
つい一瞬前までさやかの立っていた場所が、その光を受けて、炙られたようにぷすぷすと煙を上げる。
「マミ！　さやかの事はボクに任せて！」
「へ？」
サッきゅんはそう言って、マミの肩からさやかの肩へと飛び移る。
そのストンと言う衝撃を受けて、さやかは間抜けな声を出してしまった。
「頼むわね」
マミはそう言うと、さやかのいる位置から、異形――魔獣に向かって1歩踏み出す。と、そのステップで、一瞬ふわりとスカートを、挨拶するようにたくし上げた。
すると、マミの周囲にいくつもの光の棒が立ったかと思うと、それらが装飾の掘り込まれた白銀の銃床を持つスナイドル銃に変化した。
魔獣がカメラの両手を振るう。すると、その先から、畳まれた三脚を模った柄を持つ槍が放たれる。
その時には、マミは出現させたスナイドルの1丁を片手で持ち、それめがけて引き金を引いていた。
銃口からほとばしる閃光が、放たれた槍とぶつかり、砕く。
すると、今度は魔獣は、マミめがけて両腕を振るった。
「はっ！」

マミの掛け声と共に、残っていた銃が浮き上がり、魔獣の方を向く。
魔獣の腕から放たれた無数の槍を、マミのスナイドルの射撃が砕いていく。
「マミさん！」
それに気付いたさやかが、思わず身を乗り出しかけた。
次の瞬間、魔獣の右腕から延びたレールが、まるでリボンのように捻じ曲がっては、マミの身体に巻きついて縛り上げたのだ。
「だめ、前に出ないで！　さやかはまだ生身の人間なんだから！」
「で、でも」
さやかは思わず駆け出そうとして、サッきゅんに慌てた声で制止される。
「大丈夫」
マミは一瞬、締め上げられて苦しそうな顔をするものの、すぐに穏やかな笑みをさやかに向けたて、余裕気に言った。
「この程度で、未来の後輩にかっこ悪いところ、見せられないもんね」
マミはそう言ってから、再び視線を魔獣に向ける。
「Ｒｅｌｏａｄ！」
マミが呟くと、一度射撃を終えて転がっていたスナイドルが、いっせいに浮かび上がる。
ブリーチに黄金色の光が挿入されたかと思うと、その尾栓が閉じられると同時に、サイドハンマーが起こされる。
そして次の瞬間、それらが同時に火を噴いた。
射撃は魔獣の頭部に集中して命中する。レンズが、ストロボが叩き割られる。
魔獣はもんどりうつように仰け反る。
「はっ」
マミを拘束していたレールが緩み、マミは掛け声と共にそれから抜け出して、くるりと体勢を整えながら着地した。
１丁だけ、空中に浮かんで残っていたスナイドルが落ちてきたかと思うと、マミの右手に収まる。
そして、そのスナイドルの銃身が巨大化し、臼砲のようになった。

「Ｔｉｒｏ――」
マミがその砲口を、のた打ち回る魔獣に向ける。
サイドハンマーが、発火石（フリントロック）を叩く。
「Ｆｉｎａｌｅ」
ゴォンッ！
放たれた巨大な光が、魔獣を包み込む。
レールとカメラで構成された魔獣の身体が、ボロボロと崩れ落ちていく。
その後に、変貌する前の姿の、気絶した青年と、無残な状態でボディの割れたキヤノン製１眼レフカメラが、残された。

周囲の光景に色が戻ってくる。
ドンッ
「きゃっ」
「あ、す、すみません」
突然、さやかは背中に衝撃を受けた、かと思うと、背後から男性が反射的に謝罪する声が聞こえてきた。
「お前、よそ見しながら歩いてっからそうなるんだよ」
「そんな事ないよ」
高校生ぐらいの２人連れの少年が、さやかを追い抜く形で歩いていく。さやかにぶつかってきた方の少年は、先端に１眼レフカメラを装着した三脚を抱えていた。連れの方の少年が、軽口交じりに咎める。
「いいから気をつけて歩けよ、それで人殴っちまったら、洒落になんねーぞ」
「解かってるって」
さやかが辺りを見回すと、先ほどまで動きを止めていた人やクルマの姿はなく、電車も踏切上にはいなかった。
いつの間にか陽は沈みかけて、あたりは山吹色に染まり始めている。
「えっと、あれ……？」
「今張った結界は、あくまで周囲に危害が及ばないように因果を切り

離すだけのものなの」
　さやかが事態を理解できずにいると、既に魔法少女の装束を解いたマミが、苦笑交じりに微笑みながらそう言った。
「時間そのものを止められるわけじゃないのよ。その内側では〝そう見えてる〟ってだけ」
「なるほど」
　マミの説明を受けて、さやかは納得して声を出した。
「本物の時間操作能力をもつ魔法少女が生まれるとしたら、よっぽど強い願いか、何らかの強い因果を背負ってる存在か、そのどっちかだろうね」
　サッきゅんが付け加えるように言った。

「う……うん……」
　２人が話していると、路肩の土手に寝転ぶようにしていた青年が、呻くような声を上げながら、ゆっくりと眼をあけた。
「……あ、れ？　ここは？　俺はいったい何を……？」
　青年はそう呟いてから、ゆっくりと身体を起こそうとする。
「いちち……」
　青年は、身体は起こせたが、関節が痛むのか、表情を歪ませて声を漏らす。
「無理はしないでください」
　マミは青年に近寄り、屈んでその背をそっと支え、微笑みかけた。
「大丈夫、ちょっと悪い夢を見てただけですよ」
「あ、うん……そうなのかな」
　青年は、まだ状況が完全に認識できていないのか、ぼんやりとしつつ、マミの言葉に答えた。
「これ」
　膝を軽く曲げて座り込む青年に、マミはそれを差し出した。
「貴方の、大切な物ですよね？」
　壊れたカメラを差し出す。
「ああ、うん……」

青年はそれを受け取ると、膝の上に抱えて、感慨深そうに壊れたカメラを見た。
「高校の頃に必死にバイトして買って、ずっと使ってたんだけど……駅のホームで突き飛ばされて、こんなになっちまったんだよな……直せると、いいんだけど」
青年は呟くようにそう言ってから、
「あはは、高校生の女の子に何言ってるのかな、俺」
「こ、高校……」
マミが一瞬硬直し、絶句する。
『マミさんの容姿じゃねぇ……』
『今は制服着てるから高校生で済むけど、私服だと大学生だよ』
さやかが苦笑しつつテレパスでサッきゅんに話しかけると、サッきゅんも含み笑いをするかのような声でそう言った。
「でも、もし貴方がそれで悲しい思いをしたって言うんなら、それを他の人には味わわせないようにしましょう?」
マミは硬直から解けると、穏やかに微笑んで、青年にそう言う。
「って、子供が生意気なこと言っちゃいましたか」
「いや――」
マミが悪戯っぽく舌を出してそう言うと、青年は憑き物が落ちたかのようなさっぱりした笑顔で、言いながら立ち上がり、ズボンの尻を払う。
「君の言うとおりだと思うよ」
「はい、ありがとうございます」
青年の言葉に、マミはにっこりと満面の笑顔を浮かべた。
「それでは、私達は失礼しますね」
マミはぺこりと一礼する。
「うん、ありがとう」
青年は手を振ってそれに応えた。
「さ、さやかさん、行きましょう」
「あ、はい」
マミは1歩踏み出して、さやかに声をかけた。

青年は、さやかとマミ達が向かおうとしている方向とは逆に向かって、歩き出していた。
「一件落着、ですか」
「ええ、めでたしめでたし、よ」
マミがそう言ったとき、
「え、あ、あれ!? カメラが、俺の１０（テン）が!?」
青年の手の中には、綺麗な状態になったＥＯＳ１０があった。

夜――――
美樹家、さやかの自室。
「マミさん、すげーかっこよかったなぁ」
宿題をやる為にノートを広げつつも、それには手をつけず、右手でシャープペンシルをくるくると弄びながら、左手で頬杖を突いて、熱いため息を漏らしながら言う。
叶えたい願いとか、いろいろありすぎてすぐには決められないけど――――
あたしはきっと、ああなりたいと思ってる。

カンカンカンカン……
警報機が鳴る、遮断機が下りる。
西馬込行の快速電車、初代三田線乗入れ用１０００系が、直角カルダンのベベルギアの独特な響きを立てて、通過していく。
「これじゃまるで、今までとしていることが――――」
既にとっくに陽も落ち、街頭が薄暗くあたりを照らす中で。
警報機と電車の走行音をＢＧＭに、呟いた。

第3話：キミ自身がそれを望むのか

滝元医学大学・附属病院――――

「うわぁ、すごい！」

病人衣に身を包んだ少年が、まだパッケージの封の切られていないCDを見て、そう声を上げた。

「これ、もうネットでも手に入らない廃盤だよ！」

「そ、そうなの？」

はしゃぐ様な声を上げる少年に対して、それを届けた同じ歳の少女は、半ばきょとんとして聞き返す。

「さやかはレアなCD見つける天才だね。いつも本当にありがとう」

少年――上条恭介は、爽やかな笑顔で、少女――美樹さやかに言った。

「良かったら、さやかも一緒に聞いてみる？」

ポータブルCDプレイヤーを取り出し、バイオリンソロ曲のCDの封を切りながら、恭介はさやかに対してそう提案する。

「へっ!?」

突然の提案に、さやかはビクッと背を跳ねさせた。

「ほら……」

恭介は、本来ステレオのイヤホンの片方を、さやかに差し出した。

さやかはそれを受け取り、自分の左耳につける。

プレイヤーの再生キーが押される。

イヤホンから、半分ずつのバイオリンの音楽が流れ始めた。

上条恭介の夢はバイオリニストだった。

その才能は既に芽吹き始めており、周囲からも将来を嘱望されていた。

幼馴染みの少女、美樹さやかもその1人だった。

だが、少年の夢は、本人の意思とは無関係に暗礁に乗り上げた。

数週間前、踏切事故に巻き込まれて。

一命こそ取り留めたが、彼の左手は靭帯を激しく損傷し、回復は絶望視されていた。

「……っ……」
最初は嬉しそうにしていた恭介の表情が徐々に曇り、やがて呻くように、押し殺して泣き声を上げ始めた。
その顔を見せまいとするかのように、さやかから顔を背けた。
「……う……ッ……」
さやかが出来る事は限られていた。見ていることとの他には、彼の好きそうなバイオリンの曲のＣＤを流してあげる程度しか――――
「……」

翌日。
「それじゃあ、今日も魔法少女体験コース、行ってみましょうか」
見滝原駅駅ビル『フォーリング・ビュー』のショッピングセンター区画にある、ファーストフード店。
さやかはマミと向き合い、ブランチとしゃれ込んでいた。もっともマミのチーズバーガーもさやかのホットドッグもすでに包み紙だけになっていて、少しだらだらとポテトをつまんでいる段階だったが。
「あーいっす」
マミに言われ、さやかは、まだ布カバーに包まれたままの金属バットを見せびらかすようにしながら、そう元気よく答えた。
「っても、今日もまた、歩き回って探すことになるんですよね」
さやかは、それがいやというわけではない、といった感じの口調だが、どこかため息交じりの苦笑でそう言った。
「ええ、けれどちゃんと、私だってまったくあたりをつけてないわけじゃないのよ」
「あ、そうなんですか」
やわらかく苦笑するマミにそう言われて、さやかは少しだけ気まずそうに言った。
「まぁ、実際にはそれっぽいところの情報を集めて、サッきゅんに確認してもらってるだけだけど」
マミは、穏やかな微笑に、わずかに自嘲交じりの苦笑を混ぜて、そう言った。

「いやぁ、それでも凄いですよー、私なんて突進することしか考えてませんから」
さやかは、他意はなく心からそう言って、やはりじぶんを自嘲するように苦笑した。
『マミ』
丁度、２人の会話が一段落したとき、そのサッきゅんからテレパシーが届いた。
『駅北口から少し離れた廃ビル。誘導するからついてきて』
『解ったわ』
マミは、サッきゅんにそう答えると、
「じゃあ、行きましょうか?」
と、穏やかに微笑んだまま、すでに包装紙類と空のドリンクカップだけが残されたトレイを持ち上げつつ、立ち上がった。
見滝原駅――――
大きな商店街や巴邸のマンションがある南口側と異なり、北口側はそれほど拓けていない――と言っても比較論の問題で、小柄とはいえ２階建てで衣料品も扱うスーパーマーケットもあり、決して人通りが少なくないわけではないのだが。
しかし、１９９０年代末に計画された再開発事業がうまくいかず、結果として、かつて小口貨物を扱っていたヤードが撤去されず、バブル崩壊の際に撤退してしまった周囲の廃工場ともども、不気味な廃墟地帯と化してしまった。
太平洋セメントの消石灰工場だけは今でも稼動しているため、同工場への引込線と駅にある機回し線はまだ生きているが、中小の工場が利用した荷役ヤードは、今は放擲されて荒れ放題になっている。
さやかやマミたちが、サッきゅんに誘導されてやってきたそこは、かつて運送会社の荷役所だったらしい場所で、今は、正面のオフィスビルも、広い敷地を持ったトラックヤードも、雑草が生えて荒れ放題である。
鉄筋コンクリートのはずの建物は老朽化で錆色に赤茶けており、不気味さを醸し出していた。

「！」
「マミさん？」
急に、マミの表情が険しくなった。廃ビルの頂点のほうに視線を向けている。
「あっ」
マミの視線を追って、さやかも、それに気付き、短く声を上げる。
ＯＬ風の女性が、屋上にいた。この廃墟の屋上にただ立っているだけでも不自然だが、その女性は、おもむろに錆付いたフェンスを乗り越えようとしたのだ。
「いけない」
マミは、右手に白銀の銃床を持つスナイドル銃を1丁出現させると、それを縦にスピンさせるようにして投擲した。
その銃口の方から、地面に突き立つ。
フェンスを乗り越えた女性が、躊躇う様子もなく、自分の身を屋上から放り投げた。
ふわり。
丁度その女性の真下に突き立ったスナイドルは、大量の黄金色のリボンの束に姿を変えると、舞い上がるようにして上昇し、屋上と地面との中間ぐらいの高さで花のように開いて、ふわりと女性の身体を受け止める。そのまま反発するのではなく、ゆっくりと降下速度を減速させて、マミやさやかたちの胸元あたりの高度まで下ろした。
その間に、マミはソウルジェムから放たれる黄金色の光を纏い、魔法少女の装束に身を包むと、跳躍するようにして女性の下に寄る。その後を、タタタ……と、さやかが駆けて追いかけてきた。
「マミさん！」
さやかは緊張した様子で声を出すが、
「……大丈夫、身体の方はなんともないわ」
と、マミは、女性のおでこのあたりに右手をかざしながら、そう言った。
「魔獣の瘴気に当てられたようね」
『ごめんマミ、助かった』

サッきゅんからのテレパシーが届く。
『いいえ、でも間に合ってよかったわ』
マミは、顔を上げて屋上の方を見ながら、そう返した。
さやかも見上げるが、直接サッきゅんの姿を視認することはできなかった。しかし、マミの様子からして、そこにいるのだろう。
「あまり時間をかけてられないわね、行くわよ」
マミは、両手で抱えるようにスナイドルを出現させながら、さやかに言うというよりは、自身に言い聞かせるようにして言う。
「あっ、はい」
さやかは、我に返ったように返事をしながら、歩き出したマミの後を追う。
マミがビルの扉を開くと、その内側には黒い霧が満ちていた。
さらにその中に進むと、さやかが初めてマミと出会ったときのように、直線がうねっているような奇妙な光景が広がっていた。
「あのときみたい……」
ビルの元の構造がなく、ホールのようになっている空間に、複数の種類の魔獣が漂っている。
さやかは、バットを包んでいる布をはがしながら、そう言う。異形が漂うように舞うその光景に、表情を引き締めながら、剥き身になったバットを棍棒のように構える。
「美樹さん、ちょっと、それ貸してもらえるかしら?」
「え、あ、はい」
マミにそう言われ、さやかは、一度握り締めたバットを、マミに向けて差し出した。
マミが、そのバットに、右手を添えるようにしてかざす。
「おおっ」
バットがその姿を変える。マミの出すスナイドルの銃床のように、白銀色になって装飾の模様が入ったかと思うと、うっすらと光り始める。
「おお、マジカルバットだ〜」
それを返されたさやかは、感嘆したような声を発しながら、薄く光

るバットを見回す。
「これで多少は身を守れるようになるわ。といっても気休め程度だから、私から離れないでね」
「あ、はい」
さやかは、マミの言葉に返事すると、表情を引き締めなおしつつ、バットを引き寄せて構えなおした。
まるで使い魔のような、小さな、デフォルメライズされた幽霊のような小さな魔獣が、周囲をウロウロとしている。複数の別個体なのか、それともそれでひとつの個体なのか、いくつも存在するそれは、最初はまるで庭を散策するようにそれぞれが自由に歩き回っているように見えた。しかし、マミやさやかが侵入することで、空間を満たす闇の霧を乱すと、一斉に向きを変えて、ゆっくりと2人の方に向かってくる。
「マミ、こいつらたいして強くは無いよ」
どこからともなく現れたサッきゅんが、マミの立つ足元に擦り寄るようにしながら、そのマミに向かってそう言った。
「そう、でも数がいるみたいだし、油断はできないわね」
マミは、周囲をキョロキョロと首を振りながら警戒しつつ、そう言った。
「美樹さん、あまり前に出ないでね」
「あ、は、はい」
さやかは、冷や水を浴びせられたような声を出す。
「あまり取り囲まれると、命を吸い取られるよ。危ないと思ったら、躊躇わずにマミかボクに助けを求めて」
「わ、解ってるよ！」
サッきゅんの言葉に答えつつ、さやかは、手にしたバットをを使い、所謂ゴルフスイングで、魔獣を蹴散らしていく。
一方のマミは、その視線を空間の中心の方に向ける。
中心部には、この闇の中で煌くような光を放つ存在があるのが解る。まだシルエットははっきりとしないが、無数の、幽炎のような魔獣の群れが、それを取り囲んでいる。

マミは、周囲にスナイドルを次々と出現させると、それを左右の両手で次々に持ち替えつつ、中心部を取り囲んでいる魔獣を撃っていく。
黄金色の閃光に撃ち抜かれた魔獣が、破裂するように崩壊し、残滓が周囲の霧と同化していく。
「ひっ！」
数に物を言わせて接近してくる魔獣が、さやかに迫ってきたかと思うと、マミがスナイドルの銃床でそれを殴りつける。さやかが、バットに両腕の全力を込めて殴りつけても弾き飛ばすのがやっとだったそれは、速いが軽そうに見えるマミの一撃で容易く弾けて消滅する。
「す、すみません」
「大丈夫よ、気にしないで」
さやかの言葉に、マミは、軽くウィンクしながら、今度は自分にまとわりついてきた魔獣をゼロ距離射撃で撃ち抜いた。
マミの射撃が再び中心部を向き、閃光が魔獣を蹴散らすと、その奥からひときわ巨大な、巨大な異形の姿が現れた。
まるで欧風の街灯のような姿をしたそれは、輪郭を構成する視覚上の線が太く、直線のカクカクとしたそれが、フラフラと不気味に蠢いている。その灯りの部分から、幽霊のシルエットのような青白い炎が、そのガラスの外まで漏れ出して、ゆらゆらと揺らめいていた。
「こいつが大元ね」
マミは、口元で笑ってそういうと、
「Ｒｅｌｏａｄ」
足元に転がったスナイドルの１丁を、つま先で弾いてスピンさせつつ垂直に飛び上がらせる。
それをマミの左手が掴んだとき、その銃身は臼砲のように巨大化していた。
「Ｔｉｒｏ　Ｆｉｎａｌｅ――！」
その砲口から迸った黄金色の閃光が、巨大な魔獣を貫きつつ、辺りを包む。
撃ち抜かれた魔獣の身体はボロボロと崩壊し、消滅していった。

「ふぅ……」
マミの装束が光のリボンになって消え、見滝原中学の制服に戻る。
同時に、色彩の消えていた街に、色が戻り、再び動き始める。
「さっすがマミさん、やっぱカッコイー」
さやかは、先ほどまで振り回していたバットを肩に抱えつつ、囃すようにそう言った。
「もう！　見世物じゃないのよ」
マミはさやかを振り返りつつ言う。
「危機感もちゃんと持ってね」
「イエース、わかってますって！」
バットを片手で軽く振りつつ、さやかは緊張感に乏しいまま軽い口調でそう言った。
「でも、今回のも〝人のいない〟魔獣でしたね」
「基本的には魔獣は生み出されるもので、そのものが変貌する事はそれ程あるわけじゃないからね」
さやかの肩に乗っていたサッきゅんが言う。
「でも、ここんとこハズレばっかじゃない？」
「それでも普通の人に危害を加えるのには充分だし、暴走したエネルギーは無視できないの。放っておけないのよ」
どこかつまらなそうに言うさやかを、マミがやや険しい口調で嗜めた。
すっかり陽も落ちた、夜の市民公園を歩く。
「美樹さんは、何か願い事は見つかった？」
やや先を歩くマミが、ちらりとさやかを振り返って訊ねる。
「いやぁ、それが、まだ……」
さやかは、気まずそうに後頭部を掻く仕種をしながら、苦笑してそう言った。
「おかしいなぁ。ボクが見えるって事は、二つ返事するぐらい重要な願いがあるってことなんだけど……契約するかどうか悩むのはともかくとしても、願い事がわからないって言うのは――――」
サッきゅんは、小首をかしげながら呟くように言う。

「……ッ」
その言葉を聞いて、さやかの表情が一瞬だけ曇り、
「そうだ！　この前聞きそびれちゃいましたけど、マミさんはどんな願い事をしたんですか？」
と、自らそれを誤魔化すように話題を切り替えた。
「！」
マミの顔色が変わった。歩みが止まり、さやかを振り返る。
「マミ……」
肩の上のサッきゅんが、表情を曇らせるマミを気遣うように声をかけた。
「あっ、別に言いにくいなら無理にとは……」
さやかは、その空気に軽く驚き、慌てて手を振りながら言う。
「ううん、聞いてもらっておいたほうが良いと思うから――」
マミは寂しそうに笑いつつ、そう言って切り出した。

数年前。
とある高速道路で大規模な玉突き事故があった。
運悪く連休の初日という事もあって、家族連れの乗用車が多数巻き込まれた。
先頭の方の乗用車は、大型車の重みで潰された。更には破損した燃料タンクからガソリンがあふれ出し、引火して火の手も上がった。
その、原形すら留めないほど破壊された乗用車の中に、一家でドライブ中だった巴家の自家用車も存在していた。
前席の両親は即死だったが、後部座席の娘はまだ息があった。
もっとも、潰れた車体に身体を挟まれ、火の手も迫っており、僅かな時間の猶予でしかなかった。
破壊されたクルマが路肩をも塞ぎ、対向車線も渋滞しており、その僅かな猶予の間に、消防や警察がたどり着けそうにはなかった。
「死にたく、ない……」
少女は望んだ。
生命に、自然に宿る生存本能が、それを求める。

本当に？
そう聞き返す声があった。
「助けて……」
ボクは確かに君の命を繋いであげられる。けれど、その代わり君は重い定めを負う事になる。それでも、それを求めるかい？
「わたしは……」
「生きたい」

「……そう、だったんですか」
マミの経緯を聞いて、さやかも沈んだ表情になり、低い声で言った。
「本当は望ましくないんだけど、あの場合緊急避難的にしょうがなかった」
サッきゅんも重い声で言う。
「だからね、選択の余地がある貴方には、きちんと考えて決めてほしいの」
寂しそうにしつつも、口元で微笑み、マミは言う。
「私にできなかったこと、だからこそね」
「……」
さやかはマミの話を聞いて、しばらく言葉を失い、俯いて沈んだようにしていたが、
「あ、あのさ――」
と、異を決したように切り出した。
「願い事って、直接自分の為の事柄じゃないと、ダメなのかな？」
「！」
「？」
さやかの言葉に、マミの表情がやや険しくなり、サッきゅんの表情も怪訝そうなものになった。
「例えばの話なんだけどさ、あたしなんかよりずっと困ってる人がいて、その人のために願い事する……とか、できるのかなって」
さやかは言い辛そうにしながら、困惑気な表情でそう訊ねる。
「可能だよ、前例もないわけじゃないし。けど……」

「あまり感心できた話じゃないわね」
　困惑気に言葉を濁すサッきゅんに、マミが頷いて、その後を続ける。
「？」
「基本的に、困っていて、魔法の奇跡を必要としているなら、その本人が契約するべきなんだ。さっきも言ったとおり、マミのだって、緊急避難的な処置であって、推奨できる物じゃなかったからね」
　サッきゅんは前足を使った手振りを加えつつ、そう言った。
「でも……」
「美樹さん――」
　さらに何か言葉を継ごうとするさやかに対して、マミはいつになく険しい表情と厳しい口調で遮り、切り出す。
「貴方は、その人の願いを叶えたいの？　それとも夢を叶えた恩人になりたいの？」
「！」
　その言葉に、さやかははっと目を見開く。
「他人のために願いを使うのなら、そのあたりのことははっきりさせておくべきだわ。同じように見えても、全然違うことよ、それ」
「言ったよね、本末転倒になるって。脅しじゃないんだ。実例があるんだよ」
　マミの厳しい言葉に、サッきゅんが困ったような口調で付け加えた。
「……」
「きつい言い方でごめんね。だけど、そこを履き違えたまま進んだら、きっと貴方、後悔することになると思うから」
「はい」
　マミの言葉に、さやかは神妙な面持ちで言葉を返す。
「あたしの考えが甘かったです」
　真剣な表情で言うさやかに、マミはようやく表情を崩し、穏やかな笑みに戻った。
「サッきゅんも、ごめん」
　さやかは視線を移し、そう言って軽く頭を下げる。

「難しいことよね、焦って決めるべきじゃないわ」
「ボクとしても早いに越した事はないんだけど、決断が早い事と、浅慮とは違うからね」
マミの言葉に続いて、サッきゅんも優しげにそう言った。
「ねぇ、さやか」
美樹家、さやかの自室。
半ば不貞寝するように、ベッドに寝転がって活動を止めているさやかに、サッきゅんが声をかけた。
「もしかして、さやかの言ってた願いって、あの男の子のこと？」
「！」
さやかは、それを聞いて顔を真っ赤にしつつ、跳ねるように飛び起きて、円い目でサッきゅんを凝視する。
「な、なんでアンタ、恭介のこと知ってんのよ!?」
「言ったでしょ、今はさやかのフォローにまわってるって」
サッきゅんは悪びれた様子もなく言う。
「病院はボクの姿が見えちゃう人が多いからね、直接は入らなかったけど、ちゃんとさやかの事は見守ってたよ」
「そ、そう……」
さやかは、そう聞かされて、がっくりと肩を落として脱力する。
「で、話の続き。マミが言った通り、キミ自身がそれを望むのか、キミがあの子の願いを代行したいのか、それだけはハッキリさせておいて欲しい」
「……難しい」
サッきゅんに言われて、さやかは視線を逸らしつつ、漏らすようにつぶやいた。
「だろうね、だからお勧めしないんだよ」
「……」

翌日、放課後。
「申し訳ありません、上条さんは今日、診察の予定が繰り上がってしまって。午後いっぱい、リハビリの予定なんですよ」

ナースステーションで面会を申し込んださやかに向かって、看護師は申し訳ないそうに言った。
「そう、ですか……」
さやかはがっくりと肩を落とし、そう言った。
「すみません」
「いえ、こちらこそお手数おかけしました」
さやかは看護師にそう挨拶してから、軽くため息をつきつつ、エレベーターホールに向かってとぼとぼと歩き出した。
もしかして、体調が優れないのかな。
エレベーターの到着を待ちつつも、心配と未練とで、ちらちらと病棟のほうを見る。
エレベーターに乗り、1階に下りる。外来受付のあるエントランスホールを通り過ぎて、外に出た。
駐車場の歩道を歩き、最寄り駅であり、滝原線の終点からひとつ手前、南滝元駅への近道である裏門ルートへ向かう。
その南滝元駅から川越市方面に向かって伸びる線路を、線内運転の４００系6連が、ツリ駆けモーターの轟音を残して走っていく。まだ１７時前、それも上り電車だが、車内は電車通学の高校生であろう人影でごった返しているのが、走り過ぎていく車窓越しにも見えた。
「……」
病棟の建物の前を通り過ぎかけたとき、周囲に黒い霧がたちこめだした。
「え……これっ、て……」
見覚えのあるその霧に、さやかは戦慄する。
「サッきゅん！　近くにいるんでしょ!?」
周囲を見渡しつつ、さやかは声を上げる。
『うん、見えてる』
テレパスで答えが返ってきた。
『これって、魔獣が現れる前兆なんでしょ!?』
次第に濃さを増してくる霧に、さやかは憔悴しつつ問いただす。
『さやかさん、今、私そっちに向かってるから』

さやかとサッきゅんのやり取りを察知したマミが、テレパスに割り込んできた。
『危ないから、貴方はすぐにそこから離れて！』
「……っ！」
マミに言われて、一度は脚を踏み出しかけたさやかだったが、
『だ、駄目です！』
と、声に出しそうな勢いで否定し、踏みとどまる。
『魔獣の呪いが病院に取り憑いたらやばいって……マミさん言ってたじゃないですか！　あたし、ここで見張ってます！』
『駄目よ、危ないわ！』
マミは咎めるが、
『いいえ！　それぐらい、やらせてください！』
と、さやかは半ば意固地に言い返す。
『呪いの本体が近くにあるのかもしれないし、それに――』
それに、ここには、恭介がいるんだ……！
『マミ、ボクが時間を稼ぐよ』
サッきゅんからの声が聞こえてきたかと思うと、その姿が現れて、すとん、とさやかの前に舞い降りる。
そして。
右耳についていたピアスの鈴が、ポンッと音を立てて姿を変える。
「え、それって――」
さやかは驚く。
それは、乳白色の宝石を抱えるようにした、王冠のような置物。
「ソウルジェム？　まさか、アンタも……」
さやかが口に出した時、白いソウルジェムが光を放ち始めた。
乳白色の光がさやかの視界を遮り、それが晴れた時、そこに立っていたのは、１人の小柄な少女。
身長は１５０ｃｍに満たないだろうか。乳白色の髪に赤い瞳は、アルビノを思わせる。
「魔法……少女？」
少女は振り返り、こくりと頷いた。

「一応ね。でも、ボクたちは人間ほど資質を持たない。だから、防戦がせいぜいなんだ」
　言いつつ、サッきゅんはその手に短弓を出現させる。
「だから、マミが来るまで、絶対に離れないで。護りきれない」
「わ、わかった」
　さやかはその背に隠れるようにして、言う。
　その時、目の前で魔獣が実体化する。
　その姿は、言うなればチーズで出来たゴーレム。何かに例えるとすれば――――
「さ、サンシャイン？」
「何で知ってるの!?」
「アンタだって知ってるじゃん!?」
「ボクは見た目通りの年齢じゃないから！」
　そんな緊張感の乏しいやり取りをしている間に、魔獣は２人に向かって腕を伸ばしてくる。
「この！」
　先を制して、サッきゅんが手にした短弓から矢を引き絞って放つ。
　弓を離れた瞬間、矢は乳白色の光条に変わる。魔獣の肩に突き刺さり、チーズの肩を砕いた。
「やった、効いてるじゃん」
　さやかは嬉しそうに言うが、サッきゅんの表情は晴れない。
「見た目だけだ」
　サッきゅんがそう指摘した瞬間、魔獣の崩れた肩が、デジタル放送のブロックノイズのようなものに覆われたかと思うと、今度はキャンディリースのようなものがそれを形成した。
「げ……」
　その光景に、さやかも表情を固まらせる。
　魔獣はその巨躯に似合わない俊敏さで、一気に２人に迫ってくる。
「だめだ！　さやか！　逃げて！」
　サッきゅんは弓を引き絞って狙いを定めつつ、自分に向かって振り下ろされてくる腕をかわしながら、そう叫ぶ。

「で、でもっ！」
さやかが一瞬躊躇した瞬間、魔獣の視線がさやかに向く。
「ひっ!?」
「さやか！」
ズダンッ
その瞬間、さやかに迫った魔獣の腕が撃ち砕かれた。
「お待たせっ！　2人とも大丈夫!?」
聞こえてきた声に、さやかが顔を明るくする。
「マミさん！」
「待たせたて悪いけど、一気に片付けてやるわ！」
既に魔法少女の装束に身を包んだマミが、そう言いながら右手を振りかざすと、そこから黄金色のリボンがほとばしり、魔獣を縛り上げて拘束した。
同時に、無数の光の棒がマミの身体の周囲に現れ、白銀の銃床を持つスナイドル銃に変貌する。
マミの手に握られた1丁のトリガーが引かれると、同時に全ての銃が火を噴く。
無数の光弾が、魔獣の身体を粉々に打ち砕いた。
「や、やった……」
「マミ、油断しないで！」
さやかの弾んだ声に対して、サッきゅんは緊張したままの声を上げる。
「え？」
突然、チーズのゴーレムの顔が巨大化し、マミに迫った。
「――――え？」
ガブリ――――
マミがそれを視認した、次の瞬間、その頭は胴と泣き別れになっていた。
巨大なチーズの頭部が、マミの頭部を咀嚼していた。
「え……」
さやかは、その現実離れした光景に絶句した。

「マミー！」
サッきゅんが悲痛な声を上げる。
「あ、ぅ……」
さやかは青ざめ、その場にへたり込んでしまう。
ザッ、と、サッきゅんがさやかと魔獣の間に割り込み、立ちふさがる。
その貧弱な弓を引き絞りかけて――――
ドスッ、と、別の何かが魔獣に突き刺さった。
ドオオオンッ
次の瞬間、突き刺さった何かが大爆発し、魔獣を跡形もなく吹き飛ばした。
爆風に煽られ、サッきゅんもさやかの上に転がる。
ドンドン、ドンドンドォンッ!!
更に無数の爆発が起き、魔獣の残滓を全て粉砕する。
その閃光の中から、長髪の少女の人影が浮かび上がった。
「これで、解ってくれたかしら？」
長髪の少女は、さやかに睨み付けるような視線を向けながら、淡々とした口調で言う。
「魔法少女になるって、こういうことよ」
マミの、首を失って倒れた肢体を背に、暁美ほむらはそう言った。
「しっかり、眼に焼き付けておくことね」
ほむらはそう言うと、さやかの返事を待つことなく、そのまま踵を返した。
「暁美ほむら……キミは、一体……？」
その後姿を見送りつつ、サッきゅんは呟く。
一方――――
そう。
あたしはその時、まだなんにも解ってなかった。
「う……」
奇跡を望む意味も。

「……っく……」

その代償も――――

「うあぁぁぁぁぁぁぁぁっ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

外来診察時間が過ぎ、人気のない病院の駐車場に、さやかの慟哭が響き渡った。

第４話：もう、あたしは迷わない

「……」

夜――――

美樹家、さやかの自室。

「さやかー、ご飯よー」

さやかを呼ぶのは、同居する母方の祖母の声だった。

「……」

だが、さやかは部屋の片隅で膝を抱えてうずくまるように俯いたまま、動こうとしない。

表情に生気はなく、しかし断続的に身体を震わせている。

暗い室内、照明はついていない。窓から差し込む街灯の明かりが、僅かに視界を確保している。

「さやか」

動物姿のサッきゅんが姿を現し、やはり沈痛な声で呼びかける。

「……」

さやかはそれに答えない。

「そうだよね、あの光景は――今のこの国の女の子には、衝撃的過ぎたよね」

サッきゅんはそう言ってため息をつくが、

「そうじゃない――――！」

と、さやかは荒い声でそう言った。

「ん……」

「ううん、それもある。ないって言ったらウソになる。怖い」

今度は逆に、静かに沈んだ声で言う。

「でも……あたしはそれより――マミさんの事が……」

「ん？」

「マミさん、本当に正義の味方として――自分のしてる事に誇りを持ってやってたのに……」

さやかの脳裏に、鉄道写真撮影家の青年にカメラを渡す、笑顔のマミの姿がリフレインする。

「あんな死に方、ないよ……」
さやかは、膝を抱えたままそう言うと、震えつつ、目じりから涙をあふらせながら嗚咽を漏らす。
だが――――
「え？」
さやかの言葉を聞いたサッきゅんは、顔を上げると、眼を真ん円くして。間の抜けた声を出した。
「マミ、死んではないんだけど……」
「は？」
気まずそうに言うサッきゅんの言葉に、今度は顔を上げたさやかが目を円くする番だった。

『勝手に殺さないで欲しいわね』
マミからのテレパスが、割り込むようにさやかに届いてくる。
『え、だってマミさん、あんな……』
さやかが唖然としていると、
「ボク、魔法少女は人間とは違う存在だって、言ったよね？」
と、サッきゅんがじとりと汗をかくようにしながら、さやかに改めて訊く。
「え、そりゃ、確かに聞いたけど……」
「魔法少女は、ソウルジェムが砕けない限りは死なないんだ。ソウルジェムが物理的に破壊されるか、中にあるエネルギーが尽きない限りはね」
「え……そう……なの……？」
サッきゅんの説明に、さやかは口をパクパクとさせ、ようやく搾り出したかのようにそう言った。
『そういうこと。たださすがにここまで肉体の損傷が激しいとね、回復にしばらく時間はかかるわ』
「……」
さやかは膝を抱えていた腕を開き、わなわなと震え始める。
「さやか？」

「そぉう言うことは……」
　さやかはゆっくりと立ち上がり、学校から無断拝借しっ放しにしていた金属バットを持ち出すと、じりじりとサッきゅんに迫る。
「早く言えぇぇぇぇ!!」
「ちょ、ま、暴力はなにも解決しないよ!」
「ああ、でも、流石に食欲は沸かないわ」
　さやかは、一気にやる気をなくしたように、気だるそうにベッドに腰掛け、顔を手で覆いながらそう言った。
「まぁ、あんな光景を見た後じゃね」
　サッきゅんは真面目な表情でそう言うものの、
「その状況でシリアスに言われても、ムードもへったくれもないわよ」
「やった本人が言っても説得力ないよ……」
　と、バスタオルをムシロ代わりに簀巻きにされ、ぶらーんと天井から逆さ吊りにされていた。
『それで、サッきゅん、私の身体なんだけど……』
『あ、そうだった。マミさん、治るまでどれぐらいかかるんですか?』
　マミはサッきゅんに向かってテレパスを飛ばしてきたが、慌てたように言葉を返したのはさやかの方だった。
『最短でも2週間ね……流石に欠けた部分を繋ぎなおしたり再生したりは時間がかかるの。増して今回は首だし、肉体全体の保全も並行してやらないといけないから』
　つまり、呼吸器系が働かない為、再生と同時に、酸素の供給が途絶えて活動不全に陥る肉体の劣化を防ぐ事を、同時に行わなければならないのだという。
『それで、その間のことなんだけど――』
『マミさん、サッきゅん』
　マミが切り出そうとしたのを遮って、さやかが訴える。
『もし必要なら、あたしが――』
「大丈夫、それには及ばないよ」
　サッきゅんは直接声を出して、さやかにそう伝えた。
『誰か、応援を頼んだのね?』

テレパスでマミが言う。
『うん、呼びかけたんだけど……』
「誰も、応えてくれなかった、とか？」
今度はさやかの方が、簀巻き逆さ吊りにされたままのサッきゅんに向かって聞き返す。
「それには及ばない、とは言ったよね？」
「え、あ、うん……」
サッきゅんにそう指摘されて、さやかは俯くように視線をそらした。
『美樹さんはもう少し、人の話をじっくり聞く癖をつけたほうがいいわね』
マミはため息交じりの声を伝える。
『あーっ、マミさんまでひどいー』
さやかは一瞬ベッドから立ち上がり、その場で宙を掴むようにガニ股で手をわななかせる。
『ただ、呼びかけに応えてくれたのが、あの子なんだ』
サッきゅんが真剣な言葉になって、話題を戻した。
『あの子？』
さやかが反射的に聞き返す。
『佐倉杏子さんね？』
『そう』
マミがその名前を告げると、サッきゅんは即答でそれを肯定した。
『どんなやつなんですか？　そのきょうこっての』
『根は悪い子じゃない……私はそう思ってるけど』
さやかがそう訊ねると、マミは歯切れ悪く言う。
『けど？』
『うーん……』
サッきゅんはテレパスで唸ってから、
「マミには言わないで欲しいんだけど……」
と、直接声に出して、さやかに言う。
「え？」

「マミとは性格が違いすぎるって言うか、そっちで相性が悪いところがあるんだよね」
さやかが反射的に聞き返すと、サッきゅんは言い辛そうに答えた。
「多分、さやかともあまりウマは合わないんじゃないかと思う」
「ふーん……」
さやかは、サッきゅんから視線を外して自然に正面を向き、軽く天井を見上げる。
「でも……」
さやかの脳裏をよぎったのは、ストレートの長髪を持つ魔法少女の姿。
――――暁美ほむら。
「あの転校生は、いまいち信用しきれないしなー」
「うん、それは同感」
呟くように言うさやかの言葉に、サッきゅんも同意する。
「ボクのことを狙ってたかと思えば、さやかに攻撃的な発言をしておいて、そのくせ今日はさやかが危ないって時に割り込んできたし」
「ああ、もう、なんだか今日は疲れたわ……このまま、寝ちゃおうかな」
軽く混乱したさやかは、そう呟くように言うと、部屋着姿のまま、上半身をどさっとベッドに投げ出した。
「えっと――」
どこか投げ遣りな態度のさやかに、サッきゅんは言う。
「できれば、そろそろ降ろしてくれると、それはとっても嬉しいなって」

翌日。
キーンコーンカーンコーン……
電子音が再生する鐘の音が、見滝原中学に放課を継げる。
「美樹さん、今日はこの後用事はありますの？」
さやかが立ち上がりかけると、いつものように、仁美が近寄ってきて、そう訊ねてきた。

「あ……うん。ちょっとね」
「あら」
さやかが苦笑すると、仁美はどこか意外そうな顔をしてから、
「昨日も、一昨日もそう言われましたし……美樹さんも、なにかお稽古事とか、始めましたの？」
と、おしとやかなお嬢様然としながらも、女子中学生らしい好奇心旺盛そうな表情で訊ねてくる。
「あ、ううん、そう言うわけじゃないし、それに」
さやかは苦笑しながらそう言い、そこで少し視線を逸らすと、
「……今日のは、また別件だから」
と、若干声のトーンを落としてそう言った。
「ふふ、そう言うことでしたら、仕方ありませんわね」
仁美はそう言って苦笑する。
「ごめん、なんか最近、付き合い悪いみたいで」
「気にしないでくださいまし」
さやかが申し訳ないそうに苦笑しながら言うと、仁美は微笑みながらそう言った。
「それでは、失礼いたしますわね」
「うん、また明日」
仁美を見送ってから、さやかも席を立ち上がる。
校舎を出て、正門を跨いださやかが足を向けたのは、見滝原駅の方だった。
「……」
さやかがマイペースで歩いていると、カツカツ、と、やたら規則的なリズムの足音が、着かず離れずついてくる。
さやかはその足音の主を無視して歩き続けていたが、やがて焦れたように、
「ちょっと、一体なんでついてくんのよ」
と、振り返って、その足音の主に対して、低い声で問いつめる。
駅前の通りの雑踏の中、２人の歩みが人の流れから取り残される。
「あなたも、巴マミの部屋に行くのかと思って」

足音の主、暁美ほむらは、淡々とした口調でそう言った。
「ハァ？」
さやかはわけが解からないといったように声を出した。
「マミさんは今動けない身体だし――――」
――――!?
さやかの言葉が、一瞬だけ途切れる。
「邪魔しに行ってもしょうがないでしょうが」
「動けない身体？」
さやかの言葉を聞いて、ほむらは怪訝そうに表情を歪める。
「言っとくけど、マミさんの部屋、サッきゅんが鍵かけてきたから、中を漁ろうとしても無駄よ」
さやかはそう言い放つが、ほむらは口元に手を当てて考え込んだまま、視線を逸らしていた。
「何よ、人の話、聞いてないの？」
そんなほむらの態度に、さやかは不機嫌そうに言ってから、
「それじゃ、あたし用事あるから」
と、再び駅に向かって踵を返した。
駅に着くと、さやかはカバンのポケットから、ＰＡＳＭＯの定期券を取り出した。
学生定期ではない。区間は「見滝原←→武蔵滝元」になっていた。
さやかがホームに入ると、５分と待たずに電車は入ってきた。線内運転の普通電車、ツリ駆け式４００系の６両編成だった。
プシューッ、と言うドアエンジンの音と共に、片側３箇所の片開き扉が開く。乗車客より、降車客の方が多かった。さやかは数人の乗車客と共に、進行方向から３両目の、向かって前側の扉から乗り込んだ。
半分より少し多い程度に座席は埋まっている。さやかは乗り込んだ扉から、２つほど真ん中よりの席に腰を下ろした。
『さやか、気付いてる？』
この場にはいないサッきゅんが、テレパスで伝える。
『え？』
『後ろ側のドアの近く。顔は向けないで！』

言われて、さやかは一瞬顔を向けそうになり、慌ててそれを戻してから、視線をちらりと向けた。
そこに、ドア横の手すりに腰をもたれさせるようにして、ほむらが立っていた。
さやかは、怪訝そうに表情を歪める。
あいつ、マミさんの部屋に行くみたいなこと言っといて、なんで電車に乗ってるのよ。
滝元医大病院――――
「あの子、美樹さんだったかしら、今日も来てるのね」
「ええ、本当に助かるわ」
整形外科のナースステーションで、看護師達が噂する。
「今が一番、つらい時期ですものね」
「あのくらいの年頃だと、動けないことだけでもつらいでしょうし」
「それに――」
女性看護師に交じって、数少ない若い男性看護師が言う。
「あのくらいの男の子にとっては、どうしようもなく辛い事実ですからね……俺も、親からこの道反対されて、ぐれるって程じゃないけど、反抗した時期でしたし」
その言葉の意味を知らない、聞く由もないさやかは、既に落ちかけた陽の放つ山吹色の光が差し込む病棟を、小走りに駆けていく。
「恭介！」
さやかはノックしてから上条恭介の個室に入り、さやかは出来る限り明るく声をかけた。
「今日もＣＤ持ってきたよ。昨日買ってきたんだけど、すれ違っちゃったからさ」
さやかはまだパッケージの封の切られていない、クラシックＣＤをカバンからとりだしながら、そう言った。
だが、恭介はさやかの方を向こうとはしない。
さやかが改めてベッドの上の恭介を見直すと、恭介はＣＤプレーヤーをかけ、イヤホンを耳につけていた。
「何、聞いてるの？　あ、これは後で聞いてくれれば良いから」

そう言って、さやかはＣＤを、個室の病室の小さなテーブルの上に置いた。
『亜麻色の髪の乙女』
恭介は、さやかの方を向こうともせずに、ポツリと呟くように答えた。
「あ、ドビュッシー？」
ようやく反応のあった恭介に、さやかは表情を輝かせて言う。
「あたしってホラ、こんなだからさ、クラシックなんて聴く柄じゃないだろって、みんなが思うみたいでさ、たまに曲名とか言い当てたら、すごい驚かれるんだよね。意外すぎて、尊敬されてしたりしてさ――」
さやかは、傍目から解かるほどに、無理して明るく振舞い、おどけるように言ってみせるが、
「違うよ」
と、恭介は静かに、しかしはっきりとした言葉でそれを遮った。
「ヴィレッズ・シンガーズの方」
「あ……」
さやかは一瞬、繕った笑顔で固まり、言葉を失う。
「そうなんだ。……恭介がポップス聞くなんて、ちょっと意外だな。あはは……」
ヴィレッズ・シンガーズも、グループの名前は平成生まれの中学生には馴染みのない名前だろうが、近年にカバー奏者も出ており、曲名の方は、さやかも一応知ってはいた。
「でも、先にドビュッシーが出てきちゃうなんて、あたしも恭介の影響受けてるってことだよね。あたし、多分恭介がいなかったら、クラシックとかちゃんと聴いてみたりしなかったと思うんだよね」
さやかは、気まずそうな空気を振り払おうと、やはりテンションを意図的に上げて一気にそこまで言った。
だが、そこで言葉が途切れてしまう。
「……ねぇ、さやかはさ」
僅かな沈黙の後、恭介が口を開く。
「僕を、いじめてるのかい？」

「え……」
恭介の口から発された、あまりに意外で酷薄な言葉に、さやかは短く声を発して、そのまま絶句する。
「嫌がらせのつもりなのかい？　なんで今でもまだ、クラシックのＣＤなんて僕のところに持ってくるんだい？」
ベッドのそばに置かれていたキャビネットの上に、ケースに入ったＣＤが積まれていた。
いずれもクラシックのＣＤ。そのほとんどが、さやかが小遣いをやりくりして、中学生にとっては決して安くないにもかかわらず、せっせと買い集めてきたものだった。――――恭介に喜んで欲しい一心で。
「だって……それは……恭介が音楽……好きだから……」
さやかは、混乱を覚えつつ、困惑した口調で途切れ途切れに答える。
すると、それまで虚脱していたようだった恭介が、突然身を起こした。
「もう聴きたくないんだよ！」
バキィッ!!
恭介は、荒く声を張り上げる。包帯に包まれた左腕を振るい、その手を積まれたクラシックのＣＤに叩きつけた。
ケースが壊れ、その破片が恭介の手を切りつける。包帯から血が滲み、ベッドのシーツにまで滴る。
「自分で弾けもしない曲なんて!!」
「……！」
さやかは絶句し、立ち尽くす。
「もう、動かないんだ。僕の指は！　この手は、痛みさえ、感じないんだ!!」
「や、やめてっ!!」
尚も暴れようとする恭介に、さやかは覆いかぶさるようにして制止する。
「大丈夫だよ！　きっと治るよ！　諦めなければ、きっといつか……!!」

さやかは、必死に恭介に言い聞かせようとするが――――
「諦めろって、言われたのさ」
――――一転して静かになった、しかし重い口調で、恭介は絶望の言葉を告げた。
「今の医学ではどうしようもないって。普通に生活できるようにはなるけど、楽器はもう諦めろってさ。僕の手は……この指は……動かないんだ……もう……――――」
恭介は、パンドラの箱に最後に残った物の名前を口にする。
「――――奇跡か魔法でも、ない限り……！」
「……やはり、その道を選ぶのね、美樹さやか」
運命をおう者は、白い巨塔の見える雑居ビルの屋上で。
『美樹さん……貴方の望みは、その奇跡は、――――――とは、限らない』
動けぬ身の者は、ベッドの上で。
「どうして、ボクたちは感情を切り捨てることまでは、できなかったのかな」
システムを操作する者は、その巨塔の屋上の手すりから。
「あるよ」
僅かな沈黙の後、さやかは真剣な顔で恭介に向き合い、そう告げた。
「奇跡も、魔法も、あるんだよ」
「最後にもう一度だけ、確認するよ？」
陽は水平線の彼方に沈み、薄暮の空に幽かに茜色が残る。
廃止された小さな貨物駅。
コンクリート製のシンプルな架線柱には悉く蔦が巻きつき、その先端は既に饋電されていない架線にまで達していた。架線柱のいくつかは経年によって重力に負け、傾いている。
引込み線から繋がる、小ぢんまりとした荷役ヤードには、２両ほどの貨車の廃車体が放擲されていた。

電車の音が聞こえる。ＷＮドライブの近代的な音。２０００系か、相互乗り入れ相手の都交６３００形の、どちらかの走行音。
少し離れた場所に、放擲された貨車よりもロートルの電気機関車、ＥＤ２８　１のシルエットが見える。大正１４年にイギリスはイングリッシュ・エレクトリック社で製造された骨董品（ただしここに来たのは昭和４９年のこと）だが、入れ替えに便利な車体構造なので、主に、今も生きている引込み線用の入れ替え（スイッチャー）用機関車として現役だった。
錆付いた転轍機の上に、ちょん、と座ったサッきゅんが、もう動くことのないポイントの上で、軽く脚を開いた姿勢で力強そうに立つさやかを見つめる。
「あの男の子……上条恭介の手の機能を回復させる――」
サッきゅんは、静かな、しかしはっきりとした声で、さやかに問いかける。
「本当にそれが、キミの願い、キミ自身の願う奇跡だと信じていいんだね？」
「うん」
さやかは、険しい表情に真摯な瞳で、頷いた。
「それが、あたしの願い」
「以前も説明した通り、魔法少女は、人間とは違う存在になるんだ。それも納得した上での話、だね？」
サッきゅんは念を押すように問いかける。
「うん。あたしは、もう迷わないって決めたから」
さやかは、真剣な表情でそう言った。
「解かった」
サッきゅんもまた、真摯に答えると、軽く眼を閉じた。
さやかを包み込むようにして光の柱が天に向かって立ち上る。
やや逸らせ気味になったさやかの胸から、いくつもの青い光条が直線的に上がり、やがてそれらはさやかの頭の高さから１ｍ弱ほどの高度で集まって、球形に集まり始める。
天に上る光は、やがて一方向――滝元市の方角へ向かって流れて

いった。
残った青い光の球が、やがて実体へ、青く澄みきった宝石を抱えた、王冠のようなデザインの置物へと変貌する。
「ここに契約は成立した。今からキミは、魔法少女だ」
さやかの元にゆっくりと降りてくるソウルジェムを、さやかは両手でそっと、それを受け止めた。
もう、あたしは迷わない。
そう、思っていた。
――――この時は
「!?」
――――ドクン。
青く澄みきって輝く、自分のソウルジェム手にした瞬間、さやかの頭の中で、まるで一瞬だけ血流の量が増えたような感覚が走った。
まるで、頭の中で、或いは心の中で、何かが繋がったかのような感触。
「――か――――?」
さやかが幽かに呟いたそれは、しかしこの場にいるサッきゅんにも聞き取れなかった。
「え? どうしたんだい? さやか」
サッきゅんが軽く驚いたようにして、心配げにさやかの顔を覗き込む。
「え、あ、ううん。なんか一瞬、ボーっとしちゃって」
「ぼうっ、と?」
サッきゅんは不思議そうに小首をかしげる。
「おっかしいなぁ。契約で、そう言う副作用はないはずなんだけど」
「そうなの?」
小動物の姿で器用に口元に手を当て、怪訝そうにするサッきゅんに、さやかの方も首をかしげるようにして、聞き返す。
「うん、或いは考えられるとすれば――――」
サッきゅんはそう言って原因を追究しようとしたが、それはかなわなかった。

チリーン。
２人以外を静寂が支配する廃貨物駅で、サッきゅんのソウルジェムであるピアスの鈴が、澄んだ音を一度、あたりに響き渡らせた。
「まずい、こんなときに！」
サッきゅんが転轍機の上で、背を伸ばすようにして頭を上げ、キョロキョロとあたりを見回す。
「え？　え？」
さやかはサッきゅんの様子に戸惑っていたが、ふと、手にしたばかりの自分のソウルジェムが激しく明滅していることに気付く。
「これって、まさか……」
「そう」
さやかの言葉に、サッきゅんはあたりを見回す仕種をしながら肯定の返事を返す。
「しかも契約したばかりのさやかのソウルジェムが、それも意識もしないのに反応するなんて、大分近くに、それもかなり強いのがいる……!!」
「アンタが呼んだって言う、代わりの魔法少女は？」
さやかは、切迫したような焦った表情で問いただす。
「まだ！　間に合う位置にはいない」
サッきゅんは、一度動きを止めてさやかと正対してから、首を横に振った。
「マミさんは当然まだ動けないし……」
さやかは、右腕のひじを抱えてその手の親指のつめを噛む仕種をして、険しい表情で呟くように言ってから、
「あたしが……行くしかないじゃない！」
と、力強く決断した。

カンカンカンカン……
警報機が鳴る。遮断機が下りる。
西馬込行き快速電車、プレーンなほろ付貫通型の顔つきの１０００系が、踏切に向かってくる。

踏切の前に、虚ろな目をした無数の人間が集まっていた。
主婦風の女性が、迫ってくる電車のヘッドライトに惹かれるかのように、遮断機の中にフラフラと躍り出ようとする。
それを、絹のような白い肌の手が、肩を抑えて止めた。
「焦ってはいけませんわ」
振り返った主婦に対して、その手の主――志筑仁美は優しげに微笑みながらそう言った。
「今から、神聖な儀式を始めるのでしょう？」
穏やかな、これ以上ないほどの穏やかな笑み。
そう――――人をかどわかす悪魔のそれのように。
踏切が開く。
仁美を含む、人々の群れは、ひとつの小さな廃工場へと向かっていった。
かつて消石灰を原料とするラインパウダーを製造していたが、炭酸カルシウムパウダーへの切り替えにより、その需要が減って、この工場の会社も発注元を失って倒産した。
やがて集まる人の流れがまばらになり、そして途絶えると、彼らがくぐって行った搬入出口のシャッターが、ガラガラと閉められる。
ピシャリ、と、閉める力だけが、しっかりとその音を立てた。
「俺は駄目なんだ……」
廃工場の、既に機材が撤去されて広く開いたスペースに、集まった人たちに向かい合うようにして、1人の中年男性が立っていた。
配置だけを見るなら、小規模な講演会、或いはライブとその奏者、と言った感じだが、その場を支配する空気は、とてもテンションの上がった状態ではなく、それどころかどんよりと重く陰鬱な雰囲気が漂っていた。
「こんな小さな町工場ひとつ、満足に切り盛りできなかった……」
中年男性はそう言って、その場で俯き、頭を抱える。
「今の時代に俺の居場所なんて……あるわけねぇんだ……」
男性の言葉はだんだんと力のないものに変わっていく。やがて、その場に崩れ落ちるように、用意されていたパイプ椅子に腰を落とし

た。
座った男性の足元に、金属製のバケツと、業務用の、大容量の厨房用洗剤のボトルが置かれていた。
男性は椅子に座ったまま屈むと、その洗剤のボトルのキャップを開けると、それを一気にバケツに流し込んだ。
その時、さやかは廃工場の外までたどり着いていた。
薄汚れた窓ガラスから、中を覗き込む。
人の集団の前で、パイプ椅子に座った男性が、バケツに洗剤を空けているのを見えた。
「なに？　あれ、洗剤？」
業務用ボトルといっても、貼られているラベルは家庭用と同じものだったので、それがなんなのかはさやかにも解かった。だが、意図が理解できない。
洗剤を無差別に人にかければ、危害を加える事にはなるだろうが、命に関わるとは思えない。魔獣の呪いにしては、あまりに生易しすぎる。
さやかが怪訝に思っていると、窓の中では、今度は集団の方から、主婦と思しきエプロン姿の女性が、男性に近寄ってきた。
その手に、別の家庭用洗剤のボトルが握られている。
「……あれは……」
先に注がれた弱酸性洗剤に対して、女性が出したのは、カビ取りなどに使われる塩素系洗剤のボトル。
「混ぜるな危険」ラベルに描かれるその警告文は、さやかも当然のように見た事があるし、それを破る事によって発生する硫化水素により、事故や自殺があることも、テレビや新聞、ニュースサイトで知っていた。
「まさか！」
さやかがそう思った通りの事が、目の前で起きようとしていた。
女性はボトルのキャップを取ると、バケツに向かってそれを傾ける。
「止めなきゃ！」

さやかはそう言って、自らの青く澄んだソウルジェムを握った。
「セットアーップ！　……なんちゃって」
ソウルジェムを掲げてそう宣言するように言ってしまってから、妙に照れくさくなって、付け加えた。
「まぁ……精神的にノルのは悪い事じゃないけどね」
サッきゅんがそう呟いたときには、青いソウルジェムから放たれた光のリボンに包まれたさやかの姿が、一変していた。
ブレストアーマーをイメージさせるチューブ部分を持つビスチェ調のドレスに、動きを妨げない程度の長さのフレアスカート。翻る白いマント。〝魔法少女〟らしいファンシーさと、さやかの活動的なイメージとを、両立させたデザインのコスチューム。
さやかが変身を終えた時には、既に主婦の持っていたボトルの中身が、バケツの中に注ぎ込まれていた。
「間に合え！」
さやかは、中の空気を入れ替えようと、〝ガラスを割る〟という意識を持った。
すると、刀身は細いが、しっかりと刃のある長い西洋剣が現れた、かと思うと、その瞬間、その剣がまるで矢か銃弾のように発射される。
ガラスを突き破った瞬間、剣は青い光になって弾け、ガラスをサッシごと粉々に砕いた。
「サッきゅん、バケツ頼める？」
「よしきた」
さやかに言われたサッきゅんは、耳のピアスの鈴をソウルジェム本来の形に戻す。
さやかはそちらには視線を向けず、返事の声だけをしっかりと聞いてから、サッシのなくなった窓をひらりと飛び越えて工場の中に入る。
「そこまでよ！」
びしっ、と、集団に右手の指を向けて声を上げる。
「どれが〝本体〟だか解からないけど……この魔法少女さやかちゃんが来たからには、ここにいる人達を死なせたりしないわ！」

精神的にテンションも上がってきたさやかは、もう一方の手を腰にあててポーズを決めながらそう言った。
――――のだが。
「あら、美樹さん、こんなところで奇遇ですわね」
「ひ、と……み……!?」
窓の側からは死角になっていた、集団の最前列に、見知った顔を発見し、驚愕する。
「でも、この素晴らしい神聖な儀式を邪魔するなんて、それは正直、感心しませんわ」
仁美は、現れたさやかに対して、虚ろでいて悪意の篭った、狂気の視線を向け、口元で酷薄そうに微笑む。
仁美の言葉に反応したかのように、集団の他の参加者までもが、まるでアンデッド・モンスターのような不気味な動きで、さやかに迫ってくる。
「ちょ、ま……っ！」
さやかは戸惑って後ずさりする。
ここにいる人間の大半は、魔獣の呪いに操られた、普通の人間だ。迂闊に攻撃するわけには行かない。
「はぁっ！」
さやかが取り囲まれている、その一瞬の隙を突いて。
魔法少女姿のサッきゅんが男性のもとに駆け寄り、その足元のバケツを拾い上げる。そのまま、迷わず、別のガラス窓めがけて遠心力で振り回すように放り投げた。
ガシャアァンッ
バケツは窓を突き破って、その内容物もろとも屋外へ放り捨てられた。
「やったよ、さやか！」
サッきゅんはさやかの方を向いて、とこか弾んだように声を出したのだが、
「危ない！」
と、それを見たさやかはそう声を上げた。

「え」
グワッ
サッきゅんが聞き返すが早いか、その頭部を男性の右手が薙ぎ払った。
「きゅぷっ！」
壁に叩きつけられて、サッきゅんは突っ伏した姿勢で悲鳴を上げる。
体格差だけではなかった。中肉中背、平凡な外見の中年男性に、片手で軽々と人1人を薙ぎ払う腕力があるようにはとても見えなかった。
「あいつが本体……でもっ」
さやかは両手に剣を生み出すが、他の人間を斬りつけるわけにも行かず、じりじりと迫ってくる集団に身構えるしか出来ない。
「ぐぅあぁあぁあァァァァァァァァッ!!」
そうしている間にも、サッきゅんを排除した中年男性は、人のものとは思えない雄叫びを上げると、その身体が異形のもの、魔獣へと変貌していく。
四肢は錆付いた工作機械を象り、それにベージュの筐体が日焼けした旧いＦＡ用のパーソナルコンピュータが寄せ集まって出来ている。
「くっ」
魔獣に攻撃の矛先を向けようとするが、いよいよ手の届く距離に迫ってきた。
さやかは、右手の剣を魔獣に向かって投擲しようと、腕を振り上げる。
ガシッ
しかし、その右腕を誰かにつかまれる。
「ひっ、仁美!?」
「私たちはこれから素晴らしい世界へ旅立とうとしてますのに、なぜそれを邪魔なさるのですか？」
狂気の笑みを顔に湛えた仁美は、さやかの右手首をつかんだまま、さやかの行動を咎めるように言う。

「みんな目を覚まして！　仁美！」
さやかは困惑した声を上げて、仁美、更には周囲に絡み付いてくる人間を見回し、必死に、説得するように声を張り上げる。
「貴方こそ……これがどんなの素敵なことか、どうして理解してくれないのですか？」
仁美は、やはり咎めるように言う。
「そうだ！」
はっ、とさやかは閃く。
マミさんの技、あたしにも、使えるか!?
そう思いながら、さやかは左手の剣を床に突き立てる。
剣が青く澄んだ光を放ち、床につきたてられた部分から、無数の光条がワイヤーのように迸る。伸びた光条が、さやかの行く手を阻む人間に絡みつき、その身体を拘束した。
「いまだっ」
さやかは自由の身になると、再び両手に剣を生み出し、魔獣に迫る。
「おらぁぁぁぁぁぁぁっ！」
魔獣がその腕でさやかを薙ぎ払おうとするより早く、その懐に飛び込むと、白銀の柄を持つ剣で、魔獣の胴に切りつける。
ザシュッ
硬い物体で構成されているかに見える魔獣の胴は、さやかの剣を受けて、脆くも切り裂かれる。
回っていた歯車が外れて飛び散り、年代がかったパソコンディスプレイの画面が砕け散る。
「グゥアァァァァァッ!!」
魔獣は苦悶の方向を上げる。のた打ち回る。その注意がさやかから逸れた。
「はぁっ！」
さやかは飛び上がると、マントに手をかけ、それを振り払うようにして外す。
マントの生地の通過した空間に、無数の剣が生まれた。
「Ｌｏａｄ　ｓｅｔ！」

その剣が青い光を放ち始める。
「これで、とどめだ！」
澄み切った青に光る剣は、無数の光条になって、直下の魔獣に向けて打ち出される。
「Ｔｉｒｏ　Ｆｉｎａｌｅ――!!」
無数の青い閃光が魔獣の身体を撃ちぬく。
蜂の巣のようになった魔獣の身体は、残っている部分もボロボロと崩れ、塵のようになって消滅していった――――
青い閃光が晴れた後に、作業着姿の男性がうつぶせに倒れていた。
さやかがその表情を覗くと、妙に穏やかな表情をしていた。
さやかの魔力糸で拘束されていた他の人間も、意識を失って倒れこんでいた。さやかはそれを確認して、魔力糸を消去する。
男性の寝顔を確認して、さやかは満足げに微笑んでから、腰を上げる。
「やっばいなー、仁美に顔見られちゃった」
さやかは、頭をかく仕種をしながら、困惑しつつも何処か緊張感に乏しい口調で、そう呟く。
「大丈夫だよ」
まだ魔法少女姿のままのサツきゅんが、頭を抑えるようにしながらさやかにむかって歩み寄りつつ、言う。
「操られていた人たちも、目が覚めれば、夢を見ていた程度の記憶にしかならない。現実だとは思わないよ」
「そっか、それならいいんだけど」
さやかはそう言ってから、
「マミさんが治ったら、後で結界の張り方教えてもらわなきゃなー」
『ふふ、一番の技はもう真似されちゃったみたいだけどね』
と、マミがテレパスで妙に可笑しそうに言う。
『あ、マミさん。えっと……すみません。つい、勝手に使っちゃって』
さやかは顔を赤くしつつ、慌てたようにそう伝える。
『構わないわよ、私の後輩、弟子みたいなものなんだし』
マミは穏やかにそう良いつつ、

『でも、この様子だとうかうかしてられないわね』
と、悪戯っぽい口調で付け加えた。
『そんな。まだまだマミさんみたいにはなれませんよ』
さやかは照れつつ、やはり慌てたように言い返す。
「お話中悪いけど、誰かが眼を覚ます前にここを離れた方が良いんじゃないのかい？」
サッきゅんが、変身をといて白い小動物に戻りながら、さやかに向かって訊ねるように声をかけた。
「あ、そうだった。仁美もいるし……うん」
さやかはもう一度周囲を見回してから、
「マミさんみたいにフォローできなくて、申し訳ないけど」
と、まだ眠ったままの、魔獣の本体だった中年の男性に、さやかは後ろ髪を惹かれるようにそう静かに告げて、廃工場を後にしようと、その建物から外へ出た。

滝元医大病院。
すでに消灯時間も過ぎた病室で、一度は眠りについていた上条恭介は目を覚ました。
「奇跡とか魔法とか、そんなものあるんだったら……」
病室にいる自分という現実。恭介はそれを認識すると、誰が聞いているはずもないのに、声を出してぼやき、包帯に捲かれた左手を見ようとする。
「……」
ぴくり。
恭介の左手は動いた。彼の意思の通りに。
指は動いた、最初から怪我などなかったかのように滑らかに。
「そんで？　マミがぶっ倒れたって聞いたから、せいぜい笑い倒してやろうと思ったのに、話が違うじゃんか？」
夜空の下。
送電線の鉄塔から見滝原市の夜景を見つつ、クレープを口に運びな

がら、癖のある髪を長く伸ばした少女はそう言った。
「ごめん。急ぎで契約を必要としてた子がいてね」
傍らに、ちょん、と腰掛けた小動物姿のサッきゅんが、少し申し訳なさそうに言う。
「わざわざ来てやったってのに、ちょぉムカつく」
少女は不機嫌そうにそう言った。
『えー、池袋までご利用のお客様は次の電車が最後になりますー……』
見滝原駅からの構内放送が夜の静寂にのって届いてくる。
2人の視界の正面につり掛け車の銀色の車体が、上りホームに滑り込むのが見える。
駅前には送迎待ちか、多少の車の流れがあるが、それ以外には、もともと中央道からも甲州街道からも離れているためか、すでにクルマの流れはまばらだった。
「でもまぁいいや、もともとあたしもここの生まれだし」
クレープを食べ終えた少女は、その長い髪を翻すようにして立ち上がった。
「マミは当分動けねーみたいだし、ルーキー1人に任せるのも癪だしねぇ」
縛った髪をかき上げる。
「どうするつもりだい？」
サッきゅんが見上げ、訊ねる。
「そんなに心配すんなって」
少女――佐倉杏子は、八重歯を見せながら、少年のように笑った。
「ルーキーにちょいと、礼儀とか能力（ちから）の差とかってものを教えてやるだけだからさ」

第5話：後悔しない生き方なんて

「！」
道路へ出た所で、その姿と対面した。
「よぉ」
「あ……」
さやかに声をかけられると、暁美ほむらはその姿を見て、一瞬だけ驚いたような顔をする。
「遅かったじゃん、転校生？」
さやかは、ほむらに若干挑戦的な笑みを向けて、そう言った。
「そう、貴方が来ていたの」
しかし、ほむらはすぐにいつもの淡々とした口調と、冷静な表情に戻って、短くそう言った。
「なによ、あたしが契約したのがそんなに気に入らない？」
「ええ、気に入らないわ」
さやかは、ムスッと不機嫌な表情になって。低い声で訊ねるように言うが、ほむらはあっさりとそれを肯定した。
「どんな願いを叶えたのか知らないけれど、どんな願いもいずれ裏切られるわ」
ほむらはそれだけ言うと、もう用はないといわんばかりに、その場をつかつかと歩いて通り過ぎようとする。
「ボクはそうならないことを祈ってるよ。心から」
サッきゅんは、さやかの肩に飛び乗り、ほむらの背中に向かってそう言った。
ほむらは一瞬だけ足を止めたが、
「ぬけぬけと」
と、2人には聞こえない声で呟き、そのまま歩いて去っていく。
「結局、誰にも頼れない」

翌日――――滝元医大病院
「そっか、退院はまだなんだ」

「うん」
個室である上条恭介の病室で、さやかの問いかけに、本人が答えていた。
「まだ、足のリハビリが済んでないしね」
そう言いながらも、恭介の表情は穏やかで、嬉しそうな微笑みを湛えていた。
「さやかの言った通り、本当に奇跡だよね。これ……」
恭介は、うっとりと自分の手を見つめて、そう言った。
そんな、穏やかながらも無邪気そうな恭介の笑顔を見て、さやかもにこやかに微笑む。
「……この前はさ、さやかに酷いこと言っちゃったよね」
そう言って視線をさやかに向ける恭介の顔が、急に曇る。
「ごめん……」
「きっ、気にしなくていーの！」
申し訳なさそうな恭介の言葉に、さやかは慌てて、身を乗り出すようにして声を上げる。
「せっかく良くなったんだから、そんな顔してちゃ駄目だよ！」
「……さやかがそう言ってくれるなら、嬉しいけど……」
恭介はそう答えて苦笑する。
さやかは僅かな間、恭介と微笑みあっていたが、やがてちらりと袖口をまくり、腕時計を見た。
「そろそろかなー」
「？」
さやかのわざとらしい呟きに、恭介は僅かに怪訝そうな顔をする。
「恭介。外の空気、吸いに行こ」

「そう、結局、あの時言った願いのために、契約の奇跡を使ってしまったのね」
1日前、巴邸。
「ごめんなさい、マミさん……」
いまだ横たわったまま動くことの出来ないマミのベッドの横で、正

座したさやかは表情を曇らせて俯き、か細い声でそう言った。
「マミさんも、サッきゅんも止めてくれていたのに……」
「謝らなければならないのは、私の方かもしれないわ」
泣き出しそうなさやかの言葉に、マミがため息交じりに、自嘲気味に言う。
「え？　どうしてマミさんが？」
さやかは顔を上げると、軽く驚いたように目を円くした。
「だって、私はこの様で、美樹さんが契約していなかったら、今頃、さやかさんのお友達も……」
険しい表情になったマミは、まだ幾分息が苦しいのか、そこまで言うと、ぜぇっと軽く息をついた。
「あ……」
さやかは思わず、口を手で覆う。
「奇跡だけが願いを叶えるとも、限らない物でしょう？」
「そう考えると……そうなのかも……」
首は動かせないまま微笑むマミに、さやかは逡巡するように視線を床に落としながらも、口を手で覆ったまま、呟くようにそう言った。
「それにね、本当は私もあまり偉そうなことは言えないの」
「え……？」
マミの自嘲気味な言葉に、さやかは意外そうな表情をして顔を上げる。
「魔法少女という形でだけど、私1人だけ生き残って、家族もいなくて、いつも1人ぼっちで。だから、美樹さんと出会ったとき、少しだけ期待していたの。これで1人ぼっちじゃなくなるって、1人で怖い思いをしなくても良くなるんだって」
「マミさん……」
「後悔しないように、なんて、偉そうなこと言ったけど、本当は後悔しない生き方なんて、ないんだと思うわ。選択肢の数だけ、後悔があるの。でも、時間は前にしか進まない。後悔っていうのはね、次はこうしたい、そう前に進む原動力でもあるんだと思うわ」
「……」

軽く眼を閉じたマミの言葉に、さやかは一瞬言葉を失ったように、ぽかーんとしていたが、
「凄いです、マミさんは、やっぱり」
と、興奮したように腰を上げ、ファイティングポーズのような姿勢で言った。
「凄くはないわ。誰でも出来ること、誰でも無意識にしていることよ。たぶん」
マミは自嘲気味のまま微笑む。
「解かりました、マミさん」
「ん？」
力強く言うさやかに、マミはなんとか視線だけでも向けようとする。
「あたしは多分、マミさんより不器用だから、たくさん後悔すると思うんです。でも、それを乗り越えていけるようになります！」
さやかは力強い笑顔でそう言って、
「だから――お互い、引け目を感じるのはやめましょう？」
と、優しげな笑みになってから、マミの顔を覗き込んで、そう付け加えた。
「ええ、そうね」
マミも優しげに微笑む。その目じりには、かすかに涙が浮かんでいた。
「マミさん――」
「あ、大丈夫。これは、哀しい涙じゃないから」
「……はい」
少し慌てて問いただしたさやかだったが、マミはおかしそうに「くす」と漏らしつつ、そう言ってさやかを制した。
「よーし、これからの見滝原市の平和は、この魔法少女さやかちゃんがガンガン護りまくっちゃいますよー！」
さやかは室内であるにもかかわらず、腕を振り上げてそう言った。幸い天井灯はシーリングライトだったので、さやかの手がぶつかることはなかった。

「あらあら、私の出番がなくなっちゃいそうね」
マミはそう言って苦笑する。
「そそそ、そんなことないですよぉー。まだ能力（ちから）の使い方もよく解からないですし、いろいろ教わらないとですし、やっぱり1人じゃ怖いこともありますし」
さやかはあわてて、困ったような笑顔になり、視線をマミに向けた。
「そうね」
マミはくすくすと笑いつつも、言う。
「2人なら――もう、何も怖くないわ」
でも、あたしは本当に、心から、それを願ってた。
だから――――

時系列は元に戻る。
滝元医大病院の病棟のエレベーター、その1つに、さやかは恭介を乗せた車椅子を押して、乗っていた。
「さやか、屋上なんかに何の用？」
意図が理解できない恭介は、怪訝そうに振り返って聞くが、
「いーからいーから」
と、さやかははぐらかす。
やがて、エレベーターは屋上に到着した。
搭屋部を出ると、手すりに囲まれたそこに、何人かの人が集まっていた。いずれも、恭介の見知った顔ばかりだった。
主治医、副主治医、リハビリアシスタント、それに看護師。
そして、その中央に、恭介の両親がいた。
恭介が到着すると、病院のスタッフはパチパチと軽い拍手をする。
「みんな……」
恭介は車椅子の上で呆然とする。
「ホントのお祝いは、退院してからなんだけどね」
その背後で、車椅子を押すさやかが、苦笑交じりに言った。
すると、恭介の父親が、両手にそれを抱えて、恭介に向かって歩き寄ってくる。

「！　それは……」
父親の手に抱えられたバイオリンケースを見て、恭介は驚いたように目を円くする。
「お前から処分しろと言われていたが、どうしても捨てられなかったんだ」
父親はそう言って、恭介の目の前でかがむと、そっとバイオリンケースを開けた。
恭介は僅かに腕を震わせながらも、愛用のバイオリンをしっかりと掴んで手に取った。それから、一旦視線を主治医に向ける。すると、壮年の主治医はこくり、と無言ながらも優しげな表情で頷いた。
「さぁ、試してごらん」
そう促したのは、父親だった。
恭介はバイオリンを肩に構え、弓を握り、その弦を鳴らし始める。
人を魅了するかのような美しい音色が、蒼穹の空に向けて響き渡った。
ああ――――
短いが簡潔に演奏を終えると、奏者本人の恭介が感極まってしまい、震えながら涙を流し始める。悲しみによるものではないそれを。
病院スタッフの拍手の中、恭介の両親が本人に歩み寄り、元気付けるように支えるのを見ながら、さやかは思った。
あたしは、また、この音が聞きたかったんだ……
今よりも幼少の頃、自分と同じ歳の少年が奏でているとは信じられなかった、自分を魅了する音に、さやかは強く惹かれた。
一度は失われた音が、戻ってきた。
だから、
後悔なんて、あるわけない――――
「……ふぅーん」
病院の別の棟の屋上から、佐倉杏子はその一部始終を双眼鏡で覗いていた。
「あれが新しい魔法少女ねぇ、なんかチョロそうだわ」

「……君には申し訳ないと思うけど……」
傍らにいたサッきゅんは、ため息混じりにそう言ってから、更に続ける。
「全てが君の思い通りにうまくいくとは考えないでほしいな」
「けっ、よく言うぜ」
双眼鏡を下ろしながら、杏子は吐き捨てるように言う。
「それに、見滝原にはもう1人、魔法少女がいるからね」
「へぇ？　そいつ何者？」
サッきゅんが言うと、杏子は、手に持っていたメープルのワッフルをかじりながら、聞き返した。
「ボクにも良くわからない」
「はぁ？」
サッきゅんの答えに、杏子は怪訝そうに声を荒げる。
「分かんないって……そいつもアンタが契約したんじゃないの？」
「多分……違うと思うよ？」
「なんだそれ……」
サッきゅんの言葉に、杏子は不機嫌そうな声を出した。
「どれが契約したのかもわかんないし、ボクという個体を不自然なまでに敵視するし、かと思えば助けに来たりもするし、何がなんだかわけがわからないよ」
サッきゅんはそう言って、小動物姿で、手すりの上に器用に身体を敷物のように伸ばす。
「ひとついえるのは、極めつけのイレギュラーだってこと。どういう行動に出るか……保証がなにひとつないんだ」
「……フン、上等じゃん」
困惑気に言うサッきゅんに対して、杏子はワッフルの残りを口に放り込むと、行儀悪くその指についたメープルシロップを舐め取りながら、舌なめずりするような笑みを浮かべる。
「退屈しなくて済みそうだね」

夜。

美樹家、さやかの自室。
さやかは、姿見の前に立つと、パシン、と気合を入れるように、自分の両頬を軽く叩（はた）いた。
「よし！　……行くよ、サッきゅん」
威勢良く言うさやかに対して、サッきゅんは床にちょん、と座りながら、さやかを見上げて、小首をかしげるように言う。
「緊張……してるのかい？」
「そりゃーね、一歩間違えりゃ大怪我だし、それに……病院の時はサッきゅんがいたから助かったけど、そうでなかったらお陀仏でしょ？」
さやかは険しい表情をして言う。
「ボクよりあのほむらって子のおかげだけどね」
「……行こう」
サッきゅんの言葉に、さやかは顔をしかめこそしなかったが、あからさまに不機嫌そうに沈黙した後、そう言って踵を返した。
サッきゅんはそれを追い、さやかの肩に飛び乗る。
「ねぇ、サッきゅん」
「何？」
家人に気付かれないようにして家を出つつ、さやかは肩の上のサッきゅんに訊ねる。
「あたし、契約してから、何か頭の中って言うか、心の中っていうか、それが、何かに繋がったような気がするんだ」
「えっ？」
さやかの独白のような言葉に、サッきゅんは軽く驚いたような声を出す。
「なんだかぼんやりして解からない。でも、なにか忘れてるような気がするんだ」
「忘れてる、ような？」
「うん、凄く大切なことのような気がするんだけど、さっぱりわからない。忘れちゃいけないようなことの様な気がするんだけど、そもそも覚えていたって感じがしない」
「……そんな例は、今まで聞いたことがないなぁ……」

さやかは至極真面目な声で言ったが、サッきゅんは戸惑うばかりだった。
「……ごめん、変な話しちゃって」
「いや、契約したときも少し変だったし、確かにボクも気にかかってたんだけどね」
少し気まずそうに言うさやかに対して、サッきゅんはそう応えた。
「ううん……こんな話でもしてないと、手の震えが止まらないんだよ。マミさんにあんな調子の良い事言っといて、ちょっと情けなくってさ」
「大丈夫、ボクが一緒にいるよ。……足手まといよりはマシ、程度だけどさ」
「ありがと」
肩の上のサッきゅんを覗き込んで、さやかはくすっと苦笑交じりに笑った。
既に、店の殆どが灯りを落とした、見滝原駅前商店街。
その路地裏から、黒い霧が街灯の光を吸収しつつ、漏れ出していた。
「よっしゃ、行くよ」
さやかはソウルジェムを取り出し、魔法少女の装束へと変身した。
「結界！」
右手に出現させた剣の切っ先で、路地の路面を軽く叩く。
そこから澄んだ青い光条が無数に迸り、それは糸の様に流れを変えて、あたりを包み込む。
「いた！」
さやかがその姿を確認する。
サッきゅんは、さやかの肩からストン、と路面に降りた。
それは、フォルクスワーゲンⅠ、通称ビートルをさらにデフォルメナイズしたような、異形の自動車。
「くらえっ！」
シュバァッ
さやかの剣戟が、自動車型の魔獣を一刀に両断する。
そのまま魔獣はぼろぼろと崩れるようにして消滅していく。

「なかなかやるじゃん？　ルーキーの癖に」
カツン、カツン。
晴れていく黒い霧の中から、人の姿が現れる。
だが、さやかが張った結界はまだ解いていない。
「けどまぁ、あんな〝中身〟なしのやつあしらったぐらいで、でかい顔されちゃたまんねーな」
「この中で動けるってことは、アンタも魔法少女？」
さやかが問いかける。
「まぁな」
チャイナドレスにフリルをあしらったような赤い装束を来て、槍を抱えた少女は、鯛焼きをかじりながら、そう答えた。
「やっぱり来たね、杏子」
サッきゅんが言う。
「杏子？　ああ、アンタが、サッきゅんやマミさんが言ってた、魔法少女？」
「まぁ、そう言うことになるけど……」
杏子は、問いただすさやかに向かって答えつつも、冷たい視線を向けながら鯛焼きをかじる。
「アンタもあれかい？　人助けだの正義だの、そんな青臭い理由で契約交わしたクチ？」
「……!?」
酷薄そうに言う杏子に対し、さやかは睨み返すようにしつつも、軽く驚いたように目を見開く。
「……だったら、どうしたって言うのよ？」
「ハッ、アタシも別に魔獣狩りはやってるけどさぁ――」
どこか嘲るように、杏子は言う。
「アンタとかマミみたいな青臭いやつ見っと、それはそれで虫唾が走るんだよねぇ」
「駄目ださやか、挑発に乗るな！」
サッきゅんが言うが、既に遅い。
「あたしのことはともかく――」

さやかは剣を構えて、飛び出していた。
ガキィンッ！
さやかの一撃を、杏子は軽く槍で受け止めた。
「マミさんの事を、悪く言うなぁ！」
「はっ、お前も結局、紙一重のそっち側かよ！」
杏子の槍の穂先が、っ、とさやかの剣を受け流す。
――――と。
全く同時に、さやかの足が払われ、さやかは前に向かって倒れこむ。
「!?」
何をされたのか、さやかには全く理解できなかった。
ズシャッ！
「これで全治3ヶ月、ってトコか？」
さやかの背中を、杏子の槍の穂先が斬り裂いた。
勿論、致命傷にはならないことを承知の上での攻撃だった。
「な、何をするんだ、杏子!?」
サッきゅんが、小動物姿のまま血相を変えて、杏子に向かって声を荒げる。
「先輩に対する口の聞き方もわっかんねーようなのは、お仕置きしかねーだろ？」
杏子は、ちらりとサッきゅんを振り返って言う。
「アンタみたいなトーシロにウロチョロされたら、返ってメーワクなんだよ。おとなしくマミと一緒に寝込んでろ、ルーキー」
杏子は、正面を向きなおすと、ヒュンッ、と槍の穂先で風を切って鳴らしながら、さやかに向かって吐き捨てるように言う。
「ま、だ……言うか……っ!?」
その目の前で、剣で身体を支えて、さやかが立ち上がる。
「……あれ？　おっかしーな。手加減が過ぎたか？」
杏子は、面倒くさそうに頭を抱えるようにして、呟くように言う。
「さやかの契約は癒しの祈りによるものだ。回復力は人一倍。意識しなくても自律回復（オートリジェネレイト）する」
サッきゅんは、険しい表情を杏子に向けつつ、そう言った。

「あー、なるほど、能力までチョーうぜぇタイプなわけね」
杏子は、そう言いつつ、軽く肩をすくめるようにして首を振る。
「まー、本気で殺(や)りあってもアタシにはなんの得もねーわけだし、別にほっといても良いんだけどよ」
そこまで言って、杏子は再びさやかを睨みつけた。
「アンタみたいなやつ、マジでムカツクんだわ！」
ジャラァッ！
杏子の槍の穂先が、多節棍のように鎖で繋がって分割される。
「黙れぇっ！」
さやかも剣を杏子に向かって振る。
だが、それは杏子の槍の穂先であしらわれてしまう。
ビュッ
槍の一方の端が、鋭くなくとも貫き通す勢いで迸り、さやかの頬を掠める。
「……チッ」
さやかが紙一重でかわしたのを見て、杏子は舌打ちする。
「アンタみたいのには、負けない！」
さやかは口元に不敵な笑いを浮かべる。
「2人とも、いい加減にするんだ！　杏子！　どうしてこんな意味のないことをするんだよ!?」
サッきゅんが声を荒げ、杏子をたしなめる。
だが、2人の剣戟は、それでも止まらない。
「アタシがどんな思いをしたか！　アンタなら良く知ってるだろーが！」
杏子は、さやかと刃を交わしながら、ぶっきらぼうにそう言った。
「それは……、でも、さやかには関係のないことだよ！」
「わりぃけど、ちっと遅ぇわ」
ズシャァッ
さやかが多節棍の柄に気を取られた次の瞬間、杏子は槍を元に戻しつつ、その穂先でさやかの胸元を斬り裂いた。
さやかは仰向けに倒れこむ。

「これに懲りたら、二度とアタシの前でチョロチョロすんじゃねーぞ！」
言って、杏子は槍をさやかに突きつける。
「アンタがね」
さやかはしかし、倒れこんだまま、自らの血塗れになりながらも、不敵に笑って、言う。
「!?」
そこで杏子は、自らの置かれた立場に気付き、愕然とした。
周囲一帯を、さやかが右手に持っているものと同じ剣が、無数に取り囲んでいた。そしてその切っ先が、一様に杏子を狙っている。
「そうか、コイツ……くそ」
杏子は苦い顔をして、毒つく。
「杏子」
そこへ、２人の間に、魔法少女姿のサッきゅんが割って入った。
「君のやり方に異を唱えるわけじゃない。けれどそれは魔獣退治に限っての話だ」
そう言って、サッきゅんは杏子を睨みつける。
「こんなやり方は、ボクとしても本意じゃない」
「チッ」
杏子は、舌打ちしながら槍を引き、手で頭をかくようにして髪を梳いた。
「解かったよ」
杏子はそう言って、魔法少女の装束を解き、パーカーにカットジーンズという私服姿になった。
「せいぜいがんばんなよ、ルーキー」
杏子は手を差し伸べることもせず、踵を返して歩き始めた。
「死ぬまでな」
嫌味っぽくそう言って、いい加減に手を振りながら去っていった。
ピンポーン。
駅近くのマンション、巴邸。

さやかは律儀にインターホンのボタンを押す。が、もちろんまだマミは動ける状態ではない。
『大丈夫よ、入ってきて』
マミはインターホンではなく、テレパスでさやかに答えた。
『じゃあ、お邪魔します』
さやかこそう答えてから、普段はサッきゅんが所持している合鍵で玄関の鍵を開けた。
「お邪魔しまーす……」
今度は直接声に出して、恐る恐る、と言った感じで言い、室内に入る。
マミの居室に入り、そこで照明をつけた。
「ん……っ」
室内が蛍光灯の光で照らされると、マミは一瞬顔をしかめた、
「あ、眩しかったですか？　すみません」
「大丈夫。部屋が暗かったから、目が眩んだだけ。寝ていたわけじゃないから、気にしないで」
慌てたように言うさやかに対して、マミはくすくすと苦笑しながらそう言った。
「あ、はい……」
「それで、こんな時間に何の用？」
マミは、咎めるというより、さやか自身を気遣うようにして、そう訊ねた。
「さやか、とりあえず、マミの首を」
「う、うん」
「美樹さん？」
サッきゅんに促されて、さやかはマミのベッドの枕元に近付き、膝を突いて屈む。マミはその意図がわからず、思わず聞き返していた。
「マミさん、動かないで」
「動けないけど……って、ひゃ!?」
さやかの意図が読めずに、マミが軽く混乱していると、さやかはマミの首筋、うなじの左脇を、ソウルジェムの指輪のはまる右手で触れ

た。マミがくすぐったそうに短く声を上げる。
さやかは、何かを念じるように、軽く眼を閉じた。
「あ……」
触れられたさやかの手から、熱がじんわりとマミの首の中に入り込んでくる。
「首が……？」
表面は傷跡を残して癒着が済んでいたマミの首だが、まだ再生の済んでいなかった延髄や脊椎なども、急速に修復されていく。
「どう……ですか？」
さやかはマミの首から手を離しつつ、眼を開いてその顔を覗き込み、そう訊ねた。
マミは、自分の手で自分の首に触れて、感触を確かめた後、ゆっくりと身を起こして、左右に振ってみる。
「凄い、普通の魔法少女の回復力を凌駕してるわ。美樹さんは……」
「さやかの願いは癒しの願いだったからね。回復の魔法には長けているんだよ」
小動物姿のサッきゅんが言う。
「早く言ってくれれば、マミさんの首もすぐに治して上げられたのに」
「確証がなかったからね。そう言う意味じゃ、杏子に感謝かな」
「うげぇ」
抗議の声を出すさやかに対し、サッきゅんがそう言うと、さやかは露骨に顔をしかめた。
「でもさやか、あくまでここまでのひどい傷を治療できるのは、相手が魔法少女のマミだからだからね？　生身の人間に対しては、せいぜい擦り傷切り傷といった裂傷を治すのがせいぜいだよ」
「え？　どうして？」
サッきゅんが一言念を押すように言うと、さやかが反射的に聞き返す。
「たとえば――」
代わりに、ベッドの縁に座りなおしたマミが答える。
「骨折した人がいるとするわね？　その人に、今の魔法をかけたらど

うなると思う？」
「え？　元通りになるんじゃ……」
　さやかはマミの言葉の意味が理解できず。小首をかしげる。
「いいえ。折れ曲がったままくっついてしまうの」
「えっ？」
「生物の身体って言うのはそれほど便利にできてないんだ。骨折とかした場合は、ちゃんと整形して矯正してあげないと、そのまま癒着しちゃうだけなんだよ」
　さやかが、軽く驚いたように聞き返す声を出すと、サッきゅんが補足するように説明した。
「今回の場合は、マミが魔法少女で、自分の身体を矯正して再生する能力があったから、出来たことってわけ」
「なるほど……」
　サッきゅんの説明に、さやかは納得の声を上げる。
「だから、むやみにその能力（ちから）を濫用したり、過信したりしないようにね」
「あ、はい。わかりました」
　今度はマミに言われると、さやかはマミのほうに視線を向けて、真摯にそう答えた。
「ところで、さっき佐倉さんがどうとか、言ってたみたいだけど？」
「あ……」
　マミの問いかけに、気まずそうな声を出したのはサッきゅんの方だった。
「佐倉杏子……ですよね、多分、そいつだったと思います」
「それで、仲良くなれた？」
　さやかが答えると、マミはやさしげに微笑みつつ、そう問い返してくる。
　だが、さやかの表情はむしろ、険しくなった。
「いいえ！　いきなり襲われて、怪我させられて。何とか引き分けに持ち込みましたけど、正直殺されるかと思いました」
「……流石に魔法少女で殺しあうって事はないし、手加減はして

いたと思うけど……」
　さやかの言葉を聞いて、マミは言葉で杏子を擁護しつつも、あからさまに顔をしかめた。
「マミさんのことも酷く言ってたんですよ、そいつ！　青臭いやつは嫌いだって！　あたし、それが許せなくって……」
　さやかは、マミに視線を向けつつ、憤慨の声を上げ続けていたが、
「あの転校生も何考えてるかわからないし、マミさん以外の魔法少女って、みんなあんな感じなのかな……って」
　と、急に声のトーンを落として、そう言いながら、うつむきがちになってしまう。
「杏子にはああなった理由があってね……」
　さやかを慰めるように言葉を発したのは、サッきゅんだった。
「経緯はボクから語るべきじゃないけど……ただ、彼女がさやかのような魔法少女を毛嫌いする理由は、ちゃんとあるんだよ。単純な感情論だけじゃなくてね」
「私も、彼女は根は悪い子じゃないと思ってるわ」
　サッきゅんとマミの困惑気な言葉に、さやかは悔しそうに拳を固めて、ぶるぶると震えていたが、
「わかりました」
　と、視線を伏せたまま、そう言った。
「それなら、極力――相手しないようにします」
「そうしてくれると助かる。マミも復帰したってわかれば、そうそうさやかにも手出しはしてこないだろうし」
　サッきゅんはそう言って、マミと一緒に、胸を撫で下ろすようにする。
　さやかははぁっ、と深くため息をついた。
「さて、こんな時間だし、美樹さんもそろそろ帰ったほうが良いんじゃないかしら？」
　マミは、ぱんぱんと手を叩いて話題を切り上げ、苦笑気味に言う。
「はい――」
　まだ何処かわだかまった様子で、さやかはそう言った。

２ストロークエンジンの、パンパンという何かが断続的に弾けるようなアイドリング音が、深夜の見滝原市街に響く。
スズキ　２サイクル・バーディー５０。所謂〝カブスタイル〟の原動機付自転車だが、基本的にこれらが４ストロークエンジンを採用しているのに対し、スズキお得意の２ストロークエンジンを採用していたものである。
それは交差点の信号待ちで停車していた。
既に市街地の交通量もほとんどなく、道路は時折タクシーとトラックが通過するばかりだった。
だが、やがて信号が青になっても、アクセルを吹かして発射する様子はない。
「なに、アンタ。跳ねられたいの？」
革製の耳当ての付いた、ヴィンテージスタイルのヘルメットを被った少女は、円レンズのゴーグルを上げて、不愉快そうに言う。
バーディーの直線上、とっくに赤信号になった横断歩道の上に、ストレートの長髪を持つ少女が、黙って、しかし険しくはないが強烈な視線をバーディーの運転手に向けつつ、立ちはだかっていたる
「バッキャロー！　ふざけてんじゃねーぞー！」
背後にいたトラックが、運転手がそう怒鳴りながら、僅かに右に逸れて追い抜いていった。
「ちっ、てめぇからミンチにしてやろうか」
ガロロロロ、とディーゼルエンジンの音を響かせながら走り去っていくトラックの後ろ姿に向かって、バーディーにまたがっている少女――佐倉杏子は睨み返すようにしながら言い棄てると、
「で？　結局アンタはなによ？」
と、目の前に立ちはだかる少女――暁美ほむらに視線を戻す。
「まぁ、アタシの前に出るって事は、大方アンタも魔法少女なんだろ？」
杏子はやや忌々しげに問いかける。
「そうよ」

ほむらは淡々とした様子で短く答えた。
「貴方に話があるの」
「なんだよ、くだんねー話だったら、マジ轢くぞ」
そう言って、杏子はバーディーのギアを抜き、アクセルをひねって空ぶかしし、威嚇する。
「無免許運転はまだしも、ガソリンの無駄遣いは感心しないわ」
「けっ」
ほむらは怯んだ様子もなく、淡々と言う。杏子は面白くなさそうに声を漏らす。
「で、結局なにさ」
「この街を、あなたに預けたい」
ぴくり。
ほむらの言葉に、杏子は眉を僅かに動かした。
「で？」
２４時間営業の、コンビニエンスストアの前。
杏子は、ガードレールの歩道側に立てかけられたバーディーにもたれかかるようにして、黄色いロング缶の缶コーヒーをあおりながら、
「どんな風の吹き回しよ？」
と、いまいち理解できない、と言った感じで、傍らに立つほむらに訊ねる。
「魔法少女は貴方みたいな子こそ相応しいわ。美樹さやかでは務まらない」
「さー、どーだか。マミだってなんのかんのとうまくやってたぜ。今回だってくたばり損なってやがるし」
「心にもないことは言わない事ね、佐倉杏子」
名前を呼ばれて、杏子はまだ自分が名乗っていないことに気付き、顔を上げて怪訝そうにほむらに視線を向ける。
「確かに肯定はしねー。だが事実を無視もしねー」
杏子はぶっきらぼうに言いつつ、やはり入手したばかりのポッキーを開けて、１本口に運んだ。ポリッと心地よい音がする。
「現実からの剥離は敗北を意味する。実戦派の貴方らしい考え方だ

わ」
「そりゃ、どーも」
　ほむらは感情を表に出さずに淡々と言い、杏子の方も形ばかりに例の言葉を言う。
「美樹さやかはそう言うことが考えられない。その点では巴マミよりも資質に欠けている」
「そこまでとは思わなかったけどな」
　敵対していたとは言え、ほむらの悪意的な言い回しに、杏子はどこかすっとぼけたような表情で星空を見上げつつ、呟くように言った。
「彼女については、貴方は今後手出ししないで。私が対処する」
　ほむらは眼を軽く閉じる程度だったが、僅かに表情を変えて、そう言った。
「どーにも狙いが見えねーな。アンタ何者だ？　一体なにが狙いなのさ？」
「自己紹介が遅れてごめんなさい」
　ほむらは僅かに眼を伏せて謝罪してから、更に言葉を続ける。
「私の名前は暁美ほむら。私の目的は、ある魔獣からこの街、いえ世界を護ること」
「そんな厄介なのが来るってのか？　アンタやアタシ１人じゃどうしようもないような」
　杏子は、そう言って怪訝そうな表情をほむらに向けた。
　すると、ほむらは僅かに溜めるようにしてから、言葉をつむぐ。
「２週間後、この街に『グリフレットの別れ』が来る」
　２本目のポッキーを加えた杏子の動きが一瞬止まり、表情が引きつった。
『武蔵滝元行最終電車参りまーす。ご利用のお客様はお乗り過ごしのないようご注意ください』
　見滝原駅のホームから流れてくる放送と共に、隣の武蔵滝元止まりの電車が駅に進入していく。４００系のツリ駆け式モーターの轟音が、深夜の静寂の中に、乾いたように響き渡った。
「……何故分かる？」

電車が轟音を立てて駅を出て行った頃、杏子が問いただす。
「秘密。ただ確実に来るとしかいえない。信じる信じないは貴方の自由」
「胡散臭さいことこの上ねーな」
淡々としたほむらの言葉に、杏子はそう言って、缶コーヒーを一口すする。
「信じられない？」
「とゆーより、手札がまるで見えないとあっちゃね。けど、『グリフレットの別れ』ね……それを聞いちまうと無視はできねーな」
「それさえ倒せば私はこの街を離れる。あとは貴方の好きにすればいい」
何処か呆れたように言う杏子に対し、ほむらはただ淡々と伝える。
「確かに、1人じゃあ手強いが、2人掛かりなら勝てるかもな」
杏子はそう言うと、もたれかかっていたバーディーのシートから身を起こし、ポッキーの箱をほむらに差し出した。
「食うかい？」

第６話：アンタは胸を張っていてよ

「えっ、上条君、退院したんですか？」
「ええ……連絡行ってなかったの？」
驚くさやかに対して、病棟の看護師は困惑気にそう言った。
翌日、恭介の入院する、否、していたはずの滝元医大病院に向かったさやかだったが、すでにそこに上条恭介の姿はなかった。
目的をなくしたさやかは、そのままとぼとぼと病院を出ると、見滝原に帰るために、最寄である南滝元駅に向かう。
ホームは島式と対向式を組み合わせた２面３線で、コンコースは駅ビルのある見滝原駅より小ぢんまりとまとまっていた。改札を通ると、対向式ホームの背の側に、鮮やかに花を咲かせたクレマチスの植わったプランターが並べられている。
５分と待たずに、都交６３００形電車が、ＬＥＤ方向幕に、「西馬込」「地下鉄三田線直通」の表示を交互に、「快速」の種別表示とともに出しながら、ホームに滑り込んできた。
人影はまばらで、電車にたやすく飲み込まれていく。それを終えると、電車は扉を閉めて、滑るように発車した。

タタン、タタン……
モーターのない中間車の車内には、台車からはレールの継ぎ目を超えるときのジョイント音だけが響く。
人も座席の半分ほどが埋まる程度には乗っていて、車内放送などもあるにもかかわらず、さやかの周囲にだけ音を遮る壁ができたかのように、さやかにはそれらが耳に入ってこなかった。
退院したなら、連絡くれてもいいのに……
自分だけが無音の車内で、さやかはため息をつく。
『次は見滝原ー、見滝原でございます。ご乗車の電車は、地下鉄三田線直通の快速西馬込行です――』
その車内放送の僅かな後に、電車は見滝原駅の上り線ホームに滑り込んだ。

扉が開き、さやかはとぼとぼとした足取りでホームに降りる。
恭介を見舞いに行く為に作ったＰＡＳＭＯ定期を自動改札機に触れさせて、改札の外に出た。
その後、自宅に一端帰宅しようと考えていたが、脚は半ば無意識に、上条恭介の自宅のほうに向かっていた。
もともと、美樹家と上条邸はそれほど離れていない。
とは言え、ありがちな和洋折衷建築の一戸建てである美樹家と、資産家の上条家の豪邸とは、隔世の感さえある。
その高い鉄の門が、越えられない壁のようにさえ見えた。
その奥の屋敷の方から、済んだバイオリンの音色が響いてくる。
練習、してるんだ……
多分、またバイオリンが弾けるようになったことがよほど嬉しいのだろう。
さやかはそう思うと、口元で微笑んで、黙したまま踵を返した。
後悔はない、筈だった。

「おい」
だが、そんなさやかの心に水を差す存在があった。
「折角会いに来たのに、挨拶もしないで帰るのかい？」
「！　お前……」
その姿を見て、さやかは反射的に身構える。
「今日1日、追いかけまわしてたくせに？」
紙袋に入ったストレートのチュロスを抱え、今も1本かじりながら、杏子はニヤニヤと笑いつつ、さやかに話しかけてくる。
「何の用？」
さやかは警戒を解かないまま、剣のある言葉で聞き返す。
「知ってるよ、この家の坊やなんだろ？　アンタが契約した理由」
杏子は、上条邸を振り返りながらそう言い、それから視線をさやかに戻した。
「つたく……。たった一度の奇跡のチャンスをくだらねぇことに使いやがって。魔法ってのは自分だけの願いを叶えるためのもんだ。他

人の為に使ったってロクなことにならないのさ」
そこまで言って、杏子はチュロスを一口かじる。
「巴マミは、その程度のことも教えてくれなかったのかい？」
「……っ」
杏子の言葉に、さやかはぶるぶると震えつつも、反射的に視線を逸らす。
杏子はさらにチュロスを一口かじる。
「惚れた男をモノにするなら、もっと冴えた手があるじゃん？　せっかく手に入れた魔法でさァ」
「……？」
杏子の発現の意味が分からず、さやかは怪訝そうににらみ返す。
「今すぐ家に乗り込んで、坊やの手足を潰してやりな。もう一度アンタ無しでは何もできない身体にしてやるんだ」
まるで悪魔が囁くかのような低い声で、杏子はそれをあっけなく言い放った。
「それは……！」
さやかの顔色が変わる。慄いたように表情を引きつらせた。
「そうすりゃ身も心も坊やはアンタのモノ……」
「……」
一度は押し黙ったさやかだったが、自分を落ち着かせるように軽く深呼吸をし、僅かなあとに、
「反対はされたわ。マミさんにも、サッきゅんにも」
と、さやかは切り出した。
「お？」
さやかの言葉を意外に思い、杏子は軽く目を円くする。
「それでもあたしは、あいつの手を治してやりたかった。それだけ」
さやかは淡々と言った。
「あはっ、あはははっ！」
杏子は、それを聞いて、お腹を抱える姿勢をしながら哄笑をさやかに浴びせる。
「アンタってホントにバカなんだな」

「バカでも何でも良いわよ。バカだけど、同じ過ちは繰り返したくないから」
そう言うと、さやかは杏子を振り払うようにして歩き始める。
「お？」
「マミさんと約束したの。アンタとは係わり合いにならないって」
とっぽく聞き返す杏子に、さやかはそう言い捨てるようにして立ち去ろうとした。
「待てよ」
杏子がさやかを呼び止める。
「だったら、アンタの代わりにアタシがやってやろうか？」
「!?」
その言葉に、さやかの顔色が変わる。
「係わり合いにならない、とは約束したけど……」
さやかは、そう言いつつソウルジェムを握り締める。その拳がぶるぶると震えていた。
「恭介や街の人に危害を与えるって言うんなら、話は別だ！」
「へへっ、やっとその気になりやがった」
言うと、杏子は変身もせずに、ポーン、とその場から跳躍するように駆け出した。
「追いかけて来いよ！　止めたかったらな！」
着地ざまにちらりとさやかを振り返り、悪戯を考えた子供のような、憎らしげな笑みで言う。
「ま、待てっ！」
さやかの方は先に変身をかけつつ、杏子を追う。
けど、アイツ……
さやかを引っ張るように逃げつつ、杏子は少し怪訝そうに思う。
いくら魔法少女でも、アタシの心を引き寄せる能力が効ききらないなんて、なかなかたいしたやつなのか、それとも他に理由があるのか

一方。
『マミさん！』

さやかはテレパスで呼び出す。
『どうしたの？』
『昨日の杏子ってやつに絡まれて。無視するつもりだったんですけど、恭介の手足を潰すとか言い出して！』
『！　分かったわ。私もそっちに行く』
マミはそう答えて、一旦テレパシーの通話は途絶えた。
既に陽は沈みきり、あたりは街灯や道路等の灯りが照らすだけになっている。
２人は幹線都道と国道が交差する大き目の交差点の、歩道橋の上にいた。
一般の通行路だが、下にも横断歩道がある為、通学中の小学生以外は、まずこちらを使うことはない。
「ここなら遠慮はいらないねぇ」
杏子はそう言って、さやかはソウルジェムを取り出そうとする。
「待って」
杏子が変身しようとすると、その背後から声をかけられた。
「アンタは……！」
現れたほむらに、杏子は一瞬だけ言葉を詰まらせる。
「話が違うわ。美樹さやかには手を出すなと言った筈よ」
ほむらは淡々と言いつつも、睨むような視線を杏子に向ける。
「何の用よ、転校生」
さやかの方から、割り込んできたほむらに対して、苛立ちの声が発される。
「悪いけど、アンタとやりあうつもりもないし、あたしはそもそも誰かを傷つけるつもりはないの」
剣の切っ先をほむらに向けつつも、さやかはそう言った。
「どうやら、アンタじゃお気に召さないようだぜ」
そう言いながら、杏子はソウルジェムを掲げようとする。
「ちょっと、待ちなさい！」
タァンッ！
ほむらの怒声の、僅か一瞬後に、発砲音がとどろいた。

「っ！」
杏子が反射的に手を抑える。
「ごめんなさい、加減はしたはずだけど」
「マミさん！」
さやかが表情を明るくする。
マミのスナイドルが、杏子のソウルジェムを弾いたのだ。
赤いソウルジェムは、そのまま落下して行き――
たまたま下を走っていた、トヨタ　ハイラックストラックの荷台に落下した。
「まずい……ッ」
ヒュンッ
そう言い残して、ほむらの姿がかき消える。
「マミ……てめぇ……なんて事しやが――――」
邪魔をされた杏子は、さやかの傍ら、歩道橋の手すりの上に姿を現したマミに向かって、怒りで震えながら睨みつける――かと思いきや、
グラリ――――
と、膝から力が抜けたかのように、崩れ落ちて倒れこみかける。
「ちょ、ちょっと、アンタ！」
さやかが、それを見て、とる物もとりあえず飛び出し、正面から杏子を受け止めた。
「さやか!?　マミ!?」
その時、ようやくにして、魔法少女姿のサッきゅんが姿を現した。
「……」
「ちょっと、しっかりしなさいよ！　アンタ！」
さやかが、杏子の身体を揺すったり、頬を軽く叩いたりするが、反応はない。目を見開いたまま、スイッチが切れたように、動かずに止まっている。
取り乱しかけるさやかの傍らに、マミが膝を折ってかがむと、さやかにうつ伏せで膝枕された状態の杏子の首筋に手を添えた。
「サッきゅん？　これはどういうこと……」

マミは、その姿勢のまま、視線も向けずに低い声で問い質す。
「え……？」
まだ到着したばかりで、状況を把握しきれていないサッきゅんは、少し困惑気にしつつも、倒れこんでいる杏子を見つけて、顔を青ざめさせる。
「ま、まさか……」
血の気を失ったサッきゅんに対して、マミはおおよそ普段からは信じられない、酷薄そうな声で事実を告げる。
「この子……死んでるわよ……!!」

すでに絶版になって久しいが、都心部の高さ制限を嫌って、なお使用されていたトヨタ　ハイラックス２ＷＤ。
１トン積みに対してエンジンは２０００ｃｃ、１００ｐｓの１ＲＺ―Ｅ。若干アンダーパワーとは言え、普通の人間が生身で走って追いつけるわけがない。
だが、その後ろ、歩道と車道の間の路側帯を、ほむらがそれを走って追ってくる。
黒に近い紫をベースにした、セーラー服に似たツーピースの、魔法少女の装束に身を包んだほむらは、時折、ＣＤやＭＤで曲をスキップするように、姿がかき消えては、一気に距離を縮めて現れる。それを繰り返して、着実にハイラックスに近付いてくる。
ついにほむらの手がハイラックスの後部アオリを捉えた。
さらにもう一度、ヒュンッ、と姿が消えると、次に現れたとき、ほむらはハイラックスの荷台に転がり込んでいた。
欠けられたシートの上で、赤く輝くソウルジェムを見つけ、掴み取る。
その次の瞬間、再びほむらの姿が消えた。
そして、ハイラックスが通過していったその脇の歩道に、ほむらは立っていた。
「まさか、こんな事故が起こるなんて……」

びくりとも動かなくなった杏子の身体を囲むさやかとマミ。そのマミの背後の位置で、サッきゅんが青ざめた表情で言う。
「どういうことなの……？」
マミは、静かにだがはっきりした声で、サッきゅんに問いただす。
「君たち魔法少女が身体をコントロールできるのは、せいぜい１００ｍ圏内が限度なんだ。でも、ソウルジェムは本来肌身離さず持っているものだと思ってたから、こんな事故が起きるとは想定してなかったんだ」
「１００ｍ？　いったい何の意味よ!?」
今度はさやかの方が、視線をサッきゅんに向かって聞き返す。
「君たち魔法少女にとって、肉体っていうのは、いわば外付けのハードウェアなんだ。その本体が、コンパクトかつ安全、魔力を効率よく運用できるソウルジェムってわけ」
「……」
「つまり、ソウルジェムが君たちの本体、魂と言うべきものなんだ」
「……」
しょぼくれたような口調で説明するサッきゅんに対し、２人は鬱蒼とした沈黙を返す。
「このっ！」
やがて、さやかが激昂したように、杏子の身体をマミに押し付けると、サッきゅんの胸倉に掴みかかった。
「それじゃあたし達、ゾンビみたいなモノにされてるって事じゃない！」
「ちょ、ちょちょ、ちょっと待ってよ」
さやかに掴みかかられて、サッきゅんはばたばたと手を振る。
「順を追って説明するから」
サッきゅんは、そう言いながら、何とかさやかの腕から逃れる。
「良いかい、ソウルジェムという本体と、外付けのハードになった身体も、基本的には繋がっている。この星のコンピューターシステム、パソコンに例えようか。２人とも、ハードディスクって単語は解かるかい？」

「パソコンの中に入ってる部品だってことしか……」
　さやかは困惑気にそう答えたが、
「えーと……、ソフトやデータを入れておいて、電源が入っていないときに保存しておく、磁気ディスクユニットよ」
　知識が多少あるらしいマミが、素人にも解かりやすいように、と考えて、さやかにそう説明した。
「今、一般に市販されているパソコンは、本体の中に内蔵されてしまっているから解かりづらいけど、あれは本来、パソコンそのものにとっては、後から付け足す付加機能なんだ。でも、この星の昨今のＯＳは、ハードディスクなしじゃ運用できない、必須品でもある」
「つまり……肉体は魂の付属品……そう言いたいって事……？」
　さやかが、低い声で唸るようにいう。
「そう……それで、少し昔、と言っても、マミが生まれるよりももっと前の話だけど、そのころは、このハードディスクも、パソコンの本体にケーブルを使って接続する、外付け方式が普通だった。当然、ＯＳを起動するハードディスクと、本体とは、運命共同体。どっちかがトラブルを起こせば、もう一方も機能不全を生じる。ただ、外付けであれば、修理や交換は容易いし、本体が一緒に致命的ダメージを受けるリスクもずっと下がる。普通の人間は、魂の入れ物と一体である肉体が破壊されたら、死しかないだろう？　それが君達は、心臓や脳に致命的ダメージを負っても、再生する事が出来るんだ」
「あ……」
　サッきゅんの説明に、さやかは完全に納得できたわけではなかったが、その意味するところに気がついて、マミを振り返った。
　衣装に新たに黒いチョーカーを加えたマミが、困ったように、しかしさやかを必要以上に不安にさせまいと、笑顔を作った。
「さやかはさっき、ゾンビって言ったけど、とんでもないよ。外付けのハードがゾンビだったら、本体も正常に作動できない。あくまでソウルジェムって本体と、肉体っていうハードを、物理的に分離しただけ」
「……」
「……」

理不尽に対する怒りや不満がないわけではなかったが、それ以上に複雑な感情がお互い絡み合った空気が、あたりを支配する。さやかとマミは言葉を失い、沈黙する。
「それに、この方法をとるには、もうひとつ理由があるんだ」
「もうひとつ、理由？」
マミが、仰向けにした杏子の身体を膝枕するようにしながら、訊き返す。
「最初にも言ったとおり、魔獣から回収された負の精神のエネルギーを一時的にせよ溜め込んでおくには、生身の身体じゃキャパシティが低すぎて受け入れきれない。その為のソウルジェムシステムでもあるんだ」
「そう、それで解かった。アンタがなんであれだけあたしに念を押したのか」
さやかは低い声で、細々と言う。
「解かってくれたかい？」
サッきゅんは、いまだ気まずそうな顔をしながらも、いくらか表情を明るくして、視線を上げた。
「ううん。本当はまだ納得しきれてない面もある。不安な事もあるし、悔しいとも思ってる。けど、そのおかげでマミさんは死なずにすんだし、あたしもこうして一緒に戦える。今更、アンタだけを恨んでもしょうがない」
さやかは低い声で言う。恨まないとは言ったが、その言葉にはいまだ悔恨の念が篭っていた。
「さやか……」
サッきゅんは再び俯き、ため息をついた。
そこへ、ハイラックスの荷台から紅いソウルジェムを回収してきたほむらが、さやかやマミの背後側から現れた。
杏子の身体をはさむ形で、ほむらは、マミの反対側から杏子の身体を軽く抱き起こすと、その手にソウルジェムを握らせた。
「！」
杏子の仁美に生気が戻ったかと思うと、ツリ眼だが大きく円い瞳を

ぱちくりとさせた。
「……？　なにが、どうなってんだ？」
杏子は状況が理解できず、歩道橋に座り込んだ状態でキョロキョロと辺りを見回した。
「今日は解散にした方がいいようね」
ほむらが言った。
「……？　よくわかんねーけど、ルーキーやマミも戦意喪失みてーだし、無理に喧嘩吹っかけても面白くもねーし、そうするしかねーか」

「騙してたのね、あたし達を」
美樹家、さやかの自室。
さやかの勉強机に置かれた、青く澄み切ったソウルジェムの前で、小動物姿のサッきゅんがうなだれている。
「ごめん……ボクの説明が足りなくて、結果としてそう言う形になってしまった」
サッきゅんは低く言う。
「そうね、『生身の人間とは違う』ってだけは、しつこいくらいに繰り返し言ってたものね」
さやかはそう言ったが、その口調は乾いたもので、無機質な感じの表情ともども、到底納得したという感じのものではなかった。
「でも、魔獣と戦うのに必要な形態ではあるんだ。少しでも安全にね」
「……余計なお世話――」
そう、言い切ろうとして、さやかは一旦言葉を詰まらせる。
「――って、言いきれない……」
サッきゅんの言い訳に、しかしさやかは強い調子にもなりきれない。
このシステムでなければ、マミは病院での戦いで死んでいた。
それもまた事実だったから。
「それに……まださやかは魔法少女になり立てだから無意識にしか使ってないだろうけど、魂に依存する意識と肉体とを分離するって言

うのは、魂の方を保護する意味でも必要な事なんだ」
「どういう、意味よ？」
「たとえば、背中を槍で切り裂かれた場合、本来、肉体の痛覚がどれだけの刺激を受けるかって言うとねぇ」
サッきゅんはそう言うと、前足をそっと持ち上げ、
「ごめん、さやか、大分つらいけど、それだけだから」
と、申し訳なさそうにそう言って、ちょん、と、さやかのソウルジェムを突付く。
ソウルジェムの突付かれた部分に、水面に石を投げ込んだかのような波紋が走る。
ギシリ
「いぎぃ、いいいいいっ!?　かはっ、かはぁぁぁぁっ!!」
さやかの背中に、焼けるような激烈な刺激が与えられる。立ってなどいられず、その場に倒れこんで、背中を逸らすようにしてのた打ち回る。
「これが本来の〝痛み〟。これだけの深手を負ったら、普通は動けなくなるんだよ。キミがあの時、杏子に襲われて生き延びれられたのは、分離されている魂が肉体に対して、必要以上の痛覚を遮断しろって命令してたからなんだ。運命共同体でありながら別個の個体であるというこのシステムだからこそ可能な事なんだよ」
サッきゅんは、申し訳なさそうにしつつも、はっきりとした声で説明する。
「慣れてくれれば完全に痛覚を遮断することも出来る。ただ、肉体の健全性を保つ障害になるから、あまりお勧めは出来ないけど」
「はぁっ……はぁ……っ」
さやかは、苦悶の様は大分和らいだが、いまだに苦しそうに息をしている。
「お、教えなさい……よ……」
「教える？」
息も絶え絶えになりつつも、さやかはサッきゅんに迫る。
「あたし達を……こんな目に合わせてまで……どうして……魔獣と

……っ」
「……」
サッきゅんはそう言われて、しばらく逡巡していたが、
「解かった、話すよ」
と、覚悟を決めたかのように、切り出した。
「ボクは、実はこの星の住人じゃない、宇宙のはるか彼方から、この地球を探して、やってきた存在なんだ」

かつて、宇宙に大文明を築いた知的生命体の種があったという。
彼らは膨大な領域で膨大なエネルギーを消費し、産業文明活動を行っていた。
だが、やがて彼らはひとつの重大な危機に直面する。
エネルギー問題。
勿論、地球のオイルショックや南北較差問題のように、そういったエネルギー問題に直面してこなかったわけではないし、解決しても来ていた。
だが、今回のそれはスケールが違った。宇宙全体のスケールだった。
エネルギーの大量消費により、宇宙空間のエントロピーが増大し、それらは核物理学上のエネルギーの総量を減少させて、やがては宇宙全体が冷え込み、〝熱的死〟を迎えるというものだった。
そこで、その文明を築いた知的生命体がとった手法が、熱力学第二法則の適用されない、すなわちエネルギー保存の法則の範囲外になるエネルギーを、相転移によって熱量換算可能なエネルギーに変換し、宇宙全体のエネルギーの均衡を保つという物だった。
そしてその〝エネルギー保存の法則の範囲外になるエネルギー〟こそが、個体が意識を持つ知的生命体、つまり人間の精神だったのだ。
「ところが、彼らの説にはとんでもない誤りがあってね」
「誤り？」
「うん……さやか、小学校のころ、こういう実験をしたことはないかな？」

フタのない木箱に、まず、砂を入れる。
その砂の上に、木箱の上いっぱいまで、砂利を入れる。
それをふるいにかけるように揺する。
そうすると、個体の重い砂利は沈もうとし、逆に砂は浮き上がってこようとする。
結果、砂利のあいていた隙間に砂が詰まった状態になり、全体の嵩は減る。
「あー、小さいころなんかの本で読んだことあるわ」
「つまり、これと同じ事なんだ」
つまり、エントロピーの変化は見た目の嵩の減少に過ぎず、エネルギーの総量自体はあくまでエネルギー保存の法則に従って循環していた。
そもそもそうでなければ、知的生命体の文明によるエネルギー消費なぞ無にも等しい、天体、特に恒星の活動でとっくに宇宙は〝熱的死〟を迎えていなければおかしいはずなのだ。
にもかかわらず、その知的生命体は、宇宙に許容範囲外のエネルギーを注ぎ続けていた。
「そ、それってさぁ、ある意味やばいんじゃないの？」
サッきゅんへの不満や怒りなど通り越して、さやかは顔を蒼白にし、慌てた声を出す。
「やばい、なんてもんじゃないよ！」
サッきゅんも、つい声を上げてしまっていた。
「もともと、宇宙空間のエントロピーを増大させる、つまり、宇宙全体を膨張させるのはその内部に抱えているエネルギーなんだ。単純にエネルギーの総量を増大させるようなことをすれば、本来エントロピーの増大に伴ってゆっくり膨張していく宇宙は、限度を超えて空気を入れ続けた風船がやがて破裂するのと同じように、破滅を迎える」
「そ、そうよ、ね……」
「正確に言えば、破裂どころの騒ぎじゃない――」
エネルギーが過多になった宇宙は、やがて膨張の限界に至る。
末期には過剰なエネルギーを圧縮してその飽和度を和らげる為に、

恒星の重力崩壊が促進されてブラックホールが多発し、あたりの天体を破滅させる。勿論、太陽系も例外ではない。
そして最後は、宇宙自体の中心が重力崩壊を起こして爆縮現象を起こし、最後に、宇宙全体の質量を持つ、しかし体積は限りなく0に近い大きさの珠になった〝宇宙〟が、3次元という空間上に残される。
「そのことに気付いたのが、僕たちだった」
個体こそ少ないが、やはり高度な文明を持つ別の知的生命体がいた。
同レベルの規模で戦争をすれば30回に1回は勝つ、という程度の物だったが。
しかし宇宙に起きる変異――主に恒星の重力崩壊の促進――に気付いた彼らは観測を続け、隣人の過ちを知った。
「そこで、僕らはそのエネルギーを回収する必要性に迫られた」
一度〝熱量換算可能になったエネルギー〟を、アストラルエネルギーである精神に返すためのシステム、それが魔法少女だった。
「魔獣という形で具現した負の精神エネルギーを一度魔法少女に返し、最終的にアストラルエネルギーとして昇華させる。その為に送り出されたのが、ボクたち、〝母胎（サッキュベーター）に返す者〟」

「でも……」
「でも？」
さやかの呟きを、サッきゅんは鸚鵡返しにする。
「なんであたし達なの？　地球人なの？」
「それは、地球人の精神エネルギーが大きいからさ。それこそ、その総量は宇宙を作り変えられるほどにね。だから、エネルギーを取り出そうとしていた連中のシステムの副作用で魔獣が出現するようになったし、ボクらはそれを優先的に回収しなければならなかった」
怒りというよりは、気だるそうに聞くさやかに対して、サッきゅんはそう説明する。
「地球人のエネルギーって、そんなにすごいの？」
「うーん、さやかの歳じゃ、女の子だし、技術史にはあまり明るくない

だろうけど……地球人の精神エネルギー、分けても負のエネルギーは凄まじい物があるよ。鉄道、自動車、航空機、コンピューター、電波無線を使った広域放送、音響機器、映像機器、宇宙開発、あらゆる物が発明される、或いはその発展進化の過程において、そうしたマイナスの感情が強くそれを加速してる」
「……へぇ」
　さやかは、感心したというよりは、気の抜けたような声を出す。
「ただ、この事例に関しては、もっとも感情の振幅の強い、所謂思春期入り始めの時期、それも、女性の方が適しているんだ。だから、さやかぐらいの歳の子を、中心に勧誘してるんだよ」
「……」
　サッきゅんの説明に、さやかは沈黙を返す。幾分硬いが、険悪さはだいぶ薄れてきている。
「ひょっとしたら、この星は、一度彼らに目をつけられた事もあるのかもしれないね」
　サッきゅんもまた俯いたまま、呟くように言った。
「……どうなったの、そいつら？」
「え？」
「宇宙を滅ぼしかけたバカな連中がどうなったのか、よ」
　さやかはサッきゅんに視線も向けず、訊ねなおす。
「……」
　サッきゅんは僅かに沈黙してから、答える。
「滅亡したよ」
「そう、なんだ」
「自分達で制御できないエネルギーを濫用した末路なんてそんなものだよ。エネルギーの制御に失敗して、母星ごと跡形もなくなった。……この星も気をつけてほしいけどね、同じ過ちを、もう3度も繰り返してる」
「それはよく解からないけど……」
　サッきゅんは警告するように言うが、さやかには理解しきれもしなければ、それをどうこうできる立場でもない。

「でも、サッきゅんたちも魔法少女自体にはなれるんだよね？」
「なる事だけはね……」
　サッきゅんはそう言って俯く。
「ボクたちは、より前世代的なエネルギー問題の解決の為、精神のネットワーク化に成功し、実現してしまった。労働も、娯楽も、移動のために必要なエネルギーも必要なく、疲労する事も知らずにこなせるようになった。肉体の維持にも必ずしもこだわる必要はない。事実、このＳＱとしての身体も、一種の生態端末だからね。だけど、その代わりに、個というものが薄くなってしまったのさ。もちろん、プライベートは存在する。けれど、地球人のそれに比べて、感情の振幅が小さすぎるんだ。だから、あの程度の力しか出せない」
「そっ、か……」
　サッきゅんの答えに、さやかは素っ気無い返事だけをする。
「ごめん……さやかにとっては、勝手な言い分にしか聞こえないよね」
「……」
　うなだれたままのサッきゅんに対して、さやかは僅かな沈黙の後、口を開いた。
「ひとつだけ確認させて」
「確認？」
「うん」
　さやかはそう言って、ようやくサッきゅんの方に視線を向けた。
「もし、アンタたちが来なかったら、地球に魔獣も湧かなかったの？」
「……どっちとも言いきれない。でも、現れた可能性の方が高い」
　サッきゅんは、逡巡しつつ、沈んだ声でそう言った。
「元々、エネルギーを作り出そうとしてた連中がばら撒いたモノの副作用で現れるようになったのが、魔獣なんだ。負の感情を実体化して、〝熱量換算可能な〟エネルギーの源にするためのね」
　サッきゅんは、口調をニュートラルに戻し、視線を上げて、そう説明する。
「さっき言った通り、地球人の感情が持つエネルギーは、特段に大きいから、まず確実に出現していたと思う。１００％ではないけれど、っ

ていうところかな……」
説明し終えて、サッきゅんは再び俯く。
「そう」
そこまで言うと、さやかはふらりと歩いて、サッきゅんに近付く。
「ねぇ、悪いんだけど、魔法少女の姿になってくれる？」
「え？」
さやかから発された意外な言葉に、サッきゅんは一瞬、キョトン、としてしまう。
「せめて、縋らせてよ」
「あ、う、うん」
俯いた姿勢から、涙を浮かべるさやかに対して、サッきゅんはこくりと頷くと、勉強机からベッドに飛び降りつつ、ぽんっ、と、そこで魔法少女姿になった。
とは言っても、さやかより頭ひとつ分近くは小さなサッきゅんを、さやかは縋りつくように抱きしめる。
「うっ、く……あたし……っ、ホント、バカでっ……！」
さやかは顔をサッきゅんの右肩にうずめて、すすり泣く。
「ごめん……さやか……っ」
サッきゅんは抱きつき返すようにしてそう言った。
だが――
「アンタが謝るな！」
さやかは突然怒鳴ったかと思うと、サッきゅんの腕を振り解き、その肩を掴んで顔を正面に見据え、声を荒げた。そして、そこからは泣き崩れるような声で、更に続ける。
「アンタに後ろめたいことなんかないでしょうが。宇宙を護って、その為に魔法少女を生み出して、結果的に地球の平和をも護って……」
言って、さやかは再び顔をうずめる。
「だから、これは……あたしの場合は……あたしがバカだっただけ……」
「さやか……」
「アンタは胸を張っていてよ……でないと、あたし、正義の味方でいら

れない……」
「さやか……」
サッきゅんは、小柄な自分に縋りつくさやかの背を撫でる。
「さやか……ありがとう……」

「はーい、席ついてー」
見滝原中学、２年４組の教室では、担任の早乙女和子が出席簿を手に、生徒に着席を促す。
「ＨＲを始めまーす。まずは出席から。秋月くーん」
「はい」
「天海さーん」
「はーい」
「如月さーん」
「はい」
「黒井くーん」
「はい」
近年の通例どおり、男女を分けずに、ファミリーネームの５０音順に呼ばれていく。
ただし、転入生のほむらだけは〝あけみ〟でも最後だ。
「美樹さーん」
さやかの番になって、和子はその姓を呼ぶが、返事はない。
「美樹さん？」
「せんせーい、美樹はいませーん」
ほむらの前、さやかの右隣に座る男子生徒が、手を上げながらそう言った。
「どうしたのかしら……」
和子は心配げに言い、軽くため息をつく。
「美樹さん、どうなさったのかしら……」
仁美も、心配げに、主が不在のさやかの席を振り返って呟く。
「……」
ほむらだけは、ただちらりと視線をそちらに向けただけだった。

「ただ起きれなかっただけだよコンチクショー」
ベッドの上で毛布を被ったまま、さやかは起きたらテレビでタモリが話している声を聞いてしまった気まずさを隠そうと、誰にともなくそう言った。
「今朝方近くまで泣いてたもんね」
一晩抱き枕状態にされ続けた、魔法少女姿のサッきゅんも、眠たげに口を手で覆って大欠伸をした。
『おいおい、正義の味方がサボりかよ、ルーキー』
そこへ、テレパスが聞こえてきた。
『まぁいいや、そう言うことなら、ちょっとツラ貸せよ』
さやかが自室のカーテンをめくると、自宅前の道路に、テレパスの声の主、佐倉杏子が立っていた。

第７話：正義の味方じゃなくっちゃなぁ

ビィィィィィ……
２ストロークエンジンの甲高い排気音が響く。
「はぁ……」
「なんだよ、そんな鬱陶しそうなため息ついて」
「こんな時間に学生が外出、原付無免許運転に２人乗り、しかも片方はノンヘル。これもう絶対正義の味方のやる事じゃないわ……」
ため息をついて沈んだように言いつつも、さやかは杏子の運転する２サイクル・バーディー５０の荷台にまたがり、杏子の腹部に腕を回して捉まっていた。
「そうでもないぜ？　正義のヒーローのやってる事なんて、わりと法律なんかサクッと無視してるもんさ」
タバコのようにキャンディポップを咥えた杏子が、ニヤニヤと笑いながら言い返す。
「そう言う問題じゃなくてねぇ……」
「じゃあ、どんな問題だよ」
さやかは呆れたように言い返しかけるが、杏子はそれを聞いてキョトンとする。
「ああ、もういいからぶっ飛ばせ！」
「了ぉ解！」
杏子がアクセルを開くと、トルクの太い２ストロークエンジンがぐいと牽引力を上げ、バーディーは増速した。

そこは、見滝原市と滝元市の市境、滝原湖と呼ばれる湖の湖岸の一部に位置する丘陵地帯。
すぐ傍を、滝元市内を水源として滝原湖を経由し、最終的に神田川と合流し隅田川に流れ込む河を、滝原線のガーター鉄橋が越えているが、駅自体からは徒歩で来るには遠い位置にある。
それでも鉄橋のあたりには何人か、平日だというのに三脚を立てている人間がいて、それらの訪問者が乗ってきた軽自動車や自転車が、

すぐ傍の道路の路肩に停められていた。
「ちっ、いい大人どもが真昼間から」
杏子は、バーディーの前カゴから紙袋を抱え上げつつ、それを見て、忌々しげに呟くものの、
「あたしたち人の事言えないって」
と、さやかが手を振りながら苦笑して言う。
「まぁ、いいや、ついてこい」
そう言って杏子は、さやかを先導するように歩き始めた。
そこは、かつては綺麗に舗装されていたが、現在は自然の反逆により、路面はタンポポやヒメジオン、ハルジオンによってめくり上げられたアスファルトの亀裂に、更にヒシバやエノコログサが息吹き、路肩の樹が枝を伸ばして、空から路面を覆っていた。
「アンタ今、何考えてるか当ててみようか？」
スタスタと先に進む杏子が、顔だけ振り返ってそう言った。
「な、なによ……」
『こんな身体にされちゃって、どんな顔してアイツに会えばいいのかな』
「！」
それまで順調に杏子についてきていた、さやかの脚が、ぴたりと止まった。
「図星だろ」
杏子は、今度は身体ごと振り返って、ニヤリと唇を吊り上げた。
「……」
「アンタさ、後悔してんだろ？」
僅かに沈黙をおいた後、杏子は再び前に向き直って、歩みを再開しつつ、
「こんな身体にされちゃったこと」
と、さやかに問いかけてきた。
「……後悔してるけど、言うほど悲観もしてない」
さやかは俯きがちに低い声で言う
「へぇ」

杏子は、意外そうな声を上げて、ちらりと背後のさやかを見た。
「正直なところを言うとね、アタシも、まーいいかって思ってるんだ」
杏子はそう言いながら、抱えていた紙袋から、真っ赤なリンゴをひとつ取り出し、丸ごと、皮のついたままかじりつく。
「なんだかんだでこの力で好き勝手できてる訳だしね」
「……自業自得でしょ、アンタのは」
さやかは、呆れたように、やや芝居がかってため息をつきながら、そう言った。
「そうさ、自業自得にしちゃえばいいんだよ。自分の為に生きてれば全部自分のせいだ。他人を恨む事もないし、後悔なんてあるわけがない――」
杏子は、そう言いつつも、行儀悪くリンゴをかじり続けていた。
「そう思えば、大抵のことは背負えるもんさ」
やがて、道の先に樹の枝が拓けた。眩しい光の先に、白い洋館が建っている。一定の様式に則って建てられたそれは――
「教……会……？」
尖塔に金の十字架を持つ、そこそこ以上には立派なそれは、しかし、すでに使われなくなり無人になってからしばらく以上の年月が経過していた。壁は綻び、蔦が這い回り、ガラスの何枚かは割れていた。
杏子はその正面の扉を、バンッ、と、無造作に蹴飛ばして開ける。
「こんなところに連れてきて、何なのよ」
杏子に続いて教会の礼拝堂に入ったさやかは、あたりをキョロキョロと見回すようにしながら、そう訊ねた。
すると、答えより先に、ヒュッ、と、リンゴがひとつ、飛んできた。
「！」
「食うかい？」
杏子は、珍しくニュートラルな表情をさやかに向けながら、さやかにそう訊ねた。
「いらない……」
さやかはそう言って、リンゴを礼拝堂の机の上に置いた。
「そうか」

杏子はあっさりとそう言ってから、手振りで礼拝堂の壇を指した。
「……ここはね、あたしの親父の教会だった」
杏子は一方的に、身の上話をし始めた。
さやかはそれに、口を挟まないでいた。

正直すぎて、優しすぎる人だった。
新聞を読むたび、涙浮かべて、どうして世の中が良くならないのか、真剣に悩んでるような人でさ。
新しい時代を救うには、新しい信仰が必要だって、それが親父の言い分で……
ある時親父は、教義にないことまで信者に説教するようになった。
……当然、信者の足はばったり途絶え、本部からも破門された。
アタシ達一家は食うにも事欠く有様になっちまった。
親父は間違った事なんて言ってなかった。
だけど、誰も真面目に取り合ってくれなかった。
……悔しかった。
誰もあの人の事を解かってくれないのが、アタシには我慢できなかった。

「――――だから、ＳＱに頼んだんだ」
みんなが親父の話を、真面目に聞いてくれますようにって。

次の日から、怖いくらいの勢いで信者は増えたさ。
そしてあたしは、晴れて魔法少女の仲間入り。
……バカみたいに意気込んでたよ。
親父の説法とアタシの魔獣退治、表と裏からこの世界を救うんだって……
でもね、ある時、カラクリがバレた。
信者が魔法の力で集まったって知った時、親父はブチ切れたよ。
アタシの事を人の心を惑わす魔女だって罵った。
それで、親父は壊れちまった。

酒に溺れて、頭がイカれて。
最後は家族で無理心中さ。
もちろん、最初にアタシが刺されたさ。
この魔女！　って……
娘じゃない、親父にはアタシが本当に邪悪な何かに見えてたんだ。
でも、もうアンタには言うまでもなく。
アタシは死ねない身体だったからね。

「かろうじておチビ……妹だけが助かった。ＳＱが通報してくれたおかげでな。もっともアタシは死んだことになってるし、妹は母方の爺さんの家に預けられちまったから、会うこともねーんだけど……結局――」
杏子はいつしか演壇の上で神父のように直立していた。
「あたしの祈りが、家族を壊しちまったんだ」
「……」
さやかは無表情で沈黙を続けている。
「他人の都合を知りもせず、勝手な願い事をしたせいで、結局誰もが不幸になった。だから心に誓ったんだ。二度と他人の為に魔法は使わないってね」
言いながら、杏子は紙袋から新しいリンゴを取り出す。
「奇跡ってのはタダじゃない。希望を祈った分だけ同等の絶望が撒き散らされる。そうやって差し引きゼロにして世の中は成り立ってんだよ」
杏子はそう言って、取り出したリンゴを、再度さやかに差し出した。
「アンタもアタシも同じ間違いから始まった。アンタはこれ以上後悔するような生き方をするべきじゃない。対価としては高すぎるモンを支払っちまったんだ。これからはつり銭を取り戻すことを考えなよ」
「……あたし」
そう言って微笑む杏子に対して、さやかはようやく口を開いた。
「アンタのこと勘違いしてたわ。その事はごめん、謝るよ」

さやかの神妙な声に、杏子は意外そうに目を円くした。
「でもね――」
キョトンとする杏子の前で、さやかは更に続ける。
「言ったよね？　後悔はしているけど、言うほど悲観もしてないって」
「！　……なんで、アンタは……」
杏子はむっとしたようにさやかを睨む。
だが、さやかは動じもせず、穏やかに落ち着いたまま言う。
「確かに勝手な願い事だよ、あたしのも。でも、アンタのと一緒にしないで」
「なんだと？」
さやかの切り返しに、杏子は表情を険しくし、噛み付くような声を出す。
意外な切り返しに、杏子は目をぱちくりとさせた。
「アンタの願いで、実際に動かされたのは、本当なら、アンタやお父さんとは関係のない人間じゃないか」
「え……」
それまで、噛み付こうとする狂犬のようだった杏子の顔色が、急に変わる。
「アンタの願いってのは、自分たちに関係のない誰かに、何かを強いる願いだったんだよ」
「……」
強気に出るさやかの口調に対して、杏子は顔色を無くす。
「アンタにはきつい事を言うかもしれないけど、アンタの不幸はその反動だよ。願いをかなえたからじゃない、願いそのものに問題があったんだ」
「テメェ！」
さやかが畳み掛けると、杏子は、逆上して顔を紅潮させ、声を荒げて身構える。
「いいよ、やりあう？　あたしを殺せばそれで満足？」
さやかは杏子と正対しつつも、まだソウルジェムを取り出そうともしていない。

「そうやって他人に不幸を振り撒き続けるのが望みなら、いつでも相手になるよ。あたしは負けないし、もう恨んだりもしない」
「っ……」
杏子は身構えたまま、その姿勢で固まる。
「今、サッきゅんは多分マミさんのところで説明してると思うから。次に聞いてごらん。見方、変わると思うよ」
さやかはそう言って、踵を返しかけた。
「今の、あたしの願いはね」
さやかは、扉のところまで行き着いたとき、顔は向けずに、
「誰にも恥ずかしくない〝正義の味方〟になることだから」
と、言い残して、教会を出て行った。

翌日
「はっ」
今日は昨日と一転、目覚ましより早く目が覚めた。
今までの日常が、やたらと新鮮に思えた。
家族との朝食。
登校、行ってきますの挨拶。
登校路の交差点。
……。
「なんだろう」
旧くからの住宅街からと新興住宅地からとの登校路が合流するそこで、今日もさやかは無意識に脚を止めていた。
そして、その理由がわからず、腕を組んで首をかしげる。
「だんだん強くなってくる……この感じ、一体なんなんだろう……」
小さくだが口に出して呟いてから、さやかは首を左右に傾げつつ歩行を再開した。
そして、いつものように友人で同級生の後姿を見つけて、
「おーい、仁美ー」
と、手を振りながら声をかけた。
「あら、さやかさん」

志筑仁美が振り返り、カバンでスカートの前を隠すような姿勢のまま、ゆっくりと会釈をした。
「さやかさん、昨日はどうしたんですの？」
「んー、ちょっと風邪っぽくてねー」
さやかの方も、いつものように、カバンを手に提げたまま両腕を頭の後ろに組んだ姿勢で、そう言った。
「まぁ、大丈夫なんですか？」
仁美は、俄かに心配気になって聞き返した。
「平気平気。大事をとっただけだから」
「それならいいですけれど……」
さやかはへらへらと笑いながら言い、仁美はそれに対して少し困惑気に応えた。
見滝原中学の生徒の姿で雑然としている遊歩道を、2人もまたその流れに乗って歩いていく。
「さぁて、今日も張りきってーいきまっしょい」
さやかがそんな風に気合を入れていると、
「あら？」
と、仁美が何かに気付いた。
その視線の先に、男子生徒が何人か集まっている。
そして、その中心にいたのは――
「上条くん、退院なさったんですの？」
――上条恭介が、松葉杖を着きつつも、制服を来て、後者へと向かう姿だった。
恭介も、もともとはさやかや仁美と同じ2年1組の生徒だった。
数週間かぶりに退院して、登校してきた恭介は、まるで転校生かのような扱いで、取り巻かれていた。
「さやかさんも行ってこられたらどうですか？」
仁美はにこやかに微笑んでそう提案したのだが、
「あたしは……いいよ……」
と、さやかはどこかはにかむような表情で、そう言った。
「……」

そのさやかの様子を見て、仁美は目を細め、何事か逡巡し始めた。

放課後――――

さやかは仁美に呼び出され、いつものショッピングセンター内のファーストフード店にやってきていた。

「お待たせー」

自分のメニューを運んできたさやかは、先に席についていた仁美に、明るく声をかける。

「それで仁美、話ってなに？」

さやかはいつもの調子で、特に無理して装っているわけでもなく、明るい口調で訊ねる。

だが、訊かれたほうの仁美の表情は、いつになく真剣で、真摯な瞳をしていた。

「前から、さやかさんに、秘密にしてきたことがあるんですの」

「へ？」

仁美にそう切り出されて、さやかは短く、間の抜けた声を出してしまう。

仁美は構わずというか、静かな声ながらもはっきりとさやかに聞こえるように、その言葉を告げる。

「私、ずっと前から――上条恭介くんのことをお慕いしてましたのよ」

ほんの一瞬だったが、さやかの中で時間が止まった。

「……そ」

優に5秒は要してから、ようやくさやかは搾り出すように声を出す。

「そーなんだぁ！　あはは、恭介のヤツも隅に置けないなー」

無理に取り繕うようにして、笑い飛ばすようにそう言った。

「さやかさんは、上条くんとは幼馴染でしたわね？」

「ん～、まぁ、腐れ縁っていうか、なんていうか……」

仁美は真摯に訊ねてくるが、さやかはおどけたように答えてしまう。

だが、仁美は、さやかを正面に見据えて、強烈な視線を向け、

「本当にそれだけ？」
と、さらに問い質す。
さやかは空気のかみ合っていないような感触に、おちゃらけた声を留めてしまう。
「私――」
僅かに沈黙をおいて、仁美のほうから切り出した。
「もう自分に嘘はつかないって決めたんですの」
仁美も、内心落ち着ききれてはいないのか、そう言いながら身体の前で軽く組んだ両手の指を軽く動かしている。
「さやかさん、あなたはどうですか？　本当の気持ちと向き合えますか？」
「な、何の話をしてるのさ……」
さやかはそう聞き返した。いや、解かってはいた。いる筈だった。だが、頭がそれを認識することを拒んでいた。
「さやかさん――あなたは大切なお友達ですわ。私は抜け駆けも、横取りするような事もしたくありません。ですから、1日だけお待ちしようと思いますの」
「1日……って？」
さやかは、反芻するように聞き返した。
すると、仁美の視線が、険しいものではなく、しかし鋭さを増す。
「私、明日の放課後に上条くんに告白します。それまでに後悔なさらないよう決めてください。上条くんに気持ちを伝えるべきかどうか」
「……」
さやかは言葉を失い、酸欠の金魚のように口をパクパクとさせていた。
「それでは、今日はこれで失礼いたしますわ」
そう丁寧に挨拶して、仁美は先に席を立った。

駅近くのマンション、巴邸。
「ふぅ……」
見滝原中学の制服に、首に黒いチョーカーをつけた姿のマミが、帰

宅する。
窓の外で電車のタイフォンの音が聞こえ、ツリ駆けモーターの音が響いてくる。
ピンポーン
カバンを下ろしたマミが、紅茶を入れようと、ティーポットを一口のガスコンロにかけようとした時、インターホンが鳴らされた。
マミはコンロに火をつけるのは一旦後回しにして、インターホンの受話器を上げた。
「はい、どちら様でしょう？」
『ぐすっ、マミさぁん……』
受話器から聞こえてきたのは、泣きはらした声だった。
「美樹さん？　どうしたんですか？　あ、今開けますから」
マミは一旦聞いてしまってから、受話器を戻し、慌てて玄関に向かう。ドアの鍵を外し、扉を開けた。
「マミさぁん」
「美樹さん……」
さやかは扉の前で立ち尽くすようにしていたが、マミが扉を開くと、押し返す勢いでマミに抱きついてきた。
「ごめんなさい、ごめんなさぁい……」
「美樹さん……」
自分に向かって謝罪の言葉を繰り返すさやかの意図が、一体なんなのか、マミには理解できなかったが、たださやかを抱きとめると、穏やかな顔で目を細め、
「なにか、辛いことがあったのね」
と、囁くように、しかしやさしげに言った。
マミに抱きついたままのさやかは、こくこく、とすすり泣いたまま頷いた。
陽がすっかりと沈み、空は藍色に染まる。
登校していった女子中学生が、連絡も無しに帰ってこないにしては遅い時間になった頃。

トゥルルルルル……トゥルルルルルル……
『はい、もしもし、上条ですが』
その豪邸の中で、電話をとったのは、家人か、それとも使用人か、女性の声だった。
『はい、少々お待ちください』
そう伝えられて、受話器は少年の手に渡った。
「もしもし、お電話代わりました」
バイオリン練習用の防音室の中。休憩用のソファに腰を下ろしていた恭介は、コードレスホンの子機を受け取ると、まずは形式的にそう言った。
「あ、さやかのおばさん」
恭介は、相手が幼馴染みの母親と、伝えられてはいたが、直接声を聞いて、改めてそう口に出した。
「え？　さやか、まだ帰ってないんですか？」
恭介は軽く驚いて、壁にかけられている、シンプルな円い時計を見た。
スィープセコンドのセイコー製時計は、すでに午後8時近くを指していた。
「いえ。うちには来ていません……僕にも何も。はい、すみません」
電話口の向こうで、さやかの母が『お手間取らせてごめんなさいね』と申し訳なさそうに言いながら、電話は切れた。
『ツーッ、ツーッ』という発信音をわずかに聞いてから、恭介はコードレス子機の切断ボタンを押した。
「さやか……」
恭介は、音の途絶えたコードレス子機に視線を向けつつ、そう呟いた。
『ツーッ、ツーッ、ツーッ、ツーッ……』
「あら……通話中？」
結局、泣き崩れたさやかは、泣き疲れたのか、一旦そのまま眠りこけてしまっていた。

さやかはカバンを持ったままなので、一度家に帰ったわけではないようだった。時間も時間なので、と、マミは一度美樹家に電話をかけてみた。
だが、結果は話し中。
「仕方ない、もう少しおいてからかけなおしてみましょうか」
そう言って、受話器を留守番電話機の本体に戻す。
「それで――」
マミは視線を、ベッドの縁に腰掛けたさやかに、見上げるようにして向ける。
「話、聞かせてもらえるわね？」
俯き、塞ぎこんだ様子のさやかだったが、マミの問いかけに、ゆっくりと頷いた。
「マミさん、……あたし……」
「うん」
先ほど散々泣きはらしたはずなのに、さやかはまたぐすりぐすりと泣き声を上げ始めてしまう。
マミはそんなさやかに向かって、優しげな笑みを向けている。
「あたし……正義の味方……失格です……」
「なにが……あったの？」
さやかの吐露に、マミも少しだけ困惑したようにしつつ、やんわりと問い質す。
「今日、後悔しそうになったんです。あの時――仁美を、あの、同級生なんですけど……その子、助けなければって、思っちゃった……」
さやかの言葉を聞いて、マミは一瞬軽く驚いて、目を円くした。
「美樹さんが……どうして？」
マミは、意外そうな表情と口調で、さらに聞き返す。
「あたしっ、願い事で手を治した男の子……ひぐっ……その仁美って子も好きで、明日告白するって……あたしより美人で、優しくって……その子に、とられちゃう……」
さやかは、しゃくりあげ、その度に言葉を途切れ途切れにしながら、言う。

「でも……あたし、なんにもできない……サッきゅんがいくら説明してくれても、もう……生身の人間とは違うんだもん……こんな身体で抱きしめてなんて言えない、キスしてなんて言えない……」
マミは、それまでさやかがしゃくりあげながらいう言葉を優しげに微笑みながら聞いていたが、それが一段落したと判断すると、
「ちょっとだけ、厳しいことを言うことになるけど」
と、そう言って、俄かに険しい表情になった。
「私もサッきゅんも、確認したわよね？」
『貴方は、その人の願いを叶えたいの？　それとも夢を叶えた恩人になりたいの？』
『キミ自身がそれを望むのか、キミがあの子の願いを代行したいのか、それだけはハッキリさせておいて欲しい』
さやかの頭の中に、２人のその言葉がリフレインする。
「……あたし……」
さやかは言い篭る。
「佐倉さんの言う通り、とまでは言わないけど、もしそれで後悔してるのなら、その彼に全部打ち明けるべきだわ。貴方の手は私のおかげで直ったんです、私は貴方の恩人です、って、押し付けちゃえば良い」
「マミさん……？」
「自分1人で抱えようとしたら、いつか潰れる。私自身もずっと苦しんできたことよ。そして、私は美樹さんに助けてもらった。だから私は、美樹さんに同じ思いをして欲しくないの」
「そんな……あたし……マミさんにそんなこと言ってもらえる立場なんか、じゃ……」
いつしか涙は止まっていたが、さやかはなおマミを直視できず、腫れぼったい顔を俯かせている。
「でも、そんな事、言ったって、信じてもらえ、なんか……」
中学生はメルヘンにまだ淡い期待を抱きつつも、大半がその夢から醒めだす世代だ。魔法少女だ、その願いで手が治った、そんなことを彼に伝えたところで、信じてなどもらえないのは目に見えている。
すると、マミは優しげな表情になって、

「受け入れてもらえるかもらえないか、なんて、わりとどうでも良かったりするの。溜め込んでるものを吐きだすだけで、ずっと楽になるものよ」
と、言ってから、くすくすとその微笑を苦笑に変える。
「なんてね、本当は私が偉そうに言えた義理じゃないんだけど。私も美樹さんに出会って、初めて吐き出せたんだから」
「でも、あたしがそうしたら、マミさんは……」
さやかははっとして、顔を上げ、赤い目でマミを見る。
「私は大丈夫。願いは全部かなったから」
「全部……？」
さやかは反射的に聞き返す。
「死にたくない、生きたいって願って、それが叶った。1人ぼっちがいやだって思ったら、美樹さんが現れてくれた。だから、私はこれ以上望まなくても、戦っていける」
「マミさん……」
穏やかな表情で言うマミを見て、さやかは自分も心が落ち着いていくのを感じていた。
マミは口元で微笑みつつ、しっかりとさやかに視線を向けた。
「美樹さんは、どうするの……？」
「あたし、は――――」

翌日。
仁美が登校すると、まだ教室にさやかの姿はなかった。
「……さやかさん……」
複雑な心境で呟き、軽くため息をつく。
「あ、ああ、志筑さん」
かけられた声に、仁美はドキリ、と背を跳ねさせた。
「あ、な、なんでしょう、上条くん？」
仁美は恭介を振り返って、微笑みを取り繕い、聞き返した。
「さやかのこと、何か知らない？　昨日、家に帰ってないらしいんだ」
「え？」

思いもよらない恭介の発言に、仁美は短く声を発して、絶句する。
「すみません、私もなにも聞いてはいません……」
「そっか……」
仁美の答えに、恭介は気落ちしたように肩を落とす。
「上条くん……」
仁美は、恭介と、さやかの席と、交互に視線を向けながら、心配そうな表情をする。
すると、その時、
「おっはよーさーん」
と、教室の後ろの扉から、さやかの明るい声が聞こえてきた。
「あ……」
「さやか！」
仁美が声を出しかけたとき、それの先を越す形で、恭介が身体の向きを変え、松葉杖をついて、自分の席に向かうさやかの元に寄っていった。
「あ？　おはよ恭介」
さやかは、あっけらかんとした表情で、恭介に挨拶をする。
「さやか、何か僕に隠してることない？」
「恭介に？」
恭介に訊ねられて、さやかはキョトン、とする。
「昨日、家に帰ってなかったって」
「え!?　なんで知ってるの？」
恭介に問い質されて、逆にさやかは驚いて聞き返してしまう。
「さやかの家から電話があって」
「ウチから？　おっかしいなー、ちゃんと連絡入れてもらったんだけど……電話がすれ違っちゃったのかな」
さやかは一瞬眉をひそめ、それから決まり悪そうに、呟くようにそう言ってから、
「昨日はちょっと、急に3年の先輩の家に泊まることになっちゃって」
と、申し訳なさそうに苦笑しながらに答えた。
「その話……本当なんだね？」

「え？」
恭介がさらにつっこんできたので、さやかは再びキョトン、としてしまう。
「なんで恭介が疑ってるのか知らないけど……3年の巴マミって先輩の家。なんだったら証言してもらおうか？」
言いながら、さやかは携帯電話を取り出し、フリップを開くと、メモリダイヤルからマミのアドレスを呼び出そうとした。
「べ、別にそこまでしなくて良いよ」
恭介は慌てて、さやかの行為を遮る。
「そう？」
言いつつ、さやかは携帯電話を畳んでしまいなおした。、
「――――マミさんは、あたしと一緒に、いてくれますか？」
「え？　……そうね、もう知らない仲でもなんでもないんだし、美樹さんが必要としているのなら、いつでも助けに行ってあげるわ」
マミは、一瞬呆気にとられつつも、そう答えた。
「だったら……」
さやかは泣きはらしたままの顔で、ゆっくりと立ち上がり、
「だったら、あたしには、それで充分です」
と、格好つけて腕を腰ダメにするポーズをとり、そう言った。
「美樹さん……？　いいの？」
「はい」
まだ目尻に涙を残しつつも、満面の笑顔になってそう言った。
「あたしの今の願いは、〝正義の味方になること〟ですから」

「あ、それより恭介」
さやかは、携帯電話をしまい終えると、はっと思い出したようにして、ニヤッと笑って切り出した。
「今日の放課後、サプライズがあるから、期待してた方が良いよー？」
「サプライズ？」
「そう、サプライズ」

さやかは、にんまりと笑いながらそう言うと、ちらりと視線を仁美に向ける。
どきりとしたように反応を返す仁美に、さやかは微笑んでウィンクしてみせた。
「さやか、それだけ？」
「え？」
さやかが、昨日の出来事をリフレインさせつつ、机にその中身をうつそうと、机の上に置いたカバンを開けると、恭介は尚も問い質してきた。
「それだけって……他に何かあるの？」
さやかは、呆気にとられたようにして聞き返した。
「……いや、別に深い意味があるわけじゃないんだ、それなら、それで」
恭介は、かえって気まずさを感じ、誤魔化すように苦笑してそう言った。
「変な恭介」
そう言って苦笑するさやかの様子は、恭介がよく知っている、明るくてどこにでもいそうな女の子だった。
しかし――――
なんだろう、この、違和感は……
恭介は、なにか見えない糸が絡み付いてくるような感触をおぼえていた。

放課後――――
見滝原中学の目の前にある市民公園。
花壇のあるテラスの前で、仁美が時折時計を見たりしながら、そわそわとしている。
それを遠目で見ていると、やがてそこへ、恭介が松葉杖を突きながらやってくるのが見えた。
「お待ちしておりましたわ」
「えっ？」

恭介の方は、元々、たまたま通りかかった形だった。そこへ、仁美が声をかける。
「えっと……志筑さん？」
「上条くん……」
仁美は、恭介と向き合うと、その顔に真摯な瞳を向けつつ、口元に笑みを浮かべて、切り出す。
「私は、貴方の事をお慕いしてまいりました。よろしければ、私とお付き合いいただけませんでしょうか？」
はっきりと声に出し、口篭ることなく、澱みなくそう言った。
「志筑さんが――――」
恭介は、唐突な出来事に、いささか面食らった。
そうか、サプライズって、こういうこと……
恭介はそう思いつつ、目の前で自分を見据えつつ、たおやかに微笑んでいる少女の姿を、一瞥する。
やがて、恭介は、仁美の手に、そっと自分の手を添えた。
一方。
「本当に、キミはこれで良いんだね？」
サッきゅんが心配気に聞いてくる。
「うん」
さやかは、振り返り、サッきゅんと、彼女を肩に乗せたマミに向かって、満面の笑顔で頷いた。
「それじゃあ今日も正義の味方の活動、行ってみましょーかー！」
さやかは腕を振り上げながら、そう言って歩き出す。
「大丈夫かなぁ」
「空元気も元気、よ」
なお心配気なサッきゅんに対し、マミは微笑ましそうにさやかを見ながらそう言った。
約2時間後。
「くっ、ふぅっ」
さやかは1人で、銀食器が節足動物に変形したような姿を持つ魔獣と戦っていた。

マミはこの魔獣と同じ〝呪い〟が生み出した、〝中身のない〟魔獣を討ちに行っている。
近くに〝呪い〟本体があると解かっていたのと、複数の同種の魔獣が現れたのとで、マミがそれを撃ち、さやかは捜索を続ける、という流れになったのだが、そうしたらまもなく、さやかが〝当たり〟を引いてしまったのだ。
性質に銀とニッケルの合金を取り込んでいるせいか、さやかの剣が通りにくい。キン、キンと高い音を立てて、魔獣の腕と剣とが、弾きあう。
「!?」
さやかが一瞬、構え直そうと体勢を立て直しかけたとき、
ズシャッ
無数の銀の針が魔獣の胸部から伸びて、さやかの身体を無数に刺し貫いた。
「くっ……」
一度、さやかの身体が動きを止め、くたりと力が抜け、突き刺さった針の群れにぶら下がる。
だが――――
「あはは……なるほどねぇ」
さやかの身体に力が戻ってきたかと思うと、右肩近くを貫いた針を、その右手で掴み取った。
「その気になれば痛みなんて、完全に消しちゃえるんだ……」
さやかが言いつつ、左手にもう1本、剣を生み出そうとしたとき。
バキィンッ！
さやかを貫いていた針のことごとくが、その目前で切断された。切断面から先は、ボロボロと崩れさっていく。
「……なにしてんだよ、アンタは」
槍を構えた紅い魔法少女が、さやかの傍らで、呟くようにいった。
「なによ、こんなヤツ。あたし1人で充分なんだから！」
「そんなボロボロになって言ってんじゃねーよ。この身体でも、耐えられるダメージにゃ限度があんだぞ？」

佐倉杏子は、さやかより前に出て、槍で魔獣の攻撃をいなしつつ、少し忌々しげな表情でそう言った。
「アンタみたいなやつに助けられたくないのよ」
「まだそんな事言ってンのかよ、青臭いツラしやがって」
杏子は、口にスティックビスケットを咥えつつ、一瞬振り返って言う。
「けど、良いツラだ」
そう言って、ニヤリと口の端を吊り上げた。
「え？」
さやかは一瞬、目を円くする。
流石の杏子も、目の前の魔獣の攻撃からずっと視線を逸らしたままにはしていられず、すぐに正面に向き合い直し、険しい表情になる。
「悪い夢から醒めたって言ってんだよ」
さやかを襲ったのと同じ針攻撃が来る。
「自業自得なら、せめてテメェで帳尻合わせるのがケジメってモンだし、それに――」
杏子の槍の柄が多節棍になり、針の束を縛り上げ、締め上げて砕く。
「それに、やっぱ魔法少女は、正義の味方じゃなくっちゃなぁ！」
杏子は歯を剥いて笑いつつ、針とすれ違いざまに跳躍すると、一瞬にして柄を元に戻し、その穂先で魔獣の頭部に切りつけた。
「アンタ……」
さやかは呆然と立ち尽くす。
「ボロボロのやつはすっこんで、ここはアタシに任せなって」
杏子は銀の魔獣の腕を槍でいなしながら、言う。
「冗談、あたしの基本能力がなんだかは知ってんでしょ？」
そう言ったさやかの姿は、まだ衣装は完全に復元していないものの、身体の傷はすでに消えかけている。
「上等！」
杏子は、魔獣と鬩ぎあいながらも楽しそうに言う。
「だったら、アタシが時間稼いでやっから、とっとと大技決めろよ」
「わぁーったわよ」

杏子の言葉に、さやかは口調ではかったるそうに言いつつも、にやりと笑ってマントを翻す。
翻ったマントの後ろ側に、無数の剣が現れ、その切っ先で魔獣に狙いをつける。
「行くわよ！　退いて」
「かまわねーよ、撃て！」
さやかの合図に、杏子は魔獣の頭を踏み台にして跳躍しながら、視線を一瞬さやかとあわせる。
「Ｔｉｒｏ　Ｆｉｎａｌｅ!!」
さやかが握っていた剣を魔獣に向けて振ると、浮かんだ剣は次々と、青い光の矢になって、魔獣に向かって迸る。
最初のうちはぶつかって弾けただけだったが、やがて魔獣の銀の表面にひびが入り、さらにそこに、青い光の剣が突き刺さる。
表面の砕けた魔獣は、青い光の剣に貫かれて、全体が崩れ、消え去っていく。
それを確認しながら、杏子はさやかの隣に、すたんと降り立った。
お互い、ニュートラルな表情で顔を見合わせて、それから、同時ににまっと笑った。
「よっしゃーぁ」
パシン、とハイタッチがかわされた。
「ごめんなさーい、1匹逃げたのを追うのに手間取っちゃってー」
マミが、2人の背後から、そんな声をかけながら駆けてきた。
「おせーぞ、ったく！　自分の弟子の不始末ぐらい自分でつけろよな！」
杏子がマミに食って掛かる。
「別にアンタに助けてくれとは言ってないでしょー!?」
マミが申し訳なさそうな表情をしつつ、顔の左右で両手を広げながらたじたじとしていると、さやかがその間に割って入るように声を荒げた。
「だったらあんなみっともねー戦い方してんじゃねーよ、そろそろトーシロ卒業しろってんだ」

杏子は、今度はさやかに呆れたような表情を向ける。
「うっ、うっさいわね！　別にあのままでも何とかなったもん」
「あ？　なんだ先輩に向かってその口の利き方は」
「くすくす」
２人のやり取りを見ていたマミが、声を出して微笑む。
「なに笑ってんだよ」
杏子が、茶化されたのを怒ったかのようにマミに向かって声を上げる。
「まぁまぁ。今日は大物を回収できたし、他に反応も無いみたいだから。よければ私の家でお茶にでもしない？」
「いいんですか？」
マミの提案に、さやかが聞き返す。
「ええ」
マミは、さやかにそう答えてから、杏子のほうに視線を向ける。
「貴方も来るでしょ？　佐倉さん」
「マミが人を家に誘うって事は、なんかお菓子用意してあるってことだな？」
杏子が、確信したように、拳を握り締めて問い質す。
「ワンパターンのタルトでよければ」
「よっしゃ行く」
「アンタ行動パターンがわっかりやすいわねー」
杏子の返答に、さやかは呆れたような言葉を出した。

第８話：出会えてよかったと思うよ

上条家。

バイオリン練習用の防音室。恭介の左腕の上で、弦の上を、弓が滑るように走っていく。バイオリンは滑らかな音色を、美しい旋律として奏でていく。

――――すると。

ティローン、ティローン

それを遮るにはあまりに無粋な電子音が、演奏に没頭していた恭介を我に返らせた。

一度バイオリンを下ろすと、小さなテーブルの上に置いてあった、黒のＤｏＣｏＭｏ・Ｐａｎａｓｏｎｉｃ　Ｐ―０１Ｃに手を伸ばす。

メールの着信が入っていた。

フリップを開いて確認すると、仁美からのメールが１通。

「くすっ」

その、中学生の少女らしい、他愛もない内容のメールに、恭介は声を漏らして微笑みつつ、返信を打ち込み始めた。

それを送信し終えたところで、恭介はふと思い出すように考える。

そう言えば、まだ、退院してから、さやかとじっくり話してないな……

そう思った恭介は、メモリダイヤルから〝美樹さやか〟のアドレスを呼び出す。

入院中は酷いこともしてしまったし、それに……昨日の事も気になるし。

心の中で言い訳めいた言葉を紡ぎながら、恭介は通話ボタンを押した。

トゥルルルルル……と、呼び出し音が鳴る。

沈黙が支配する、光を吸い込む黒い霧の中で――――

突然、電子音が『微熱Ｓ．Ｏ．Ｓ!!』のサビ部分の着メロを奏で始めた。

静寂を切り裂かれ、その音の中心にいたさやかは、ゆっくりと歩いていた姿勢からビクッと背筋をはねさせる。
「いけね、着信音切っとくの忘れてた」
視界の届く範囲には自分しかいないにも関わらず、さやかは、気まずさを感じて、声に出して誤魔化すようにそう呟いた。慌しくスカートのポケットに手を入れ、ピンクのＡＵ・日立ｂｅｓｋｅｙを取り出し、そのフリップを開いた。
「恭介……？」
ディスプレイに表示された発信元の情報を見て、さやかは、一瞬キョトンとしてそれを凝視してしまう。
浅く息を飲むようにしてから、通話ボタンを押そうと指を伸ばして

『いたぞ！　信号の１本手前の路地だ』
杏子の発したテレパシーが、頭に響いてきた。
さやかは、まだ着信音を鳴らし続ける携帯電話のフリップを折りたたみ、
「ごめん恭介、また後で」
と、そう呟きつつ、軽く後ろ髪引かれる様にしながら、それをポケットにねじ込む。それから、右手の指に嵌っているソウルジェムの指輪を本来の姿に戻すと、その発する光を身に纏いながら、その場から駆け出した。
魔法少女の装束姿になったさやかは、澄み切った青の閃光のように、黒い闇を切り裂いて、水平に跳躍するように駆け出した。
ビュビュビュビュッ
目の前にいる魔獣の、その身体の前に、無数の、シャープペンシルを模ったモノが現れたかと思うと、それは弾丸となって、対峙する杏子に襲い掛かる。
「ちぃっ」
後ろにさがりつつ、右に転がるようにしてそれの大半をかわす。槍の柄の連結をはずして多節棍に変えつつ、軌道を微妙にカーブさせながら杏子を狙ってくるシャープペンシルを、すべて弾き返した。

「こりゃ相性悪いな……あいつら来ないとどうしようもないか？」
妙な線に姿を変えた、元は電柱だったそれに身を隠しつつ、顔だけ覗かせてその様子を伺う。
その魔獣は、日本の女子学生用としては古典的な、白と紺のセーラー服に身を包んでいた。
だが、その体形は明らかに男性のものであり、しかも――人間の数倍のスケールであることは別にしても――衣装がぱっつんと張るほどの巨躯だった。
顔はケインのついた、中世欧風の兜ですっぽりと隠し、虚ろに彷徨う両腕の、右手にはシャープペンシルが握られていた。
「!?」
杏子が、はっと、意識を己の周りに戻したとき、あたりを無数の、どす黒い光球が取り囲んでいることに気がついた。
「しまっ……」
杏子が己の失態に気付いたとき、黒い光を放つスフィアは、矢に姿を変えて杏子に襲い掛かろうとするところだった。
まずい、死んだか。
杏子がそう意識した、次の瞬間。
発射されるはずだった黒い光の槍に向かって、同じ数の黄金色の閃光が迸り、撃ち砕いていく。
「もっと早く来るべきだったかしら？」
近くにあった別の、2基の柱上トランスの乗った電柱の頂点に立ち、マミが微笑みながらそう言った。
「うっせ」
杏子は、照れ隠しに鼻の下を擦りつつ、マミを振り返って苦笑交じりにそう言ってから、槍を構えて、魔獣を正面に見据えるように、路地の中央に仁王立ちになる。
「行くぜ！　しっかり援護しろよ！」
「任せておいて」
杏子は、槍の穂先を下げて突進の大勢を作りながら言う。
杏子の言葉に、マミは、そう答えながら、左手、右手の順で、その

身体の横に弧を描くように手のひらを開いた状態でゆっくり振り下ろす。星屑のような光とともに、白銀の銃床をもつスナイドル銃が、無数に出現する。
「うらぁ！」
杏子が突進をかける。
魔獣は、黒い光のスフィアを生み出し、それを矢に変えて杏子めがけて迸らせる。
「Ｓｐａｒａｌｏ!!」
マミが手を前に振りかざしながら叫ぶ。空中に浮かぶ無数のスナイドルのサイドハンマーが叩かれ、銃口から黄金色の閃光が迸る。
黄金色の閃光の雨が、黒い光の矢を撃ち砕いていく。
杏子は、剣呑な雨が交錯する中を、魔獣めがけて突進していく。
「！」
杏子が眼前に迫ると、魔獣は今度は、シャープペンシルの槍を無数に生み出した。その穂先が、悉く杏子を睨んでいる。
「早々同じ手を食うかよ！」
杏子がそう言った瞬間には、槍の柄の連結が外れて、多節棍がシャープペンシルの槍を薙ぎ払う。
「行けっ」
杏子は、まるでそれが予定されていたかのように、シャープペンシルの槍を打ち払いながら、不敵に笑って、そう言った。
「はぁぁぁっ！」
杏子の背後からすり抜けるように現れたさやかが、その周囲に何本かの細身の剣を纏うようにしながら、青い光を身体に纏わせつつ、魔獣に向かって迫る。
魔獣は、さやかに迫られて、じりとわずかに交代する。だが、そこまでだった。
さやかが、右手に握っていた剣で、魔獣の身体を横一文字に薙ぎ払う。兜に覆われた、というより、兜そのものがそれであった首が跳ね飛ばされる。
魔獣はそれでも、腕を虚空にばたつかせてもがくように暴れていた

が、
「これで、とどめだぁっ」
と、さやかが、空中に出現させていた剣の1本を新たに手に取り、魔獣の胴を袈裟斬りにした。
青い光を纏った剣に斬り裂かれた魔獣は、ぐらりと姿勢を崩して倒れかけたかと思うと、そうなりきる前に、身体が塵のように崩壊して消滅して行った。
「よっしゃあ！」
さやかは、細い裏路地の、アスファルトの路面に着地すると、その場で腕を振り上げて勝ち鬨を上げる。
「おい、こら、最後においしいとこだけもってって、自分が主役みたいな顔すんな」
杏子は、連結させた槍を片手にゆるく持ちながら、さやかに近付いてきて、ため息混じりに、呆れたようにそう言った。
「えー、だってあたしがいなかったらとどめはさせなかったじゃん？」
さやかは、頭の後ろに両手を組みながら、そう言った。
「マミがいるだろ？　……いつものアレでよ」
杏子は、そう言ってしまってから、気恥ずかしそうに鼻先を赤らめつつ、ちらりとマミを振り返る。
「そうね、なんとかならないことはなかったかもしれないけど、佐倉さんを援護しながらだし大技は難しくはあったわね。かといって私1人じゃあ、照準（エイム）の時間を貰えたか疑問だし……さやかさんがいて、助かったんじゃないかしら？」
マミは、スナイドルの1丁を両手で抱えたまま、そう言いつつ、近付いてくる。
「ほーらみろー」
さやかが、どこか勝ち誇ったように、ニタニタと笑いながら杏子を見る。
「でも、さやかさんはあまり調子に乗って、油断に繋がらないようにね」
「うっ……」

苦笑気味のマミにそう言われて、途端にさやかが顔色を失う。
「へっ、怒られてやんの」
逆に、杏子がにやりと笑う。
「うっ、うるさいやい」
さやかが、杏子に向かって乱暴に声を上げた。
「へへっ、まだまだひよっ子なんだから、気ぃ抜かないようにしろよ」
杏子はそう言いつつ、
「よっ」
と、左足を上げた。
「って、アンタ!?」
「佐倉さん!?」
さやかとマミはそれを見てぎょっとする。
杏子の左脛を、黒い光の矢が貫いていた。「ジジッ」と音を立てながら消えかけているそれが穿った傷口から、足へ向かって血が滴っている。
「別に驚くほどのもんじゃねぇだろ、アタシらの身体、これぐらいはどうってことないんだし、出血が多いわけでもないしよ」
杏子自身は慌てた様子もなく、落ち着き払ってそう言った。
「そういう問題じゃないでしょ、そういうのは早く見せなさいよ」
さやかは、身を乗り出して、杏子の上げた足に手を伸ばそうとする。
「なんだよ、大丈夫だって、アタシでも、これぐらい」
「見てるこっちが痛々しいのよ」
杏子は面食らったような声を出すが、さやかは、構わずその場にしゃがみこんで、杏子の脚の傷に右手を近づける。
優しげな青い光が、さやかの手のひらから杏子の傷口に向かって流れていく。黒い光の矢は霧のように掻き消えて、傷口そのものも、最初からそれがなかったかのように消えた。
「これでよし……と。手間かけさせないでよね」
「う、うっさいな、別に頼んだわけじゃねーだろ」
やれやれといったようにため息混じりにいうさやかに対し、杏子は、顔を真っ赤にしながら、困惑交じりに荒い声を出すものの、

「け、ど、まぁ、変に傷跡とか残さないですんだし、ありがと、な」
と、急に視線を伏せがちにして、つけ加えるようにそう言った。
「まったく、素直じゃないんだから」
「ふふ」
さやかはふんぞり返るような態度をとる。
そんな2人を見て、マミは微笑ましげに笑い声を上げた。
「さ、とりあえずこの場は解散しましょうか」
マミが、そう言って微笑みながら、魔法少女の装束を解く。
辺りを覆っていた黒い霧はすでに晴れていたが、とうに陽は沈んでいて、商店街の表通りから零れてくる鮮やかな光だけがあたりを照らしていた。
「へーいへい」
杏子が適当に言いつつ、さやかともども、2人もマミに倣って衣装を元に戻した。
「と言っても、アンタは別に帰る場所一緒でしょ」
さやかは、杏子に向かって苦笑交じりにそう言った。
「なんだよ、来いって言ったのはマミの方だぞ」
杏子は、少し決まりが悪そうに言い返す。
杏子は今、1人暮らしのマミの家に転がり込んでいた。
「だって、佐倉さん、ほっとくとホテルに不正宿泊したり、危ない場所で野宿したりするんだもの……ほっとけないでしょ？」
マミは、軽く短いため息をついて、苦笑しながらそう言った。
「アンタねぇ……」
さやかは、杏子にジト目を向けて、呆れきったように言う。
「なんだよ、しょーがねーだろ、アタシの家はあんなだし、他に行くトコなんてねーんだからよ」
「あっ……」
決まり悪そうに、顔を赤らめながら言う杏子の言葉を聞いて、さやかは、はっと口元を押さえる。
「ごめん……あたし、また考えなしな事言っちゃって」
「いや、構わないさ。褒められたことじゃねぇのは解ってるしな」

杏子はさらりとした感じでそう言った。
「さやかさんも来る？　まだそれほど遅い時間でもないし、夕飯ぐらい一緒にしてもいいでしょう？」
マミは、口元で穏やかに笑いながら、さやかを見つめてそう提案した。
「いいんですか？」
さやかは、目を円くしてそう言うものの、口元は笑ってしまっている。
「ええ、人数が多い方が楽しいものね」
マミは、そう言ってニコッと満面の笑みになった。
「あっ、じゃあ、是非お願いします！」
さやかは軽く興奮気味に言う。
「ええ、喜んで」
マミは笑顔のままそう答えた。
「おい、早く行こうぜー」
杏子が、待ちきれないと言ったように、２人を振り返りつつも、早くも歩き出そうとしながら、そう言った。
「あ、待って」
マミが慌てて杏子を追い、さやかがそれに続く。
「あ、ウチに電話しとかないと」
さやかは、２人の後ろに続いて歩きつつ、スカートのポケットから携帯電話を取り出した。
「あ」
さやかは、フリップを開いてそのメインディスプレイを見たところで、その事を思い出す。
ディスプレイには『着信あり　１件』と表示されており、それを選択して決定ボタンを押すと、着信履歴の先頭に『恭介携帯』と表示された。
「そっか、さっき出られなかったんだっけ」
さやかは、前にいる２人にも聞こえない程度の声で呟いた。そのまま折り返し連絡しようと、発信ボタンを押そうとして、その直前で指

を止めた。
「……」
視線を上に向けて少し逡巡してから、別にキーを押してアドレス帳情報を呼び出し、メールに切り替える。
ティローン、ティローン
再び、バイオリンの音色を、電子音がさえぎった。
自らの演奏に割り込んできた無粋なそれに気がつくと、恭介は、再び演奏を止めて、携帯電話に手を伸ばした。
フリップを開くと、Eメール着信の表示が出ていたため、キーを押してその情報を表示させる。
「えっ」
恭介は、そのメールの本文を開いて、軽く驚いたような声を出した。
発信者は『美樹さやか』になっている。
『さっきは電話出られなくてごめん。でも、なにか困ったことがあるんなら、仁美に相談してあげなよ。その方が仁美、喜ぶよ』
さやかにしてみれば、やや思い込みはあるものの、善意のつもりでの提案だった。
だが、それを見た恭介は、軽く自失したように、しばし目を見開いていた。
「なんで……？」
恭介は、クモの巣にまとわりつかれているような、言いようのない中途半端な不快感を感じていた。

「行ってきまーす」
翌日。
美樹家の玄関を開き、さやかが背後に威勢良くそう言い残しながら、あわただしく出てくる。
「ふぁ……眠いなぁ……」
1人で登校路を進みつつ、不意に出た欠伸を手で抑えながら、さやかはそう呟いた。
「マミのところに長居しすぎだよ。ご両親が甘いからって、あんまり

遅いのは感心しないけどな」
　さやかの隣を、小動物姿のサッきゅんが、トコトコと４本足で歩きつつ、嗜めるようにそう言った。
「しょうがないじゃん、むにゅ、杏子のやつがもう１回もう１回ってしつこいからさ」
　さやかは、眠たげな表情で、口元を捏ねるようなしぐさをはさみつつ、そう言った。
　巴邸に置いてあったＮｉｎｔｅｎｄｏ　Ｗｉｉと、Ｗｉｉ版『太鼓の達人』を杏子が見つけたのがことの始まり。
　アーケードの、所謂音ゲーなら早々負けない程度の実力、と、自負していた杏子だったが、彼女が家庭用ゲーム機のＷｉｉコントローラーに慣れているはずもなく、結果さやかにもマミにも大惨敗。
　しかしそこは負けず嫌いな杏子のこと、再戦をせびっては２３時近くまで２人をつきあわせた挙句、
「ダンレボならぜってー負けねぇ！」
　と、捨て台詞を残しつつ、自分はダイニングのベンチベッドで不貞寝を始めてしまった。
「あいつ自分は早起きする必要ないからって、ふぁぁぁ……」
　杏子の行動に愚痴る間にも、さらに欠伸が出る。
　そしてふと、今日もその、信号もついていない小さな交差点でさやかの足が止まった。
「……」
「やっぱり、何か感じるのかい？」
　無言で、新興住宅地を覗き込むさやかに、サッきゅんが声をかけた。
「うん……なんだろうね？」
　さやかは、眠気のせいか、あまりはっきりとしない口調で、そう言った。
「さ、遅れちゃう、さっさと行こ」
　さやかは、自分に言い聞かせるように言うと、登校路を行く歩みを再開した。
　やがて、見滝原中学校正面の、公園の遊歩道までたどり着く。

「あ……」
その行く先に、遠目によく見知った後姿が見えた。
さやかは、一度歩みを止め、僅かにおいてから、明らかにそれまでよりゆっくりと、歩みを再開した。
「声……かけないの？」
傍らをトットッと歩くサッきゅんは、はるか前方に見える仁美の後姿を見て、視線は向けずにさやかに問いかけた。
「……うん」
さやかは、うつむきがちの姿勢で、躊躇うような口調でそう答えた。
「友達、やめちゃうの？」
サッきゅんは、トットッと歩きつつ、首をかしげるような仕種でさやかを見上げて、聞き返した。
「そんなつもりはないけど……今は、ちょっと……」
さやかは、俯いた姿勢のまま、言葉を詰まらせながらそう答える。
「そっか……」
「乙女心は複雑なの。アンタたちには、解からないかも知れないけどね」
さやかは、その場の微妙に重苦しい雰囲気を誤魔化すように、苦笑しながらそう言った。
「！　ひっどいなぁ、ボクたちは感情を持たないわけじゃないんだよ？」
サッきゅんが、ややおどけ混じりにしつつも、憤慨したように声を上げる。
「でも、へんてこな宇宙生物にそんな事言われても説得力無いって」
さやかは、歯を見せて苦笑しつつ、サッきゅんに視線を向けてそう言った。
「この身体は単なる生体端末。君たちとは多少形態は違うけど、文明を築くのに必要な肉体を持ってたんだよ」
サッきゅんはそこまで勢いよく言ってから、
「……もともとはね」
と、軽く自嘲するように、静かに付け加えた。

「その存在意義を喪ってはいるけれど、それでも、ネットワークの向こう側には誰かがいる。文明的な産業を基礎にした社会の形成において、個性（パーソナリティ）の交錯は不可避かつ必須の事象だよ」
　サッきゅんは、重々しい口調で吐露するように言う。が、その相手のさやかは、理解の範囲を超えてしまったらしく、目を円くして返答に困っていた。
「本来なら」
　より低い声で、サッきゅんはさらに言う。
「こんな、キミたちを耐久消費財扱いするような出会い方じゃなくて、ボクたちと地球文明と、友好的な出会いを果たしたかった」
　それを聞いて、さやかの表情が真剣なものに変わった。
「この広い宇宙の中でボクらもキミたちも孤独じゃないんだ、って。この星で『E．T．』って映画が公開されたときは、多くの仲間がその内容に泣いたよ」
「……」
　サッきゅんの言葉に、さやかは真剣な表情で少し逡巡した後、
「でも、あたしはサッきゅんと出会えてよかったと思うよ。凄く後悔したこともあるけど、それは自業自得ってところもあるんだし、結果的にはよかったんだと思える」
　と、ニコッと笑ってそう言った。
「……ありがとう、さやかにそう言ってもらえると多少は気が楽になるよ」
　サッきゅんも、まだ自嘲混じりながらも、そう言って笑った。
　さやかは、仁美とは接触しないまま、校門、昇降口を通り、階段を上がって、２年４組の教室へと向かった。
「おはよーっす」
「あ、さやか、おはよー」
　さやかが挨拶しながら教室に入ると、クラスメイトがそれに気づいて振り返り、挨拶を返す。さやかは、そのまま自分の席に向かうと、カバンを机に放り出しつつ、椅子を引いて座ろうとする。
「おはよう、さやか」

そう、よく知った声が背後からかけられたとき、さやかは心臓が飛び出るかと思うほどに驚いて、全身を跳ね上がらせた。
「って、なんだ、恭介か」
さやかはそう言って振り返る。本当は彼の声だから驚いたのだが、反射的な言葉はそれに触れない。
「さやか、昨日はどうしたの？」
「へ？」
恭介の言葉の意図が理解できず、さやかは目を円くする。
「電話かけた時出なかったし、それに……」
「ああ、うん、一昨日言ってた3年の先輩とちょっと遊んでて、それと――」
さやかは、そこまで言って、少し考えてから、
「他の学校のやつと」
と、そう言って、杏子のことについてははぐらかした。
「あんな時間まで？」
「いや、それがそのもう1人ってやつがさ、負けるたびにもう1回もう1回って言うもんだから、ついつい遅くなっちゃってさ」
怪訝そうに聞き返してくる恭介に対して、さやかは、後頭部を掻く仕種をしながら、苦笑してそう説明した。
実際には恭介の携帯電話から着信があったときにはそうではなかった、が、さやかは、誤魔化すのにこれ幸いと、杏子を出汁に使った。
「それならいいけど……あまり家の人に心配かけちゃだめだよ？」
恭介は心配そうな表情をして、さやかにそう言った。
「大丈夫、解かってるって」
さやかは、表面的にそう答えてから、急に表情を砕けさせる。
「そんなことより、いくら相手があたしだからって、他の女の子と話してると、仁美が妬いちゃうよ？　女の嫉妬は怖いんだから」
さやかは、そう言って、恭介を仁美のいる方に向かって、半ば突き飛ばすようにして押し出した。
「え、あ、うん」

恭介は、そう言って仁美のいる方に視線を向ける。
当の仁美は、自分の席に……ではなく、教室の廊下側の壁に寄りかかって、俯きがちにこちらを伺っていた。
恭介がそちらの方に立ち去った後で、さやかは、急に気が抜けたように、はぁ、とため息を吐き出し、それから、がっくりと頷いた。
「やっぱきっついなぁ～」
思わず、声に漏れる。
あたしの気持ちに、気づいてよ！
割り切ったはずなのに、いざ言葉を交わすと、心の片隅でそう悲鳴が上がった。
さやかは、無意識のうちに、苦しげに、右手で胸を押さえていた。
「ヒマだ……」
屋上。
授業が始まってしまうと、マミやさやかのところにいるわけにも行かず、サッきゅんは、屋上に設置されたベンチの上でちょん、と座っていることぐらいしかできない。
サッきゅんがヒマなのは、魔獣の気配もなく平穏ということで好ましいのだが、どうにも手持ち無沙汰でしょうがなかった。
「杏子の所にでも行ってみようかな」
サッきゅんがそう逡巡していると、キーンコーンカーンコーン、と、屋上の屋外スピーカーから、チャイムが鳴り響いた。
「そういえば、マミが持たせてくれたクッキーがあったっけ」
サッきゅんはその存在を思い出すものの、
「でも、別にボクたちは食べ物を必要としているわけじゃないからなぁ」
と、自嘲気味に呟く。
「あ、そっか」
さらに、ある事実に気がつくと、右耳にピアスでぶら下がるソウルジェムを点滅させた。
変身してこの星の人間の姿になれば、食物を採ることが可能になる。ただし、もともと経口による栄養補給を必須としない以上、嗜好

以外の意味はなかったが。
とは言え、さやかや杏子が絶賛するお菓子作りの腕前だし、サッきゅん自身も、マミを満足させることが主目的だったとは言え、何度か口にしたことはあるし、それに対して高い評価を持っていた。
早速とばかりに、魔法少女システムを濫用しかけたとき。
ガチャリ、と、校舎からの出入り口である鉄扉が開いた。
サッきゅんは、驚いて、変身を中止して、その場でびくんと前足を突っ張って硬直する。
その人物は、金網の内側にあるハシゴ型のフェンスに向かってまっすぐに歩き、正面からそれにもたれかかった。
「はぁ……」
複雑そうな表情で、深くため息をつく。
「こうなることは覚悟していたはずですのに……どうして今更……」
その人物は、しばらく重苦しそうに遠くを見つめていたが、
「あら？」
と、不意にベンチの方を見て、短く声を上げた。
「可愛らしい縫いぐるみ……どなたかの忘れ物でしょうか？」
「えっ？」
くすっと微笑みながら自分を覗き込んでくる相手の言葉を聞いて、思わず、サッきゅんは声に出していた。
「志筑仁美、キミにボクが見えるのかい？」
「まぁ、最近の玩具は対話もできるんですの？」
仁美は、いつもの世間知らずのお嬢様然とした様子でサッきゅんを覗き込みつつ、誰にともなくそう声に出したが、急に怪訝そうに眉を潜める。
「……どうして、私の名前を？」
「ボクは玩具じゃないよ。ボクはＳＱ。サッきゅんて呼ぶ人もいるね」
サッきゅんは、仁美に向かって向き直り、そう言った。
「ボクと契約して魔法少女にならないかい？　ボクは、魔獣と戦う運命を背負ってもらう代わりに、ひとつだけ、キミの願いをかなえる奇

跡を起こしてあげるよ」
「まぁ」
この時点でも、仁美にはサッきゅんが己の意思で会話しているとは感じていなかった。
魔法少女……テレビマンガのマスコットかなにかでしょうか？
仁美は、そのよくできた玩具、程度に思っていた。
「魅力的なお話ですけれど、私、今充分充実しておりますし、遠慮させていただきますわ」
仁美は、相手を玩具だと思いつつも、わざわざ言葉にしてそう言った。
「それでは、失礼させていただきますわね」
そう言って、仁美はその場を立ち去る。
本音では、目の前にある玩具を置き忘れた誰かに、今の自分を見られるのが嫌だからだった。
だが、背後にこんな言葉を聞いた。聞いてしまった。
「キミにはそれが正しい選択だと思うよ。お互いのためにね」

キーンコーンカーンコーン……
鐘の音を模した電子音が、放課を告げる。
「お待たせ」
昇降口で、さやかが下駄箱にもたれかかりながらキョロキョロとしていると、そこへマミがやってきて、声をかけた。
「あ、大丈夫です、今来たところですから」
さやかは苦笑混じりにそう言った。
「3年生はどうしても長くなりがちなのよ」
「まぁ、しょうがないですねー」
昇降口から出て、校門へと向かいながら、そんな会話を交わす。
「そういえばマミさん、進学とか、どうするんですか？」
「そうね……」
さやかに訊ねられて、マミは口元に手を当て、視線を上向かせて軽く考え込む。

「あまりはっきりと決められていないわね……今までは生きるのに精一杯で、将来がどうとか深く考えたことがなかったから」
「そっか……マミさん……」
マミの答えに、むしろさやかの方が深く落ち込んだかのように視線を下げる。
「でも、一応高校は出ておきたいかな。それなりのレベルのところでいいから」
「あたしはそのそれなりも駄目そうだ……」
決して成績優秀というわけでもないさやかは、マミの言葉を聞いて、オーバーリアクション気味にがっくりと肩を落とす。
「私も人のことが言えるような成績じゃないわよ」
マミはそう言って苦笑した。
そんなやり取りをしながら、校門を出て、公園の遊歩道へと歩みを進める。
「そう言えば、サッきゅんは？　さやかさんと一緒にいたんじゃなかったの？」
「えっ」
マミが辺りを見回すようにしながら言うと、さやかはキョトン、としたような表情になる。
「昼休みぐらいから姿が見えなくって、てっきりマミさんの方に行ってるのかと思いました」
「私は見てないわ。それに、３年の教室には近づきたがらないの」
「えっ、どうしてです？」
マミの答えに、さやかはさらに聞き返す。
「微妙な時期でしょ、〝見え〟やすいのよ」
複雑そうな表情で、マミが言う。
「さすがに受験なんて一過性のもので契約受けちゃうと、大変なことになっちゃうでしょ。だから」
「なるほど……」
さやかは、感心したような声を出してから、
「魔法少女の世界も世知辛いものですなぁ」

と、おどけ交じりに苦笑しながらそう言った。
「佐倉さんのところかしらね、ひょっとしたら、魔獣が出て彼女が対処してたのかも知れないし」
マミは、軽く逡巡するようにしつつ、そう言ってから、
「それだったら、早く戻ってあげないと。今頃佐倉さん、お腹空かせてるわ」
と、穏やかに苦笑しながら言った。
「あいつ、ほんっと常に何か口に入れてるイメージですもんねー」
さやかも、おどけたように苦笑しながら、そう同意した。
「へっくしゅ」
同じ頃、見滝原駅南口商店街の裏路地。
建物の影で、昼間でもあまり直射日光の指さないそこにいた杏子は、魔法少女の装束を身にまとっていた。
「さやかのやつ、下んない話でもしてるんじゃないだろうな」
鼻の下を擦りながら、杏子は1人で毒つく。
マミやさやかの予想は、サッきゅんの動向という点では外れていたが、残り半分は当たっていた。
巴邸でゴロゴロとヒマをつぶしていたところ、至近に魔獣の気配を感じて、その捜索に当たっていた。
――――近くにいる、こっちへ来る！
黒い霧は出ていない。あまり強くはない魔獣なのだろう。
裏路地の、さらに建物と建物の隙間から、それは現れた。
「なっ!?」
その姿を見て、杏子は面食らったように、素っ頓狂な声を漏らした。
それは、まるでゴブリン、とでも表現すればいいのか、明らかに異質な小人が、操り人形を操りながらふらふらと彷徨っている、というものだった。
問題はそのディテール。
異質な小人は、ワンピースを着て、前髪にヘアピンを2つ留めたボブカットの少女という、杏子が最近知った姿を模していた。
半ば無軌道に彷徨いつつ、両手で操り人形の糸を操る。糸に操られ

るまま、人形はミニチュアのバイオリンを弾き続けている。
「なんだ、この、胸糞悪い！」
杏子はその姿に対する嫌悪感のあまり、相手の規模も考えない全力の攻撃で、一瞬にして魔獣を木っ端微塵に砕いていた。
「！」
魔獣の気配が消えるのを感じたところで、杏子は我に返る。
「まさか!? アイツ！」
目を見開き、見滝原中学校のある方角を身体ごと振り返っていた。

上条邸の防音室。
恭介の左腕の上で、バイオリンが滑らかな音を奏でていた。
日常的な光景。
ただ、いつもと違ったのは、珍しく身内以外のギャラリーがいたことだった。
弓は滑るように弦を引き、整った音楽を奏で続ける。
――――と。
ギィ
不意に、弓が弦に対して逆らう動きをし、耳障りなノイズを立てる。
「っ……」
恭介は、一瞬、下唇を噛む仕種をしてから、はっと我に返った。
「ごめん、まだ……本調子じゃないみたいでさ」
少し緊張した様子で苦笑しながら、相手に向かってそう言った。
「無理はいけませんわ」
外部の人間には滅多に見せることのない練習風景に入り込んだ相手――志筑仁美は、心配そうな表情を恭介に向けて、そう言った。
「まだ、怪我が治ったばかりなのですし、脚のほうはまだ完治していないのですから」
「うん、でも大丈夫」
恭介は、にこやかな笑顔で言う。
「手の方は、まったく問題ないからね。まるで怪我なんか最初からなかったみたいだ、奇跡としか言いようがないって、言われるほどだか

ら」
「ですけれど、身体全体のことを考えてくださいませ」
仁美は、なおも心配気に言った。
「うん、ありがとう」
恭介は、屈託のない笑顔で言う。
「少し休憩しようかな」
恭介は身体の緊張を解すと、本来立って演奏するところを、用意されたパイプ椅子の、背摺りにもたれかかるようにして、言う。
「お茶のおかわりでも用意するかい？」
「あ、それでしたら、私が――――」
恭介の言葉に、仁美は、休憩用においてあるソファから立ち上がって、そこで、譜面の並べられた本棚の片隅にある、それに気がついた。
「これは……？」
その写真立てには、何かの表彰の盾らしきものを持った幼い頃の恭介が、家族や知人と写っている写真が飾られていた。
「ああ、それは」
仁美が凝視するものに気づいた恭介は、リラックスした態度で、苦笑混じりに言う。
「県のジュニア・コンクールで初めて金賞をとった時の写真なんだ」
なるほど、確かにそれなら記念品として、この部屋に飾ってあるのも頷ける。
だが、問題は、一緒に写りこんでいる人物、その中の1人だった。
「さやかさんとは、この頃からのお付き合いでしたのね……」
「え？」
恭介は、一瞬、聞き返すような声を出してしまってから、
「ああ、うん。もともと家族同士の知り合いだったんだけど、僕とさやかが2人で遊ぶようになったのは、この頃からだったかな」
と、懐かしそうに言った。
「さやかはまるで男の子みたいでね、僕はどっちかって言うとおとなしい方だったから、お互い両親にどっちが男の子だか解からないって言われてたな」

ついつい、思い出話を口にしてしまう恭介だったが、写真を凝視して押し黙っている仁美の様子に、さすがに気まずさを感じ取った。
「……ごめん、さすがに志筑さんにする話じゃなかったかな。今朝もさやかに注意されたばかりだってのに……」
「いえ、そんなことはありませんわ」
仁美は、そのときばかりはその言葉に他意があるわけではなく、そう言って恭介を振り返った。
「ありがとう。そう言ってくれると助かるよ」
恭介は苦笑しながら言う。
「昔からそう言う付き合いだからさ、男と女としてじゃないけど、お互い大切な親友なんだ」
「……！」
そこで、恭介の表情が俄かに曇り始めたことに、仁美は気がついた。
「僕が入院してたときも、さやかは3日とあけずにお見舞いに来てくれてね。鬱陶しいって感じちゃったこともあるけど、今になってみると、それで僕もずいぶん助けられたんだなって思う」
「ええ、それは解かります……」
「でも……」
恭介の表情から、すっかりと笑みが消えた。
「最近、さやかは僕を避けているような気がするんだ」
「……」
すれ違っている気持ちのことを、仁美は気づいていたが、それを口に出すことはできなかった。
なにより恭介は、自分の想いに答えてくれたのだから。
「確かに、入院中、僕はさやかに対してひどいことをしてしまったこともあったんだ。でも、手が治ったときは、一緒に喜んでくれて……怒ってるとは、思わなかったんだけど、それは、甘かったのかな」
恭介は、寂しそうにそう言った。
一方、仁美は、目を円くして恭介を凝視しつつ、頭の中でパズルが一気に組みあがっていくような感覚を覚えていた。
――それを組み上げてはいけない、と、心のどこかで悲鳴が上

がるのを感じながら。

バンッ！

巴邸。

玄関の鉄扉が、乱暴に開けられた。

「ちょっ、何やってんのよ、アンタ」

台所に立っていたマミに代わり、何事かと様子を見に来たさやかは、そこに杏子の姿を認めると、その乱暴な態度に軽く憤ったような態度で、声を上げる。

だが、さやかの言葉にはかまわず、杏子は土足なのも構っていられないというように、一気にさやかに迫ってきた。

「ちょっ、な、何よ？」

「アンタ……大丈夫なんだよな？　なんともなってないよな!?」

「はぁ？」

あまりに唐突な杏子の態度に、さやかは目を白黒とさせるばかりだった。

「ちょっと、ワケ解かんないってば。ってか、アンタこそ大丈夫？」

さやかは思い切り怪訝そうに眉を寄せて、杏子に問いただし返す。

「商店街にいたんだよ！　アンタそっくりの魔獣が！　だから、もしかしたらアンタに何かあったんじゃないかと思って！」

「あたしそっくりの魔獣？　って言われても……」

杏子は、切羽詰ったような真剣な言葉でそう言うが、正気を失った覚えもないさやかは、怪訝そうに、鸚鵡返しに聞き返すことしかできない。

「キミの心配は杞憂だよ、杏子」

杏子の背後、開けられたままのドアから、小動物姿のサッきゅんが姿を現す。

「サッきゅん？」

「杏子が心配するのも無理はないんだ」

サッきゅんはそう言って、説明を始める。

「魔法少女は、ソウルジェムとなった魂に、一時的に外部からの負の感

情のエネルギーを溜め込んで、その一部を魔力にしながら、最終的に大半を昇華させる。だから、魔法少女自身が呪いを生み始めると、その反動で、人間のそれが生み出すものとは比べ物にならない、強力な魔獣になるのさ。ボクらはそれを魔女とも呼んでる。何度も言ったよね、軽率な願いは本末転倒になるって。それは、そう言うことなんだ」

「……それは解かったけど、別にあたしはなんともないわよ？」

さやかは、まるで押し倒してきそうな杏子を振りほどこうとしつつ、今度はその怪訝そうな表情をサッきゅんに向けて、問いかけるように言う。

「うん、ボクには解かるよ。さやかは今はそれほど不安定じゃない。地球人ならよくある程度の感情の振幅だ。心配するほどじゃないよ」

サッきゅんは静かな口調でそう言った。

「じゃあ、あれはただの偶然かよ？」

杏子は、ようやくさやかを解放して、サッきゅんの方を向きながらそう言った。

「ボクは実際にその魔獣を見ていないからね。でも、そうとしか言いようがないんじゃないかな」

サッきゅんは、楽観そうにそう言った。

すれ違う想いに気付いていた。

それに付け込んだのも事実だった。

でも、〝Ｗｈｙ〟をたださなかったのも事実だ。

そのパズルが音を立てて、頭の中で完成していこうとする。

心をきしませながら。

奇跡としか言いようがないって――

キミの願いをかなえる奇跡を起こしてあげるよ――

避けているような気がするんだ――

魔獣と戦う運命を背負ってもらう代わりに――

「ま、さ、か……――――!!」

第9話：本当に欲しいモノは、なんですか？

見滝原中学校――――

チャイムの音が、午前中の授業の終わりを告げた。

「きりーつ、礼、着席ー」

日直の号令の後、4時限目の担当教師が教室を出て行き、さやかたち2年4組にも昼休みが訪れた。

「さやかー、一緒にお弁当食べよー」

さやかが、自分のカバンの中から、可愛らしいピンクの包みに入った二段タイプの弁当箱を取り出していると、クラスメイトの女子から声をかけられた。

以前は仁美とばかり一緒にいたが、元々、思い込みは激しいところがあるものの、人見知りとかいった単語とは無縁な性格だけに、交友関係自体は広い。

その仁美が恭介と付き合い始めた、という噂というか、事実なのだが、学校の真ん前で堂々とやっていれば、もともと恭介も仁美も学校中に名前が通っている上、男子も女子もこういう話題には食いつきやすい年頃のこと、あっという間に学年中に広まってしまった。

その告白の翌日から、美樹さやか・志筑仁美の定番コンビは崩れ、さやかは、マミと会っているときを除けば、そこそこ親しいクラスメイトと談笑していることが多くなった。

「あ、うん」

さやかは、いったん声の主たちの方を向いて、笑顔で挨拶すると、右手で弁当の包みをつかんで、立ち上がろうとした。

「さやかさん」

「え？」

立ち上がりかけたさやかは、別の方向から声をかけられて、そちらの方を向いた。

そこには、真剣な面持ちでさやかを見つめる仁美が立っていた。

てっきり恭介と一緒にいると思っていたので、さやかは、一瞬動き

を凍りつかせ、短く間抜けな声を出してしまいつつ、真ん円くした目で仁美を凝視してしまった。
「申し訳ありませんが、今日のお昼は、私と御一緒していただけませんか？」
仁美は、やや高圧的に、しかし真剣そのものの態度でそう言った。
「……」
さやかは、椅子から立ち上がりかけた姿勢に、目を真ん円くしたどこか間の抜けた表情のままで、僅かな間仁美を凝視していたが、やがて、
「わかった、いいよ」
と、苦笑交じりに言いつつ、身体を起こして仁美と向かい合った。
「すみません、皆様、今日はさやかさんをお借りいたします」
仁美は、いつもの温和そうな様子とは異なり、真剣かつニュートラルな口調でそう言い、先にさやかに声をかけたクラスメイトたちに向かって、軽く会釈をした。
「どこへ行く？」
「あまり、人の来ないところがよろしいのですけれど」
さやかの問いかけに、仁美は表情を微かに曇らせるようにしながらそう答えた。
「それじゃ、屋上行こう」
そう言って、さやかは仁美を先導するように歩き出す。
仁美は、それに続き、教室の前のドアから出て行き様に、再度教室の中を振り返って、先ほどのクラスメイトに頭を下げてから、さやかとともに教室を後にした。
「なに、アイツ……信じらんない」
さやかと仁美を見送ったクラスメイトたちの1人が、軽く呆然としつつ、呟くようにそう言った。
すると、それを皮切りに、他のクラスメイトたちも、次々と文字通りに口火を切る。
「ホントだよ、さやかが上条君と仲いいのなんか、それこそ同じ小学校のやつならその頃からみんな知ってたことなのにさぁ」

「横からかっさらっといて、今でもよく友達ヅラできるよね」
「ちょっと自分がいいところのお嬢様だからってさ、なんでも思い通りになると思ってるんだよ、志筑は」
「ああいうのを泥棒猫、って言うんだろうね、さやか可哀想」
「よく志筑に付き合えるよね、さやか。いくら前からの友達だったからってさぁ」
「志筑、さやかいなかったら友達1人もいなかったんじゃないの？」
「でもさ、上条君も見る目無いと思わない？　入院中だってしょっちゅうお見舞いに言ってたんでしょ？　さやか」
「男子なんてみんなそんなもんだって。普段猫かぶってるし。儚いお嬢様気取ってればコロッとだまされる馬鹿ばっかり」
「結局上条君も他の男子と同じって事かぁ～」
「ちょっとショックだなぁ、それ。私も、上条君のことちょっといいなって思ってたんだよね」
「それ、さやかが聞いたら卒倒しちゃうよ」
「だから、そこまでは入れ込まなかったんだよ。さやかで決まりだと思ってたから。だから余計に志筑のやつ、許せないんだ、私」
「でもさ、それだったらアンタもさやかも、ある意味丁度よかったんじゃない？」
「あははっ、言えてるかも」
女3人寄れば姦しいというが、詳しい経緯も知らず、表面的なイメージで好き勝手なことを言っていた。

教室でそんな会話がなされているとは知らず、当のさやかと仁美は、屋上へと上がってきた。
高い金網フェンスが張られている代わりに、生徒の散策用スペースとして解放されている場所ではあるが、季節柄まだ風が冷たく感じられるためか、この時期ここで昼食を採ろうとする者は極めて稀だった。
「それで、なんの相談？　仁美のことだから、恭介に関することでしょ？」

その中程まで進んだところで、さやかは、背後についてくる仁美を振り返り、笑顔でそう訊ねた。さすがに、本心から笑顔になることはできなかった。足りない分を、意識で埋めて笑顔を作った。
「お昼休み返上してまでってことだから、お弁当のことかな、好きな食べ物とか知りたいの？」
逆に、精神の安定を図ろうと、まだ仁美が何も言っていないにも関わらず、さやかは、次々に話題を出して進めていこうとする。
「さやかさん」
それを遮るようして、仁美は、きっぱりとした口調で、さやかの名前を口にし、正面から真摯な目で向かい合った。
「……じゃあ、なんなのよ」
逆にその態度を見て、さやかの声が半オクターブ低くなる。
「まずは単刀直入にお聞きします。貴方は、私や上条くんに、なにか重要な隠し事をなさっていませんか？」
仁美のほうも、それに怯むことなく、正面突破の質問をさやかにぶつける。
「――――……な、何言っちゃってるのかな。別に、２人にそりゃー……まったく隠し事なんかないわけじゃないけど、そんなマジになんなきゃならないようなことはないよ？」
さやかは、そう答えたが、その前の逡巡するような僅かな沈黙や、茶化すような言い回しが、その動揺を如実に表していた。
「上条くんの手に関すること――でも、ですか？」
仁美は、続けざまに斬り込む。
しかし、
「そんな事言ったって、あたしは医者じゃないし、恭介の手をどうこうすることなんかできるわけないじゃん？」
と、その問いかけに対しては、さやかは、いともあっさりとそう言いきった。
「そう……ですか……」
仁美は、どこか落胆したような様子になって、右手で左の二の腕をつかむ仕種をしつつ、悲壮そうな面持ちでさやかから視線をはずし、

軽く伏せさせた。
しかし、すぐにそれを元に戻し、
「それではもうひとつ……これは、質問ではなく、お願い、なのですが」
と、次の話題を切り出した。
「なに？」
さやかは真剣な口調で聞き返す。
「上条くんに、その、表面的でも良いですから、以前と同じように接してあげていただけませんか？」
「え？」
仁美の言葉があまりに意外だと感じ、さやかは、再び間の抜けた声を出してしまう。
「さすがに厚かましいお願いだとは思いますけれど……上条くんにとって、さやかさんは、男性とか女性とか関係なく、心の支えの一部なのですわ……さやかさんが上条くんを避けるようになってから、バイオリンも、少しスランプ気味のようですし」
どこか、必死に訴えかけるように言う仁美に対して、
「へぇ、そうなんだ」
と、さやかは、あっさりとした口調で、どこかあっけらかんとして言う。
「でも、悪いけど、それは無理。あたしは恭介のことをそう言う風には見れないし、できもしないって解かりきってることをできるって言いたくない」
「……そう、ですわよね」
意外にあっさりと答えたさやかに対して、仁美は力なくそう言って、顔を俯かせる。
「っていうかさ、これからは仁美が恭介のこと支えてあげれば良いじゃん。まぁー、あたしも癪だと思ってないわけじゃないけどさ、仁美が恭介について知りたいことがあれば、教えてあげないこともないよ？　まぁ、そりゃ、何でも知ってるわけじゃないけどさ」
さやかは、心の奥で自分が悲鳴を上げているのを押し殺すように、わざと明るく、ニカニカとした笑顔におどけ交じりの口調でそう言っ

た。
「はい……ありがとうございます」
仁美は、視線を床に這わせたまま、弱々しくそう言った。
「話、これで終わりかな？」
「ええ……」
さやかの問いかけに、仁美は力なく答える。
「こんな状況で御飯って雰囲気じゃないし、あたし、3年の知り合いの先輩のところに行くからさ、仁美も、どこかで適当にお弁当食べるなり時間つぶすなりして戻りなよ」
「はい……」
さやかは、言うと、仁美の返事を待ってから、
「それじゃ」
と、努めて最後まで明るい態度をとり続けて、その場を後にした。
「志筑仁美、何がしたいの？　貴方は？」
屋上に取り残された仁美の背後から、さやかのものではない、最近知るようになった、どこか感情の薄い声がかけられた。
「暁美……さん？」
軽く驚いた仁美が振り返ると、さやかと入れ違うように、そこにほむらが立っていた。
「貴方は自分の望むものを手に入れたでしょう、何が不満なのかしら？」
「……っ」
仁美は、一瞬、下唇を噛み締めて、視線をほむらから逸らし、
「貴方には、関係のない話ですわ」
と、ぶっきらぼうに言ってから、視線をほむらに戻した。
「そうね」
ほむらは、そうあっさりと肯定するが、
「ただ、私としては、美樹さやかの心をこれ以上乱してほしくないの」
と、睨み付けるように目を細めつつ、静かにだが、威圧感のある口調でそう言った。
「どうしてですの？　貴方は別に、さやかさんとは――」

「そう、なんでもないわ」
反射的に睨み返すような表情になった仁美に対して、ほむらは、その言葉を途中で遮って、自ら結論を言う。
「むしろ嫌悪感を抱いているといっても良い。けれど、私の目的のために、できれば美樹さやかをこのまま維持したいの」
「目的？　維持――――？」
ほむらの言葉が理解しきれず、仁美は、そのキーになる単語を鸚鵡返しにするようにして聞き返した。
「詳しいことは秘密。けれど、貴方は上条恭介と結ばれ、美樹さやかはその事実に、自分の中である程度の折り合いをつけた。これは僥倖に近いの。だから、これ以上事態をややこしくしないで頂戴」
「……」
ほむらの発言には、ところどころ、仁美には理解の難しい言い回しがあったが、大筋では正論だと感じていた。
「解かったら、これからはこんな真似をしないで頂戴」
ほむらは、そう、言いたいことを言い切ると、踵を返して、校舎の中へと戻っていこうとする。
「ひとつだけ！」
そのほむらを呼び止めようと、仁美は、声を上げてそう言った。
「なに、かしら？」
ほむらは、顔だけでちらりと仁美を振り返り、聞き返す。
「暁美さんは、――――魔法少女というものを、ご存知ですか？」
「さあ」
縋り付くように訊ねてくる仁美に対し、ほむらは突き放すように答える。
「知っていようが知るまいが、貴方にはもう、関係のないことよ」
言い終えると、ほむらは、今度こそ屋上を後にした。
ぽつり、と、仁美だけが、人の気配のない屋上に取り残された。
春先ながら、妙義颪（おろし）の突き刺さるような冷たい風が、容赦なく吹きすさんでいた。

夕刻の上条家。
今日もまた、恭介の練習部屋の防音室に、志筑仁美は招き入れられていた。
恭介の左腕の上で、バイオリンが音を奏でる。
だが、自らもピアノという形で音楽を嗜む仁美には解かる。
恭介の演奏は、徐々に荒れてきていた。
その演奏すら、途中で再び、ギィ、と、弦を引き誤って耳障りな音を立ててしまう。
「……」
恭介は、そのまま、弓を弦からはずすと、だらり、とそれを握る右腕をぶら下げるように下ろした。
「どうして、だろうね」
恭介は呟くように言う。
「身体の方は、脚の方も、もうすぐ松葉杖も取れるって言われてるくらいなのに……こっちの方は、どんどん駄目になっていくよ」
バイオリンを下ろし、自嘲気味に笑い、パイプ椅子に力なくもたれかかる。
「無理に焦らなくても……スランプなんて、誰にでもあることですわ！　ゆっくり、養生するつもりで直していけば……」
仁美は、恭介を何とか元気付けようと、自分の方が必死なぐらいの様子で言った。
「違うんだ……駄目なんだよ」
恭介は、穏やかだが、それがとても危うく見える苦笑を浮かべて、言う。
そして、つ、と、一点を指差す。
そこには、昨日、仁美が見つけた、幼い頃の写真が飾られた写真立てがあった。
「やっと、解かった。僕はこの時、賞を取れたことなんか、どうでもよかったんだ。他の誰のためにでもない。ただ1人、僕のバイオリンを心の底から褒めてくれた、その子のために、弾きたかった。それだけなんだ」

「上条くん……」
恭介に釣られるようにして、弱気な表情を見せた仁美だったが、やがて、覚悟を決めたように、声に出して、迫る。
「私の為では、駄目なのですか？」
「……え？」
仁美の突然の言葉に、恭介は戸惑ったような様子を見せた。
「上条くんは、決定的な思い違いをしています。さやかさんが上条くんに寄せていた想いは、女性として、男性に対する、それです」
「な――――」
「そして、私は、それを承知の上で、貴方に想いを告げさせていただきました。さやかさんにも、そうするように勧めたのですが、行動に出ることはなく、諦めてしまわれたのです」
「それじゃあ、さやかが僕を避けるようになったのは……!!」
驚愕しながら問い返す恭介に対し、仁美は真剣な表情で深く頷いた。
「経緯はどうあれ、上条くんは、私を選んだのです。これからは、私を見てくださいまし！　そのバイオリンも、誰かの為にというのなら、私の為に弾いてくださいまし!!」
仁美は、表面的には感情的な様子を見せて、恭介に迫った。
「近寄るな！」
恭介は、命の次に大切と言っても過言ではないはずの、バイオリンの、その弓を乱暴に振るって、仁美を遠ざけさせる。
「僕は、僕はなんて残酷なことを……！　さやかは、だから、僕の為にっ……」
顔を覆い、目を向いて、恭介は慟哭する。
「上条くんっ！」
その姿を見て、仁美は驚愕と困惑、それに心配で、思わず声を上げていた。
顔を覆う指の合間から見える、血走ったその瞳に見えるのは、狂気――――いや、それすらも通り越した何か。
「!?」

仁美は、視界の中を横切ったそれを見てギョッとする。
どこから入り込んできたのか、否、その前にこんな現象が存在するのか。いつの間にか、黒い霧が、防音室の中に湧きはじめていた。
「ウォオオオオオオオオオ」
恭介の声帯が、おおよそ人間のものとは思えない、どこかコンピューターによる合成音を思わせるような唸りを上げる。
恭介を覆うようにして濃さを増す黒い霧の中から現れたのは、操り人形を操る、ショートカットの少女を模した異形の小人。
「ひっ！」
その不気味さに強烈な嫌悪感を感じ、仁美は、短く悲鳴を上げつつ、反射的に身を竦めてしまう。
ガシャアンッ！
黒い霧が異形とともに仁美を飲み込みかけた時、白い、あまり透明感の無い閃光が、防音室の2重ガラスを突き破って飛び込んできた。
「貴方は?!」
「話は後、逃げるよ！」
やや露出度が高いがファンシーな衣装を身に纏った、見た目は仁美たちより幼い、アルビノを思わせる乳白色の少女は、右手に持った短弓を引き絞り、異形に向かって閃光の矢を放ちながら、少年のような話し方でそう言うと、その体格差をものともせずにひょいと抱えて、破ってきた窓から常人離れした跳躍で、飛行するように跳び出した。
『マミさん！　今の、サッきゅんの聞こえました!?』
さやかは、見滝原中学校近くの路地を駆け抜けながら、険しい顔をしつつ、マミにテレパシーを飛ばす。
『ええ、聞こえたわ。私も今、そっちに向かってる』
マミの返答に、僅かながら安堵を覚えたその時。
「え……」
自宅のある、旧い住宅街の方に視線を向けると、その一帯を、真っ黒な霧の巨大な塊が、外からはまるで地平近くに積乱雲が降りてきたように、覆い尽くしていた。
そして、その霧をかき分けるようにして、姿を現した異形。

「何、あれ……」
さやかは一瞬、呆然として立ち尽くしてしまった。
それまでさやかが出会ってきた魔獣とは文字通り格が違う、巨大な異形。
その姿は、中世欧風の、方形状の四隅に円柱状の構造を持つ塔。それが、無数の馬を立てた巨大な戦車（チャリオット）に乗って、突き進む、というものだった。

『さやかさん！　早く来て！』
マミのテレパシーで、さやかは我に返る。
『このままじゃ街に被害が出るわ！　私は結界に専念しないとならないの！』
『杏子はどうしたんですか!?』
『もう突っ込んで行ったわ！　一緒に連れている魔獣の数が多すぎて……それに、瘴気に巻かれた一般人も……！』
「ちっ」
さやかは、舌打ちすると、走りながら周囲に人気が無いのを確認してから、右手の中で指輪のソウルジェムを本来の姿に戻しつつ、その放つ光を見に纏う。
青い魔法少女の装束になったかと思うと、弾丸のように鋭く跳躍し、一気に魔獣の方へと向かっていく。
「くそったれぇ！」
上条家のあるはずのあたりで、杏子が毒つきながら、連結を切り離して多節棍になった槍を使い、群がる、少女の姿をした魔獣たちを、片っ端から砕いていく。
「くっ！」
ちらりと一瞬、後ろに目をやると、あまりに濃く、しかも広範囲に広がった黒い霧に巻かれた通行人が、卒倒しているのが見えた。
以前の杏子なら、魔獣は退治する一方で、一般人の被害は省みないところがあった。しかし、今の杏子に、そう言った戦い方はできない。
槍の柄を一瞬戻し、即座に再び連結を切り離して、群がる魔獣をま

とめて砕いた。
だが、あまりに多勢に無勢。
杏子自信はどうということも無いが、一般人をすべて救うことは、かなりの難易度のように思えた。
『マミー！　早くしろ！　支えきれねぇぞ！』
多節棍を振るった反動で、空中で仰向けの姿勢になった杏子の視界に、マミが必死に広げているリボンが、何とか塔の上までドーム状に覆おうとしているのが、目に入った。
『こう範囲が広くちゃ、そう簡単には張り切れないわ』
結界を展開しているマミも、悲鳴のような声を上げる。
「くっ、まずい……」
杏子は、民家の屋根の上に着地し、勢いあまってテレビアンテナを蹴飛ばしてしまいながら、迫ってくる新手を見て、ギリ、と奥歯を鳴らす。
これまでの波状攻撃より、明らかに数が多い。
杏子の多節棍が薙ぎ払う――が、半ば予想したとおり、取りこぼしが出た。
魔獣たちは、「ケケケケ」、と、杏子を嘲笑うかのように、跋扈し始めようとする。
「くそっ！」
一度槍を元に戻し、振り返りながら再び連結を外そうとしたとき。
下から迸ってきた青い閃光の雨が、魔獣たちを次々に貫き、砕いていった。
「バカヤロ、おせーぞ！」
「悪いと思ってるわよ！」
杏子とさやかは、そうやり取りをしつつ、各々手にした槍と剣とで、残った魔獣を砕いていく。
『結界、完成するわ……今！』
マミからのテレパシーがそう伝えた瞬間、黄金色のリボンが覆ったその空間の中から、色彩が消え、あたりの光景は黒地に白い線で書かれた線画のようになった。

「よっしゃ、行くぞっ！」
「言われなくたって！」
２人は、民家の屋根を蹴り、戦車に乗って行進する塔へと向かって飛び出す。
そうはさせじとでも言うのか、少女形の小人姿の魔獣の新手が、正面から無数に向かってくる。
「Ｌｏａｄ　ｓｅｔ」
さやかは、白いマントを一度翻すと、そこに無数の剣を生み出した。
剣は、切っ先を前に向けたまま、次々に青い閃光になって発射され、魔獣の群れに突き刺さっていく。
「へっ、こうなりゃどうってことねぇよ、こいつらは！」
杏子は口元で不適に笑いながら、さやかの射撃をすり抜けてきた残りを、槍で次々に砕いていく。
「けど、自分でこれ見て倒すのは、いい気分しないわね」
さやかは、自らも右手に剣を握って接近戦にもつれ込みながら、不快そうな顔をして言う。
「！」
杏子が、紅い光を纏ってさやかに急接近する。
塔の魔獣が刃のようなものを、さやかに向かって、ドシュッドシュッと何発も発射したのだ。
「え!?」
さやかが声を上げたときには、すでに、杏子の槍が多節棍になって、それを弾き落したところだった。
あたりに散乱した、刃のようなそれは……――
「なに、これ……っ……!?」
それは、バイオリンの弓を巨大化したような代物だった。弦の部分が、刃のようになっている。
「まさか……そんな、っ」
さやかは、塔の魔獣を見上げて、その場に呆然と立ち尽くしてしまう。
「バカ野郎、何をボサッとしてやがる！」

杏子が、さやかを抱えるようにして突き飛ばす。
その次の瞬間、それまでさやかたちが立っていた場所に、バイオリンの弓の刃がどすっドスッと突き立った。
パパパパパパパッ
なんとか難を逃れたさやかと杏子の頭上で、黄金色の閃光が無数に弾ける。
「なんとか、間に合ったようね」
２人が見上げると、民家の屋根の上に、無数のスナイドルを周囲の空中に従えたマミが立っていた。
「Ｒｅｌｏａｄ」
尚も向かってくる新手の魔獣に対し、マミのスナイドルが再び一斉に火を噴いた。
それをすり抜けてきた残りを、さやかと杏子が砕いていく。
そこへ撃ち込まれる刃の弓を、マミが新たに生み出したスナイドルを次々と両手に握り、クイックアクションで撃ち落としていく。
「けど、このままじゃあ……」
「うん、まずいわね」
近付けない！
３人に共通の意識が走り、焦りが見え始める。
「瘴気が広範囲に広がりすぎているの、本人だけじゃなくて、あたりの人間の負の感情まで巻き込んで、魔獣を生み出す糧にしているのよ！」
マミが、射撃を続けながら憔悴した口調で声を上げる。
「それじゃあ、キリがねーってことじゃねぇか！」
杏子が毒つく。
一方、さやかは――
何とかしなきゃ、何とかしなきゃ……
そう頭では考えるものの、そればかりが思考を占めて、まったく打開策を思いつくことができない。
痛覚遮断で特攻することも考えたが、さらにそこからあの塔を破壊するだけの技を使う自信が無い。

３人は、手詰まりか、と半ば覚悟を決めかける。
「っ、しまった！」
最初に手を落したのは、マミだった。
コスチュームの、トリガーのタッチを感じるために指貫にしてあったグローブが仇になった。
魔法少女になっても、意識してそれをとめない限り、肉体は新陳代謝を続ける。激しい運動をすれば、当然汗をかく。
その汗で濡れた指でトリガーを弾いた瞬間に滑り、銃身が大きくぶれた。修正の利くレベルではない。
悪いことに、それはさやかに向かって打ち出された、弓の刃を狙っていた。魔獣と斬りあっていたさやかに、撃ち漏らされた刃の弓が迫る――――
「！」
それを凝視してしまっていたマミが、目を見張った。
どこからか飛んできた投擲斧が、さやかの寸前でそれを破断し、撃ち落した。
異変はそれだけではなかった。
キィィィィン……
それまで、遮二無二３人めがけて突っ込んできていた魔獣の群れが、突然、フラフラと彷徨うような動きに変わった。
しかも、その魔獣たちを、塔の魔獣が放つ弓の刃が、次々に撃ちぬいていく。
「なにこれ……どうなってるの!?」
あまりに唐突な状況の変化に、３人は目を疑い、さやかが代表するように声を出した。
「みなさん、今です！」
そこに別の声が響いてくる。サッきゅんのものではなかった。
「今なら近付けます！」
フォレストグリーンを基調に、白い提灯袖、チェックのブラウス風の装飾を組み合わせることでチューブトップ風を演出しているワンピース。羽飾りのついたベレー風の帽子、装飾を意識しながらもしっ

かりと踏みしめられる構造のショートブーツ。
　両刃のロングアックスに、投擲斧を格納した、左腕の甲に固定された小さな円い盾。
「うそ……アンタ……」
　さやかは、ぶるぶると震えながら、力の入らないような様子で、新たに現れた魔法少女を指差した。
「仁美!?　アンタ、どうして!?」

　――――上条家から仁美を救出した、魔法少女姿のサッきゅんは、一旦マミのマンションの屋上まで退避してきて、そこで小脇に抱えるようにしていた仁美を、一旦両腕で抱えるようにしてからゆっくりと下ろした。
「大丈夫?　怪我はないかい?」
　サッきゅんは、心配気な表情で仁美を見つつ、そう訊ねた。
「ええ、かすり傷程度ですわ」
　仁美は、制服を払うようにしながら、そう答える。
「そっか、よかった」
　サッきゅんは、そう言って、軽く胸を撫で下ろした。
「あれが、魔獣、ですのね?」
　仁美が問いかけると、サッきゅんは素直に頷いた。
「人間の、絶望、呪い、嫉妬、恨み、そんな負の感情が具現化したモノ。それらが〝熱量換算可能なエネルギー〟に変化する過程の段階の存在だけど、人間にとっては害悪以外の何者でもない。そう言う存在」
「上条くんは……どうなったんですの?」
　仁美は、巨大な動く塔を黄金色のリボンが覆っていく光景に視線を向けながら、サッきゅんに訊ねる。
「今は、自身の呪いである魔獣に取り込まれた状態。でも安心して。魔獣を倒せば元に戻るよ」
　サッきゅんはそう説明する。
「その為に、魔法少女はいるんだからね」
　サッきゅんは、仁美に向かってそう言うと、

「でも、これはちょっと規格外だ。彼女たちでも苦戦するかもしれない。ボクもできる限りサポートしてあげないと」
そう言って、塔の異形のいる方へと向かおうとする。
すると、そのサッきゅんの、ピンクがかった白い尻尾を、仁美の手がむんず、と掴んだ。
「お待ちください！」
「きゅぶぃ！」
尻尾を引っ張られて、サッきゅんは悲鳴を上げる。
「な、何をするんだよ」
サッきゅんは、お尻を抑えながら抗議を上げるように振り返る。
「その魔法少女の中に、……いえ、美樹さやかは魔法少女なのではありませんか？」
「う……」
仁美に、険しいというほどでもないが鋭い目を向けられながら問い質されて、サッきゅんはたじろぐ様にして言葉に詰まらせる。
「そして、契約の際に叶えた願いは、上条恭介の腕の機能を回復させること。違いますか？」
「……その通りだよ」
観念したかのように、サッきゅんはため息混じりに肯定の返事を返した。
「では、どうして、その事を私や上条くんに伝えなかったのですか!?」
仁美は、悲痛な面持ちでサッきゅんに問い質す。
「それは、本人じゃない以上、断言はできないけれど……今、この光景を目にしなかったとして、キミたちはそう言われて、信じることができたかい？」
「！　それは……」
サッきゅんの言葉に、今度は仁美の方が絶句する。
「それが普通だよ。大半の人間はボクたちのことを認識していない。魔法少女のことも知らない。自分が願った奇跡で何かが起こった、なんて言われても、普通は誰も信じない。それどころか、下手をすれば、邪な存在として虐げられすらする。さやかの本意がどこにあったか

は、ボクが断言できることじゃないけれど、一般論としては、言えないよ」
サッきゅんは、どこか醒めたような表情になって、そう言った。
「……魔法少女というのは、普通の人間とは、違う存在なのですか……？」
「……そうだね、生身の人間とは、根本的にとは言わないけれど、決定的に違う。それに、詳しい説明をしなかったせいで、彼女たちを苦しめることにもなってしまった」
何ば自失したような表情と姿勢で、呟くように問いかける仁美に対し、サッきゅんは、少し悲痛そうな表情になって、そう答える。
「だから、上条くんへの本当の気持ちも封じた……」
「そのへんも、ボクが断言できるようなことじゃない」
仁美の呟くような言葉に、サッきゅんは軽く首を振ってそう言った。
「ただ……借りた言葉だけれど、希望と絶望は等価値なんだよ。2つを同時に手に入れることはできない。さやかは、上条恭介の腕を治した奇跡の代わりに、上条恭介と共にあることを諦めたんじゃないのかな？　そして、それをキミに託したんじゃないのかな？」
「……っ！」
仁美は、下唇を噛む。
「そしてそれは、彼にも同じことが言える」
サッきゅんは、努めてニュートラルに言う。
「上条……くんにも？」
仁美が聞き返すと、サッきゅんは、軽く頷いてから、
「さやかが契約にいたった一部始終を、ボクは見ていた。彼はそうとは自覚せずに、さやかと、自分の腕とを、天秤にかけたんだ。天秤を動かしたのはさやか。でも、そうさせたのは彼。さっきの言葉通りなら、その彼が両方とも手に入れることは、できないんじゃないのかな」
と、自分でもいまいち断言はできないというように、そう説明した。
「……」
「さやかはボクがついてフォローしてあげる。だからキミは、ここで

起きた事は忘れれば良い」
サッきゅんはそう告げて、今度こそ踵を返し、戻ろうとする。
「勝手に、託されても、困り、ますわっ……」
仁美が、かすかな声で呟いたのを聞きつけて、サッきゅんは今一度だけ歩みを止める。ただし、振り返りはしない。
「私、はっ……」
ただ、自分が欲しいモノ、自分のものにしたいモノのために、行動していた。
それは、紛う事なき事実。
けれど――――
けれども――――

今、私(アナタ)が本当に欲しいモノは、なんですか？

「サッきゅんさん、でしたわね」
力なく膝を突いてへたり込んだ姿勢のまま、仁美は顔を上げると、真剣な瞳でサッきゅんを見上げる。
その態度に、サッきゅんも振り返ると、魔法少女姿の顔を、真摯なものにした。
「私とも契約できる、と、仰いましたわね」
「うん、今ならね。でも、キミはそれを望まないと思っていたんだけどな」
静かに言う仁美に対し、サッきゅんはニュートラルな口調で、自分の思ったところを口に出す。
「ええ、でも、たった今、願いができましたの」
仁美は、言いながら立ち上がり、サッきゅんと向かい合った。
「その意思があるというんなら、僕には拒むことはできない」
サッきゅんは、やや困惑気に眉を潜めて、そう言った。
「さやかさんの願いに比べたら、取るに足らないもの。でも、奇跡でしかなしえないこと、ですわ」
そして、仁美は願いを口にした。

「さぁ、叶えてくださいまし、ＳＱ！」
仁美の言葉に答えるかのように、その身体から、眩いばかりの光の柱が立ち上り始めた。
胸から溢れ出したフォレストグリーンの光が、空中で集まって珠になり、ソウルジェムを形成する。
「ここに契約は成立した。今からキミは、魔法少女だ」

「何やってんのよ……アンタ……」
ふるふると震えながら、さやかは仁美を凝視して、訊ねる。
「ご心配なく。私、少々ですけど武道も嗜んでおりますから」
「そうじゃない！」
仁美がニコリと笑って答えると、さやかが声を荒げた。
「なんで、アンタもなっちゃったのよ……ま、魔法少女に……」
「それは……」
震える声で問い質すさやかに対し、仁美は、答えかけて、
「！」
と、急に表情を険しくし、視線をさやかから離した。
迫ってきた魔獣の1体を、手にしたロングアックスで切り裂き、消滅させる。
「詳しい話は後に！　魔獣の力は、だいぶ弱っているはずですわ！」
「そうだな、まずは目の前の相手を片付けちまおうぜ」
仁美の言葉に対して、杏子がさやかの背後から同意の声を出し、槍を両手で構えなおした。
「くっ、解かったわよ、やってやろうじゃない！」
さやかも言い、両手に白銀の剣を1振りずつ生み出す。
「はぁぁぁぁっ」
マミを除いた、3人の魔法少女が、己の武器を振りかぶって、突進する。
仁美は、その進路上に立ちふさがる魔獣に対して、僅かに進路を逸らしつつ、横から薙刀の要領で薙ぎ払う。そのままの勢いで放物線を描きながら塔の魔獣に迫り、ハンマーの要領でロングアックスを振り

下ろし、叩きつけた。四隅の尖塔の1つが、崩壊する。
杏子は同様に、行く手を阻む魔獣の姿を確認するや、槍の柄の連結を解いて多節棍にし、複雑な軌道をいとも簡単に描かせて、魔獣を打ち砕く。直後に柄を連結させて槍に戻すと、それを紅く光らせながら、仁美とは反対側の尖塔に、それを突き立てる。爆発したかのように、尖塔は破壊された。
正面から迫るさやかに向かって、塔の魔獣は弓の刃を放ってきた。さやかは右手に握っていた剣を投擲する。青い閃光になったそれは弓の刃を破壊し、さらに塔の魔獣の正面に突き刺さって、穴を穿った。さやかは左手の剣を青く輝かせると、その穴からに中に飛び込んだ。かと思うと、まるで己が弾丸になったかのように、内部を突き破って、その後ろ側に貫通する。
塔の魔獣は傷つき、ただでさえ緩慢な動きがさらに速度を落とす。少女を模した小人の人形は、すでに姿が見えなかった。
「みんな、行くわよ！」
3人が一撃離脱で塔の魔獣から離れたとき、すでにマミの手には、その銃身が臼砲、と言うより加農砲のようになったスナイドルが握られていた。
「Ｔｉｒｏ　Ｆｉｎａｌｅ――――!!」
黄金色の閃光が、正面から塔の魔獣に命中する。
最初は若干威力不足かに見えたが、やがて光が塔の内部ですべてを巻き込む竜巻のように渦巻き出し、すべてを飲み込み、崩壊させ消滅させていった。

「私の願いは――――」
最初からそれを、覚悟していたはずだった。
そんなものは失っても、どうということはないと思っていた。
否、そもそも失うとか、そんな表現をするべきものですらないと思っていた。
けれど。
一度知ってしまったその居場所は、あまりに居心地がよくて。

無意識のうちに、それが当たり前になっていた自分に、自分は気づかないでいた。
自分は弱くなったのかもしれない。
自分を弱らせたあの人が忌々しい。
それ以上に、その状況に甘んじてしまった自分が忌々しい。
だけど、もうそれを忘れることはできない。
けれど、それに気がついたときは、もう遅かった。
自分で、それを金槌で滅多打ちにしてしまってから、そのかけがえのなさに気がついた。
それが治せるだなんて思っていない。
でも、せめて夢だけは見たい。
「上条恭介から、私、志筑仁美と、美樹さやかの記憶を、消してください」

「はっ」
恭介が意識を取り戻したとき、彼は、防音室の中に備え付けられた、休憩用のソファに深く腰掛けていた。
どうやら、うたた寝をしてしまったらしい。
傍らにあったバイオリンを確かめる。異常が発生していないか、試しに弓をかけてみた。
覚えたばかりの譜面を、弦に走らせてみる。
弦は淀みなく鳴った。
最近陥っていたはずのスランプは、まるでそれが嘘だったかのように、恭介の腕は、滑らかにバイオリンに曲を奏でさせ続ける。
それは、バイオリン独奏曲になっている譜面は大変珍しいものだと言われ、挑戦し始めた楽曲。
バイオリンがウィリアム・シェイクスピア作曲『Ｗｈｅｒｅ　ｇｒｉｐｉｎｇ　ｇｒｉｅｆ』を奏でる。
なぜだか解からないが、目尻にたくさんの涙が浮かんだ。
なぜ悲しいのかも解からないのに、恭介はバイオリンをとめることができずに居た。

第１０話：そんなの、あたしは望まない

「これで条件は同じ――そう言いたいの？」

見滝原中学校、屋上。

さやかと仁美は、張られたフェンスの同一の面を向きつつ、距離を離して、それぞれ背中を向けるように斜めを向いていた。

遥か向こうに、見滝原市と滝本市を分かつ、滝原湖とそこから流れ出す滝原川が見える。その川にかかる、滝原線のガーター橋に向かう緩い上り勾配のカーブを、４００系の普通・武蔵滝元行がツリ駆けモーターの轟音を立てながら登っていく。橋を渡ってきた１０００系の上り快速・西馬込行とすれ違う。

杏子の実家だった教会がある、森と林の中間ぐらいの緑地が見える。そこからさらに湖側に視線を移すと、市が設置した見滝原市民小風力発電所のジャイロミル（可変ピッチストレートダリウス）・サボニウス型風車が、ヤグラの上でくるくると回っているのが見える。

川から湖に掛けての築堤に沿った道路を、乗用車や小型トラックが行き交う。甲州街道・中央自動車道の幹線ルートからは外れているためか、大型トラックやトレーラーの姿はまれだ。

「あたしに同情して、お情けで魔法少女になったってわけ？」

さやかは、自分から少し離れたところで、反対側の斜め下を臨んでいる仁美を振り返り、本格的に声を荒げ始めた。

「……」

「お高くとまってるアンタらしいよ！　仁美」

仁美は、沈黙したまま顔を向けない。

さやかは、ガシャン、と拳でフェンスを鳴らす。

「あたしだって、アンタのこと嫌いじゃないから――恭介のこと、任せられるって、割り切ろうと……してたのに……っ！」

前日――――巴邸。

「なんでそんな契約受けちゃったのさ！」

さやかの荒い声が飛ぶ。

「そんな事言われたって、ボクの立場じゃ、そうしたいと言われたら断る権限がないんだよー!!」
そう言い訳するサッきゅんは、小動物姿で簀巻きにされ、またしても天井から逆さ吊りにされていた。
「マミも杏子も、なんか言ってやってくれよー」
サッきゅんは、逆さ吊りのまま身を捩って、振り子のように揺れつつ、小型ながらワイドタイプの液晶テレビでドラマを見ながら紅茶を嗜むマミや、扉1つ隔ててダイニングの方にいる杏子に救いを求める。
「あー?」
ガラリ、と引き戸を開けて、杏子が不機嫌そうな顔を見せる。
ダイニングのブラウン管式小型テレビが、安物の地デジチューナー経由で映しているのは、動物モノのバラエティ番組のようだった。
「んなくっだらねぇ願いホイホイ聞いてたらそうなるのも当然だろうが。自業自得自業自得」
杏子は呆れ返り、袋入りのバターしょうゆ味のポテトチップスをわさわさと口に運びつつ、肩をすくめるようなポーズをとって、そう言った。
「サッきゅんにしては、多少配慮が欠けていたようには思えるわね」
マミが静かに言う。
「だーっ、マミまで? だって仕方なかったんだよ? あの馬鹿でかい魔獣見たでしょ?」
サッきゅんは、逆さ吊りのまま器用にマミのほうを向いて、じたばたともがきながら抗議するように声を上げる。
「どういう……意味よ」
さやかが、睨み付けるような表情で問いただす。
「魔法少女が生み出す〝呪い〟がもっとも深刻なものだとしたら、その次点に来るのが、魔法少女の奇跡に起因した〝呪い〟なんだ」
「自然じゃないことを起こす以上、裏目に出ることもあるのよ」
サッきゅんの説明に、マミが軽いため息混じりに補足した。
「普通なら実現し得ない希望を実現した分、その反動が高波のように

一気に押し寄せた場合、普通ではありえない巨大な呪いを生むことがある」
「それが、あの魔獣だって言うの!?」
サッきゅんの言葉に、さやかが反射的に問いただす。すると、サッきゅんは、上下逆さまのまま、こくんと頷いた。
「でもなんで!? 手も治って、仁美みたいな可愛いカノジョもできて、どうしてそんな呪いなんか生み出すのよ!?」
さやかは、サッきゅんに視線を向けつつも、言葉自体は誰に向けるわけでもなく荒い声で言う。
「さやかさん」
マミは、穏やかに言いつつ、視線をさやかに向ける。リモコンを手にとって、ドラマを流していたテレビを途中で切った。
「確かに彼には恋愛感情はなかったのかもしれない。けれど、小さい頃からずっと一緒にいたんでしょう?」
「えっと……まぁ、それは……」
さやかは、濁すようにしながらも、否定ではない答えを返した。
「それまで日常的に、当然のようにあったものが失われたら。それでできる心の隙間は、決して小さいものじゃないのよ」
「けど、それは別に、コイツが背負うべきモンじゃねーだろ?」
さやかがその言葉に応えるより先に、杏子が、行儀悪くポテトチップスをわさわさと口に運びながら、そう言った。
「手のことを自力で乗り越えられなかったのも、さやかが自分の日常からドロップアウトする選択をしたのも、その上条とかいうやつ自身の責任だぜ? 知らなかったから、なんてのは言い訳以上の何にもならねぇ。大体、アタシらそれで人のこと言える立場じゃねぇだろ?」
杏子は、どこか気だるそうな口調でそう言ってから、これまた行儀悪く、ほとんど空になった袋を直接口に向けて傾け、粉々になったポテトチップスのかけらを流し込んだ。
杏子もマミも、本来あるべき日常というものはほとんど失っている。それも、杏子の場合は願いによる反動だが、マミのそれはそうではない。偶発的に起こったものだ。

「それはそうなのよね……」
　マミもまた、複雑そうに目を伏せてため息をついた。
「ともあれ、マミの言うその『心の隙間』が、彼にあの〝呪い〟を生み出させたのは事実だよ。しかもこのケースは、根本的な解決法がないわけだから、魔獣を倒しても対処療法にしかならない」
「根本的な解決法がない……」
　サツきゅんがそう言うと、さやかが、俯きがちの姿勢で、鸚鵡返しにした。
「だから、彼女の願いに便乗させてもらったのさ。彼からキミと、志筑仁美の記憶を消してしまえば、彼が〝呪い〟を生み出す要素はなくなる」
　サツきゅんは、そこまではっきりと言ってから、
「……あまり冴えたやり方じゃないのは、ボクにも、なんとなくだけど解るよ。でも、今はこれしかなかったんだ」
　と、軽く落ち込んだようにそう言った。
「そうね、今更、いきなり手のひらを返されても、それはそれで嫌でしょう？」
「そんなもんかね、取り戻せるもんなら、取り戻したっていいんじゃないのか？」
　考え方の違いか、マミが否定的に言ったそれに対して、杏子は疑問形の言葉を発した。
「あたしは……」
「あたしは、取り戻すなんて考えられなかったと思う。どっちが正しいとかじゃなくて、あたし自身の考え方の問題として」
　ファァァァァァン……
　今度は８連の快速同士、鉄橋を渡ってきた１０００系の西馬込行と、都交６３００形の武蔵滝元行がすれ違う。カーブでのすれ違いざまに鳴らされる、１０００系のＡＷ５警笛と、６３００形の電子笛が、不協和音をこの場にまで響かせる。
「でも、ひとつだけ、どうしても解らないことがある」

一度、顔の向きを、相手から身体ごと逸らした正面に戻したさやかは、静かに言う。
「アンタが恭介の記憶を書き換えようとしたのはわかる。でも、それなら、あたしの記憶だけ消せばよかったんじゃないの？　そうすれば、アンタは恭介の恋人のままでいられたはずでしょ？」
「そんなことをすれば、貴方の勝ち逃げを認めることになります」
ググッ
仁美はそう言いつつ、直接さやかには表情を向けずに、睨み付けるように目元を険しくしながら、はしご型フェンスの外側を覆う、金網フェンスのひし形にクロスした鋼線を握り占める。
カーブで電車がすれ違う。発電所の風車が回る。眼下の校庭で運動部が活動している声が聞こえる。どこかで自動車のクラクションの音がする。駅前を雑踏が支配する。救急車のサイレンの音が聞こえる。
「上条くんの腕を治して、その後のことは私に全部任せた、なんて、一方的過ぎますわ！」
ギリッ
仁美の答えに対して、さやかも、表情を険しくし、歯を剥くようにかみ締めた。
「つまり、結局高慢チキなアンタのプライドを満足させたいだけってこと!?」
さやかが噛み付くように声を荒げる。
「ええ、そうですわ」
仁美は、口調では、悪びれもしていないかのように言う。
「私は、結局、人の心でさえ、自分の思うようにならなければ気がすまない、傲慢な人間ですの。さやかさんが思っているような、おっとりしたお嬢様の上っ面さえ、そのための手段なのですわ」
今度はそれを聞いていたさやかが、はしご型フェンスの手すりをひしゃげさせるような勢いで力をいれ、掴む。
「だから今も、そんなことを言って、本当の心を誤魔化さなければ、プライドを保つことさえできない、嫌な人間ですわ」

言葉の途中から、仁美の口調が自嘲気味なものになったことに、さやかも気がついた。
さやかが振り向くと、仁美は寂しそうな目をして、自分の方を向いていた。
「私は小さい頃から、同じ歳ぐらいのお友達なんていませんでしたわ。周りにいるのは、蹴落とすべき敵か、私や家族のご機嫌を伺おうとするずるい大人ばかり。だから私も、手に入れたいと思ったものは手に入れるようにしてきましたの」
「恭介もそうだって言うの!?」
さやかは噛み付くような声を出す。
「ええ。ただ、そのきっかけは少し違いましたわ。私が上条くんに惹かれたのは、私と同じような立場に置かれながら、あの人当たりの良い気さくな人柄を持っていたところ。もちろん、それ以外にも、バイオリンの腕とか、容姿とかも、ないわけではありませんでしたが。私が持ち得ないもの、私のように上っ面の誤魔化しではないそこに、私は惹かれた――――」
「それは……解るよ、あたしも恭介の、あれだけのもの持ってて気取らないところ、好きだったから」
「そう、でしょうね」
そう言ってから、仁美は、ふっ、と、自嘲的に口元で笑った。
「?」
さやかは、その様子の理由が理解できず、微かに怪訝そうにする。
「あの日、上条くんを手に入れるために、貴方に詰め寄ったとき――私は、ああは言いましたが、貴方と、これまで通りのお付き合いができなくなることは、覚悟していましたわ。いえ、していたはずだった」
「どういう、こと?」
「先ほども言いました通り、私には、心の許せる友人なんていませんでした。人付き合いは、打算の延長線にあるもの。そう思っていましたから。人当たりのいいお嬢様を演じながら、常に気を張り詰めていた、私にとって――――」
そこまで言って、仁美は、身体ごとさやかに向き直り、真剣な眼差

しを向けた。
「美樹さやかさん、貴方は、私にとって最初の、本当のお友達だったんです」
「――――」
「近づいたのは、今までのように、自分が孤立するのを防ぐための打算だったかもしれません。だから、それを失いそうになって、やっとそのことに気がついた。失いたくないと思ってしまったのですわ」
　まっすぐにさやかを見つめる仁美の眼が、徐々に潤み始める。
「最初は、私と引き換えに貴方を元の人間に戻そうとも思いました。けれど、サッきゅんにそれはふたつの理由から無理だと言われました。ひとつは、私では貴方に資質が及ばず、すでに魔法少女である貴方という存在に干渉しきれないこと。もうひとつは、貴方を元に戻すということは、その願いもキャンセルされるということ。つまり、上条くんの手が、また動かなくなるということ」
「そんなの、あたしは望まない――あたしの為に、誰かが苦しむのを、見せられるのはいやだよ」
　さやかは、意識せずに乾いた声で、そう言った。
「ええ、そう言うと思いましたわ。ですから、私の本当の願いを叶えることにしたのです。一度壊れてしまったかもしれないけれど、肩を並べてさえいれば、また、いつか――――そんな、勝手な夢を見たいという思いを、その願いにかけたのです」
「それで……わざわざ、魔法少女に……」
　聞き返すさやかの言葉に、仁美は頷く。
「上条くんと私では、駄目だった。お互い、貴方の代わりにはなれなかった。ただの自己満足だということは、理解していますわ。このような身体になって、後々後悔したとしても、自分の本当の気持ちに気付きさえしなかった私の自業自得。それだけの、ことですわ」
　そう言って、仁美は不意に、フェンスから離れ、踵を返しかける。
「私から言えることは、それだけですわ。どうぞ、哂ってやってくださいまし」
　そう言って、階段のある屋塔部へと、歩みを進め始める。

「待ってよ！」
　静かに立ち去ろうとする仁美を、さやかは、手を伸ばすようにして、あわてた口調で制止する。
「ホントに、自己満足だけして行っちゃわないでよ。これで留めなかったら、あたしが悪者じゃんか」
　歩みを止めた仁美だったが、さやかの言葉に、まだ振り返ろうとはしない。
「第一、仁美だって、あたしのこと買いかぶりすぎだよ。アンタは覚えてないかもしれないけど、あたし、一度アンタのこと助けてるんだよ。でも、アンタに恭介のことで迫られたとき、助けなければよかったって、本当に思っちゃった。アンタにそう言ってもらえるような人間なんかじゃないんだよ」
「そんなことが――あったのですね」
　どこか必死な様子で言うさやかに対して、仁美は、静かにそう言って、振り返った。
「あたしさ、アンタと違ってバカだから、上手く言えないけど――人って、そういうもんだよ。きっと。『後悔しない生き方なんてない』、あたしの尊敬する人がそう言ってた」
「さやかさん……」
「本当は後悔なんてしたくないよ。ここであんたを引き留めなかったら、絶対後悔するって思う。結果が逆だっていいよ。もう、あたしに自分の信じられること、裏切らせないでよ」
「――――」
「壊れてなんか、ないよ。まだ、やり直せるよ。アンタは、やり直して、いいんだよ。そのためにこんな願い叶えたんでしょ？　諦めないでよ。諦めるとこ、見せないでよ」
　泣きそうな声で言うさやかに対して、仁美は、どこか愕然として言葉を失ったような様子でさやかを見ていたが、やがて眼を伏せるようにして、
「ありがとう、ございます」
　と、そう言った。

「あたしだってさ、せっかく友達になったのに、失うなんてやだもん。きっと、これでいいんだよ。そう信じるよ」
泣いた子がもう笑った、という感じで、さやかは軽く笑い飛ばすように苦笑しながら、そう言った。
「そろそろ、いいかしら？」
２人が笑いあい始めると、見計らったかのように、階段へと繋がる搭屋部からマミが姿を現した。
「あ、マミさん」
２人は同時に気付いて顔を向けたが、さやかだけが顔をほころばせて声を上げた。
「こちらの方は、確か、銃を使ってらした……」
仁美は、マミを見て、思い出すように言う。
「あ、うん、紹介するね」
さやかはマミの傍に移動する。マミの方もさやかの近くまで来たところで、歩みを止めて、仁美に顔を向けた、
「あたしと普段一緒に行動してる魔法少女で、巴マミさん」
「よろしくね、志筑仁美さん」
マミは、満面に穏やかな笑みを浮かべて言い、軽く会釈した。
「はい。よろしくお願いいたします」
仁美は、スカートを僅かにつまみあげる、お嬢様然としたポーズで、マミに挨拶の返事をした。
「リアルでも先輩だから、３年生」
「あ、そうだったのですね。失礼をしてしまうところでしたわ」
さやかが言うと、仁美は眼を円くしつつ、口を手で押さえる。
「もう、そんな事気にしなくていいのよ。これからは一緒に戦う者同士、仲良くしましょう？」
マミは、手を振りつつ、苦笑交じりに、そう言った。
「はい、ありがとうございますわ」
仁美の方も、口元に微笑を浮かべる。
「ところで」
そう言って、仁美は視線をさやかに戻した。

「先日は、確かもうひと方、赤い衣装の方がいましたけれど、そちらは？」
「あー……」
仁美に訊ねられて、さやかは、決まりが悪そうに言いつつ、後頭部をかく仕種をする。
「アイツは……まぁ、仁美にはちょーっとあれかなーと思って」
「はぁ……」
さやかの濁すような物言いに、仁美は小首をかしげた。

「はっくしゅん」
同じ頃。
見滝原市内の某所で、待ち合わせをしていた杏子は、盛大にくしゃみをした。
「あー、誰か噂でもしてやがんのかな」
そう言って、右手で鼻の下を擦る。
駅前のコンビニで買った黄色いロング缶のコーヒー飲料と、パッケージにデフォルメナイズされた農夫の描かれたチーズのスナック菓子を、ちびりちびりとやりながら、時間を潰していた。
すると、そこへ待ち人がやってきた。
「よお」
「待たせたようね」
杏子が挨拶すると、その相手――――暁美ほむらは、相変わらず淡々とした様子で、そう挨拶を返した。
「いんや、もともと暇だったからさ、時間潰してただけ」
杏子はそう言って、残っていた缶コーヒーを一気に煽る。
「そう」
ほむらはそう言って、杏子が陣取っていたベンチに腰を下ろした。
「だいぶ、彼女たちと仲良くなったのね？　どういう心境の変化かしら？」
ほむらは、直接には視線を向けずに、杏子に訊ねる。
「ま、信用に足るだけのものを見せてもらった、聞かせてもらった、っ

ていうトコかな」
杏子は、そう言いつつ、手悪戯にコーヒーの空き缶を片手で握りつぶしてみるものの、その表情はサバサバとして微笑んでいる。
対するほむらの表情は、僅かにだが、どこか忌々しそうに歪んだ。
「そんな顔すんなって。『グリフレットの別れ』に関しては、アンタと同盟するって気は変わってないからさ」
杏子はつぶした空き缶をゴミかごに放りつつ、そう言った。
「それは、どういう意味かしら？」
ほむらが聞き返すと、それまで軽そうだった杏子の表情が、真剣なものに代わる。
「信用はできる。けどな、あいつらは１００あったら１００を助けようとしちまう」
「『グリフレットの別れ』相手に、その考え方は危険、無謀、――なるほど、ね」
杏子の深刻そうな言葉に、ほむらは同意の言葉を発して頷いた。
「それじゃあ、続きは場所を変えましょう。地図とかも用意したいし」
「ああ、いいぜ」
「どの道、佐倉さん、連れてこられなかったのよね」
見滝原中学校から、最近すっかり魔法少女たちの溜まり場と化している巴邸へと向かう道。
３人が連れ立って歩いていると、マミがそう切り出した。
「なにか、人と約束があるって」
「え、そうなんですか？」
さやかが、意外そうにそう言った。
路地１本挟んだ向こう側から、プァァァンという国鉄ＡＷ５警笛の音と、ツリ駆けモーターのうなり声が聞こえてくる。
交差点で信号待ちをしているクルマの列を、さやかたちはゆっくりと追い抜いていく。
「アイツが、……誰と会ってるんだろ？」
「解らないけど、朝早くに携帯で誰かと話しているのを見たわ」
さやかが口元に手を当てながら小首を傾げると、マミは今朝方のこ

とを思い出してそう言った。
「え、アイツ携帯持ってたんだ……」
さやかは、そっちの方がよほど意外だと言うように、思わず漏らした。
マミは、それを嗜めるように苦笑しつつ、言う。
「プリペイド式だったけどね」
「『グリフレットの別れ』の出現予測はこの範囲」
ほむらは卓袱台に広げられた地図の上で、滝原湖岸のあたりに指で線を引き、そう言った。
ほむらの住む、和室のワンルーム。
杏子は行きがけに調達してきたカップ麺を、ほむらの電気ジャーポットを勝手に拝借して作りつつも、視線を地図に向けている。
「いずれのパターンにも対応できる防御線を張る為には、最低でも二ヶ所の霊脈を押さえる必要があるわ」
「その出現予測の根拠はなんだい？」
杏子は、胡坐をかいたその足の上で大事そうにカップ麺を抱えつつ、ほむらに向かって訊ねた。
「統計よ」
ほむらは短く答える。
「統計ぇ？」
杏子は訝しげに表情を歪める。
「この街に『グリフレットの別れ』が来たなんて話、聞いたことないよ？」
「……」
ほむらは答えない。押し黙った様子もなく、ただ無言になっただけだった。
「手を組むとはいったけどさ、もうちょっと手の内見せてくれたっていいんじゃない？　でないと信用のしようがないよ」
「貴方が？　あの2人のことは信用できても？」
ほむらは逆に、怪訝そうに聞き返す。
「ああ」

言いつつ、杏子はカップめんのフタを完全に剥がしにかかる。
「あいつら、どーしよーもなく単純でまっすぐだからさ、考えてっことはすぐにわかるんだ。もっとも感化されちまったアタシも割りと根は単純なのかもしんねーけど」
杏子は、左手にカップ麺を持ち、割り箸を口で咥えて、右手で割りつつそう言った。
カップ麺を左手で抱えると、箸をつけ、ずずず、とひとすすりしてから、視線をほむらに戻す。
「アンタは何を考えてるのかわからない。ただウソをついてるってわけじゃないのは解かる。けどそこから先がさっぱり読めねぇ。何もかも諦めたような眼をしてるくせに、その奥じゃまだ絶対に譲れないモンを抱えてる。矛盾しまくってて、理解できねーよ」
いいながら、杏子は再び麺をすすりだした。
「あなたって……鋭いのね」
「それほどでもねーさ」
ほむらの言葉に、杏子は行儀悪くも麺をすすりながら答えた。
「そうよ、私にはどうしても譲れないもの、取り戻したいものがある」
ほむらはニタリと、酷薄そうな笑みを浮かべる。
「彼女を取り戻せるのなら、他はどうなろうと知ったことではないと言ってしまってもいいわ」
「なんだかよくわかんねーけど」
妄執の様相さえ見せるほむらに対し、杏子は臆することもなく、麺をすすり終えたカップを一度卓袱台に置きながら、半ば呆れたような視線をほむらに向ける。
「もしアンタがどうしても譲れないものがあるってんなら、それこそ相談の相手、間違ってねーか？」
そこまで言って、杏子は表情を引き締める。
「もしアンタにどうしても譲れないものがあるってんなら、それこそあいつらだったら喜んで力を貸してくれるよ？　もちろん、アタシも協力するけどよ」
手振りをくわえながら、険しくも真剣な表情をほむらに向けて、そ

う言った。
「……」
「辛いときは誰かに頼ったっていいんだよ」
杏子はそう言い、
「ま、ちょっと前までのアタシだったら、アンタと似たように1人で塞ぎ込んじまおうとしたんだろうけど」
と、若干気まずそうにしつつも、視線はほむらに向けたまま、付け加える。
「むしろ、だからこそ、なおさらな」
「確かに――――」
ほむらは言葉に出す。
「現状は、今までの中で最も理想的だと言っても良い」
「今まで？」
ほむらの言い回しに、杏子は、微妙な違和感を感じて、鸚鵡返しに聞き返した。
「でも……――――」
杏子の問いかけを無視するかのように、ほむらは短く口なする。
「そうやって私は裏切られ続けてきた！」
ドン！
ほむらの握り締められた左手が、卓袱台を強く叩いた。
カップ麺のカップが倒れ、こぼれたスープが地図に染込んで行く。
「裏切るって、どういうこと――」
杏子の問いただす声を遮って、ほむらが声を上げた。いつもの――今まで他人に見せてきた姿からは想像もできないようなほど、ヒステリックに激昂して。
「もう後戻りのしようがないのよ！どんなに繰り返しても、状況は悪くなる一方で！　あの子がその存在すらかけた願いすら、結局は裏目に出た！　あの悪魔が貴方たちの前に現れた時点で、すべて手遅れなの！　私以外にどうしようもないの！　誰にも頼れない、私が全部、やるしかないの！」
「いったい、何だってんだよ、もう……」

杏子は、卓袱台に手を置きかけて、そこでようやく、こぼれたスープが広がり、滴っていることに意識が向いた。
「うぉっやべっ！　もったいねーしこりゃ、おい、ゾーキン、ゾーキンどこだよ、おいってば！」
杏子が慌てながらほむらに訊ねるが、ほむらはしばらく機能停止したように、その場でこわばった表情をしながら、深いが荒い息をしていた。
『杏子！　杏子！』
『なんだよ、Ｑ公。今それどころじゃ――』
テレパスでのサッきゅんの声に、杏子は煩わしそうに言い返しかけるが、
『魔獣が出た！　場所は――――――――――！』
と、それを遮って、サッきゅんは言葉を続けた。
『なんだと』
杏子の顔色が変わった。
『マミやさやかはどうした』
『もう向かってる、でもキミが一番近い』
「クソッ」
杏子は、実際に声に出して毒つきながら立ち上がった。
「わりいけど、緊急事態ってやつだわ。アタシは行くから、片付けは頼むわ」
言って、杏子はソウルジェムを指輪から本来の姿に変え、右手に握る。
「待って、だったら私も……」
ほむらは、顔を上げ、すがるような表情で言うが、
「ダメだ」
と、杏子は険しい表情で一蹴した。
「今のアンタじゃ、ついてこられたら迷惑だ。割とマジにな」
そう言っている間にも、杏子の身体を赤い光のリボンが包み込み、チャイナドレスを思わせる魔法少女の装束へと姿を変えた。

まだ日没まではだいぶ時間があるが、その路地一帯は光を吸収する黒い霧に阻まれ、周囲は夜のように暗く、ぼんやりとしか視界が利かない。
しかし、それに接近すれば、紅い閃光が、巨大ななにかと絡み合うようにして争っているのが、目に見えた。
その巨体――魔獣の姿は着生ランの一種、アングレカムの姿をしており、その四肢は節くれだった茎と分厚い葉。そして、頭部に巨大な白い花をつけている。
そのいくつもの葉が、紅い閃光に向かって覆いかぶさる。すると、銀色に光る、鋭い刃がその葉を切り刻んだ。
だが、そうすると今度は、節くれだった胴から蔦のような根を生やし、しなる鞭のように紅い閃光に向かって叩きつけられる。
それを刃で裁いていくが、その間に葉が復活してしまう。キリがない。
「なに、普段人のこと言ってるクセして、こんな不器用な真似してんのよ！」
復活した葉が、胴を攻撃しようとするそれを叩き潰そうとしたとき、その肉厚の葉は切り裂かれて、再び地に落ちた。
「う、うるせー」
根を相手に防戦一方だった杏子は、それを払った多節棍を元に戻しつつ、決まり悪そうに言い、腕で額を拭った。
「アンタらしくないわよ、いったいどうしたって言うの!?」
さやかは、杏子に襲い掛かっていた根のいくつかを斬りおとしながら、言葉で杏子に問い質す。
「とにかく邪魔すんな！　こいつは、アタシがケリつけなきゃなんない相手なんだよ！」
杏子は息を上げながら、槍を構えなおし、さやかよりも魔獣に向かって前に出ようとする。
「バカ言わないでよね。あたしが言っても説得力薄いかも知んないけどさ――――」
そう言いながら、さやかは、それまで振るっていた剣を右手だけで

持ち直すと、左手に新たな剣を生み出す。
「友達が苦しんでるとこ、黙って見てられる性格じゃないのよ！」
「！」
さやかの言葉に、杏子は、一瞬目を円くして、さやかを凝視するように視線を向けた。
新たな根が胴から飛び出し、杏子とさやかめがけてしなる鞭のように振り下ろされる。それは本来アスファルトであるはずの地面を、したたかに打ち据える。
だが、すでにその場に2人の姿はない。左右二手に分かれて、緩い孤を描きながら、魔獣の胴に迫る。
「損な性格してるよな」
「うっさい、だったらひねくれた真似すんな」
からかい気味に言う杏子に対して、さやかは面白くもないといったように荒い声で返す。
「あたしは今日は、ちょっとテンション高いのよ！」
さやかを叩き落とそうとするように振るわれた葉は、あっさりとX字に切り刻まれて霧散した。
青い閃光が魔獣の胴に迫る――――
ドッ、ドッ、ドッ、ドッ!!
「えっ？」
「！」
胴から、根が、今度は弾か矢羽のように打ち出された。だが、それはより至近に接近しているさやかではなく、杏子めがけて放たれた。
「しまっ……」
さやかが声を上げかける。
魔獣が新たな手を打ち出すのは予想していた。だからさやかは半ば陽動のつもりで前に出た。
自動回復（オートリジェネ）を持つさやかなら、ピンポイントでソウルジェムを砕かれない限り、多少のことでは致命打にならない。
だが、魔獣はそのさやかを無視したかのように、杏子を狙った。
杏子が反射的に槍を引き、攻撃に構えかけたとき。

キィィイン
突如、根の先端が向きを変えたかと思うと、そろって一直線に、自らの胴を刺し貫いた。
「ウォォォォオン」
魔獣はのた打ち回り、耳障りな声を上げる。
「自分で自分を攻撃してる……どうなってんの？」
さやかは、信じられない光景を見て、目をぱちくりとさせる。
「さやかさん、今のうちですっ」
その声とともに、新たに現れた緑色の閃光が、一気に魔獣の胴に迫る。かと思うと、鋼色の強烈な斬撃が、魔獣の胴を鋭角に削り取る。
「このぉっ」
何枚もの葉が、接近してくるそれを叩き落とそうと迫るが、さやかの両手に握られた2本の剣が、それを次々に斬り割いていく。
シュバッ
最後の1枚をX字に斬り裂いたかと思うと、崩れ去る葉の向こう側から飛び出してきたのは、紅い閃光だった。
「これで、とどめだぁっ！」
雷を模ったかの様な槍の穂先が、頭部の花の中心に突きたてられる。
花は散るようにして消え去り、それにあわせて、胴も崩壊を始めた。
「オォォォォォオン……」
魔獣は断末魔をあげながら、塵さえ残さずに崩れ去った。
「終わりましたわね」
黒い霧が、急速に晴れていく。
さやかと杏子が地面に降り立つと、仁美が、重々しいロングアックスをバトンのように回して姿を消させながら、そう言いつつ近づいてくる。
「！」
黒い霧が晴れると、空にはまだ陽が残っていた。やや色を朱に近づけつつある空の下に広がったのは、新興住宅街の路地だった。
そして、その袋小路の終点に倒れているのは、キリスト教のそれと

思しき礼拝服を着た、さやかたちとそれほど変わらない年恰好の少女。
ただし、異様なのは、顔といい、捲くれた袖からのぞく腕といい、刃物で斬りつけられたような傷痕が無数についていた。
「魔獣の生む呪いの主は、こうやって残されますのね」
初めて目にする仁美が、どこか感心したように言う。
「この子……」
さやかが、その痛々しい光景に眉をひそめて、何かを言いかけたとき、
「悪い」
と、言って、2人を押しのけるようにして、杏子がその少女の脇にかがみこんだ。
「こいつのフォローは、あたしに任せてくんないか？」
「フォローって……アンタが？」
杏子の言葉に、さやかは、怪訝そうに眉をひそめる。
「そういう気分のときもあるんだよ」
そういいながら、杏子はひょい、と少女を抱きかかえると、すたすたと歩き出してしまう。
「あ、ちょっと待って……」
「さやかさん」
あわてて手を伸ばしながら追おうとするさやかを、仁美が咄嗟に腕で制した。
「何か事情がありそうです。お任せしてしまいましょう」
仁美は真剣な表情で言う。
「そりゃ解らないでもないけど……アイツ、DV親メッタ刺しとかしないだろうな……」
さやかは、一瞬仁美の顔を凝視した後、真剣に思い悩むようにそう言った。
「どうやら、〝本体〟はもう片付いてしまったようね」
黒い霧の晴れた彼方から、杏子と入れ違うようにして、マミが姿を現した。1丁だけ、その両手でスナイドル銃を抱えている。

「あ、マミさん」
さやかが、顔を上げて、仁美とそろってそちらに視線を向けた。
「あら？　佐倉さんは？　来ていなかったの？」
マミは、２人が立ちん棒している周囲をキョロキョロと見渡すようにして、そう訊ねた。
「とりあえず、たぶん明日は雨です」
「は？」
さやかの唐突な発言に、マミは経緯がわからず目を点にした。

「ホント、アイツがフォローだなんてさても珍しいこともあるもんだ」
夜――――美樹家、さやかの自室。
既にパジャマ姿のさやかは、呟くようにそう言った。
「杏子がどうして今のようになったのかは、もう聞いたんだろ？」
勉強机の上に、ちょん、と座った小動物姿のサッきゅんが、訊ねるように言う。
「うん……知ってることは知ってるけど」
「杏子も昔からああいう性格ではなかった。むしろマミよりも優しすぎるぐらいだったのさ、彼女は」
さやかが肯定の答えを返すと、サッきゅんはそう説明した。
「アイツが、ねぇ……」
「杏子を襲った悲劇は並大抵のものじゃなかった。人柄を変えてしまうのには充分だったんだ」
「そんなものかなぁ」
サッきゅんの言葉を聞いて、さやかは、そちらに視線を向けるでもなく、鏡台に向かって髪にブラシを入れながら、呟くように言った。
「ボクはどっちの杏子も見ているからね」
サッきゅんは、言いつつ、軽くため息をつく。
その口調が、少し重々しいものに変わる。
「荒んでた頃の彼女は、自分がこれ以上傷つかないように盾をつくっていた面もあるかも知れない。でも、盾を取り払ったからと言って、いまさら変わってしまった人格が元に戻るわけでもないって事なん

じゃないのかな」
「サッきゅん……ひょっとして、責任感じてる？」
　さやかは、意外そうにそう問いかけた。
「そりゃ、感じるさ。究極的には、ボクたちの都合の犠牲になったようなものだからね」
　サッきゅんは、そこまで言って、再度、ため息をつく。
「人間の心は複雑怪奇。今のボクたちには理解不可能かも知れない。でも、観察してその結果を見ることぐらいはできる。杏子の内面には昔の彼女がまだ残ってる。でも、だからと言って、変わってしまった後の性格が偽というわけでもない。どっちも真なんだと思うよ、ボクは」
「なんだか哲学的になってきたな……今日は仁美のことと言い、頭使いすぎて、疲れてきたかも」
　さやかは、そう言って、そのまま、ベッドに仰向けに、自らの四肢を放り出す。
「あ、そう言えばさ」
　ふぅ、と、一度息をついてから、目をぱちりと開けて、サッきゅんに煽りの視点から視線を向けつつ、思い出したように言う。
「あの魔獣、確かに自分で自分を攻撃したよね？」
　目の前で、ランの魔獣が自分の根で自分の胴を貫いたのを思い返しながら、訊ねるようにそう言った。
「ああ、あれは――」
　サッきゅんは、それなら解りやすい、というように、答える。
「仁美の、固有の能力（ちから）だよ」
「仁美の？」
　さやかは反射的に聞き返す。
「そう。彼女の願いは忘却だった。だからごく狭い範囲をごく短時間の間だけど、対象の記憶を操作する事ができるんだよ」
「へぇ、なんだか便利そう」
　サッきゅんの説明を聞いて、さやかは好奇心旺盛そうな表情をした。

「そうでもないよ。精神感応系は範囲や対象が限定されるし、効果も確実じゃない。杏子だってそうだけど、基本的にはそれ以外の能力で戦ってるだろ？　さやかのオートリジェネほど使い勝手はよくないよ」
「そんなものなのかなぁ」
　言いつつ、既に寝支度を終えたさやかは、一度身を起こして、ベッドの布団の中に潜り込もうとする。
「それじゃ明日も早いし、そろそろおやすみ……」
　そう言って、リングライトの引き紐を引いて蛍光灯を消し、それから布団に肩まで入った。

「……かちゃん、さやかちゃん……」
　……誰……？
　声に出して訊ねようとしたが、それはかなわなかった。
　靄がかかった、ぼんやりとした視界の向こう側で、誰かが自分に必死に呼びかけてくる。
　さほど長くない、やや強（こわ）い感じの髪を、サイドアップに近いスタイルでツインテールにした、小柄な少女。
　……あの子……は……
　さら、さら、さら、さら……
　砂時計が、幽かな音を立てて流れ落ちていく。
「泣いても笑っても、この時間軸が最後のチャンス」
　夜の室内、明かりもつけていない、藍色の闇が支配する中で、暁美ほむらは呟く。
「全てを救うか、全てを失うか……」
　カーテンも閉められていない窓から、満天の星空から淡い光が差し込んでくる。
「そう、貴方のことも――――」
「まどか……」
　一方は夢の中から寝言で。
　一方は覚醒した意識の下で自らの意思で。

口に出された言葉は、お互い知らず、聞こえるはずもないのに、重なっていた。

第11話・どうして

ジリリリリリリリリ……

「んー……」

美樹家、さやかの自室――――朝。

目覚まし時計の、それほど大きくはないが耳障りなベル音に、さやかはうっすらと目を開けつつ覚醒し始めると、右手をベッドサイドに伸ばして、音を立てる目覚まし時計を探る。

視線も向けずにそれを見つけてつかみ、ベル音を止めると、ワンテンポ置いてから、

「ふぁぁぁぁ……」

と、気だるそうに欠伸交じりの〝伸び〟をしつつ、背中の方から下がるようにして身を起こした。

「また……変な夢……」

さやかは頭を、手の、手首との付け根あたりで軽く叩きながら、まだ幾分寝ぼけ眼でそう呟く。

「さやかー、朝ごはんよー」

祖母がさやかを呼ぶ声がした。

朝食はベーコンエッグの乗ったトースト。それに牛乳をコップ1杯

「いくら女の子とは言え、そんな軽い食事でお昼まで持つのかい？」

祖母はどこか心配気に聞いてくる。

「やだなお祖母ちゃん、あたしこれでもしっかり食べてる方だって」

さやかは、一度口の中のものを嚥下してから、ケラケラと笑ってそう言った。

「そうね、最近は朝食、抜いてしまう子も多いんでしょう？」

専業主婦の母親が、シンクに向かったままそう声をかけてきた。

「んー、でもやっぱり食べないと力出ないしねー」

「こらさやか、行儀悪いわよ」

さやかが、言いつつ、全てを嚥下した後、指を舐めとっていると、戦

後生まれとは言えまだ厳格な躾が生きていた頃の生まれの祖母が、それをやや険しい声で嗜めた。
「ははははっ」
壮年期の父親は、自らも端を止めつつ苦笑する。
「このところさやかが明るくて、家の中がほっとするよ」
「え、そ、そんなに変わってるかな、あたし」
さやかは、どきりとして目を円くした。彼女は、家族の前ではありふれた日常を装っていたつもりなだった。
もっともつい先日、マミに泣きついたときに、
『何かひどいショックを受けていて――――ええ、今日はウチに泊めますので。はい、責任持ってお預かりいたします』
と、いうような電話を、さやかの家族はマミから貰ってしまっているのだが。
ちなみに、さやかの家人に、マミの声は、マミ本人ではなく、若い母親、ないしは最低でも大学生程度の姉だと思われていた。
「学校で、何かいいことでもあったのかな？」
「え、別に特別な事は……なかったと思うけど」
さやかは、惚けるように父親から視線を逸らしつつ、そう言った。
実際には特別な事はありまくりだが、機嫌が良くなるような〝いいこと〟があったかと言われると、そんな事はなかったような気もする。
「もう、お父さんったら、そんな野暮な事聞かなくたっていいでしょうに」
母親はそう言って苦笑しつつ、
「さやかのいいことって言ったら、上条くん絡みの事よねぇ？」
と、一番俗物的な発言をした。
「あ……」
言われて、さやかはむしろ、自分が落ち込むと言うより、家族に対して気まずそうな表情になって、視線を泳がせた。
「あー……えーと……――――」
さやかは、どう反応したものかと逡巡し、視線を泳がせ続けるもの

の、
「その、恭介には、振られちゃった」
と、結局あっさりとぶっちゃけた。
ピシッ、と、一瞬その場の空気が凍りつき、それから気まずい雰囲気が今度はその場全体を包み込む。
「振られたって言うか、まぁちょっと、お互いゴタゴタしてて、その、自然解消的に」
さやかの、妙に乾いた声が食卓に響く。
「そ、そうか」
「ご、ごめんなさいね」
両親は、あからさまに「地雷を踏みましたー」という態度で、慌ただしく動き始める。
「さ、さて私はそろそろ仕事に出ないとな」
「あ、今準備しますね」
「って、あからさまに動揺しなくていいってば！」
さやかは、とたんによそよそしい態度を取る両親に向かって、眉間にしわを寄せた苦笑で声を荒げる。
「まったく、やーっと割り切れてきたところだって言うのに」
そそくさと玄関に行ってしまった両親に対して、さやかは憤りの声を上げつつ、軽くため息をついた。
「さやか」
祖母が、さやかの傍らに立ち、声をかけてきた。
「何？　お祖母ちゃん」
さやかは、素の表情で何気なしに祖母を振り返った。
「お前ぐらい若いとまだ解からないだろうけどねぇ、人の縁って言うのは複雑に入り組んでいるものなんだ。人はね、出会いと別れを繰り返して成長していくものだよ。一時悲しい別れがあったとしても、ずっと後になってから思い返せば、大切な思い出になったりするものなんだ」
祖母は、穏やかな表情と口調で、噛み砕くように言って聞かせた。
「ん、大丈夫、もう解かってるよ、お祖母ちゃん」

さやかは、そう言って苦笑して見せた。
「さてと、あたしも学校、行かなくっちゃね」
そう言って、さやかは食卓から立ち上がった。
行ってきます、の挨拶。
いつもの登校路。
――――の、はずだった。
「あれ？」
さやかは気がつくと、新興住宅地の、ある1軒の家の前で立っていた。
「はて……さやかちゃんは何でこんなところにいるのでしょうか？」
右の人差し指で自分のこめかみの辺りをつついて、小首をかしげる。
とりあえず、何か意味があるのかと思い、その表札を見る。
姓の部分は「鹿目」。その後、名前は「和久」「詢子」と2行に分かれて書かれ、さらにその下、1行空けて「タツヤ」と書かれていた。
「……」
1行空けている理由は、おそらく先の2人が夫婦で、最後の名前が息子だから、と言ったところなのだろう。
だが、さやかはその空白に、どうしても違和感を感じてしまっていた。
ここに入る名前を、あたしは知っていたような気がする。
他人の家の表札に無礼だとは思ったが、指でその空白の行をなぞってみた。
「って」
その仕種で、腕時計の文字盤が眼に入り、我に返る。
「やばいやばい、こんなところでいつまでものんびりしてるわけにいかないって」
さやかは、慌てて学校へ向かう道を駆け出した。
「どうかしたのですか？　今日は少し遅かったようですけれど」
学校に着くと、自分の席に着くなり、仁美が心配気に声をかけてきた。

「んー、いや、ちょっと回り道しちゃってさ……」
さやかは、自分でもよく解からないことなので、そう言う以外説明のしようがなかった。
だが、
「はぁ……」
と、仁美は一旦は納得しかけたものの、急に表情を険しくし、さやかに問い質す。
「まさか、また何か大事なことを隠されているのではないですわよね？」
「え？　あ、いや、今回のは別に、ほんとに大した事じゃないんだって」
さやかは、仁美の剣幕に驚いて一瞬表情を引きつらせた後、両手をばたばたと振る仕種をしながら、そう言った。
「ただ、このところ変な夢を見るんだよね。結構前から、なんだけど」
「変な夢、ですか？」
さやかが表情を引き締めて言うと、仁美はキョトンとして鸚鵡返しに聞く。
「んん、それが起きちゃうとあんまりはっきり覚えてないんだよ」
さやかは、仁美から視線を外して己の正面に顔を向けつつ、僅かに顔を強張らせて言う。
「ただ、なんかこう、忘れちゃいけないことがあって、けどそれを覚えていたのかもはっきりしないような、気持ち悪さがあるんだよね」
「それは……確かにスッキリしませんわね」
仁美も、考え込むような、難しい表情をしてしまう。
「あ――――」
そこでさやかは、記憶の隅に引っかかった単語を思い出し、何の気なしに呟く。
「まどか」
ガタッ
不意に、２人の背後で物音がした。
さやかたちが振り返ると、いつの間にか登校していたほむらが、机の中に移そうとしていたカバンの中身を、思い切り床にばら撒いてし

まっていた。
「あらら……」
「大変ですわ」
とるものも取りあえず、さやかは立ち上がり、ほむらが落とした教科書やノート、筆記用具などを拾い集めようとする。一瞬突っ立ったままになりかけた仁美は、そのさやかの姿をチラリと見て、追いかけるようにして自分も屈んだ
『美樹さやか』
『！』
テレパシーでさやかの頭に響いてきたのは、ほむらの声だった。
さやかは、一瞬だけ引きつって手が止まるが、すぐに何事もなかったかのように再開する。
ほむらの方は、最初から平然と自分の物を拾い集めていた。
『放課後話があるわ。貴方の夢の件で』
『……』
さやかは僅かに逡巡する。
『アンタ……何を知ってるの？』
さやかは、ほむらが床にぶちまけてしまったものを拾い集めながらも、視線はそれらに向けたまま、表情をにらむように険しくする。
『それは、貴方がどこまで私に話してくれるか次第』
『……』
ほむらの言い回しに、さやかは不快さを隠しもせず、
『解かった、行ってやろうじゃない』
と、挑発し返すように返事をした。
『私も御一緒させていただいてよろしいのですわね？』
テレパスでの会話に割り込んできた”声”に、今度はほむらの方が一瞬引きつって、動きを止める。
視線を上げると、”声”の主が、険しいとまではいかないが、真摯な視線をほむらに向けていた。
『志筑……仁美……まさか……貴方も魔法少女に？』
『ええ、つい先日のことですけれど。これからよろしくお願い致しま

すわね、暁美ほむらさん』
絶句しかけるほむらに対し、仁美はどこか挑発的な挨拶を返した。
『そ、そう……別に……いえ、いてもらった方がいいわ』
『畏まりましたわ』
丁度2人のやり取りが終わり、ほむらの席の片付けが終わった頃、
キーンコーンカーンコーン……
「はーい、HR始めるわよ、席についてー」
と、担任の早乙女和子が本鈴と共に教室に入ってきて、生徒たちに声を張り上げた。

放課後――――
「それで、なんなの話って」
見滝原中学校、校舎の屋上。
さやかと仁美が塔屋部から出て、やや不機嫌な空模様の下に来たとき、既にほむらはその出入り口の正面を見据えるようにして、5mほど離れた位置に立っていた。
さやかは軽く足を開いた姿勢でほむらと正対し、仁美はいつものようにカバンでスカートの前を押さえるようにしつつ、そのさやかの後ろに控えるように立った。
「貴方、今朝言ってたでしょう?」
「だから、その夢がどうしたのかって聞いてるの」
疑問系で切り出すほむらに対して、さやかは焦れたように聞き返す。
「それだけじゃなくて、貴方はあの時、確かに言ったはずよ」
「だから、何を――」
「鹿目まどか」
更に問い質そうとするさやかの感情的な声を遮って、ほむらははっきりと口に出した。
ドクン
「!?」
それを聞いて、さやかはなぜか、全身、特に頭の中が過熱するよう

な感覚を覚えた。
「やはり、覚えているの？　鹿目まどかを？　美樹さやか、あなたは……！」
ほむらは、さやかの反応を見るとそれまでの態度が一変し、切羽詰ったように追求する。
「う、うう……」
さやかは、脳内の血流が一挙に増大したような感覚を覚え、表情を歪ませてよろける。
「さやかさん、大丈夫ですか？」
慌てて、仁美がさやかの身体を支え、右手でさやかの右手を握る。
さやかは、一旦仁美に向けて笑顔を作り、こくんと頷いて見せてから、
「そんな名前、――知らない」
と、ほむらの方を見てそう言った。
「じゃあ、なぜこの名前を口にしたの？　朝」
ほむらはさやかの様子を心配した風もなく、畳み掛けるような早口で更に問い質す。
「知らないけど、知ってる――覚えてないけど、忘れてない――なに、この、感覚、は……、まどか……鹿目まどか……？」
さやかは、ほむらの問いかけに答えるというより、自問自答するように、表情を歪めながらそう言った。
「どうして……――――」
立ち尽くしたようになっていたほむらは、血が出そうなほどに握り締められた拳をわなわなと震わせていた。やがて、呻くような声を出したかと思うと、それに続いたのは、周囲を振るわせんとするほどの絶叫だった。
「どうして、貴方なのっ!?」
その大声に、仁美は一瞬、驚いたように身をすくめる。
だが、当のさやかは、ほむらの様子など目に入っていないかのように、うわ言のように呟く。
「まどか……鹿目まどか……」

「あたしの……一番の親友……」

滝元市。

小さな教会の礼拝堂で、1人の少女が祈りを捧げている。

「なかなか感心な事ですね」

瞑想して祈りを捧げていた少女に、神父と思しき壮年の男性が声をかけた。

「何か、迷っている事でもおありですか？」

聖書を手にした神父は、そう言って、少女に優しげに声をかけた。

「いえ――」

少女は顔を上げる。

赤毛を肩口にかけて前におろす三つ編みにした、生来なら愛らしいであろう少女だったが、その顔や、袖口から見える手には、鋭利な刃物で深く斬りつけられたような、痛々しい無数の傷跡が残っていた。

しかし、それでも少女の表情は、晴れやかな笑顔になっていた。

「逆です」

「ほう」

少女の嬉しそうな答えに、神父は更に破顔する。

「私、ずっと心の中にわだかまってた事があって……」

「ふむ」

「でも、そうしたら、昨日、夢の中で、言ってくれたんです。もう気にするなよ、って」

傷跡だらけの少女はそこまで言って、照れくさそうに苦笑した。

「それは、主の御使いが、ですかな？」

「はい――」

神父の問いかけに、少女は答えつつ、夢ともつかない記憶の中から、その姿を思い出す。

自分を抱きかかえて笑う、真紅の天使の姿を。

「多分、そうだと思います」

「なるほど」

神父は、穏やかに笑ったまま、少女の言葉に応えつつ、キラキラと

眼を輝かせるその姿を見ていた。
すると、小さな礼拝堂の窓の外で、オートバイの爆音がし、遠ざかっていくのが聞こえた。
「！」
少女がはっと気がついて、窓によると、外開きの窓の桟に、手紙ともいえない、メモ用紙に走り書きした簡単な文が残されていた。
少女はそれを手に取り、その文面を見た。
『これからも、元気でやれよ。
天使になりきれなかったバカより』
杏子は、傾き始めた陽が俄かに茜色に染め始めた空の下、背景に滝原湖の見える幹線都道の道路橋を、滝元市側から見滝原市側に向かって、2サイクルバーディーを走らせていた。
ヴィンテージスタイルのヘルメットを被ったその表情は、どこか寂しくもありつつも、口元で満足げに笑っていた。

「ん、うう……ん……？」
さやかが眼を覚ますと、眼に入ってきたのは、白い無機質な天井と、横たわっている自分を他から遮るように張られたカーテンだった。
「ここ……は……？」
一瞬、病院を連想したが、天井の材質が毎日のように見ているものであることに気がつく。
「あ、保健室……？　なんで……あたし」
さやかが、すぐには状況が認識できずに自問自答するように呟く。すると、シャッ、とカーテンの端がわずかにずらされ、
「あ、気がつかれましたのね」
と、仁美が顔をのぞかせて、さやかの状況を確認し、軽く胸を撫で下ろすようにため息をついた。
「！　まどかは？　まどかは大丈夫なの？」
さやかは、はっと我に返ったように覚醒すると、仁美に向かって問いただす。
「落ち着いてくださいまし！　〝鹿目まどか〟はここには居られませ

んわ！」
　仁美は、慌ててさやかに駆け寄り、冷静さを取り戻させようと声をかける。
「え……あ……？」
　仁美の言葉を聞いて、さやかは一瞬、呆然とする。
「さやかさんが倒れられたとき、あの場にはさやかさんと、私と、暁美さんしかいませんでしたわ」
「あ……そうか……」
　仁美の言葉を聞いて、さやかはようやく状況を正しく認識した。
「一体、なにがどうなっているのですか？」
　仁美はさやかに訊ねる。
「暁美さんも、あの後半狂乱になって、私が止めるのも聞かずにどこかへ行ってしまわれましたし。なにがどうなっているのか、私にはわけがわかりませんわ」
　仁美は、そう言って困惑気な表情でため息をつく。
「いたんだよ、あたしの隣に」
　どこかしんみりした表情で、さやかが呟くように言った。
　仁美は、それを聞いて、視線をさやかに向けて上げる。
「鹿目まどか……いつ頃からか……まではまだはっきり思い出せないんだけど、確かに、あたしの隣にいた……友達で、臆病なくせに他人をほっとけなくて、バカみたいに優しくてさ……」
「どこか遠くにいる、お友達なんですの？」
　さやかの独白のような言葉を聞いて、仁美はそう訊ねた。
「……今は、多分、そうだと思う」
「思う？」
　さやかの自信なさ気な言葉に、仁美は思わず眉を潜めた。
「あたしの中の鹿目まどかは、見滝原中の制服を着てて、今もすぐ傍にいて……そう、仁美、アンタとも一緒にじゃれあってる――そんな存在」
「私、も……？」
　仁美はいっそう怪訝そうな表情をする。

「あはは……こんな事いきなり言われても信じられないよね……」
さやかは、気弱げに、誤魔化すような苦笑をしながらそう言った。
「確かに、そうですけれども――」
仁美は、困惑気にそう言ってから、
「けれど、暁美さんのこともありますし、無視もできませんわ」
と、視線をさやかに戻して、はっきりと言った。
「あ……うん、そっか……」
さやかは、苦笑を消して、弱ったような表情でそう言ったが、
「ありがとう、仁美」
と、顔を上げて仁美と視線を合わせ、笑顔になって礼を告げた。
「気にしないでくださいまし。さやかさんは、私にとって大切なお友達なのですから」
仁美は、そう言ってくすくすと苦笑する。
「あたしも――」
さやかは明るい表情になって、言う。
「アンタと、友達やめなくて、良かった」

「はぁ……アタシとした事が……」
住宅街近くの道路を、杏子はバーディーを推して歩いていた。
「ガス欠とは……なにやってんのかなぁ」
杏子は、重量物でしかなくなったバーディーを推しつつ、ため息交じりにぼやく。
「ん……？」
特に何かきっかけがあったわけでもなかった。
たまたま前を通りかかった公園の中に、小さな男の子が1人で遊んでいる事に気がついた。
周囲を見渡すが、他に人影が見当たらない。
「どーれ、しょーがねーな、と」
杏子は上手く車止めを避けてバーディーを公園の中に入れると、その入り口あたりで傍らに寄せて、スタンドを立てて駐輪する。
「おーい、坊主」

ヘルメットを脱ぎながら、杏子は男の子の背後から声をかける。
「あー？」
3歳ぐらいだろうか、男の子は声で杏子に反応しつつも、一心不乱に何かをやっている。
「どうしたー、1人で遊んでるのかー？」
杏子はそう言いつつ、男の子がなにをしているのか、覗き込んだ。
男の子は非舗装の地面に、細い木の枝で絵を描いていた。
「!?」
その、男の子が描いている絵を見て、杏子は目を円くした。
男の子が描いていたのは、アニメでよくある、典型的な魔法少女のような、フリルのついたドレスを着た女の子。
それは、所詮未就学の子供が描いた落書きのレベルでしかない。
なのに、杏子にはその絵のディテールの細かいところまでもが、その意識の中で再現される。
それどころか、当然ただの線画でしかないのに、写真のように彩づいて見えた。
杏子は、まるでその絵に吸い込まれるような感覚を覚えた。杏子自身には数分以上の時間に感じられたが、実際には2・3秒の時間だった。
「はっ」
のけぞるようにして我に返る。
「な、なあ坊主」
杏子は、姿勢を立て直すと、男の子に声をかける。
「なにー？」
男の子はようやく杏子の方を振り返って、満面の笑顔で返事をした。
「い、いや、上手く描けてるなーって」
無駄にドキマギとしながら、杏子は男の子に訊ねた。
「まどかー」
男の子は無邪気そうな声で答える。
「まどか？」

「うん、まどか！」
杏子が鸚鵡返しに聞き返すと、男の子はもう一度元気よく答えた。
「そうか、まどかって言うのかー」
ご機嫌そうな男の子に対して、杏子も歯を見せて笑った。
「あ、っと、そうだ」
杏子はポケットから、プリペイド仕様のＡＵ・ＳＨＡＲＰ　Ｓｐｏｒｔｉｏを取り出す。
「この絵、写真撮らせてもらってもいいか？　いいだろ？」
携帯電話のカメラを起動しながら、杏子は男の子に向かって訊ねる。
「うん、いーよー」
男の子は、特になにを考えた様子もなく即答した。
「うし」
杏子はタッチパネルのシャッターボタンを指で叩き、男の子が地面に描いた絵を撮影した。
「おーい、タツヤー」
杏子が撮影した映像を保存し終えたとき、少し離れたところから声がかけられてきた。
「ああ、こんなところにいたのか」
男の子の父親と思しき男性が、そう言いながら小走りに駆けてきて、そう言った。それから、屈んで手を伸ばし、男の子を抱き上げる。
「すみません、何かご迷惑をおかけしませんでしたでしょうか？」
男性は、穏やかな様子で杏子に問いかけるように言う。
「いや、別にそんな事はねーよ」
杏子は、携帯を右手に握ったまま、頭の後ろに腕を組んで、笑い返しつつそう応えた。
「そうですか、すみません、ありがとうございました」
男性は再度杏子に会釈してから、踵を返して、杏子が入ってきた方とは逆側の出入口の方に向かって去って行った。
「さて……と」
意気揚々として、杏子もその場を立ち去ろうとしたが、

「……ガソリン、調達してくっかなぁ……」
公園の入口のところまで戻ったところで、ガス欠したバーディーの姿を見て、やや俯きがちの姿勢で肩を落とし、ため息をついた。
巴邸――――。
「鹿目まどか……ね……」
その名前を聞いたマミは、肘を突くように口元に手を当てて、唸るように逡巡する。
「マミさんも心当たりは、無いですよね……」
ガラストップのテーブルに向かい合うようにして、さやかと仁美が並んで座っている。
テーブルの上には、人数分の、明らかに手製のアップルパイと紅茶の入ったティーカップ。
問いかけたのは、さやかの方だった。
「うーん……言われてみると……あるような……ないような……」
マミは、口を軽く尖らせるようにして、難しい表情をする。
「巴先輩も、なのですか？」
仁美は、軽く驚いた表情で聞き返す。
「マミでいいわよ……」
マミは、仁美に向かってそう言ってから、
「美樹さんのようにはっきりした意識があるわけではないのだけれど……ただ、言葉の響きとして引っかかるのよねぇ……」
と、複雑そうな表情をしたまま、そう言った。
「多分」
それまでベッドの上にいたサッきゅんが、そう言いながら、ストッとテーブルの上に降り立った。
「全てのキーワードを知ってる、或いは己自身がキーなのか、どちらかだと思うけど、それを持っているのが――」
「暁美ほむら」
サッきゅんの言葉の先を制して、仁美が言う。
「そうですわね？」

「単純に推測すると、そう」
仁美の問いかけるような言葉に、小動物姿のサッきゅんはそう言って頷いた。
「けど、どうも彼女が中心じゃないような気もする」
「え？」
サッきゅんの困惑気な言葉に、3人が揃って聞き返すような声を発した。
3人とも、その推測が正しいと思っていたからだ。
「考えても見て欲しい。暁美ほむらの場合は、言動から考えれば〝最初から全部知っていた〟。これももちろん不自然だけど、もっと不自然な事があるじゃないか」
「え？」
「どういうこと!?」
「！」
さやかはどこか間の抜けた声を出し、マミは驚いたように聞き返したが、仁美だけは、それに気がついて視線を鋭くし、その対象に向けた。
「でも、とりあえず今は暁美ほむらだ。彼女から事情を聞きださない事には何も解からないし、何も始まらない」
サッきゅんは、小動物姿で器用に真摯な表情をし、そう言った。
「確か、佐倉さんが、その暁美さんと面識があったはずよね？」
マミが確認するように言うと、
『ああ、居場所もわかるし、連絡も取れるぜ』
と、杏子がテレパスで割り込んできた。
『なんなら、今この後からでも呼び出そうか？』
『いいのですか？』
仁美が訊き返す。
『すぐにでも……と言いたいとこだけど、1時間ほど待ってくれ』
杏子はそう返事して来た。
『なにやってんの？』
さやかは素に聞き返した。

『ガススタのジェリ缶でガソリン運んでる』
『は？』
間の抜けた聞き返しをしたのは仁美だった。
さやかは呆れた表情でため息をつく。
『なにガス欠なんかこいてんのよ、だっさ』
『う、うるせー』

幹線県道の交差点――――夜。
かつてさやかと杏子が争いかけ、その結果ソウルジェムの秘密の暴かれた歩道橋。
まだそれほど遅い時間ではないが、やはり下に横断歩道があるせいで人の姿はまったくと言っていいいほどなく、暗い。
その大歩道橋の中心で、既に真紅の装束を身に纏った杏子がいた。ただし、まだその仕込み槍は手にしていない。
「頭数に頼るなんて、貴方らしくないわね、佐倉杏子」
既に陽の落ちた暗闇の中から、やはり、黒に近い紫の装束を纏ったほむらが現れた。左腕に小さな円い盾を装備しているものの、やはり武器の類は手にしていない。
「本当に話があるのはアタシじゃないからね」
杏子は、悪びれもせずにそう言った。
「その割りには、貴方以外はみんな遠巻きに見ているだけのようだけれど」
ほむらは、それが目的と言うより、杏子にその仕種を見せ付けるように、周囲を見渡す。
「巴マミも銃を呼び出していない。志筑仁美の武器が気になるけれど、おそらくは全員、まだ武器を手に持っていない」
「へぇ」
ほむらの淡々とした発言に、杏子は意外そうな声を出した。
「何でも知ってるアンタでも、解からないことがあるんだな」
「……」
挑発するように言う杏子に対し、ほむらはただ黙ったまま、鋭い視

線を向ける。
「まぁまぁ、２人とも」
　そこへ、小動物姿のサッきゅんが姿を現した。
「っ……」
　ほむらは反射的に構える。
　左腕の円い盾のようなものに手を突っ込んだかと思うと、中からオートマチックの拳銃を取り出した。ＩＭＩ　デザート・イーグルＩＩ　・３５７。
「キミがボクに敵意を持ってるのは解かってる。けれどボクを殺しても何も解決しないよ」
「どうかしらね」
　ほむらはそう言って、ガンサイトにサッきゅんを捉え、引き金に指をかける。
「キミがボクを何かと勘違いしているのは最初の頃から解かっていた。それがなんなのか、ずっと解からなかったけど、よく思い出してみたら、キミ自身がすでにその答えを口にしていたんだ」
「黙りなさい」
「それでも君は撃たない。撃っても無意味だと思ってるからだ。ボクの推測が正しければ、ね」
　ほむらは低い声で脅すように言ったが、サッきゅんはそれを確信しているかのようにずけずけといい、堂々と振舞う。
「ボクがさやかと契約したとき、キミはこう言った」
『どんな願いを叶えたのか知らないけれど、どんな願いもいずれ裏切られるわ』
「……この言葉で気付くべきだった。ありえない事だと除外してしまったのがいけなかった。キミみたいなイレギュラーを分析、考察するのに、例外を作ってはいけないのに、だ」
「つまり……どういうことだよ？」
　焦れたように問いただしたのは、サッきゅんの背後に立っていた杏子だった。
　サッきゅんはほむらの方を向いたまま、続ける。

「まるでボクたちが、魔法少女が絶望することをしているかのような言い種。……確かに、杏子みたいに裏目に出ることが無かったわけじゃない」
「うるせーな」
　杏子が抗議の声を上げるが、サッきゅんは構わずに続ける。
「けれどそれはボクらの本意じゃないし、むしろそうなられると困る。けれど、以前それを実際にやってた連中がいた」
　サッきゅんはそう言って、ほむらの視線を見据え直す。
「暁美ほむら。キミはボクの事を、〝インキュベーター〟だと思ってるんじゃないのかい？」
「!?」
　ほむらの表情が僅かに変わる。
「なんだい、そりゃあ……」
　杏子がどこか間の抜けた声で聞き返す。
「アンタたちの仲間か？」
「違うよ。いや、種としては縁戚にあたるらしいけど、文明の系統樹は違う根にある惑星の住人。その彼らが作り出した、アストラルエネルギーを〝熱量換算可能なエネルギー〟に変換する為の生態端末さ」
「それって」
　暗がりの中から、さやかが姿を現した。
「以前言ってた、宇宙を滅ぼしかけた連中のこと!?」
「そう。滅びたはずだった。だから可能性から除外して考えていた」
「でも、そうだとしたら暁美さんは、そんなに昔から生き続けている存在だということなのですか？」
　仁美が姿を見せ、信じられないと言ったように、誰にともなく問いかける。
「まっとうに考えればそう言うことになるね。でも、いくら魔法少女でもそこまで生きることは普通は不可能だよ」
　サッキュベーターのソウルジェムシステムによって誕生した魔法少女は、代謝が衰えることがない上、本来細胞の入れ替わりのない脳も再生可能なため、肉体が完成に近づく〝成長〟はするが、それを終

えた後の〝老化〟は常人に比べて非常にゆっくりしたものになる。意識してそうするなら、ほとんど止めてしまうことも出来る。
　とはいえ世に不変なものはない。いずれはソウルジェム自体の劣化により、回収した感情エネルギーの処理と魔力の抽出が鈍くなり、肉体のほうもそれに伴って劣化を始め、〝死〟に至る。それは悲劇でもなんでもなく、そうでなければならない話なのだ。
「それとも、不老不死を願ったのかな？」
　サッきゅんはそう言って、最後にほむらに問いかけるように言う。
「貴方は……」
　ほむらは、俯き加減の姿勢で表情をゆがめつつ、ギリ、と奥歯を鳴らしてから、その険しい表情のまま顔を上げて、サッきゅんを睨み付ける。
「そういう貴方は一体何者なの!?　姿はインキュベーター達にそっくりで、なのに自ら魔法少女に変身して、契約した魔法少女の破滅を望まないかのようなことを言って！」
「ボクたちは――――」
　サッきゅんは答える。
「母胎に返す者（サッキュベーター）。〝熱量換算可能なエネルギー〟の人為的かつ不当な供給により、宇宙の〝物理的死〟を回避するため、その根源である、知的生命体の負の感情エネルギーが具現化した魔獣から、それを回収している」
「宇宙の生死と地球の平和、両方にとっての脅威である魔獣、それと戦える存在が魔法少女」
　サッきゅんの言葉を受け継ぐようにして、マミが姿を現した。
「だからサッキュベーターは私たちの絶望を望まない。そして私たちが絶望する言われもない」
　言いつつ、わずかに睨むように、ほむらに視線を向けている。
「システムの〝外見〟や、使う生態端末の設計が似ているのは当然と言うか、当時、状況が切羽詰っていたから、彼らのシステムの大元を流用して、そのエネルギーの流れる方向を変えて造ったものだからさ。例えるなら発電機と電気モーターの関係だね」

発電機と電動機の構造は原理的に同一である。軸の回転から電力を生み出すものを発電機、電力から運動エネルギーを生み出すものを電動機（モーター）と呼んでいるに過ぎない。
それを端的な形で使っているのが鉄道における電気車だ。今日の日本の電車のほとんどは、減速時に、空気を使って車軸を物理的に制動するブレーキのほかに、モーターを発電機として電気を発生させる事で、車軸の回転に対する抵抗とする制動機構を備えている。かつては抵抗器を使って熱として棄ててしまう〝（狭義の）発電ブレーキ〟が主流だったが、現在はそれを架線に押し返すことで別の電車・電気機関車や設備を減速用の負荷にする〝回生ブレーキ〟が主流になっている。とはいえ根本的な原理は変わっていない。
「さて、ボクは自分の正体を明かしたよ」
信じられないと言ったように、立ち尽くしてよろめくような様子のほむらに対して、サッきゅんが言う。
「そろそろボクたちにも、キミの正体を明かしてもらっても良いんじゃないかな」
「……」
ほむらは、わずかな沈黙の後、
「そうよ……」
と、静かに言い始める。
「私はインキュベーターと契約した魔法少女。だけど、不老不死の身体で生きてきたわけじゃないわ」
「？　どういうこと？」
さやかが問い質す。
「そのインキュベーターって、生き残りがいるってことなの？」
「それも違うわ」
しかし、ほむらは即座に否定の答えを返した。
「わけがわからないよ」
サッきゅんが困ったように言う。
「私の願いは〝やり直す事〟。その為に限定的な時間移動能力を身につけたの」

「！　そうか！」
　それまで飄々としていたサツきゅんが、俄かに興奮したような声を上げた。
「キミは別の可能性を持つ時間軸から来た、テンテレポーターだったのか！」
「どういうこと？」
　サツきゅんの言葉に、さやかが訊き返す。
「彼女は抽象的時間移動能力を使って、過去の自分に割り込んでいたのさ。でも、その時点で彼女自身がユニークな存在になってしまう以上、タイムパラドックスが発生する。彼女が戻れる過去は、常に別の可能性の時間軸なのさ。おそらく彼女が最初にいた可能性の時間軸では、彼らは滅亡しておらず、ボクらは存在していなかったんだよ」
「なんだかややこしいことになってきたわね……」
　さやかは右の人差し指で自分の頭をつつきつつ、複雑そうに表情をゆがめる。
「いいえ、多分それであってるわ」
　ほむらが言う。
「私たちの地球はインキュベーターの食い物にされていた。私はこの能力でその運命と戦い続けたわ。ある人物を助ける為にね」
「それが、鹿目まどか、ね？」
　マミが、穏やかな口調で、しかし問い質すように言う。
「ええ、そうよ。でも、結局それは叶えられなかった。まどかは、最後は自分を犠牲にして、魔法少女の絶望を受け止める為の〝円環の理〟を作り出して、宇宙の法則を書き換えたの」
「そんな、無茶だよ！」
　悲鳴のような声を上げたのは、サツきゅんだった。
「鹿目まどかは、私の時間移動が原因で、因果律が収束して、魔法少女の契約によってとんでもない奇跡を起こせる可能性を持ったわ。それを使ったの」
「そうだとしても――」
「そうよ！」

反論しかけたサッきゅんの言葉を遮って、ほむらは声を荒げる。
「全部終わったと思ってた。世界からまどかはいなくなったけど、私との絆は残った。一番いいシナリオだと思ってた。それなのに――」
ほむらは、ヒステリックに声を荒げる。
「『グリフレットの別れ』によって、その世界は滅亡したのよ！」

第12話：失敗するつもりなんか、ないんだもん

「人は所詮神にはなれない」
　サッきゅんが、深刻そうな表情で言う。
「宇宙の理を作り変える――神ならぬ身でそんな事をすれば」
「いや、神にさえ宇宙すべての因果を書き換える事など不可能かもしれない」
「意識を持って創物を為すものに、1つのエラーもなく、万物の法則を書き換えることなど不可能だ」
「無理にそれを為そうとすれば――――」

「その先にあるのは、破滅だけだ」

「暁美ほむら。キミの主張する通りだとすれば、かつてインキュベーターたちは、魔法少女のソウルジェムが、その抱く感情が希望から絶望に変わるときに発生する相転移の――おそらく、より厳密に言えば相転移によって引き起こされる、所謂〝ひも理論〟現象によって得られるエネルギーを、〝熱量換算可能なエネルギー〟として回収していた、ということになるけれど、そこまでは良いかな？」
　小動物姿のサッきゅんは、落ち着きを取り戻した様子で、ほむら問い質す。
「インキュベーターはもう少し端折っていたようだけど……ええ、その通りよ」
　ほむらは、表情が見えない程度に俯いたまま、そう言った。
「そして、鹿目まどかの起こした奇跡によって、それは書き換えられ、相転移を引き起こしたソウルジェムは、もともとは鹿目まどかという存在だった、〝円環の理〟という概念に基づいて消滅するようになった」
「ええ、間違いないわ」
　サッきゅんが言葉を続けると、ほむらは、俯いた姿勢のまま、ほぼ垂直に下ろした左腕の肘の辺りを右手でつかむ姿勢で、肯定の返事を

返した。
「それなら、消滅したソウルジェムが抱えていた、宇宙を満たすほどのエネルギーはどこへ消えてしまったんだい？　エネルギーと質量の総量は、そういう特別なことをやらかさない限りは、常に収支ゼロのはずだ。一度概念になってしまった存在に、〝熱量換算可能なエネルギー〟を解放し昇華することは出来ない。一時的にどこかへ溜まって昇華されるにせよ、それでも膨大な量がどこかへ溜まることになる」
「なんだか難しい話になってきたわね……」
さやかが、話についていけなくなりかけて、苦い顔でそう言った。
「難しいついでに、ボクの仮説を披露しようか」
サッきゅんは、そう言って話し始めた。
ひとつの宇宙を創るほどの奇跡を起こせる、という因果に対して、その鹿目まどかがこの世界――宇宙で行ったことは、ただひとつ、エネルギーの導路を造っただけ。これだけだとあまりにささやか過ぎるんだ。
おそらく、より重要なのは、その導路の先に、エネルギーを、あるいは一時的に溜め込んでおく何かが作られたことだ。それが、鹿目まどかが起こした奇跡の本体とも言うべき部分なんだろう。そして、暁美ほむらの言葉が正しいとするなら、それはおそらく、多元宇宙の存在する三次元上に設けられた小宇宙。
「小宇宙？」
マミが、鸚鵡返しに聞き返すと、
「宇宙がその起源から、所謂ビッグバンを起こして、私たちが存在するこの宇宙のようになるまでの間の存在ですわ」
と、マミが視線を向けているのとは別の方向から、仁美がそう答えた。
サッきゅんは頷いてから、さらに続ける。
けれど、人為によって創られたその小宇宙は、それが許されない。物質もエネルギーの循環則もなく、ただタンク替わりに感情エネルギーを溜め込んでいく、歪な存在。でも、そんなものが正常に存在し

続けられるはずはない。
と、するなら、どこかで内部に溜まったエネルギーを放出する必要がある。
外部の宇宙、分けてもこの地球と密接な関係にあるその小宇宙は、視覚的に表現するのは難しいけれど、概念的に言うなら、キスするように接触するんだ。そうして生まれた結節点から、この宇宙に向かって、エネルギーのガス抜きが行われる。流れ込んだ負の感情エネルギーは、この宇宙に存在しているシステムに従って、魔獣になる――

――

「それが、最大の魔獣『グリフレットの別れ』の正体だ」
「あくまでボクの仮説だけど、明らかに間違っている点はあったかい？」
「いいえ。ほぼその通りよ。実際に〝円環の理〟が小宇宙であるかどうかまでは、わからないけれど、『グリフレットの別れ』は、〝円環の理〟とこの世界の結節点。それは間違いないわ」
サッきゅんが問いかけると、ほむらは険しい表情のまま、肯定の言葉を返した。
「それにキミの話を聞く限りじゃ、その因果の書き換えが行われた後も、インキュベーターたちは存在したんだろう？」
サッきゅんは、小動物姿の身体の表情を深刻そうにして、ほむらに聞き返した。
「……そう。相変わらずエントロピーの増大を抑制する為のエネルギーを回収していたわ」
「！　それじゃ」
反射的に声を上げたのはさやかだった。その表情を睨むように険しくする。
「魔法少女の魔女化のリスクが低減された分、それまでよりも効率よく回収する事ができた」
「そして、宇宙は破滅を迎えた」
ほむらの言葉に、サッきゅんが静かな口調で付け加える。

すると、ほむらは顔を上げ、睨むような目をサッきゅんに向けた。
「全部が無駄だった――――そう言いたいの？」
「君には残酷な言い方をするようだけど、そう言うことになる」
サッきゅんは、困惑気な表情をしつつも、はっきりとそう言った。
「あの子がその存在をなげうってまで……永遠の孤独を受け入れてまで創りあげたものが、すべて無駄だって言うの……!?」
ほむらは、口調が感情的になり、表情をさらに険しくしつつ、その一方で、目に涙を湛えはじめる。
「それがそもそもおかしいじゃん」
向かい合っていたほむらとサッきゅんの間に、割り込んでくるように声を上げたのは、さやかだった。
「普通の人間から魔法少女になるくらいだったら――まだ解る。けど、自分の存在を消しちゃうなんて、夢も、希望も、なかったことにしちゃうなんて、そんなの絶対おかしいって！」
「貴方がそれを言うの!?」
ほむらは、きっ、と、明らかに敵意の篭った目でさやかを睨みつける。
「いつもまどかを追いつめてきた貴方が――まどかがこの願いを叶える過程のひとつになった貴方が！」
「失礼あそばせ」
ほむらが、今にもさやかに掴みかかりかけながら、激昂した言葉を上げると、その間に、仁美がすっと割り込んできた。ほむらに迫られて慄くような表情をしていたさやかが、1歩さがる。
仁美は、見た目にはきつくはないが、明らかにほむらを睨み返す眼差しを向ける。
「貴方の事情は大体理解できましたが、貴方の経験の上にいるさやかさんと、今ここにいるさやかさんとは、直接の関係はないはずですわ」
険しい表情のまま、言う。
「そして私もさやかさんの言葉が正しいと思います」
「志筑仁美、貴方が……？」
ほむらは、どこか信じられないといったようにしつつも、驚いて円

くなった眼で仁美を見る。
「ええ、私も、もう少しで大切なお友達を1人、失ってしまうところでしたもの」
「仁美……」
仁美の背後で、さやかが呟くように声を漏らす。
「だからこそ、度の過ぎた自己犠牲を、私は肯定いたしません」
仁美は、そうきっぱりと言い、深く瞬きするように一旦軽く眼を閉じた。
「なぁ、ちょっと待ってくれよ」
その場の言葉が一旦途切れたかと思うと、それまで成り行きの外にいた杏子が、疑問点がまとまったというように、サッきゅんに向かって声をかけた。
「『グリフレットの別れ』って、過去にも記録されてる、最強の魔獣なんだろ？」
「いや」
サッきゅんは、まず否定の言葉を口にした。
「過去に記録されている『グリフレットの別れ』は、おそらくほむらの言う〝円環の理〟から、まだしも余裕のあるこちらの宇宙に、〝熱量換算可能な状態になった〟アストラルエネルギーを抜く為の、一時的な安全弁のようなものだったんだろう」
「それじゃあ、これから来る『グリフレットの別れ』が……」
「そうよ」
ほむらの低い声に、さやかがごくりと喉を鳴らす。
「まどかが消えたあの〝時間〟に現れる『グリフレットの別れ』こそが、本物の――この世界と〝円環の理〟との結節点」
「それが現れれば、宇宙が滅ぶ……」
さやかが愕然として聞き返す。ほむらは力なく頷いた。
「な、何とかならないの!?　サッきゅん！」
さやかは、慌てふためいたような口調で、サッきゅんの方を向いて問いかける。
「理論上は――」

サッきゅんは唸り気味の声を出しながら答える。
「目に見える実害として現れるのは、流れ込んでくる〝負の感情エネルギー〟が、こちら側の今のシステムに基づいて、魔獣として具現化するって事だ。だから、基本的には他の魔獣と同じように、それを倒して回収すればいい」
「なんだぁ、割合なんとかなりそうじゃん」
さやかは軽く笑って気楽そうに言ったが、サッきゅんの様子は全く晴れた様子がない。
「そ、そんな生易しいものじゃないよ!? 相手は宇宙1つを満たす量のエネルギーだよ? どれだけの規模の魔獣が、どれだけの数具現化するのか……想像もできない」
「う……」
サッきゅんの重い言葉に、さやかは再び言葉を詰める。
「それにそれは根本的な解決にならない。例え今回凌いだとしても、〝円環の理〟が、ボクの仮説のとおりの存在だとしたら、いずれは爆縮現象を起こして自壊する。……この宇宙を含めた、隣接する宇宙を巻き添えにして、ね」
「そんなの……」
サッきゅんの説明にギリ、とさやかが奥歯を鳴らした。
「そんなの、あたしが許さない」
「さやか……」
サッきゅんは、絶望的な状況を説明してなお、闘志を燃やすさやかに、諦観気味の溜息をつきつつも、まっすぐに視線を向けた。
「だいたいさ――」
杏子が、ほむらに向かって、訊ねるように言う。
「アンタだって、本音じゃ諦めてないんだろ? アタシに向かって、終わらせるとか、取り戻すとか言ってたよな? あれは、このばかげた時間を終わりにする、鹿目まどかってやつを取り戻す、そういう意味じゃないのかい?」
「貴方って、本当、感情的なように見えて、そういうところで理性的なのよね」

「それは褒めてんのか？　貶してんのか？」
　途切れ途切れに発したほむらの言葉に対して、杏子は、一旦ジト目になってほむらを見ながら、そう言って、表情を元に戻した。
「方法はあるわ、ひとつだけ――今度訪れる『グリフレットの別れ』は、その由来に関わって、最大級の規模のものになる。――こちらからあちらに、干渉する事もできるはず。それを利用して、〝円環の理〟を停止させる」
「そんなこと、できんの!?」
　ほむらの決意したような言葉に、さやかは驚いたような声で聞き返したが、
「可能か不可能かでいえば、可能だろうね」
　と、そう答えたのは、サッきゅんの方だった。
「〝円環の理〟なんて名前はついてるけど、この宇宙で最大かつ絶対の循環系は、エネルギー保存の法則だ。それに反するこの存在は、閉じていない。絶対でもない」
「けれど、そうしましたら、〝鹿目まどか〟はどうなりますの？」
　仁美が、サッきゅんに訊ねる。
「〝鹿目まどか〟はもう、人間としても、それ以外の物理的存在としても存在していない」
　サッきゅんは、声を半オクターブ低くし、重々しくそう言った。
「……」
「そんなぁ」
　ほむらは力なく肩を落す。さやかは、不機嫌そうな表情で不満気な声を上げた。
「けれど、〝円環の理〟、そう呼ばれる小宇宙の中には、膨大なエネルギーがある。本来宇宙を構成する物質になるはずの、未元物質（ダークマター）も存在している」
「つまり……どういうこと？」
　さやかは、サッきゅんの言葉が理解できず、聞き返した。
「たとえ概念になっていたとしても、〝鹿目まどか〟がそこに〝ある〟のだとしたら、そしてそれを引き寄せる力があるのだとしたら、再

度具現化した実体にすることは不可能ではないかもしれない」
サッきゅんの言葉が、僅かにだが軽くなる。
「ボクはこの地球に来てからずっと、地球人類の感情の強さ、その為し得るものを見続けてきた。増して、キミたちはそのエキスパートたる魔法少女だ。だから、掛け値なしに言う。キミたちがどれ程の奇跡を成し遂げたとしても、今更驚くには値しない」
「とにかく、希望はあるってことでしょう？」
さやかが聞き返す。
「希望を捨てなければ、可能性はあるってことだね」
「だったら、やるだけやってみるしかないじゃない」
さやかは、そう言ってから、表情を引き締めた。
「杏子」
さやかは杏子に視線を向ける。
「アンタ言ったよね、奇跡と絶望は等価値だって。でも、あたしはまだ奇跡に見合う絶望を受け取ってない。むしろ希望を受け取り続けてる」
「わざわざ儲けたモンをチャラにしてでも止めるってか？　青臭いアンタらしい考えだね」
杏子は、芝居がかって呆れたように、へらへらと笑って肩を竦めがちにそう言ってから、
「――そう言うアタシも受け取りすぎたみたいだ。付き合うよ」
と、引き締まった笑顔になって、そう言った。
佐倉杏子――――
そのクレバーな考え方は最も信頼に足りたし、実際一番頼りにしていたわ。
けれど、貴方はその言葉に反して、目の前で傷ついている存在を無視できない優しさの持ち主だった。
その優しさが、いつも貴方から合理的な判断を奪ったわ。
そして貴方自身に破滅をもたらした。
「マミさん」
「私の言葉は決まってるわ」

続いてさやかがマミに視線を向けると、マミはさやかに先んじて言う。
「私はもう、なにも望まなくても戦える。それに、貴方が必要としているなら、いつでも助けにいく。そうも言ったわ」
マミは、そう言ってから、顔を綻ばせて穏やかに笑った。
巴マミ――――
最初は面倒見のいい先輩だと思っていた。
けれどそれは仮面に過ぎなかった。
自己満足と虚栄心で覆い隠したその下には、疲れて脆くなった心。
それを知ってしまった時から、私は貴方を頼るのをやめた。
「仁美、アンタはどうする？」
次にさやかは仁美に視線を向け、訊ねる。
「もし、――――そばにいたい人がいるんなら、無理に付き合えとは言わない」
さやかは直接名前は出せずに、しかし仁美を見据えてはっきりと訊ねる。
それに対して、仁美は口元で微笑みつつも、ふっと軽く笑った。
「世界が滅びると言うのに、1人だけ戦いから逃げて、何になるのでしょうか？」
志筑仁美――――
彼女も最初の頃の印象は悪くなかった。
ただ、彼女は美樹さやかの魔女化の原因になった。だから自然と、疎遠にするようになった。
ただ、彼女が魔法少女になった時間軸を私は経験していない。言わばイレギュラー。
それがどう転ぶか、解からない。
そして――――
「どうして、貴方たちは――――」
ほむらは、ゆっくりと身を起こすように視線を上げ、低い声で言う。
「自分が犠牲になることを選べるの？　さっき、自己犠牲は認めない、とか言っていたのに――」

「自己犠牲ではありませんわ」
ほむらの言葉を、仁美が途中でさえぎった。
「そうですわよね？　さやかさん」
「え？　ああ、うん、なんか仁美に言われると、くすぐったいって言うか、変な気分だけど」
振られたさやかは、おどけ交じりに苦笑してそう言ってから、
「でも、希望があるんなら、それに向かっていくのは当然でしょ」
と、あっけらかんとした笑顔でそう言った。
美樹さやか――――
無駄に正義感が強くて、そのくせ執着心は人一倍で。
思い込みが激しくて、頑固で、一度そうと考えたら誰の言葉も聞かなくて。
結局、勝手に自滅してしまう、一番に厄介な相手。
「だいいち、さっき、杏子が言ってたけど、アンタだってこのまま全部諦めちゃうつもりじゃないんでしょ？」
さやかは、ほむらに問い質すように言う。
「それは……」
ほむらは、両手を胸の前で組むように握り、視線を這うように泳がせる。
「諦めたくない……まどか自身も、まどかが護りたいと思ったこの世界も……」
「だったらさ、一緒にやればいーじゃん。1人っきりでやるよりは、きっと、その方が上手くいく可能性だって大きくなるよ」
無駄に正義感が強くて、そのくせ執着心は人一倍で。
思い込みが激しくて、頑固で――――
「う、うう……」
「えっ？」
ほむらが漏らした嗚咽のような声に、さやかは、ギョッとしつつその顔を覗き込む。
「何、アンタ、泣いてんの？」
「美樹、さやか――」

さやかの問いかけに、ほむらは、涙でぐしゃぐしゃになった顔を向けた。
「私は、貴方に頼っていいの？」
貴方を見捨てた私なのに。
ほむらは、声には出さずにそう付け加えて問いかけつつも、さやかに縋るような視線を向けてしまっていた。
さやかは、ほむらの言外の言葉など知る由もなく、しかし他に掛け値もなしに、得意そうに笑って言い、自分の胸をドンと叩く。
「もっちろん。この魔法少女さやかちゃんはクラスメイトを見捨てたりはしないのだー」
――――それを貫き通すほど、優しい。
「ありがとう」
ほむらは、そう言って、さやかの胸に顔をうずめるように、縋りついた。
「ちょっ、ま……転校生？　ほむら？」
「うっ、く、えぐっ……」
そのまま、ほむらはむせび泣き始めてしまった。
「参ったな、こりゃ……」
さやかは、そう言って困惑気にしつつも、しばらくの間、ほむらのしたいようにさせていた。

美樹家、さやかの自室。
「うわ、もうこんな時間だよ。明日起きられるかなぁ」
さやかは、枕元の時計を持ち上げると、その針が指す位置を見てややオーバーリアクション気味に驚く仕種をして、目覚ましをセットしながら、ぼやくように言う。
「もしかしたら――」
小動物姿のサッきゅんが、勉強机の上に、ちょん、と座り、
「ボクたちは、暁美ほむらのループによって、偶然に存在したわけじゃないのかもしれない」
と、呟くようにそう言った。

「？　どういうこと？」
　さやかは、それを理解する事ができず、キョトン、として聞き返す。
「宇宙を壮大なひとつの生命だとするなら、その宇宙はインキュベーターを作り出したもの達によって病んでいた。そこへさらに、〝円環の理〟なんていう、宇宙自身には巨大な害でしかないものが傍らにできた。そこで、この可能性の時間軸の宇宙は、ボクらを生み出し、病巣を取り除こうとしたのかもしれない。ボクらが存在しているのは、限りなく偶然に近い必然によるものなのかもしれない」
　サッきゅんは、さやかにと言うより、自分に言い聞かせるように、そう言った。
「あはは……あたしには難しすぎてよくわかんないや」
　さやかは、そういって苦笑しつつ、視線をサッきゅんから目覚まし時計に戻した。
「でも、そうだと仮定するなら、多分、この可能性の時間軸は、宇宙にとって、自身が時間の系統樹の中で生き残り得る最後のチャンス――」
「ごちゃごちゃと難しい話はいいわよ」
　サッきゅんが分析するようにブツブツと言っていると、さやかはそれをぴしゃりと遮るように、少し声を大きくして言った。
「要は失敗できない、ってことでしょ」
　言いながら、目覚まし時計をベッドの枕元に戻した。
「そういうことだけど……」
「じゃあ、これ以上小難しい話はいらない。だって、失敗するつもりなんか、ないんだもん」
　そう言いながら、さやかはぼふっ、と、ベッドに仰向けに寝転がった。
「さやからしいや」
　サッきゅんは、小動物姿で器用に苦笑した。
「もう、今日は遅いし眠い……おやすみ……」
　さやかは、照明も消さずにそのままウトウトし始め、そう言いながら掛け布団を肩の位置まで手繰り寄せる。

「やれやれ、しょうがないなぁ」
サッきゅんはリングライトの引き紐に飛びついて、カチン、カチンと蛍光灯を消し、保安球だけにした。
「さて、と……」
さやかがすぅすぅと寝息を立てたのを確認してから、サッきゅんは行動を起こす。
「1人よりは大勢一緒の方が、上手くいく可能性はある、か」
呟いて、ちらりとさやかを振り返った。
「それは正しいと思う。でもそれなら、ボクもその為に行動するべきだね」

同じ頃、暁美邸。
「それで、どうしてこのような事になったのかしら？」
先程、さやかに縋って泣いたという事実に気まずさを感じながら、目の前の相手――志筑仁美に向かってそう訊ねた。
「私、魔法少女になって日が浅いですし、クラスメイトですのに、暁美さんのことよく知りませんから……折角ですから、多少、お話ができたらと思いまして」
仁美は、穏やかに微笑みながらそう言った。
「馴れ合うつもりはない――と言っても、もう説得力ないわね」
「ですわね」
ほむらは、仁美の同意の言葉を聞くと、やれやれと室内に招き入れた。
「お嬢様には少し手狭な部屋かもしれないわね」
ほむらは言いつつ、脚が折り畳み式の卓袱台を片付けて、布団2組を敷けるスペースを確保する。
「けれど、私の方から、貴方にはこれと言って話したいことはないのだけれど……『グリフレットの別れ』に関することなら、5人揃っていなければ意味がないし」
ほむらは押入れから布団を出しつつ、言って、視線を仁美のほうに向けた。

「それでは、私から2点ほど、質問させていただきますわ」
「……ええ、かまわないわ」
　ほむらの答えを待って、仁美は微笑みつつ、小首をかしげるような仕種をする。
「ひとつ目は、鹿目まどかさんのことについて」
　仁美の言葉に、ほむらの表情が一瞬、険しくなる。
「ほむらさんは当然として、他の魔法少女の皆さんが、多少なりとも〝鹿目まどか〟というキーワードに心当たりのあるような反応をしましたわ。けれども、私にはそれがないのは、どういうことなのでしょうか？　暁美さんなら、解かるかと思って」
「……志筑仁美、あなたは私にとって過去の時間軸において、魔法少女にはならなかったの。だから、魔法少女の末路である〝円環の理〟に導かれることもなかった」
　ほむらは、手を止めて仁美と向き合い、言う。
「おそらくはそのせいで、あなたの魂にまどかの存在が刻まれていないから、影響を受けないか、受けているとしても自覚できるほどのものにならない、ということよ」
「なるほど、それは納得できますわね」
　仁美が言う。ほむらは、布団を敷く作業を再開した。
「だからこそ、もうひとつのことが気になるのですわ」
「？」
「『貴方を見捨てた私なのに』」
「！」
　仁美の言葉に、ほむらが一瞬硬直した。
「気がついているのは私だけではありませんわ。佐倉さんもですのよ」
「……佐倉杏子、ということは貴方も……精神感応系」
「ええ、そうらしいですわね」
　ほむらに聞き返されて、仁美は苦笑気味に答えてから、
「それで、この言葉はいったいどういう意味なのですか？」
　と、真摯な瞳をほむらに向けなおし、問い質した。

「……私の、インキュベーターたちとの戦いにおいて、他の魔法少女には、頼ることができなかった。話を信じてくれさえしなかった」
「さやかさんは意固地なところがありますからあり得る話ですが……巴先輩や佐倉さんも？」
「巴マミは己の孤独から、精神的にインキュベーターに依存していて、むしろ私が敵視されたわ。佐倉杏子は――もともと利己的で他人と与することがなかったから、馴れ合いを嫌っただけ」
「だから、見捨てたと仰るのですか？」
「と言うより、積極的に関わろうとしなくなった、と言うのが正しいわね。巴マミと、佐倉杏子に関しては」
「さやかさんは？」
　仁美が訊き返すと、ほむらの表情が俄かに歪んだ。
「美樹さやかは……むしろ、いつも足枷になったわ。自分の願望と他人のそれとを履き違えて……勝手に進んで、勝手に絶望して、勝手に自滅していった」
　ほむらは、言い辛そうに、唸るような声になりながら言った。
「それではおそらく、その絶望の要因は私でもあったのでしょうね」
「その通りよ」
　仁美が言うと、ほむらは躊躇いもなくそう言った。
「それで積極的に切り捨てた、と」
「魔法少女になってしまった場合はね」
　仁美はほむらを問い詰めつつも、ほーっと胸をなでおろすようなため息をついてしまっていた。
「この時間軸でも、そうしようとしたのですか？」
「ええ、最後のチャンスだったから」
「最後？」
　仁美は肯定の返事を確信していたが、それに続く言葉には怪訝そうに思い、訊き返す。すると、ほむらは左腕の盾だけを出現させた。
「サッキュベーターが言っていたでしょう？　私の時間移動は、宇宙の因果律を収束させ、可能性を変えてしまうの。結局、それが原因で、過去を繰り返すたびに自体は徐々に悪くなっていったわ」

ほむらは盾を撫でるように抑えながら、言う。
「だから多分、これが最後のチャンス。この時間軸ですべてを失うか、すべてを救うか。それができなければ、もう過去に戻っても、私は最後に破滅の確約された、永遠の1ヶ月に閉じ込められるだけ」
「それで、あの時、屋上で私にあのようなことを言ったのですわね」
『むしろ嫌悪感を抱いているといっても良い。けれど、私の目的のために、できれば美樹さやかをこのまま維持したいの』
『けれど、貴方は上条恭介と結ばれ、美樹さやかはその事実に、自分の中である程度の折り合いをつけた。これは僥倖に近いの。だから、これ以上事態をややこしくしないで頂戴』
仁美は、ほむらの台詞を記憶から呼び起こしながら、そう言った。
「貴方に隠し事は無駄ね」
ほむらは、そう言ってほーっとため息をついた。
「最初は、今までの、美樹さやかが魔法少女になった時間軸とまったく同じ展開がなされたわ。上条恭介の手のために契約して、自らの身体のことを知って、貴方が上条恭介に告白しようとしていることを知らされて――」
ほむらの言葉を聞きながら、仁美の表情が俄かに険しくなってくる。しかし、それは怒りの類のものではなかった。
「なのに今度の時間軸では彼女は絶望しなかった」
「それで、どうしてもその状態を維持したかった、と」
「ええ、そうよ」
聞き返す仁美に対して、ほむらはあっさりとそう答えた。
「だから、上条恭介が魔獣を生み出してしまったときは、正直絶望しかけたわ。彼の心の中に、彼女はいないと思っていたから」
「……」
「そして、それを収拾させる為に、志筑仁美――貴方が魔法少女になった。これも驚きだったわ」
「暁美さんって、知識も口調も、やたらと大人びているのに、そういうことに関しては、疎いのですわね」
仁美の切り返しに、ほむらは一瞬、うっと言葉を詰まらせた。

構わず、仁美が続ける。
「私も、偉そうなことを言えた義理ではないのですけれど。もう少しで、私は本当に大切なものを、そうと理解しないままに失ってしまうところでしたもの」
仁美は、そう言って、軽く自嘲したように笑う。
「……」
「……」
「……ねぇ」
わずかな沈黙の後、ほむらがそれを破った。
表情は、それまでのニュートラルなものではない。先ほど歩道橋の上でも見せたような、すぐにももろく崩れてしまいそうな、涙が今にもあふれ出そうな表情だ。
「私は、美樹さやかに助けてもらう資格はあると思う？」
「資格なんて、必要ありませんわ」
仁美は即答する。
「さやかさんは〝正義の味方〟。罪を憎んで、人を憎むはずがありませんわ。もしさやかさんが、貴方を憎むようなことになったら、私がさやかさんの目を醒まさせて差し上げますわ」
仁美はそう言って、口元の微笑にどこか不敵なものを湛える。
「志筑……仁美……」
「私は、いえ、私もまた、貴方の希望になってみせますわ」

『ああ？　寝ぼけてんじゃねーぞ。ここをカラにしろって言うのか』
深夜の見滝原市内。
小動物姿のサッきゅんは、道路を走る自動車の屋根から屋根へと、無断ヒッチハイクを繰り返してある場所に向かいながら、テレパシーで誰かと会話していた。
そのテレパシーの主は、サッきゅんからの言葉を聞いたとたん、不機嫌そうにそう言い返した。
『何も全員で来てくれなくてもいいよ。そっちはチーム組んで長いんでしょ？』

『それはそっちの都合だろ』
サッきゅんはそう返したが、すると、相手は、ため息混じりにそう言った。だが、そのため息は、どうもサッきゅんに向けられたものではないらしい。
『1人行かせるなんて言ったところで、結局全員ついてっちまう。そういう連中なんだよ、うちのところのは』
『それじゃあ、無理か……』
サッきゅんは落胆したような言葉を伝える。
『おいおい、断るなんて誰が言ったよ?』
からかうような声が、テレパシーから聞こえてくる。
『え、だって』
『だから言ってるだろ、宇宙の危機ってときに、自分たちが蚊帳の外でヌクヌクしてられるようなやつらじゃないんだよ』
テレパシーの相手は、サッきゅんの反応を愉しむかのように言う。
『当日ギリになるぜ。仕事持ってるやつもいるからな』
『!』
移動を続けながら、サッきゅんは思わず表情をほころばせていた。
『ありがとう、ヨッきゅん』
『だっ、その呼び方やめろって』
そうして数十分後、サッきゅんは見滝原市の中心部からはやや外れたところにある、閑静な高級住宅街の中の1軒にあった――――――

そして――――その日は来た。
数時間前、見滝原市内全域と滝元市東部地区に避難勧告が出された。
日本の近代気象観測史始まって以来の、大規模積乱雲――HP型巨大スーパーセルが、見滝原市を中心として、滝原湖を覆う範囲で出現した。
住宅街の住民は、見滝原中学などの高台にある鉄筋建物の避難所に収容され、市内から人の気配が消えていた。

――――滝原湖を臨める、その堤防にいる6人を除いて。
すでに降雨が始まっていたが、魔法少女たちはそんなことを気にもしない。ただ、時折来る強烈な突風に、仁美が表情を歪ませて踏ん張りなおす程度だった。
やがて、本来単一の積乱雲（セル）として成立しているはずの雲間に、唐突として、渦を巻くように穴が開いた。
それはまるで、嵐の中に、その嵐の雲を押しのける別の嵐が現れた、そんな光景に見えた。
「演出だってんなら、なかなか粋狂なもんよね」
さやかはそれを見て、軽口のようにそう言ったが、表情から緊張は消えていない。
「限定的な重力異常!? そんなものがありえるのか？」
そう声を上げたのは、魔法少女姿のサッきゅんだった。
ヴォン……ッ
上空で発生し、広く拡がった衝撃波が、魔法少女たちに襲い掛かる。
「くっ……」
「ぐぅっ……」
「っ……」
「きゃっ……」
「……っ」
ビリビリと震えるアスファルトの路面を踏みしめながら、各々短く声を上げつつも、上空の陽の光さえ差し込み始めた雲の穴を睨みつづける。
「発現、するわ」
ほむらが喉を鳴らしながらにそう言った直後に、雲が退けられた空中に、それは出現した。
それは球形だったが、黒く、光を放つことはなく、どちらかというと〝穴〟を思わせた。
中心に、桜色に輝く宝石のような珠が見える。
「ＯＫ、要は転校生があそこに行けるよう、これからウジャウジャ沸いてくるっていう魔獣を退治すればいいんでしょう？」

さやかがそう言った。
まどかに強い思いを抱くほむらなら、〝鹿目まどか〟の〝意識〟を、歪んだ小宇宙の中から呼び出せるかもしれない。結局、確証のない方法だったが、そう決まったとき、当のほむらは、何かを確信した様子を見せていた。
それで、マミや杏子はもちろん、合理主義の仁美もそれに乗る選択をしたのだ。
さやかの手に剣が、マミのそれにスナイドル銃が、それぞれ出現する。杏子と仁美は、すでに携えていた槍と槍矛を、それぞれ構えなおす。
「けれど、あそこまで私1人だけで到達するのは困難だわ」
ほむらは、淡々とした口調ながらも、明らかに弱音を吐いた。
「なによ、今更になって、あたしたちのことが信じられないってわけ？」
さやかが、不機嫌そうな表情をほむらに向けてそう言った。
「信じてないわけじゃないけれど……私の武器は接近戦型じゃないから」
ほむらは珍しく、自信なさげな表情を見せると、左腕の盾の中に手を入れて、そこから銃を覗かせて見せた。
「直掩を努めて貰えないかしら？　美樹さやか」
「え……あ、あたしがー？」
さやかは意外そうな表情をした。
「他の近接系2人は精神感応系の能力の持ち主だから、外部で撹乱と陽動に必要。巴マミは火力支援が重要……となると、あなたしかいないのよ」
ほむらは、淡々のした口調で説明するものの、表情のほうはどこか困惑気なままだった。
「解かったわよ、一緒に行ってあげればいいんでしょう!?」
半ば追い詰められたように、さやかは声を上げた。
「お願いするわ……――ありがとう」
ほむらは、淡々とした口調で言っておいて、その後で口元に微笑を

浮かべた。
「来るわよ！」
マミが声を上げる。
『グリフレットの別れ』――〝この宇宙〟と〝円環の理〟の結節点から、黒い霧が溢れ出してくる。
霧は、無数の巨大な黒い狼となり、魔法少女たちめがけて濁流のように迸ってくる。
「……すっ」
マミが軽く息を吸い込むと、その背後に無数のスナイドル銃が出現した。
銃口が狼の姿をした魔獣を狙い、サイドハンマーが一斉に発火石を叩く。無数の黄金色の閃光が迸り、向かってくる魔獣の先鋒を撃ち抜く。
撃ち抜かれた魔獣は、中規模程度のビルのような巨躯に反して、マミの放った弾丸がいくつか命中しただけで、容易く穴を穿たれ、崩壊していく。
「なるほど、見た目は派手でも、実体化させる〝呪い〟の〝中身がない〟ので、脆い……ということですのね」
「そうと決まれば、行くぞオラァァァッ」
仁美の言葉を聞いて、杏子が跳躍した。
正面に向かってきた1体を、槍の穂先で貫き、斬りおとすと、返す刀の勢いで、槍の柄を多節棍に変える。
多節根が2体の魔獣の胴をまとめて縛り上げ、そのまま締め上げ、縊り引きちぎった。
キィィィィン
目前に迫ってきた魔獣の群れに、仁美は左手をかざす。
次の瞬間、魔獣たちは同士討ちを始めた。お互いの肩に噛み付き、食い千切る。
だが、魔獣同士の攻撃では致命打にならないのか、身体を欠けさせながらも、獰猛さはまったく衰えずに、同士討ちを続ける。
その魔獣の群れを、仁美のロングアックスが横一文字に薙ぎ払い、

消滅させた。
ダン、ダン、ダン、ダンッ
マミは自らの周りに生み出したスナイドル銃を次々に持ち替え、杏子と仁美を突破してきた魔獣を、踊るようなステップで銃を次々に持ち替えながら、次々に撃ち抜いていく。
「マミィッ」
槍で目の前の魔獣を貫きながら、杏子が声を上げる。
「道を開けてやれよ！」
「解かったわ！」
マミは杏子の言葉に答えると、まだ右手に持っていた1丁のスナイドル銃を、構えたまま器用にそのブリーチを開く。
「Ｒｅｌｏａｄ」
ブリーチに黄金色の光が収まり、尾栓が閉じる。
「お前ら、こっちだ！」
キィイイイン
マミに向かおうとしていた魔獣が、その軌道を途中で変えて、杏子へと目標を変えた。
その間にも、マミの持っていたスナイドル銃の銃身が、巨大な加農砲のような姿に変わる。
「Ｔｉｒｏ　ｆｉｎａｌｅ――」
ドォウッ
結節点へ向かって黄金色の閃光が迸り、その間に存在する魔獣をことごとく無に返した。
「今よ！」
さやかはほむらの手を掴む。手を握られたほむらは、一瞬困惑したような表情をしつつ、頬をわずかに紅くした。だが、さやかはほむらを振り返らず、それに気づくこともなく、自らを撃ち出す要領で、ほむらもろとも結節点へ向かって飛び出した。
その間も現れる。巨大な狼を、さやかは右手に握った剣で斬り払っていく。
「ああっ、鬱陶しいっ！」

際限なく現れる魔獣に対して、さやかが悪態をつく。
ほむらは、それを聞くと、さやかに牽かれている左腕の、円い盾から、アサルトライフルを取り出した。Ｃｒｉｓｔｏｂａｌ　Ｍ―１９６２。ドミニカ共和国の国産軍用アサルトライフルで、コルト・ブローニング社製・３０（７．７ｍｍ）弾を使用する。暴力団の組事務所から入手した中では、一番の戦利品。
「え？」
その銃身が自分の頭の脇からにょっきりと生えるように前に出たのを見て、さやかは軽く驚いたような声を出した。
セレクタ方式ではなく、フルオートとセミオートで分かれている２本の引き金の、フルオートの引き金を、ほむらの指が引き絞った。
第二次世界大戦中は航空機銃用としても使用された弾丸が、魔獣の群れに向けて撒き散らされる。
蜂の巣状にされてボロボロの魔獣の群れの隙間をすり抜ける。その際に、ほむらはプラスチック爆弾の詰まった筒を放り投げる。
突き進むさやかの背後で、大爆発が起こり、その進む速度を衝撃波が加速した。
爆煙に包まれた魔獣の残滓が、その晴れた後で、ボロボロと崩壊していく。
「撃つなら撃つって言いなさいよ！　鼓膜破れるかと思った」
さやかはほむらを振り返り、右耳を塞ぎながら抗議の声を上げる。
「っ、美樹さやか、前！」
ほむらの声に、さやかは我に返って前を見る。
その目前に、新手の魔獣の影が立ち塞がる。
ガッキィンッ
さやかは反射的に剣でなぎ払うが、先程までの狼とは異なり、金属質の身体を持つそれに、刃を弾き返されてしまう。
その姿は――ラウンドタイプのホイールに、西洋鎧の上半身部分を、まるで案山子のように十字に磔にしている。ホイールの外縁部には、剣の切っ先が無数に生えており、回転していた。
カチリ

さやかが気付いたとき、その魔獣の目前に、ミサイルが出現していた。
陸上自衛隊９６式多目的誘導弾の弾体がひとつ。管制装置はないため、無誘導に撃発信管で撃ち込んだだけだった、だが、その位置から、外れようがない。
爆発が一瞬、さやかたちの視界から魔獣の姿を遮る。
さやかはその姿を確認する前に、右手に持っていた剣を光の矢に変えて、撃ち出した。
爆煙が晴れたとき、前面の鎧がボロボロに破壊されつつも、魔獣はなおもホイールを回転させながら現れた。
だが、破壊された鎧の破口から、さやかの放った閃光の矢に貫かれ、そのまま弾けるように崩壊した。
「いくわよ！」
もう目と鼻の先に迫った結節点は、時折脈動するかのように震えている。
そこに向かって、さやかはほむらの手を握りなおしつつ、自らを撃ち出した。
青い閃光が、球形の〝穴〟に向かって疾走(はし)った。

第13話：The terminal of "The ring of MOEBIUS"

「……ここは……？」

〝球形の穴〟を突っ切ったところで、さやかが閉じていた目を開けると、そこは無限に広いようでいて、どこか狭苦しく、熱く、ねっとりとまとわりついてくるような空気の漂う、妙な空間だった。

どちらが、上下か、左右か、上手く認識できない。一方向へ向かう重力が存在していないようだった。魔法を使って動くことは出来るが、実際に宇宙に放り出されたらこんな感じだろうか。

周囲に、魔獣が現れるときにも見られる、光を吸収する黒い霧が漂っていた。

「……あれは……？」

視界を遮るその霧の切れ間に、ぼんやりと輝く、ピンク色の光の球のようなものを見つけた。

「とにかく、あそこへ行ってみるしかないようね」

傍らにいたほむらが、そう言った。

さやかも、頷いて同意すると、ほむらの手を引いて、青い光を纏いつつ、そちらに向かおうとする。

「!?」

あまりに静寂だったゆえに、2人はその気配に気付いた。さやかが握っていたほむらの腕を放し、それぞれ振り返りながら身構えた。

珠の光でぼんやりと照らし出されるのは、ひしゃげたような頭を持つ、手人形のような魔獣。

さやかは、身を翻す勢いで斬りつけつつ、ほむらを離した左手にも剣を生み出した。

「こいつはあたしが食い止める。アンタはまどかのところへ行って」

さやかは、構えつつ、背後のほむらを直接振り返らずに言う。

「いいえ、行くのはあなたよ、美樹さやか」

「……え？」
ほむらの淡々とした言葉に、さやかは一瞬、呆然として、反射的に聞き返してしまう。
「わからないの？　選ばれたのは貴方なのよ、美樹さやか」
ほむらは、念を押すようにそういいつつ、M―１９６２を構えて、さやかの前に出る。
「で、でもっ……」
「私は元から〝覚えていた〟。けれど、貴方は魂に刻まれた、本来自覚することはないはずの記憶を〝取り戻した〟。悔しいけれど、まどかにとって貴方は特別。まどかは〝円環の理〟を創る時、貴方にだけ例外を許したのだもの」
戸惑うような声を出したさやかに対して、ほむらは低い声で、はっきりとそう言った。
「まどかを取り戻すのは、貴方の責任よ、美樹さやか」
そうしている間にも、黒い魔獣は、さやかに斬りつけられた後などなかったかのように再生し、むっくりと起き上がる。
ほむらは黒い魔獣に向かって、躊躇せずフルオートで１弾倉分叩き込んだ。
「早く行って！　私は大丈夫」
「う、うん……」
さやかは後ろ髪惹かれる思いをしつつも、ほむらの言うことに従った。

「くそ、こいつら硬えっ！」
新たに現れた、西洋鎧の案山子を抱えた剣車輪に、さしもの杏子も泣き言を上げた。
槍で切り裂き、棍で殴って凹ませるものの、致命傷を与えるのには四苦八苦していた。
しかも、この魔獣は、車輪に生えた剣を飛ばして攻撃してくる。剣はすぐに生えてきて、無尽蔵の状態だ。
マミの支援射撃が頼りだったが、それも魔獣のほうが数に任せて押

しかけてくれば、マミは自身の防御だけで精一杯になってしまう。
マミは、地上でスナイドルを生み出しつつ、迫ってくる魔獣を撃ち続けていたが、踊るような余裕を持って、というわけにはいかなくなりつつあった。魔獣が撃ち出す剣を避けながら、1体1体に複数の弾丸を撃ち込んで、確実にしとめている。
ガキィィンッ
唯一効果的に戦っているのは、意外にも仁美だった。
精神感応の能力によって魔獣を混乱させ、同士討ちさせる。
仁美を襲おうとした魔獣は、自らぶつかり合い、回転する剣でお互いを切り裂く。
だが――――
「はぁっ、……ぜぇっ、はぁっ……」
視界の中に次々と現れる魔獣に、能力を使い続ける仁美の表情には、深い疲労の色が見え始めていた。脂汗が滴る。
「こん、やろ！」
杏子が魔獣の1体を締め上げ、破壊したときだった。
「！」
別の魔獣が、一瞬無防備になった杏子の胴に体当たりしてくる！
「がはっ……」
かろうじて、ソウルジェムを避けたものの、杏子の身体は剣車輪によってミシン掛けされたように切り刻まれてしまっていた。
あ、やべ、これはアウトかな……
そう思った瞬間、杏子の体感する時間の流れがとても遅いものになった。
認識できるのに、反応して動きをとることができない、もどかしい感覚。
もっとも、動かす身体も、今の杏子にはなかったのだが。
一度くらい、幸せな夢ってやつ、見てみたかったな。
杏子が諦観しつつそう思ったとき、走馬灯のように、妹と、さやかの顔が脳裏を横切った。
……いいや、見てたか。畜生。もうちょっとだけお前たちと早

く出会えてたらな……
「だめっ」
「!?」
次の瞬間、杏子の身体は自由を取り戻していた。
多節棍の鎖を延ばして、自らをミシン掛けしてくれた魔獣に巻きつかせ、締め上げ、そのまま引き千切る。
「!」
その杏子の背後に、別の魔獣が迫り来る。
多節棍を槍に戻し、薙ぎ払おうとするが、間に合わない！
「キョーコを、いじめるなぁぁっ!!」
仁美のそれよりもひときわ鮮やかな緑の閃光が、強烈な衝撃波を生み出し、魔獣の群れを激しく揺さぶる。
ギギギギ、と軋む音を立てつつ、動きの鈍った魔獣を、杏子の渾身の一撃が貫き、無に帰した。
杏子はふぅ、と息をつきつつ、
「こーの感触は」
と、振り返る。
するとそこには、年恰好は杏子たちよりさらに小さな、魔法少女の姿があった。
装束はねこ耳帽子に緑と白のワンピース、ドロワース。
手には、球形のハンマーの部分に猫の尻尾のような飾りがついたメイス。
「キョーコ、だいじょうぶ?」
少女は笑顔で問いかけてくる。
「だぁぁっ、ゆま！　テメェ、なんでこんなところにいやがる!?」
近寄ってくる魔獣を槍で牽制しつつも、杏子は魔法少女――千歳ゆまに向かって荒い声を発した。
「だって……だって、キョーコがあぶないことしようとしてるってきいたから」
ゆまは、杏子に怒鳴られ、うつむいておずおずと言った。
「やれやれ」

杏子は脱力したようにため息をつく。
「来ちまったもんはしょうがねーが、オマエも魔法少女なんだからよ」
「うん！」
「役立たずじゃねーって言うんだったら、あたしの背中ぐらい守ってみせろ」
「うん!!」
杏子は、面倒くさそうな口調で言ったが、ゆまの威勢のいい返事を聞くと、ニィ、と唇を吊り上げた。
一方。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
仁美は、能力の連続使用の限界に近づいていた。
「！」
魔力が下がり、精神感応の効果が薄れた瞬間、複数の魔獣がまとまって、仁美に向かって突っ込んできた。
ガキィンッ
剣車輪をどうにかロングアックスの柄で受け止めるものの、じりじりと圧される。
さやかさん……上条くん……
自分はまだ覚悟が足りない、と思っていた。だが、いざ土壇場になってみると、意外に未練として執着するものに少ないことに気づいた。
そういう生き方しか、出来ませんでしたものね……
１４歳という年齢にしては、老練したような思考で自嘲する。
ここまで、でしょうか……
仁美がそう思いかけたとき。
ビシャッ
無数の小さな鉄球が弾丸となって迸り、金属質の魔獣の身体を貫いてボロボロにする。
その魔獣を、さらに、仁美の前に躍り出た黒い影が、Ｘ字状に斬り裂いた。
「……！　あなたは！」

仁美と魔獣の群れとの間に割って入ったのは、白と黒の、対照的な衣装を纏う2人の魔法少女。
「経緯はサッきゅんから聞かせていただきました。志筑さん」
法衣のような白衣の魔法少女が、軽く仁美を振り返りながら言う。
「美国さん……貴方も……」
中学校こそ別だが、近所の名家同士して、いくつかの場面で面識のある顔に、仁美は目を円くする。
「お互い、いろいろと言いたいことはあると思いますが、まずは現状を――――」
白衣の魔法少女、美国織莉子の視線が前を向く。
剣車輪の魔獣が複数、3人に向かって殺到してくる。
「片付けてしまいましょう」
ビシャッ
そのまま、織莉子と、もう1人の黒衣の魔法少女が、その剣車輪に巻き込まれるかと思ったとき、突然、魔獣の動きが鈍った。そしてその次の瞬間には、鉄球が迸り、魔獣の群れを悉く蜂の巣にする。
半壊しかけた魔獣の群れを、ネクタイのスーツをアレンジした衣装を着崩したような姿の黒衣の魔法少女が、両手から伸ばした黒く輝くクローで薙ぎ払うように斬り裂き、完全に崩壊させる。
「そっちの、緑のお嬢様はさぁ――――」
黒衣の魔法少女、呉キリカが、どこか子どもじみたような笑顔を見せながら、言う。
「もう、諦めちゃうのかい？」
「じょ、冗談じゃありませんわ！」
仁美は、はっと我に返ると、険しい表情で言う。
完全に止めを刺されなかった剣車輪が、仁美を振り返って後ろを見せているキリカに襲いかかろうとする。
だが、まるで予定調和のように、キリカがそれを身体ひとつずらして避けたかと思うと、飛んできた投擲斧がその魔獣を破壊した。
ブーメランとして戻ってきた投擲斧を右手で捕らえて盾に格納しつつ、仁美は織莉子の前に出る。

「行くわよ、キリカ、志筑さん！」
織莉子の声とともに、三度、鉄球が弾丸の雨となって、目の前に迫る魔獣に向かって撃ち出された。
「このっ！　この、このっ！」
マミはもはや、踊る、というような余裕を失い、両手にスナイドルを持ち、その銃口を同一の目標に向けて、弾丸を撃ち込んでいっていた。
だが――
ガチン！
サイドハンマーが空撃ちの音を立てた。
「しまった――」
マミの顔面が蒼白になる。
スナイドルを新たに生み出すにも、足元に散らばったスナイドルにリロードするにも、ワンアクションが必須だ。
「ひ――――」
魔獣が車輪を横向きにし、まるでマミの首を狙うかのように剣を回転させながら迫ってくる――――
「Ｌｉｍｉｔｅ　ｅｓｔｅｒｕｎｙ」
マミが反射的に身を竦めかけたとき、その背後から迸った閃光が、魔獣を飲み込み、一瞬にして蒸発させた。
マミが振り返ると、そこに小柄な魔法少女がいた。
「大丈夫？」
その衣装は、白と黒のツートーン、星のようなカットはファンシーではあるものの、全体的には露出度の高い衣装。それに魔女っ子の象徴のようなとんがり帽子。
「え、ええ……」
その肌も露な衣装に、一瞬マミは絶句しかけてしまい、どうにかそう答える。
「はっ」
「Ｖｏｒ　ｄｅｒ　Ｋａｎｏｎｅ」
マミが背後に別の気配を感じて、振り返った瞬間、サッカーボール

ほどの光弾が、剣車輪の魔獣を粉砕した。
その上空に、フードのついた全身スーツのような衣装の魔法少女と、白い修道服のような衣装に、メガネをかけた魔法少女がいた。
「表面は硬いけれど、たいした力は持ってない。力押しで充分だわ」
メガネの魔法少女、御崎海香が言う。その左手に持つようにして浮かばせている本が、その上にかざされた右手から放たれる淡い光で、パラパラとめくられている。
「細かいこと考えないで済むんなら、それに越したことはないっ……かな」
言いつつ、フードの魔法少女、牧カオルが、剣車輪の射撃をすり抜けて魔獣の本体に迫る。その鋭い蹴りが、ラウンド形のホイールを凹ませ、剣車輪の動きを鈍くする。
「ちちん、ぷいっ！」
そこへめがけて、白黒の魔法少女、かずみが、黒い十字架のような錫杖を振り、光弾で止めを刺していった。
負けてられないわっ。
「Ｒｅｌｏａｄ」
地に這っていた無数のスナイドルが起き上がり、ブリーチに黄金色の光を装填され、サイドハンマーが起き上がる。
マミの〝踊り〟が、再び始まった。

――――結節点の〝向こう側〟。
黒い霧の中、青い光を放ち、自らを矢のようにして、たったひとつの道標にしたがって突き進む。
熱い。まとわりついてくる黒い霧が持つ熱が、どんどんと増してくるように感じる。
やがて、さやかの前に、ぼんやりと光るピンク色の光の球が姿を現した。
直径は、さやかの背丈ほどだろうか。
「……これが、中心部なのかな？」
一瞬、キョトン、としたように、それを見る。

「でも、これをどうすれば……――」
さやかちゃん。
「!?」
突如かけられた声に驚き、それまで光の球を凝視していた視線を上げる。
いつの間に現れたのか、そこに、1人の少女が立っていた。
小柄で、やや強い髪を、サイドアップ風のツインテールにしている。
「アンタ、は……」
「さやかちゃん。よく、ここまでこれたね」
少女は、にこやかに笑いながら、さやかにそう語りかける。それから、ちらり、と、光球に視線を移した。
「でも、これは触らないで欲しいな、って」
「えっ？」
さやかが反射的に聞き返すと、少女は、さやかに視線を向けなおして、言う。
「魔法少女の絶望が、災厄を生むの。さやかちゃんだってわかってるでしょう？　だから、そうなる前に、受け止めてあげるのがこれの役目なの」
言いながら、もう一度、見上げるようにしてそれを見た。
「魔法少女が祈った、希望まで否定しないように」
そう言って、少女はさやかに、穏やかな微笑みを向けた。
「……」
さやかは、愕然として、少女と光球を交互に見ていたが、やがて、
「……違う」
と、呟いた。
「え？」
少女が、小首をかしげた姿勢で、反射的に聞き返す。
「絶望なんか消したって意味がない。違う、誰かに支えてもらうことはあっても、他人に押し付けるもんじゃない！　自分で乗り越えなきゃ意味がない！」
「さやか、ちゃ」

さやかが発する声がだんだんと荒くなっていくことに、少女は、驚いた眼を向けつつ、戸惑ったように声を出す。
だが、さやかは構わずに続ける。
「後悔しない生き方なんてない！　奇跡だけが希望を叶える手段じゃない！　人はねぇ、絶望の中にこそ本当の希望を見出せるの！　後悔だってするけど、進むときは前にしか進めないんだよ！　進むことをやめたら、そこで終わり、そこに希望なんかあるもんか！　絶望を消すことこそ、希望の否定だよ！　絶望の中からだって立ち上がるために、あたしたちにはこの2本の腕があるの！」
そこまで感情的に言ってから、一旦、すぅ、と軽く息をつき、静かに言う。
「そうじゃないの？　〝あたし〟」
そう言ったとき、さやかの目の前にいたはずの小柄な少女は、鏡に映したかのような、まったく同一の魔法少女の姿に変わっていた。
「……なんで、解るかな……」
〝さやか〟が、低い声で、そう言った。
「そりゃ、解るわよ。アンタはちょっと前のあたし、そのものだもん。見返りなんて求めないなんて言いながら、本当は周りから甘やかされたがってる捻くれ者」
「あたしのくせに、何を悟ったこと言ってんのよ！　アンタだって、一緒でしょ！　ただ、アンタには甘やかしてくれる相手がいただけ！　サッキュベーターに支えてもらって、好きなだけ正義の味方ぶって！　マミさんに甘やかしてもらって、仁美の願いで目先の苦しみを消してもらって！　そんなアンタが、あたしとどれだけ違うって言うのよ！」
「違わないわよ！　この姿も、心の形も、たぶん、アンタとあたしは一緒だよ！　違う途(みち)を歩いてきたとしても、同じ〝美樹さやか〟だもん！　ただひとつ、違うのはねぇ――――」
〝さやか〟に向かって声を荒げて言い返しつつ、さやかは無数の剣を呼び出した。
「背中よ。アンタが自分で勝手に切り捨ててきたものが、あたしの背

中にはまだある。それがあたしを、前に押すのよ」
そう言って、口元でニヤリと笑う。
「っ……」
目の前の〝さやか〟が、言葉を失って、空間に漂うように立ち尽くす。
「だから、あたしがその原因だって言うなら、あたしがそれを、終わらせる」
無数の剣が、澄み切った青い閃光の矢に変わる。
「やめてぇぇぇっ！」
〝さやか〟が、甲高い悲鳴を上げるが、既にそれは遅かった。
「Ｔｉｒｏ　Ｆｉｎａｌｅ――――」
迸る閃光が、ピンク色の光球を打ち砕く。
それはガラスで出来た風船のように簡単に破裂して、中から光が溢れ出し、放射状に流れ出す。
「まどか――――」
光の奔流は、やさしげに暖かかった。それに包まれて、さやかは声を上げる。
「まどか――――!!」
さやかがもう一度声を上げたとき、光の奔流の中心がいっそう強く輝いた。
「!?」
魔法少女たちが動きを止める。
オオオオオオオオオオン……
次から次へと湧いて出ていたはずの魔獣が、突如その動きを止めたかと思うと、その場で朽ちるようにボロボロと崩壊し、塵となって消えていく。
「やった……のか……?」
まだ槍を構えたまま、杏子が呟いた。
「！」
はっと、魔法少女姿のサッきゅんが我に返る。
及ばないまでもと支援で撃ち込んでいた弓を消し、不気味な音を立

てる結節点を見上げた。
「さやか！」
「――――う――？」
光が晴れたとき、さやかの腕の中に、1人の少女がいた。
特徴的な髪型はしていない。だが、その顔には、確かに〝記憶〟の中にあった。
「まどか……？」
その顔を覗き込むようにして、さやかは、小さく訊ねるように声を発した。
「あ……さやかちゃん……」
ゆっくりと目を覚ますかのように、少女――鹿目まどかは、目を開けながら、顔を起こして、さやかに視線を向けた。
「私……なんだろう、夢を見てた。この世の嫌なことなんか、全部消えちゃえばいいって、私がそう願ったら、全部それがかなっちゃう夢」
「まどか……」
さやかは、呟くようにその名前を呼んでから、苦笑気味に、穏やかに微笑んだ。
「それは、夢だよ。かないっこない、夢なんだよ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……
沈黙の世界が、唐突に動き始めた。
――――それは言うなれば、胎動。
空間を満たしていた黒い霧が、先程までまどかを包み込んでいた桜色の珠のあった場所に向かって、ゆっくりと渦を巻くようにしながら、集まってくる。
『さやか！　さやか！』
サッきゅんの慌てふためいた声が、テレパシーで届いてくる。
『サッきゅん？　どうしたの？』
『急いでこっちに戻って来るんだ！』
強い警告の調子で、サッきゅんはそう伝えてくる。
『〝円環の理〟の概念が解消されたんだ！　エネルギーの不均衡が急

激に解消されていってる。そっちの圧力が一定の値まで下がれば、結節点の維持がなされなくなって閉じてしまう！　そうしたら、戻ってくることは絶望的になるよ！』
「――――っ！」
　さやかはそれを聞いて、表情を険しくしつつ、顔を上げる。
「ここまで来て、バッドエンドなんてありえないでしょうが！」
「え、ちょ……さやかちゃん!?」
　さやかはまどかをしっかりと抱きかかえなおすと、身体から青い閃光を放ちながら、結節点の外側に向かって、一気に飛び出した。
　黒い魔獣が、音もなく崩壊して消滅していく。
　あたりには、ばら撒かれたブローニング・３０弾の薬莢が、空中に漂うように散乱していた。
「どうやら、終わったようね」
　ほむらはそう呟くと、手にしていたＭ―１９６２を手放し、身体の力を抜き、ゆっくりとだが中心に向かって渦を描き始めた黒い霧の流れに、身を任せるようにして、漂い始めた。
　その時、
「転校生ーっ」
　と、中心の方へと向かっていったさやかが、声を張り上げながらほむらの方に向かってくる。
「美樹さやか？」
　ほむらが身体ごとくるりと振り返る間にも、さやかはほむらめがけて緩くカーブを描きながら急速に接近してくる。
「何やってんのよ！　もとの世界に戻れなくなるのよ!?」
　さやかは、ほむらの傍まで辿り着くと、困惑にわずかに苛立ちを混ぜた声を、ほむらに投げかけた。
「解かっているわ。だから早く、まどかを連れて行って」
「そんな事は解かってるわよ」
　妙に冷静な口調で言うほむらに対し、さやかは烈しい口調で言い返す。
「で、アンタは何やってんのよ」

「私は――」
　さやかが問い質すと、ほむらはその左腕の盾、それに仕込まれた〝機械仕掛けの砂時計〟を、さやかたちに見せ付けるようにする。
「時間切れ、みたいだから」
「なに……言ってんのよ」
　さやかは少し困惑気になって、聞き返した。
「私は貴方のような突進能力は持たない。時間操作の能力ももう使えないわ」
「ほむらちゃん……」
　さやかの腕の中にいたまどかが、ほむらに視線を向けて、悲しそうな表情をする。
「これは私への罰――まどかを助けたい、なんて。本当は自分が、自分だけが満たされたいだけの自己満足。美樹さやか、貴方に偉そうなことを言える人間じゃなかったのよ、私は」
　ほむらは、自嘲するような微笑を浮かべて、そう言った。
「ああ、もうごちゃごちゃワケわかんないこと言って困らせないで！」
　さやかは、その場で地団駄を踏むようにしたかと思うと、まどかを脇に抱えるようにし、反対側の手でほむらの手を掴んだ。
　そのまま、再び青い閃光を纏って、結節点の外へ向かって自らを撃ち出す。
「離して、離しなさい、美樹さやか！　私がいたら、それだけ速度が落ちるでしょう!?」
「離すもんか！」
　声を荒げて抵抗しようとするほむらに対し、さやかも烈しい声で言い返す。
「あたしだって助かりたいし、まどかを助けたい。でも、アンタを見捨てられるほど、あたしはぽんと割り切れる性格してないのよ！」
　さやかはほむらを振り返ることはせず、ただ一直線に飛行しながら、怒鳴るように言った。
「美樹、さやか……」
「それに――」

ほむらの静かな反応に対し、さやかは、口調を穏やかにすると、
「ここでアンタを見捨てたら、〝正義の味方〟失格でしょ？　ほむら」
と、そう言って、一瞬だけほむらに向かって、微笑んだ顔を向けた。
「ほむらちゃん」
さやかにしがみついていたまどかが、ほむらに笑顔を向ける。
「一緒に帰ろう、ほむらちゃん」
その声に、ほむらはようやく口元に微笑を浮かべた。
「ええ、そうね」

〝円環の理〟――――――
かつてそう呼ばれた小宇宙は、歪んだエネルギー循環から解放され、内包していた未元物質（ダークマター）が、その中心に向かってゆっくりと、非常にゆっくりと渦を巻きながら、集まっていく。
やがてその量が一定に達したとき、中心に集まった未元物質は高圧から高温を生み出し、一瞬の核融合反応の後、それによって発生した莫大なエネルギーで、小宇宙に火を点した。
――――ビッグバン。
小宇宙は一気に膨張し、その内包するエネルギーにふさわしい宇宙へと成長する。
エネルギーを溜め込むだけに存在した、歪んだ小宇宙は、ようやく、エネルギーの循環する正しい宇宙として〝生まれた〟のだ。

ブァァァァン!!
今日もツリ駆けモーターの轟音を響かせて、秩父鉄道滝原線４００系の上り普通電車が、見滝原駅に進入してくる。
「杏子さん、早くしないと遅れるわよ」
「おくれるぞー」
「わーってるって」
玄関口からする声に、ドタバタとしながら中から出てくる音が聞こえる。
『1番線、川越市行発車いたします。ドア閉めますご注意ください。

駆け込み乗車は危険ですのでお止めください』
背景で、ツリ駆けモーターの轟音とともに黄色の電車がホームを滑り出て行く。
巴邸のマンションには、最近2人の同居人が完全にいついてしまっていた。
「忘れ物はない？」
「大丈夫だって。まったく。アンタは小うるさい母親かっつーの」
問いかけるマミに対して、杏子は口調では煩わしそうに言うものの、顔では歯を見せた苦笑をしている。一方のマミは、そう言われても、ニコニコと穏やかに微笑むばかりだった。
杏子が出てから、マミが玄関の扉を閉め、持っていたキーで鍵をかけた。
2人はそれぞれ見滝原中学校の制服を着ていた。
一方、もう1人の同居人はシャツにショートパンツと言う姿で、真っ赤なランドセルを背負っている。
「さて、じゃあ、行きましょうか」
3人がマンションのエントランスまで出てきたところで、マミがそう言った。
「おーぅ、がっこういこー」
「行こうって、ゆま、オマエは小学校。小学校はあっち」
元気良く言ったランドセルの少女に、杏子がどこかぷりぷりとしながら、腰に手を当てて自分たちの通学路とは別の方角を指差した。
「えー、ゆまもキョーコといっしょのがっこういきたいー」
小さな少女は駄々をこねるように、目をキューっとさせてそう言った。
「だめだ。ちゃんと学校に行けないやつは将来役にたたねーぞ」
杏子は、そう言って突き放すようにそっぽを向いた。
「うう、わかったよぉ」
渋々といった感じで、ゆまは杏子の指し示した方へと歩いていった。
「やれやれ」

杏子は、ため息交じりに頭を掻く仕種をする。
「くすくす」
その一連のやり取りを見ていたマミが、思わずと言ったように笑い声をもらした。
「なんだよ」
「別に」
聞き返す杏子に対し、マミは少しだけ意地悪そうにそう言った。
「だ……アタシだって別に行きたくないから行かなかったわけじゃなくてだな……」
「はいはい、そう言うことにしておきましょうか」
マミはニコニコと笑ったまま、抗議の声を上げる杏子に背を向けて、自分の登校路を歩き出した。
「ってコラ、待てよ、人の話聞けよ」
杏子は、なおも声を上げつつ、すたすたと歩くマミを追いかける。
見滝原市内には、公には日本の近代気象観測史上始まって以来のスーパーセルの発生によって、主に滝原湖沿岸部に被害の爪跡が残っていたが、それも瓦礫の撤去はすでに進められ、早くも復興は始まっている。
滝原線のガーター橋も冠水したが、流されるには至らなかった。翌日、死重を搭載した有蓋車を引く、大正生まれの電気機関車が試運転を行った後、その日の午後には全線で運転を再開した。
「でも杏子さん」
マミは、歩きながら、少し不機嫌そうにしている杏子に向かって声をかける。
「ん？」
杏子が聞き返すと、マミは少し寂しそうな色を顔に出しつつ、訊ねる。
「妹さんとは、一緒に暮らさなくてよかったの？」
「ああ、その話か」
杏子は軽くため息をついた。
「いちおー、プロテスタントと言ってもクリスチャンの牧師見習（シスター）いだ

からな。魔法少女なんて傍にいちゃ、まずいのさ」
杏子は、頭の後ろで手を組んでそこにカバンを提げ、少し反り返るような姿勢で歩きつつ、そう言った。
「そう……」
マミはそれを聞いて、少し悲しそうな表情をする。
「でも、ま」
しかし、杏子の方は、あっけらかんとした表情で、
「別に、今生の別れじゃあるまいし、生きてさえいりゃ、話すことだってあるだろ。第一、あいつが危ない目にあったなら、助けに行かなきゃならねーだろうしさ」
と、ニヤリと笑いながら言い、悪戯っぽくウィンクしてみせた。
「ふふっ」
2人は、市街地から、やがて住宅街沿いへと入る。
「あ、仁美さん」
マミが先に、その姿に気がついた。
「あっ、マミさん、それに杏子さん」
マミの視線の先にいた仁美も、2人の存在に気がつき、声をかける。
「おはようございます」
「おはよう」
「よぉっす」
丁寧に軽く会釈をして挨拶する仁美に対して、マミは穏やかな笑顔で挨拶を返し、杏子は笑顔ながらもぶっきらぼうな言い回しで挨拶を返した。
「あ、そうだ」
何かを思い出したように、マミがその場でカバンの中に手を入れる。
「これ、仁美さんが以前読みたいって言ってた、御崎さんの本」
マミは、書店のカバーがかかった文庫本を、仁美に差し出す。
「お借りしてよろしいんですの？」
仁美は、軽く驚いて、円くした眼でマミを見る。
「ええ、私はもう何回も読んじゃったから」

マミは、そう言ってにっこりと笑う。
「では、ありがたく拝借いたしますわ」
「ええ、どうぞ」
仁美は軽く会釈しながら、マミから文庫本を受け取った。
3人は見滝原中学校前の遊歩道に差し掛かる。
登校する学生の数も増え、話し声で少し賑やかにもなってきていた。
「待ってよー、さやかちゃーん」
背後から、パタパタと駆けて来る足音がしたかと思うと、良く知った名前を呼ぶ声が聞こえてきた。
「アンタたちが遅いのがいけないんでしょうがー」
「だからって、こんなに急がなくても、まだ遅刻するような時間じゃないわ」
やり取りを聞いて、マミたちが振り返ると、その場で駆けるように足踏みするさやかの姿と、それを追いかけるように背後から走ってくるまどかとほむらの姿が見えた。
「そんなこと言ってると、置いてっちゃうよーだ」
さやかが、冗談交じりにいい、再び学校のほうへ向かって駆け出すが、
「あ」
と、すぐ前方に3人の姿を見つけて、短く声を上げた。
「おはようございますー、マミさん、仁美、ついでに杏子」
さやかは、3人の傍まで駆け寄ってくると、はきはきとした声でそう挨拶する。
「ついでってのはなんだついでってのは、ゴルァ」
杏子が、噛み付くように抗議の声を上げる。マミと仁美はそれを見て、くすくすと苦笑した。
「あぁん？　先輩に向かってそんな口聞いていいのかね、1・年・生・？」
さやかが、ニタニタと笑いながら杏子の顔を覗き込むようにして、意地悪く言う。

「ぐっ……テメェー！」
杏子は顔を真っ赤にして、くぐもった声を上げた。
杏子には小学校の卒業記録はあるが中学校に入学した記録がない。つまり学校に通うということは、中学1年生から、ということになるのだった。
「もう、さやかちゃんも杏子ちゃんも、喧嘩はやめようよー」
駆け寄ってきたまどかが、あわてて仲裁に入る。
「はいはい。ま、あんまり大人気ないことしてもしょうがないし」
「アタシも、こんなお子ちゃまの相手してる余裕はないもんな」
一旦はお互いそっぽを向いて憎まれ口をたたくも、すぐに2人そろってぷっ、と吹き出した。
「え？」
その様子を見ていたまどかが、キョトンとして目を円くする。
「だからさ、こんなのじゃれあいみたいなもんなんだから、本気にするんじゃないっての」
さやかがケタケタと笑いながらそう言って、まどかの頭に手を伸ばし、わしゃわしゃと、髪をかき混ぜるように撫でる。
「そうそう、いちいちマジになるなって」
杏子も、ケタケタと可笑しそうに笑う。
「もー、ひどいよ2人とも」
まどかが少し拗ねたような声を出した。
「ふふっ」
そんなやり取りをそれまで黙って見ていたほむらが、微笑ましそうに声を漏らした。
「あー、ほむらちゃんまでひどいんだー」
「あ、ごめんなさい。馬鹿にしていたつもりはないのだけれど」
ほむらは、笑いつつそう言った。
「ほら、2人とも置いてくよ」
さやかがそう言った。他の3人も学校の方へと足を向け始めている。
「あ、待ってよ」

まどかがそう言って、２人もそれに続いていく。
「まどか」
まどかとほむらが、さやかたち４人の少し後ろに続いて、並んで歩いていると、ほむらがまどかに穏やかに声をかけた。
「なに？　ほむらちゃん」
まどかが聞き返す。
すると、ほむらはおもむろに、ヘアバンドの代わりになるように留めていた赤いリボンを解いた。
「これ、返しておくわ」
「えっ？」
ほむらがそう言ってリボンを差し出すと、まどかは軽く驚いた声を出した。
「いいのに……別に」
まどかは、少し困惑気な声を出すが、
「あるべきものは、あるべき場所に、あるべき姿に」
ほむらはリボンを差し出したまま、そう言って微笑んだ。
「……」
わずかな沈黙の後、
「そっか、そうだね」
そう言って、まどかはほむらの差し出したリボンを受け取った。

〝円環の理〟と呼ばれた小宇宙が本来あるべき宇宙の姿へと変貌し、その歪んだ機能を止めた後、さやか達が自分たちの宇宙、自分たちの世界に戻ってみれば、そこでは、まるでもともと〝鹿目まどかが存在していた〟ような世界に変わっていた。
鹿目家にはまどかの部屋があり、２年１組の教室にはまどかの席があり、家族やクラスメイト達は最初からそうだったように振舞う。
結局、なにが起こったのかを理解していたのは、あの場にいた魔法少女達だけだった。
それすらも、さやかとほむら以外からは、風化するように、意識しなければ思い出せないような曖昧なものになりつつあった。

まどか本人や、さやかやほむらは、最初、居心地悪そうな思いをすることになったが、やがて、逆にそれがあるべき日常だったと、受け入れられるようになっていった。

「それじゃあ、また昼休みにでも」
「ええ」
「じゃあな」
昇降口で、学年の違うマミと杏子が別れる。
同級生の４人は、それぞれ自分の下駄箱に向かう。
「あら」
仁美が下駄箱を開けると、また洋風の封書が入っていた。
「あはは、さすが仁美。衰えないねぇ」
さやかは、仁美が下駄箱に仕込まれたラブレターを取り出すのを見て苦笑しつつ、自分の下駄箱を開ける。
「……」
その中を覗き込んで、さやかは一瞬凍りつくように静止した。
下駄箱に何もせずに、その扉を一旦閉じる。
「……？」
一旦小首を傾げてから、再度下駄箱の扉を開けた。
下履きを収める場所に、洋風の封書。背面には「美樹さやかさんへ」の文字。
「えーと……これは……」
さやかは、それを取り出して、半ば呆然としたように凝視する。
「うわー、さやかちゃん、凄いなぁ」
明らかなラブレターを、さやかが取り出すのを見て、まどかが驚いたように声を出す。
「ま、まぁ割と物好きもいるってことなのかな？」
さやかは、視線を宙に泳がせつつ、照れくさそうにしながら言った。
「そうじゃありませんわよ」
そのさやかの背後で、仁美が上履きを履きながら、言う。
「え？」

「要は、フリーになったと思われてるんですわ」
間の抜けた声で聞き返すさやかに対して、仁美は少し意地悪そうな微笑を浮かべて言い、ウィンクした。
『やあ、おはよう、さやか、仁美』
教室に入ると、さやかの机の上に、良く見知った不思議な白い小動物がいた。
「あ」
それを見つけるなり、さやかはバタバタと自分の席に駆け寄り、
『何でこんなトコにいるのよ。アンタ！　本星に帰ったんじゃなかったの!?』
と、掴みかかるようにして、テレパシーで問い詰める。
『いや、報告は済ませたよ?』
たじたじと後ずさりしかけながら、サッきゅんは答える。
『言っただろう?　この身体はネットワークで接続された端末だって。別に物理的に移動する必要はないんだ』
『なるほど……って、でも、アンタがここにいる必要はないでしょーが!』
さやかは一瞬納得しかけて、我に返り、さらに問い質す。
『何言ってるんだよ。地球は、まだまだ回収しなきゃいけない感情エネルギーでいっぱいだよ?　むしろ収束に向けては、これからが本番さ』
「えーっ!?」
サッきゅんが答えると、さやかがどこかうんざりしたように、直接声を出した。
『オマケにボクは地球の状況を観察して報告する、サッキュベーターの管理官を拝命――めでたく中間管理職ってわけ』
『は、アンタもいろいろ大変なのね』
さやかは、机に手を突いてもたれるようにしつつ、やぐされたようにそう言った。
『そういうわけで、これからもよろしく、さやか』
『ま、アンタがいようがいまいが、あたしは〝正義の味方〟の役割を放

棄するつもりはないけどねー』
　さやかは、そう言いつつ、がっくり脱力するように椅子に腰を下ろした。
「あら……」
　仁美が、教室の後ろの扉を見て、声を上げた。
「あ、上条君だ」
　仁美の声に、まどかもその視線の先を追い、言う。
　そこには、すでに松葉杖も取れた上条恭介が、クラスメイトの男子と談笑しながら入ってくる姿があった。
「上条くん、この前バイオリンのコンクールに出たのですけど、あまり成績がよろしくなかったようで……」
　仁美が、心配そうな表情と声で言う。
「あらら」
　さやかも、恭介を見ながら苦い表情をした。
「でも、それにしては、ずいぶん元気そうな顔をしてない？」
　まどかは意外そうにそこまで言って、
「無理、してるのかな」
　と、やはり心配げに目を細めてそう言った。
「逆じゃないかしら」
　ほむらがそういうと、他の3人が一斉に視線を向ける。
「彼にとって、バイオリンは一種の呪縛だったのよ。それに固執しなければならない、ね」
「呪縛……」
　さやかと仁美が、そろって重々しく言う。
「誰かに褒められてそれが嬉しかったとか、そういう思い出が彼をバイオリンに縛り付けていたのよ。それが解放されて、自然な形で楽しめるようになったのでしょうね」
「誰かに、ねぇ」
　呟くさやかに、仁美が、穏やかな、しかしどこか寂しそうな表情で視線を向けた。それから、ふぅ、と軽くため息をついた後、穏やかな笑顔になって、さやかに問いかける。

「それで、さやかさんは、どうしますの？　改めて、上条君に？」
「えー……」
　さやかは、問いかけに対して少し困惑したような声を出し、一旦視線を外して、逡巡するようにする。
「あんな甲斐性のないやつ、あたしは、考えちゃうなぁ」
「あー、さやかちゃん、酷いんだー」
　苦笑気味にそう言ったのは、まどかだった。

　夜。
　既に駅前商店街も、２４時間営業のコンビニ以外は、灯りを消した後。
『川越市行最終電車、発車いたします。ご利用のお客様は――――』
　移動しているわけでもないのに、黒い霧があたりを包み込むのとともに、駅から聞こえてくる構内放送の声と、電車の走行音が遠ざかるように薄らぎ、消えていく。
　目前には、まるでミイラのような姿をした、魔獣の姿。
「よかった、どうやら間に合ったみたいだね」
　魔法少女姿のサッきゅんが夜の闇の中から姿を現し、そう言った。
「呼ぶのが遅いのよ。もうちょっとで間に合わなくなるところだった」
　さやかが抗議の声を上げる。
「しょうがないだろ、観測情報をまとめて本星に送る作業だって忙しいんだから」
「はいはい、中間管理職は大変ねー」
　サッきゅんはそう言い訳する。さやかは手をひらひらさせながら投げやりに言う。
「ま、気を取り直して」
　さやかはそう言って、ソウルジェムの指輪を本来の姿に変える。
「行くとしますか！」
　青衣の戦士は、左右の手に剣を生み出すと、颯爽と魔獣の群れに向かって行った。

そして、時は進みだす。

【魔法少女さやか☆マギカ：了】